

個人文書群の目録編成に関する研究
—小野、長岡、馬場文書群の目録編成事例
を通して—

筑波大学
図書館情報メディア研究科
2016年3月
恩田 怜

目次

序章 研究の目的と先行研究について	2
第1章 個人文書群の収集・整理・保存の現状と課題	7
第1節 アーカイブズの中の個人文書群の特徴と価値	7
第2節 個人文書群の収集・保存の歴史と現状	13
第3節 個人文書群の目録からみる編成の分析	25
第4節 編成論を中心とした整理論の歴史と現時点での課題	35
第2章 小野増平関係文書の編成	47
第1節 小野増平関係文書の概要と整理経過	47
第2節 小野増平関係文書の編成	53
第3節 小野増平関係文書の編成と編成論との関係	68
第3章 長岡半太郎資料と馬場重徳文書の編成	75
第1節 長岡半太郎の編成	75
第2節 馬場重徳文書の編成	86
第3節 長岡半太郎資料と馬場重徳文書の編成と編成論との関係	100
終章 個人文書群の編成の課題と展開	104

序章 研究の目的と先行研究について

(1) 研究背景

個人文書が、歴史学研究にとって重要であるということは、多くの歴史研究者の共通認識になっている¹。個人が活躍する現代においても、将来の歴史研究に備え、引き続き個人文書の重要性は維持されるように思える。そのような研究利用や保存のためには、文書群を整理するという作業が必要になる。

個人文書のような歴史的価値のある文書群は、以前より、多様な機関、例えば図書館、博物館、文書館、大学、文学館などに保存され、それぞれの機関の方法で、整理され目録が作成されてきた²。それら史料目録のあり方は、どのようにあるべきか。利用者への提供を考えたときに、どのような目録がより適切なのか、ということが、1960年代後半から近世史料を対象として議論されてきた。

大野瑞男や鎌田永吉により、文書相互の関係性という点から、NDC（日本十進分類法）分類を主とする現状の分類が批判され、分類の方式が模索された³。また、中野美智子は、1980年代後半に欧米から輸入された階層構造型の編成を、従来の古文書学と近世史料学の分類論の成果を総合化する理論体系をもつと評価した⁴。それら理論を用いた文書群の構造分析から編成・記述の研究は、近世史料、行政文書を対象に行われてきているが⁵、個人文書を対象にしたものは、極めて少数にとどまっている。そのため、個人文書においては経験値に基づく目録化が依然として主流であるという⁶。

(2) 研究目的

そのような現状を踏まえ本研究では、近現代個人文書群の編成を行い、個人

¹ 伊藤隆著「個人文書の収集・保存・公開について」 藤原良雄編『図書館・アーカイブズとは何か』 藤原書店、2008年、pp.82-91

² 大友一雄著「第4章 史料保存機関における情報資源化の取り組みと課題」 国文学研究資料館編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』 岩田書院、2010年、pp.83-98

³ 大野瑞男著「近世史料分類の現状と基礎的課題」 『史料館研究紀要』 第1号 史料館、1968年3月、pp.267-283

⁴ 中野美智子著「近世地方史料の整理論の動向について―所蔵目録作成の立場から―」 地方史研究協議会編『地方史の新視点』 雄山閣、1988年、pp.134-155

⁵ 鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会 2002年

⁶ 加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

文書群の整理論のなかの編成に関わる理論の構築に資することを目的とする。

(3) 先行研究

坂口貴弘は、編成についての主な議論を2つに分けて説明している。1つは、ICAが提示したISAD(G)（注1）による組織ベースの編成であり、もう1つは、シリーズ・システムによる機能ベースの編成である⁷。組織ベースによる編成とは、組織構造に基づき区分した上で、それぞれの所管業務によって区分し、階層的に文書群を把握する方法である。19世紀に欧州で開発され、ICAによるマドリッド原則（注2）、ISAD初版、第2版に、「フォンド編成モデル」として掲載されている。また、階層構造の各レベルの定義も付されている⁸（注3）。

一方の、シリーズ・システム（注4）は、1940年代ごろからオーストラリアで開発されたものであり、日本では、森本祥子の論文により紹介された⁹。組織ベースによる編成は、組織改編が頻繁に行われると、出所を単一に設定することに困難が生じる。そのため、組織ではなく機能（業務）をベースにして編成を行い、業務から生じた文書群の持つ秩序を維持して管理するのである¹⁰。組織ベースの編成は、作成組織と文書の関係性を重視し、文書を階層の末端に位置づける。それに対しシリーズ・システムは、作成組織と文書の流れ動的なものとして、それぞれ別々に情報を記述し、相互リンクを貼ることで、関係性を明確にする。このような特徴から、坂口は、組織ベースの編成を「静的編成」、機能ベースの編成を「動的編成」と表現している¹¹。

日本においては、ISAD(G)で示された、組織ベースの階層構造に基づく編成

⁷坂口貴弘著「アーカイブズの編成・記述とメタデータ」『情報の科学と技術』60巻9号 情報科学技術協会，2010年，pp.384-389

⁸アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』北海道大学図書刊行会，2001年

⁹森本祥子著「オーストラリアのアーカイブズ・システムについて一概観」高埜利彦研究代表『歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書，平成15年度～平成18年度）学習院大学，2007年，pp.222-236

¹⁰森本祥子著「オーストラリアのアーカイブズ・システムについて一概観」高埜利彦研究代表『歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書，平成15年度～平成18年度）学習院大学，2007年，pp.222-236

¹¹坂口貴弘著「アーカイブズの編成・記述とメタデータ」『情報の科学と技術』60巻9号 情報科学技術協会，2010年，pp.384-389

が、先に述べたように、近世史料、行政文書を対象に行われてきた。しかし、2014年に加藤聖文の論文においては、シリーズ・システムの議論も踏まえ、階層構造を個人文書に適用させた、シリーズ編成が試みられている¹²。加藤はこの論文で、役職または経歴をシリーズまたはサブ・シリーズに設定することで、階層構造に基づく個人文書の編成は可能であるとしている。しかし、このような事例研究は、少数にとどまっており、個人文書の編成に関する理論の構築には、さらなる編成事例の研究が必要であると考えられる。

(4) 方法

研究の方法として、第1章では、史料情報共有化データベースを用いて、個人文書群の所蔵機関とその個人文書群の情報をリスト化し、その上で所蔵点数、文書群数などについて都道府県別、機関別に分析を行う。また個人文書目録をできる限り収集し、その編成基準を3つの段階に分けてデータ化し、その特徴や傾向を機関別や年代別に分析する。第2章では、小野増平関係文書、第3章では、長岡半太郎資料、馬場重徳文書を対象に、構造分析を行い、加藤聖文が主張する、階層構造ベースの経歴（役職）によるシリーズ設定を適用し、分析を行う。

(5) 対象

編成の対象とする文書群は、①広島大学文書館所蔵の「小野増平関係文書」、②国立科学博物館筑波研究資料センター所蔵の「長岡半太郎資料」、③筑波大学図書館情報メディア研究科所蔵の「馬場重徳文書」の3つである。①は中国地方のブロック紙である、中国新聞の小野増平記者の文書群である。記者活動を始めた昭和41（1996）年から、亡くなる直前の平成21（2008）年までに生成・蓄積された、合計1,296点の文書群である。②は物理学者であった、長岡半太郎の資料群である。年代は明治13（1880）年から昭和15（1940）年までで、点数は、7,040点の資料群である。③はドキュメンテーションの研究者であった馬場重徳の文書群である。年代は昭和9（1934）年から平成5（1993）年まであり、点数は、783点である。私が全部あるいは、一部分の整理に携わったことを、それら文書群の選定理由とした。

¹²加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

(6) 用語の定義

本論を始める前に、論文題目にある「個人文書群」、「編成」などについて用語の定義を行う。

個人文書は、『文書館用語集』の中で「1 個人に帰属するか、ないしはそこに蓄積された私的資料のこと」¹³と定義されている。本論文では、個人の元を離れ、保存機関に移された文書群を対象とし、また、その文書群は、私的なもの以外も内容として含んでいる。そのため、上記の定義では不十分であり、アーカイブズの要素を付加する必要があると考える。『アーカイブズ事典』によると、アーカイブズとは、「個人または組織がその活動の中で作成または収受し蓄積した記録のうち、組織運営上、研究上、その他さまざまな利用価値のゆえに永続的に保存されるもの¹⁴」（下線は本論文の筆者による）とある。蓄積の背景には、個人の活動があり、利用価値をもつため保存されるという。これらの記述から、本論文では、個人文書「群」と記載し、それを「1 個人に帰属するものであり、個人がその活動のなかで作成または収受し、蓄積した資料群で、歴史的・文化的価値を有するため、保存されているもの」と定義する。

編成（arrangement）について、『図書館情報学ハンドブック第 2 版』¹⁵には、「記録史料保存機関」は、記録史料（注 5）を「管理し、公開するときには、その個別具体的な固有な体系の記録史料を再構成し、その記録史料が存在することの意味とその記録史料の担ってきた役割、その記録史料の構造、そしてその内容に関する情報を記述し、それらを利用者に提示することが不可欠なこととなる。これが記録史料編成・記述の目的であり、最も根本の原則である。」

（下線は本論文の筆者による）と書かれている。ここでは、文書群がもつ固有の体系を再構成することが、編成の目的であり、原則であると書かれている。また、坂口貴弘¹⁶は、編成について、「書誌コントロールにおける「分類」に

¹³ 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会監修『文書館用語集』 大阪大学出版会、1997 年

¹⁴ 小川千代子・高橋実・大西愛編 『アーカイブズ事典』 大阪大学出版会、2003 年、p.14

¹⁵ 図書館情報学ハンドブック編集委員会編『図書館情報学ハンドブック第 2 版』丸善株式会社、1999 年、p.527

¹⁶ 坂口貴弘著「アーカイブズの編成・記述とメタデータ」『情報の科学と技術』60 巻 9 号 情報科学技術協会、2010 年、pp.387

相当するのが、アーカイブズの「編成」である。…。通常、分類（主題分類）とは日本十進分類法等に示されている既存の分類体系に図書一点一点を当てはめていく演繹的作業であるのに対し、アーカイブズの編成は、集合体としての資料群それぞれが本来有する構造や相互関連性を把握し再現しようとする帰納的プロセスといえる。」（下線は本論文の筆者による）と述べている。ここでは、再現する前の構造の把握を含めた帰納的プロセスとしている。

これら2つの編成についての記述から、本論文では、編成とは、「文書群が本来有する構造を把握し、その再構成を行うというプロセス」と定義する。これは、安藤正人¹⁷が、提示した段階的整理の3番目の構造分析のプロセスにあたる。構造分析により、文書群の構造を把握し、その再構成を行い、それに従って文書を配列することで、体系的配列目録（基本目録）が作られるのである。

本論文では、「資料」、「史料」、「文書」などの類義語が登場する¹⁸。混乱を避けるため、以下にそれらの用語を定義しておく。

「資料」とは、「文字などの記号によって記録し、再現した物体」¹⁹である。本論文では、「史料」、「文書」を包含した幅広い概念として「資料」を用いる。

「史料」とは、「過去を認識する素材となるもの」²⁰である。歴史学においては、「人間の行動や思考が残したさまざまな痕跡」という意味で用いられる。本論文では、歴史的価値のある資料という意味で、「史料」を用いる。

「文書」とは、「ある環境における必要上から文字を記したもの」²¹である。歴史学においては、さらに「後日の備忘などのために、単に覚えとして記しておくもの」と、「ある必要に応じてある事柄を対話者に向かって書き送るもので、差出人と宛名人を有し、その間に何らかの働きが見られる」ものとを区別する。前者を「記録」、後者を「文書」と呼んでいる。本論文では、その後者の意味を採用する。

ただし引用箇所は、その引用元の表記に従い本論文では、記述することにす

¹⁷安藤正人著「第三章 史料の整理と検索手段の作成」 国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、pp.51-98

¹⁸小川千代子・高橋実・大西愛編『アーカイブズ事典』 大阪大学出版会、2003年、p. i

¹⁹図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』 柏書房、2004年、p.252

²⁰渡邊静夫編『日本大百科全書 12』 小学館、1994年、p.363

²¹図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』 柏書房、2004年、p.504

る。

本論文の構成は以下のとおりである。第 1 章では、個人文書群の収集・保存の現状と課題を明らかにする。第 2 章では、編成事例の 1 つ目として小野増平関係文書の編成を行う。第 3 章では、編成事例の 2 つ目と 3 つ目として、長岡半太郎資料と馬場重徳文書の編成を試みる。終章では、個人文書群の編成の課題と展開について論じる。

第 1 章 個人文書群の収集・整理・保存の現状と課題

本章では、最初に、アーカイブズの特徴と照らし合わせ個人文書群の特徴と価値を明らかにする。次に個人文書群はどのような機関に所蔵されているのかをデータベースを用い調査する。さらに実際に個人文書群がどのように編成されているのかを個人文書目録を対象に分析する。最後に、個人文書群の編成論について、その歴史と到達点を明らかにする。

第 1 節 アーカイブズの中の個人文書群の特徴と価値

第 1 項 アーカイブズから見る個人文書群の特徴

(1) 個人文書群としての特徴

アーカイブズの特徴としては、例えば、以下の 5 つをあげることができる。

- a) 「個人であれ法人であれ、その業務の過程、あるいは結果として、「自動的、有機的に」形成され、保管される記録であり、偶然や人間の恣意による収集物 collection と対立する概念」²²
- b) 「発生の時代や場所、発生母体である個人や組織体の種類を問わない」
- c) 「記録物であればその形態や媒体を問わない」
- d) 「原則として人間活動の一次的産物としての生の記録であって、大量複製物の形で流布される図書、新聞、音楽 CD、市販ビデオなどの著作物は原則として含まない」
- e) 「通常〈記録群〉(レコード・グループ、フォンドなどともいう)として存在し、その中には発生母体組織の機構と機能を反映した体系的な秩序

²² 岡崎敦著「アーカイブズ、アーカイブズ学とは何か」 『九州大学附属図書館研究開発室年報』 九州大学附属図書館研究開発室，2012年，p.2

がある」²³

以上の5点は、個人文書群の特徴として当てはまるだろうか。a)の特徴では、恣意による収集物を「コレクション」として、アーカイブズと明確に区別している。個人が集めたコレクションは、特に博物館で多く受け入れていると考えるが、それらは、個人文書群ではないのである。しかし、個人文書群は、寄贈時に保存機関による評価選別がなされなく、その中にコレクションを含む場合がある²⁴。

b)の特徴では、発生の時代を問わないとあるが、個人文書群の場合は、明治以降（近代以降）に限定され、発生母体も個人である。近世において、個人は職と住が不可分であり、農家、商家のように「家」として商売していた。そのため、文書群は「家」のものとして生成・蓄積される。しかし近代になると、個人は「家」を離れ、職を自由に選べ、また移動の幅も広がるため、文書群は「個」のものとして生成・蓄積される。近現代個人文書は、「家」から自立した「個」の文書群なのである²⁵。

c)の特徴では、個人文書群にもそのまま当てはまると考える。個人文書群は、書類や書簡などの文書の他に、書籍、写真、電子媒体、さらにはカメラや文具や衣服などの物品類という雑多な形態のもので群を構成している。文書のみが重視されがちであるというが、本来一体である群としての性格を保持するため、保存機関には物品類も受入れる態度が求められている²⁶（注6）。

d)の特徴も、おおむね個人文書群に当てはまる。しかし、原則的には、複製物としての図書・新聞などは個人文書群に含まれないが、書類との関係性に着目すると、一体として群を構成している場合もある。例えばそれら図書や

²³小川千代子・高橋実・大西愛編 『アーカイブズ事典』 大阪大学出版会，2003年，p.19

²⁴呉屋美奈子・富永一也著「公文書館における私文書の収集と整理：実践と課題」『沖縄県公文書館研究紀要』第9号 沖縄県公文書館，2007年，pp.85-103
ここでは、①文書群の完全性を損なうため選別は行わない、②整理前に選別を行う、③収集時に行うという考え方が提示され、③を行うべきものとして結論付けている。

²⁵加藤聖文著「3章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」『アーカイブズの科学 下』 柏書房，2003年，pp.215-235

²⁶加藤聖文著「鈴木荘六関係史料の紹介—近現代個人史料の受け入れと史料館の立場—」『史料館報』80号 国文学研究資料館史料館，2004年，p.10

新聞を参考に、文書を作成していれば、その関係性を保持するため、その図書を「群」に含める必要が出てくる。また、すべてではないが、書き込みが見られる図書などは、一次的生成物として見なすことも可能である。当該個前述の c) や a) の特徴とも関わり、一体としての受け入れ望ましいが、収集・整理時に評価選別の必要が出てくる。なお、複製物ではなく、一次生成物としての電子媒体（フロッピー、CD、DVD）などは、その内容より個人文書群に含まれる。

e) の特徴は、編成に関して最も重要なものであり、「発生母体組織の機構と機能」を「個人の仕事及び活動」に置き換えれば、おおむね個人文書群に当てはまる。体系的秩序を有するのは、a) にある業務の家庭・結果として有機的に文書群が形成されるためである。しかし、組織文書に比べ、個人文書群は、体系的な秩序が客観的に見え辛く、また秩序が部分的であるか存在しないという場合がある²⁷。

もう 1 つ個人文書群の重要な特徴をあげるならば、それは、個人文書群は、社会性を持つパブリックな記録とまったく私的なプライベートの記録の 2 種類から成り立っているという特徴である²⁸。この理由は、個人差はあるが、人間が社会との関わり合いの中で、生活し、仕事をしており、その結果文書群が蓄積されているからである。日本においては個人文書群、特に政治家や官僚・職業軍人の文書群の中に、多くの公文書が混在している特徴をもつという²⁹。公文書と私文書が伝える情報は異質であり、私文書には公文書を補完する情報が、日記や書簡などから発見されるのである³⁰。

(2) MLA から見た個人文書の特徴

²⁷加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

²⁸加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

²⁹加藤聖文著「3章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」『アーカイブズの科学 下』 柏書房、2003年、pp.215-235

³⁰国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 上巻』 丑木幸男著「6章 近現代の組織体と記録—公文書の世界と私文書の世界—」 柏書房、2003年、pp.119-135

個人文書は、図書館（L）、博物館（M）、文書館（A）に保存されているが、その位置づけは、その他の史料とは異なる。3館にまたがる資料として、「地域資料」という概念がある。地域資料とは、保存施設が「所在する地域や自治体に関係する資料」³¹である。個人文書は、前述のように「村・郡・藩といった限られた狭い地域空間を超えて広く全国へと拡大し、不特定多数の人々の社会生活に関わる内容を含む」³²という特徴をもつため、「地域資料」という概念には基本的には当てはまらないと考える³³。しかし部分的には、重なる概念であり、個人がその地域に関わる場合、文書類がその地域に関わる場合などが、個人文書が、地域資料として収集される場合であると考え（注7）。

図書館では郷土資料が、個人文書と部分的に重なる概念である。その地域にゆかりのある著名人の個人文書が、収集対象となりうる。

博物館においては、郷土資料館のみが個人文書の保存機関になるわけではない。個人文書の多様な性格から、例えば科学者の個人文書であれば理工博物館、画家の個人文書であれば美術館など、専門的なテーマ性をもつ資料として収集対象となりうる。また、博物館は展示のために一次資料（実物）と併せて二次資料（記録）の収集も行うが、個人文書は、両者を併せ持ったものであるといえる³⁴。

文書館においては、主たる収集対象の資料は、「ある特定の機関や団体ないしは個人が、組織的・社会的活動を遂行する過程で作成したり受け取ったりした、一次情報としての記録情報の総体」³⁵であり、個人文書群もそれに該当すると考える。

³¹日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編 『図書館情報学用語辞典 第4版』丸善出版、2013年、p.53

³²加藤聖文著「3章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」『アーカイブズの科学 下』柏書房、2003年、pp.215-235

³³埼玉県地域史料保存活用連絡協議会編『地域史料の保存と管理』埼玉県地域史料保存活用連絡協議会、1994年、pp.6-15

上記の地域史料の定義は、「ある地域の機関・団体・個人が何らかの社会的・組織的な活動を行う際に、その過程で作成・受理し、保存してきた記録類及びその情報」である。その上で地域史料を、行政文書、諸家文書、団体文書に分けており、個人文書は含まれていない。

³⁴加藤有次著『博物館学総論』雄山閣、1996年

³⁵安藤正人著「第一章 文書記録の保存・利用と文書館」大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』吉川弘文館、1986年、p.10

また図書館、博物館、文書館の連携という MLA 連携において、個人文書群は、文献 (L)、作品 (M)、手稿 (A) という資料の多様性から、「内なる」 MLA 連携をもつ文書群であるといわれている³⁶。そのため、展示や整理・管理方法の連携など「外なる」 MLA 連携を促進するものであると考える。さらに個人文書群は、文学館、企業、公民館などにも保存されているため、さらなる連携が期待できるのである。

第 2 項 アーカイブズから見る個人文書群の価値と機関から見る価値

(1) アーカイブズから見る個人文書群の価値

アーカイブズの価値として、例えば、A) 歴史的文化的価値、B) 行政的経営的価値の 2 つが挙げられる³⁷。A) では、人間の活動の第一次産物という特徴から、図書などの印刷資料に比べ第一級の価値をもつ。ただし、この価値は、個々の文書の価値ではなく、主として文書「群」としての価値を意味する。個人文書群も同様に歴史的文化的価値を有している。個々の書類や書簡ではわからないが、それらが「群」として集まった時、当該個人の生涯や活動が見えてくるのである。

B) は、A) と異なり文書記録を生み出した機関・団体・個人にとっての価値である。現用文書としての役割が終了した後も、行政上・経営上の証拠資料や参考資料として持続的な価値を有する場合があるという³⁸。個人文書においてもこの価値があり、例えば一度使用した研究資料を、何年後かに再び使用するということは頻繁に行われると考えられる。

個人文書群は、A) と B) の価値を併せ持つと考えられる。また、これらの価値を維持するためには、適切な収集、評価選別、保存が必要であり、これら価値を暴きだす、または創造するために編成を含む適切な整理作業が必要であると考える。

(2) 保存機関別にみる個人文書の価値

① 企業

³⁶水谷長志著「MLA 連携のフィロソフィー」『情報の科学と技術』 61 巻 6 号 2011 年, pp.216-221

³⁷安藤正人著「第一章 文書記録の保存・利用と文書館」 大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』 吉川弘文館, 1986 年, pp.2-40

³⁸安藤正人著「第一章 文書記録の保存・利用と文書館」 大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』 吉川弘文館, 1986 年, pp.2-40

企業の中では、創業者や歴代経営者の個人文書群が、企業価値を高めるものとして大きな役割をもつと考える。企業の理念や事業への考え方を明らかにすることは、企業の個性や魅力に関わり、また従業員の教育や社史の編纂などに活用できる³⁹。このような取り組みは、パナソニックでは松下幸之助歴史館、花王においては、花王ミュージアム・資料室などで行われているという⁴⁰。企業におけるアーカイブズ部署は、組織（機関）アーカイブズと収集アーカイブズに分けることができ（注8）⁴¹、個人文書群は、そのいずれの収集対象にも含まれると考える。

②文学館

文学館の中では、個人文書群はその収集資料の中心的位置を占める。文学館は、文学資料を収集、保存し、閲覧に供するという図書館的機能と、収蔵品を展示し、公衆の閲覧に供するという博物館的機能を併せ持っている（注9）⁴²。文学資料とは、図書、雑誌、原稿、創作ノート、日記、書簡、筆記用具等の身の回り品を指すという⁴³。図書や雑誌は別として、その他の資料は、当該文学者の個人文書群といえる。文学館は、図書館、博物館、文書館という枠組みを横断する存在になる可能性をもっており⁴⁴、それを可能にするのは、個人文書群のもつ特徴・価値なのである。

③大学

大学の中では、個人文書群は、国立であるか私立であるかで、占める位置が異なり、私立大学においてより重要性が高いという。私立大学にとって、建学の精神や理念の保存というものは、企業と同じく重要であり、これにもやはり個人文書群が機能するのである。小池聖一は、大学文書館にとって個人文書群

³⁹ 上田和夫著「第二章 「記録」がつくる企業文化—構築と活用—」 企業史料協議会編『企業アーカイブズの理論と実践』 丸善出版、2013年、pp.19-30
ここでは、企業アーカイブズを作るために、まず初めに収集するものとして、創業に関わる資料があげられている。

⁴⁰ 松崎裕子著「資産としてのビジネスアーカイブズ：付加価値を生み出す活用の必要性和課題」『情報の科学と技術』62巻10号、2012年、pp.422-427

⁴¹ 松崎裕子著「第一章 経営資源としてのアーカイブズ」 企業史料協議会編『企業アーカイブズの理論と実践』 丸善出版、2013年、pp.3-18

⁴² 中村稔著『文学館を考える』 青土社、2011年、pp.19-20

⁴³ 中村稔著『文学館を考える』 青土社、2011年、pp.46-47

⁴⁴ 岡野裕行著「図書館と文学館の連携」 『情報の科学と技術』61巻6号 情報科学技術協会、2011年、pp.233-237

の機能に着目し、次の 5 つに類型化している。i) 建学の精神・理念の保存・継承を象徴する個人文書、ii) 事務局文書を補完する個人文書、iii) 大学史に関係する個人文書、iv) 地域貢献事業に関係する個人文書、v) 卒業生等の個人文書、である。これら 5 つのうち、私立大学が保存する個人文書群は、i) と v) が中心となるという⁴⁵。

近世にはなく近現代文書群の特徴として、文書群が「個」のものとして生成・蓄積されると前述した。作家や研究者の活動は、個人的な営みであり、またその活動の過程でたくさんの文書群を生成・蓄積すると考えられ、それら作家や研究者の文書群は、近現代個人文書群を象徴するものといえるのである。

このように個人文書群は、多種の機関の収集対象にあり、また各機関にとって多様な価値を有している。そのため、個人文書群は多種の機関に保存されてきたと考えられる。一方で、個人文書群は、その性格の 1 つである「家」からの解放が史料を散逸させる（注 10）⁴⁶、もしくは、日記や書簡などの私的な文書群はそもそも史料として社会的に認知されず消滅してしまうという危険性をはらんでいる⁴⁷。次節では、個人文書の収集・保存の現状を明らかにする。

第 2 節 個人文書群の収集・保存の歴史と現状

第 1 項 個人文書群の収集の歴史

(1) 戦後の史料保存運動

日本では第二次大戦後、社会変革等による史料の散逸が危惧され、歴史的資料を保存する運動が生起する。白井哲哉は、その運動を「戦後歴史資料保存運動」と称し、その運動の特徴を次のように簡潔にまとめている。「1948 年（昭和 23）の近世庶民史料調査委員会発足に始まり、1969 年（昭和 44）の日本学術会議「歴史資料保存法の制定について（勧告）」や 1987 年（昭和 62）の公文書館法成立などを実現させた、学校教員、自治体史編さん担当者など民間

⁴⁵小池聖一著『近代日本文書学研究序説』 現代史料出版、2008 年、pp.249-271

⁴⁶伊藤隆著「個人文書の収集・保存・公開について」 藤原良雄編『図書館・アーカイブズとは何か』 藤原書店、2008 年、p.82-91

⁴⁷小風秀雅著「近代私文書の評価・選別に関する方法的試論」『記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究』研究レポート No.3 国文学研究資料館史料館、2000 年、pp.84-88

の研究者を中心とする民間史料及び公文書の保存運動を指す」⁴⁸。この運動は、それを起こした「近世庶民史料調査委員会」の名称に象徴されるように、近世の庶民史料（地方文書）が調査対象にあり、近世史研究と共に発展していった⁴⁹。公文書に関しては、1959年日本学術会議による「公文書散逸防止について」の勧告が出され、文書館制度の欠如が指摘された。1969年「歴史資料保存法の制定について」では、歴史的資料が、近世史料だけでなく、公文書も含め定義された⁵⁰。丑木幸男は、「保存すべき資料の概念が、民間に所在する近世を中心とする古文書に重点をおいた段階から、国・地方公共団体が大量に作成・管理する現在の公文書と、古文書とを統一的に保存する要求に変化していった」と、史料認識の変化を指摘しており、その背景には、70年代までに設置された、文部省史料館、国立公文書館および都道府県立文書館などの7館の保存施設の存在があるという⁵¹。

ここまで見てきたように、「戦後歴史資料保存運動」の、歴史資料の中心にあったものは、近世史料であり、そこに公文書が後に加わっていった。「歴史資料保存法の制定について（勧告）」では、A.近世史料、B.公文書、に加えて、C.明治以降の私的文書・記録類、を「歴史資料」として規定している。しかし、その本文で、「憂慮すべき事態」として挙げられているのは、A.近世史料と B.公文書の散逸・廃棄である⁵²。以上のことから、近現代個人文書は、「戦後歴史資料保存運動」において重要視されていなかったと考えられる。

（2）憲政資料室の個人文書の収集

以上見てきたように、「戦後歴史資料保存運動」では、近現代個人文書群は、積極的にその対象とされたわけではなかった。近世史料の散逸の危機から始ま

⁴⁸ 白井哲哉著「民間史料から文書館・公文書館をとらえ直す—問題提起として—」『地方史研究』55巻2号 地方史研究協議会，2005年，p.6

⁴⁹ 白井哲哉著「民間史料から文書館・公文書館をとらえ直す—問題提起として—」『地方史研究』55巻2号 地方史研究協議会，2005年，pp.5-12

⁵⁰ 高野修著「第1章 記録史料（アーカイブズ）とは何か」文書館問題研究会・横浜開港資料館編『歴史資料の保存と公開』岩田書院，2003年，pp.11-15

⁵¹ 丑木幸男著「序 アーカイブズの科学とは」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 上』柏書房，2003年，p.6

⁵² 日本学術会議作成「歴史資料保存法の制定について（勧告）」（1969.11.1）全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『日本の文書館運動—全史料協の20年』岩田書院，1996年，巻末資料 pp.246-247

ったというが、個人文書群もその例外ではなく、散逸の危機にあったのであり、個人文書群の保存運動は、「戦後歴史資料保存運動」とは別のところで生起し、発展していった。

戦後、個人文書群の保存は、大久保利謙（注 11）の手によって始められた。大久保利謙は、大久保利通の孫にあたり、日本近代の政治史・文化史の研究者であった。大久保利謙は、自身の研究の史料収集の過程から、歴史資料についての関心を高めていたという。大久保は、1938 年に貴族院 50 年史編纂事務嘱託に就き、歴史資料の収集の業務にあたった。しかし戦争によりその業務は中断され、戦後、大久保は編纂作業の再開を提案する。ところが、「終戦直後という時代状況や史料収集に終始した戦前の編纂事業への不信感から」⁵³、貴族院事務局を引き継いだ参議院事務局で事業再開に異論が生じた。そこで、大久保は終戦から 3 年後の 1948 年 11 月 19 日に「日本国会史編纂所設置二関スル請願」を国会に提出した。

この請願は、「現代史研究ノ必要」と「日本国会史編纂ノ必要」の 2 つのパートから成る。前半では、現代史研究の貧困を嘆き、その原因を、史料を収集・整理する機関の不備であるとしており、現状の史料散逸を鑑み、「国家的史料保存ノ道」を確立するよう求めている。後半部では、特別の機関を設けて、戦争により中断された貴族院 50 年史編纂事業を再出発することを求めている⁵⁴。

「日本国会史編纂所設置二関スル請願」は、趣意書を片手に賛成を募るといふ大久保の地道な運動の甲斐もあり⁵⁵、両院で採択され、1949 年国立国会図書館国会分館に「憲政資料蒐集係」（後の憲政資料室）が設置されたのである⁵⁶。

同年大久保は国立国会図書館嘱託になり、憲政資料の収集業務に従事することになった。資料収集は、大久保自身の旧華族の人的ネットワークを頼りにしたものであり、幕末以降の政治家たちの家を回って、史料を譲ってもらうとい

⁵³藤本守著「この人を知る 大久保利謙」『国立国会図書館月報』606号 国立国会図書館、2011年、pp.17

⁵⁴大久保利謙作成「日本国会史編纂所設置二関スル請願」（昭和23年11月19日）（二宮三郎著「憲政資料室前史（下）」『参考書誌研究』45号 国立国会図書館、1995年、pp.32-35の中で掲載）

⁵⁵大久保利謙著『日本近代史学事始め』岩波書店、1996年、pp.156-157

⁵⁶藤本守著「この人を知る 大久保利謙」『国立国会図書館月報』606号 国立国会図書館、2011年、pp.17-19

うものであった。1949年当時は、金銭面も含め困っている家が多く、また国会図書館という公的機関に保管されるという安心感もあり、史料を譲ってもらえたという⁵⁷。大久保は、憲政資料室は、「アーカイブの開祖」であると考えていたため、憲政資料だけでなく、「幕末以降の政治・経済・外交史料」を手に入るだけ収集したという⁵⁸。そのようにして1950年～1953年度までに収集された資料は、30家4万7000点にもものぼったという⁵⁹。

憲政資料室設立後、続いて個人文書を大々的に収集・保存することを目的として公的機関は出てこなかったという。その後は、東大法学部（法政資料センター）、東京大学史資料室、早稲田大学大学史資料センター、慶應義塾大学福沢研究センターなどの、大学の付属機関による収集・保存が行われたという⁶⁰。これらは大学の資料保存機関（以後大学アーカイブズとする）である。大学アーカイブズが設置される最も大きな契機は、年史編纂事業である。慶應義塾は、『慶應義塾百年史』の編纂に伴い塾史編纂所（後の慶應義塾大学福沢研究センター）を設置し、早稲田大学も『早稲田大学百年史』の編纂に伴い1963年校史編纂室（後の早稲田大学大学史資料センター）を設置した（注12）⁶¹。東京大学史資料室も1974年に誕生した百年史編集室を母体としている。これら大学アーカイブズは年史編纂過程で、大学に関する資料を収集・保存し、その中に個人文書群も含まれたであろうと考えられる。東京大学は百年史刊行（1984年～1987年）前に、『渡辺洪基史料目録』（1977年）などの個人文書

⁵⁷ 憲政資料室には、1950年度から3年間にわたり総額900万円の資料収集経費がついていた。

二宮三郎著「憲政資料室前史（下）」『参考書誌研究』45号 国立国会図書館，1995年，pp.18-47

⁵⁸ 大久保利謙著『日本近代史学事始め』 岩波書店，1996年，pp.160

⁵⁹ 二宮三郎著「憲政資料室前史（下）」『参考書誌研究』45号 国立国会図書館，1995年，pp.18-47

上記の論文のpp.32-36にかけて「草創期における憲政資料収集一覧」が掲載されている。

⁶⁰ 伊藤隆著「個人文書の収集・保存・公開について」 藤原良雄編『図書館・アーカイブズとは何か』 藤原書店，2008年，pp.82-91

他にも国学院大学、学習院大学、中央大学、明治大学、大東文化大学などが挙げられている。

⁶¹ 桑尾光太郎・谷本宗生著「第2章 大学アーカイブズのあゆみ」 全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイブズ』 京都大学学術出版会，2005年，pp.21-37

群目録を7点刊行している⁶²。

第2項 個人文書の所蔵機関の現状

文書館は、現在70館⁶³あり、その設立（注13）も法整備（注14）も図書館や博物館より遅れており、青森、岩手、山形、石川、山梨、高知、長崎、宮崎、鹿児島⁶⁴の9県には、未だに文書館が存在しない。地域の古文書類は、歴史研究者の調査・保存運動などを通して、図書館・博物館・公民館など様々な機関に保存されてきた⁶⁴。また一点ずつ収集されたような古文書・古記録は伝統的に図書館や博物館が担ってきたとも言われている⁶⁵。『歴史資料保存機関総覧』⁶⁶には、5820機関が、歴史資料を保存する施設として掲載されている。ここでは、歴史資料の中の個人文書群を取り上げ、その所在情報を調査する。

(1) 先行研究と調査対象

アーカイブズの所在情報調査に関する先行研究は、先にあげた地方史研究協議会による『歴史資料保存機関総覧』⁶⁷や、国文学研究資料館の研究者らが、2003年～2005年度にかけて科学研究費補助金による研究として行った「アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究」が挙げられる⁶⁸。後者の科研の目的の1つは、古文書・記録類の保存機関が、公開する文書・記録類の名称・内容を具体的に明らかにし、またそれらの情報を可能な限り集約・公開することであった。調査対象は、市民に収蔵史料を広く公開する施設とした。方法としては基本的にアンケートを用い、古文書・記録類についての情報を回答しても

⁶² 「東京大学史史料室ニュース」1号 東京大学史史料室，1988年，pp.1-8

⁶³ Webサイト「関連リンク」『国立公文書館』

<http://www.archives.go.jp/links/>（最終閲覧：2015年5月15日）

⁶⁴ 大友一雄著「第4章 史料保存機関における情報資源化の取り組みと課題」国文学研究資料館編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』岩田書院，2010年，pp.83-97

⁶⁵ 安藤正人著「第一章 文書記録の保存・利用と文書館」大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』吉川弘文館，1986年，p.10

⁶⁶ 地方史研究協議会編『歴史資料保存機関総覧〔増補改訂版〕〕〔東日本〕〔西日本〕山川出版社，1990年

⁶⁷ 地方史研究協議会編『歴史資料保存機関総覧〔増補改訂版〕〕〔東日本〕〔西日本〕山川出版社，1990年

⁶⁸ 大友一雄編『アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究』人間文化研究機構国文学研究資料館，2006年，（平成15年度～17年度 科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）

らった（注 15）。調査結果は、国文学研究資料館作成の「史料情報共有化データベース」（注 16）⁶⁹を通して公開された（注 17）。

「史料情報共有化データベース」には、現在高知県を除く 46 都道府県、合計 601 機関の所蔵史料情報が、搭載されている。これは、史料情報を載せたデータベースの中では、最大規模のものと考えられ、同時に個人文書群のデータベースとしても最大規模のものと考えられる（注 18）。そこで、本調査では、対象として、国文学研究資料館作成の「史料情報共有化データベース」⁷⁰を選定し、それら史料から個人文書群を抽出し、その所在情報と文書群の内容を調査し、分析を行う。

「史料情報共有化データベース」のトップページには、また「都道府県一覧」として、47 都道府県が掲載され、「北海道」を選択すると、北海道の機関一覧（データベースに参加している機関）が出る。そこで「北海道立文書館」を選択すると、所蔵史料群が一覧で出てきて、史料群名を選択すると、その史料群の情報を閲覧することができる。史料群の情報を記述する項目は、「識別記号」、「資料記号」、「標題」、「年代」、「主年代」、「年代注記」、「記述レベル」、「書架延長／数量」、「物的状態注記」、「出所・作成」、「履歴」、「伝来」、「入手源」、「範囲と内容」、「評価選別等スケジュール」、「追加受入情報」、「整理方法」、「利用条件」、「使用条件」、「使用言語」、「物的特徴および技術要件」、「検索手段」、「原本の所在」、「利用可能な代替方式」、「関連資料」、「出版物」、「注記」、「収蔵名称」、「更新日」である（注 19）（下線の項目を記載している機関が多かった）。データベースには、46 都道府県にある 601 館の保存機関の史料情報が搭載されている。

調査方法は、1つ1つ機関をあたり、所蔵されている文書群を見て、個人文書群を抽出するという方法をとった。機関別の個人文書数を見ると同時に、実際の個人文書群名とその内容を調査した。

（2）調査結果と考察

調査結果を参考資料 1、参考資料 2、参考資料 3 に示した。参考資料 1 は、

⁶⁹ 国文学研究資料館作成「史料情報共有化データベース」 『国文学研究資料館 web ページ』 <http://base1.nijl.ac.jp/~isad/>（最終閲覧：2015 年 12 月 17 日）

⁷⁰ 国文学研究資料館作成「史料情報共有化データベース」 『国文学研究資料館 web ページ』 <http://base1.nijl.ac.jp/~isad/>（最終閲覧：2015 年 12 月 17 日）

都道府県別の機関数、個人文書所蔵機関数、総文書群数、個人文書群数などを示している。参考資料 2 には、機関種別に、個人文書群を所蔵している機関を抽出し、個人文書群数の多い順に並べている。参考資料 3 には 346 群の個人文書群の内容を示した。なお、割合などの計算は、基本的に小数点以下を四捨五入して表記する。

a) 都道府県別の結果（参考資料 1 参照）

個人文書所蔵機関が最も多いのは、東京で 12 館、次に、京都で 6 館、新潟、北海道で 5 館と続く。しかし、分母に総機関数、をおいた割合では、岩手県が 50%（4 館中 2 館）と最も高く、全保存機関中半分が個人文書を保有していることがわかる。北海道（15 館中 5 館）と福井（6 館中 2 館）が、33%で次に高く、東京が 30%（40 館中 12 館）、新潟県が 24%（21 館中 5 館）で続いている。個人文書群の所蔵機関が無い都道府県は、18 あり、全機関中の個人文書所蔵機関の割合は、12%であった（601 館中 72 館）。

個人文書群の合計は、東京が 341 群と最も多く、次に北海道の 98 群、大分の 42 群と続く。総文書群を分母においた割合は、岩手（14 群中 6 群）が 42%、北海道（341 群中 98 群）が 28%、東京（2264 群中 341 群）が 15%の順で高く、岩手では、全文書群の中で 42%が個人文書群である。

1 館当たりの個人文書群数は、大分が 42 群と最も多く、東京が 28 群、北海道が 20 群と続く。これら 3 つの都道府県には、1 つの機関に個人文書群が集中して保存されている。大分県において個人文書群を所蔵しているのは、大分県立先哲史料館（347 群中 42 群）の 1 館のみであり、42 群は、全国で 3 番目の数である。東京都は、国立国会図書館憲政資料室が 313 群（359 群中）を所蔵しており、この数は全国で最も多い。北海道は、北海道立文書館が 82 群（263 群中）で、全国で 2 番目に多く個人文書群を所蔵している。

以上の結果をまとめる。個人文書群が東京で 341 群と最も多く、また、個人文書群を保存していない機関も全体の 88%であった。また、個人文書群の所蔵が見られない都道府県もあることや、1 館あたりの個人文書群の割合の分析により、個人文書群の偏在が明らかになった。個人文書群の所蔵は都道府県で偏りがあり、また、所蔵している都道府県の中でも 1 館に偏って所蔵されていることが明らかになったのである。北海道は、近代に入り明治政府により

開拓政策が進められ、産業が発達し、多くの近代史料が残されていったという⁷¹。そのため開拓に関係した個人文書が多く保存されていると考えられる。

b) 機関種別の結果

機関及び団体を、図書館、博物館、文書館、公民館、文庫、大学、教育委員会、研究所、県庁・市役所、県・市・町史編纂所、その他、の11機関に分類した。各機関の分類は、主に機関名から判断して振り分けた。名称により判別がつかないものの中で、図書館は『日本の図書館 統計と名簿 2014』⁷²を、博物館は『日本博物館総覧—ミュージアムの招待—』⁷³及び『全国博物館総覧』⁷⁴を、文書館は国立公文書館 Web ページに掲載されている文書館一覧⁷⁵を、またその機関が持つ Web ページを参照し、判別した。機関によっては、複数の分類に含まれるものがあり、その場合はそれぞれに1館と配分した（大学附属図書館の場合、大学と図書館に1館ずつ振り分ける）。設置主体や、博物館の館種も同様の参考資料を用い調査した。

登録機関数は、博物館は299館で最も多く、図書館が171館、大学が74機関、文書館が48館と続く。全国にある図書館は、3,246館⁷⁶、博物館は5,747館⁷⁷（うち類似施設4,485館）に対して、文書館は70館⁷⁸であり、博物館は全体の5%、図書館は全体の5%、文書館は全体の69%の機関が登録されることになる。文学館は現在757館⁷⁹存在するが、データベースには「文学館」

⁷¹ 地方史研究協議会編『歴史資料保存機関総覧〔増補改訂版〕〕〔東日本〕〔西日本〕山川出版社、1990年、pp.2-3

⁷² 日本図書館協会図書館調査事業委員会編『日本の図書館 統計と名簿 2014』日本図書館協会、2015年

⁷³ 大堀哲編著『日本博物館総覧—ミュージアムの招待—』東京堂出版、1997年

⁷⁴ 日本博物館協会編『全国博物館総覧』ぎょうせい、1986年（筑波大学附属図書館により2003年まで加除あり）

⁷⁵ 国立公文書館作成「関連リンク」『国立公文書館 Web サイト』

<http://www.archives.go.jp/links/>（最終閲覧：2015年12月22日）

⁷⁶ 日本図書館協会図書館調査事業委員会編『日本の図書館 統計と名簿 2014』日本図書館協会、2015年

⁷⁷ Web サイト「2.博物館数、入館者数、学芸員数の推移」『文部科学省』（2011年度）

http://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/1313126.htm（最終閲覧：2015年5月15日）

⁷⁸ Web サイト「関連リンク」『国立公文書館』

<http://www.archives.go.jp/links/>（最終閲覧：2015年5月15日）

⁷⁹ 岡野裕行作成「文学館一覧」『文学館研究会ウェブページ』

と名称の付くものは 1 館しか登録されていなかった。憲政資料室は、国立公文書館では文書館扱いとなっているが、個人文書群に特化した施設であり、他の文書館とは異なる特殊な施設といえるため、文書館から分離して分析を行うことにした。

総機関数に対する個人文書所蔵機関の割合は、研究所が 47%と最も高く、続いて文書館が 40%（47 館中 19 館）であった。公民館や県・市・町史編纂所には、個人文書群は所蔵されていなかった。

総文書群に占める個人文書群の割合は、最も多い機関でも大学の 3%（32 群中 14 群）であり、個人文書群は全ての機関において、全文書群の 3%以下であるということがわかった。一方憲政資料室は、87%（359 群中 313 群）が個人文書群で占められていた。

1 機関当たりの個人文書群は、文書館が 7.5 群（19 館が 142 群を所有）で最も多く、博物館が 5.3 群（23 館が 122 群を所有）、研究所が 5.1 群（7 館が 36 群を所有）と続いた。

次に図書館、博物館、文書館を設置主体に分け、それぞれ分析を試みる。機関の規模に着目をして分析を行うため、都道府県、市、区、町村に分けた。また大学を国立、公立、私立に分けて分析を試みた。

図書館の個人文書所蔵機関は全図書館の 9%（171 館中 15 館）にとどまり、総文書群に占める個人文書群は 2%（1795 群中 33 群）、1 機関当たりの文書群数は 2.4 群（15 館が 33 群を所有）である（参考資料 4 参照）。図書館を設置主体別に分けると、大学以外の図書館では、都道府県と市立において、個人文書群をもつ図書館が見られ、区と町立のものには見られなかった。また、都道府県立では 1 館当たりの文書群の数は 20 群（25 館が 502 群を所有）であったのに対し、市立では 1 館当たり 6.4 群（81 館が 518 群を所有）であり、都道府県立の方がより多くの文書群を所蔵していることが分かった。その上で、都道府県立の方が、市立と比べて、全機関中の個人文書を所蔵する機関の割合、総文書群に占める個人文書群の割合、個人文書所蔵の 1 館当たりの個人文書群数の値の 3 つにおいていずれもわずかではあるが高い値を示した。

大学図書館においては、国立と公立にいずれも 1 群ずつの個人文書群が見

<http://literarymuseum.net/lm-list.html>（最終閲覧：2016 年 1 月 10 日）

られたが、私立には 22 館中個人文書群を所蔵している館は見られなかった。

博物館の個人文書所蔵機関は全博物館の 8% (299 館中 23 館)にとどまり、総文書群に占める個人文書群は 2.7% (4542 群中 122 群)、1 機関当たりの文書群数は 5.3 群 (23 館が 122 群を所有) である (参考資料 5 参照)。博物館を設置別に分けると、都道府県、市、区、町村立博物館のいずれにも個人文書群の所蔵が見られた。また、都道府県立では 1 館当たりの文書群の数は 42 群 (27 館が 1138 群を所蔵) であったのに対し、市立では 1 館当たり 13 群 (154 館が 2047 群を所蔵) であり、都道府県立の方がより多くの文書群を所蔵していることが分かった。その上で、全機関中の個人文書を所蔵する機関の割合において都道府県立が 22% (27 館中 6 館)、市立が 6% (154 館中 10 館) で、都道府県立の方が 16%高かった。

大学博物館は 5 館と少数であったが、私立の 2 館で個人文書群の所蔵が見られた。しかし、どちらも 1 群の所蔵にとどまり、総文書群に占める個人文書群の割合は、1%にも満たなかった。会社や個人立のものに個人文書群は見られなかった。

また博物館においては、総合、郷土、美術、歴史、自然、理工の 6 つの館種に分け、分析を行った (参考資料 6 参照)。登録機関数は、歴史が 168 館で最も多く、郷土が 71 館、総合が 21 館で続き、これら 3 館には個人文書群が見られ、美術、自然、理工には個人文書は所蔵されていなかった。総合には 1 館に 1 群の個人文書群が所蔵されているのみで、それ以外は郷土か歴史が所蔵していた。総機関に占める個人文書所蔵機関の割合は、郷土の方が高く (71 館中 8 館で 11%)、歴史は総文書群に占める個人文書群の割合 (2757 群中 109 群で 4%) と 1 館当たりの個人文書群数の値 (16 館が 109 群所蔵で 6.8 群) で郷土よりも高かった。

文書館の個人文書所蔵機関は全文書館の 40% (47 館中 19 館)にとどまり、総文書群に占める個人文書群は 1.9% (7348 群中 142 群)、1 機関当たりの文書群数は 7.5 群 (19 館が 142 群を所有) である (参考資料 7 参照)。文書館を設置別に分けると、都道府県、市立博物館に個人文書群の所蔵が見られた。また、都道府県立では 1 館当たりの文書群の数は 215 群 (26 館が 5601 群を所蔵) であったのに対し、市立では 1 館当たり 31 群 (9 館が 285 群を所蔵) で

あり、都道府県立の方がより多くの文書群を所蔵していることが分かった。その上で、全機関中の個人文書群を所蔵する機関の割合において都道府県立が26館中11館で42%、市立は9館中2館で22%、個人文書所蔵の1館当たりの個人文書群数の値において、都道府県立が11館で122群を所蔵で1館当たり11群、市立が2館で7群を所蔵の3.5群と、それぞれ都道府県立の方が20%、7.5群高い値を示した。

大学文書館においては、国立、私立共に個人文書群の所蔵が見られ、私立に至っては、3校中3校に所蔵されていた。しかし、1館当たりの個人文書群は2群であり、都道府県、市立の文書館よりも値が低かった。

次に個人文書群をもつ機関の割合が最も高かった研究所について、その特徴を分析する（参考資料8参照）。研究所は大学に設置されているもの、大学共同利用機関、その他（民間等）の3つに分けることができる。大学共同利用機関は4機関中すべてで個人文書群を所蔵している。国文学研究資料館もその中に含まれ、文書群数のほとんどを占めている（1359群中1314群が国文研のもの）。国文学研究資料館を除いて分析をすると、全文書群に占める個人文書群の割合は51%にも及ぶ。大学の研究所では、個人文書群を所蔵する機関の割合は38%、全文書群に占める個人文書群の割合は21%であり、高い値を示している。

これまで分析した図書館、博物館、文書館、研究所には、すべて大学の属性をもつ機関が存在していた。次に大学をその機関に分けて分析する（参考資料9参照）。まず設置形態別にみると、全大学のうち個人文書群をもつ機関の割合が、私立において22%（32校中7校）、国立において13%（48校中6校）で私立の方が9%高いことがわかった。

機関別に分けると、大学図書館が54館あり、他の大学博物館等よりも6倍以上多かった。しかし全機関中個人文書所蔵機関の割合は、3%と、最も高い大学文書館の62%と大きな差があった。ただし、文書館においても、全文書群に占める個人文書群の割合は7.6%程度しかなく大学文書館においても、他の文書群に比べ個人文書群の占める割合が低いことが分かった。1機関当たりの個人文書の値を見ると、研究所が最も高く4群であり、図書館が2.5、博物館が1、文書館が2、大学の記念室等が1.5群というように偏りなく少数群ず

つ所蔵されていることが分かった。

以上の結果をまとめると、個人文書群は、文書館だけでなく、図書館、博物館、文庫、大学、教育委員会、研究所、県庁・市役所などで、個人文書群が所蔵されていることが分かった。全機関に占める個人文書群所蔵機関の割合は、文書館、研究所、県庁・市役所、大学の順で高かった。大学は、総文書群に占める個人文書群の割合が最も高かったが、その値は3%であり、大学において、さらに言えば大学文書館においても個人文書群の他に大量の文書群が保存されていることが分かった。

図書館、博物館、文書館の分析においては、3館全ての個人文書群の占める割合が、全所蔵文書群の中で3%未満であることがわかった。ただし全機関中の個人文書群所蔵機関が占める割合は、文書館が40%で図書館と博物館よりも4倍以上高く、また1館当たりの個人文書群数でも文書館は7.5群で図書館の3倍以上多かった。図書館、博物館、文書館においては、都道府県立の方が市立よりも1館当たりの総文書群数が多かった。

国立国会図書館憲政資料室は、全登録文書群のうち87%(359群中313群)が個人文書群であった。次に個人文書群を多く所蔵していたのは、北海道立文書館の82群、続いて大分県立先哲史料館の42群であった。

c) 内容からの分析結果

機関に所蔵されている文書群350件の一覧を参考資料3に示した。憲政資料室所蔵の個人文書群は、その分量の多さや1館の画一的なデータであることから分析対象として除いた。この参考資料3の並びは、参考資料2の並びと対応している。ここでは、表の項目から、検索手段、利用可能な代替方式、経歴、数量、に分けそれぞれ分析を行う。

検索手段は、刊行目録が最も多く143件、webで公開、もしくは検索できるものは、118件であり、全体の72%である。一方、外部に公開されていない、内部目録は28件、マイクロ化されたものは3件あった。検索手段が空欄もしくはないものは、71件で、これは全体の20%に相当する。データベース上の公開は、未整理を理由になされていない館が少なからずあるようである⁸⁰。そ

⁸⁰大友一雄編『アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究』 人間文化研究機構国文学研究資料館，2006年，（平成15年度～17年度 科学研究費補助金（基

のため、これ以上に相当数の文書群が未整理状態のまま機関に保存されているといえる。

利用可能な代替方式は、マイクロ化が 37 件で最も多く、電子式複写が 17 件、紙焼きが 11 件、複製本が 5 件の順に多かった。デジタル化は、同志社大学同志社社史資料センターと帯広市図書館でしか行われていなかった。一方、代替なしは、282 件であり、全体の 79%にも及んだ。

経歴は、教授が最も多く 55 件、次いで政治家が 54 件、文学者が 33 件、教師が 13 件、軍人が 11 件、社会運動家が 10 件、開拓使が 8 件であった。憲政資料室を含めると、政治家が圧倒的に多くなると考えられるが、その他の機関では、教授と政治家がほぼ同数であった。文学館は 1 館も入っていないが、文学者の文書群が 33 件も含まれていた。開拓使は、北海道で生成・蓄積された文書群である。政治以外では、研究、創作活動といった個人で行う活動によって生成された文書群が、多く所蔵されていた。

点数は、不明 26 件を除く 324 件の平均が 1110 点であった。しかし、198 件（全体の 61%）の文書群が 100 点以下であった。個体差あるいは館の収集方針によって、点数に大きな差が生じていると考えられる。

図書館、博物館、文書館に分けて分析を行うと、図書館は、32 件の平均点数が 4208 点、博物館は 122 館の平均が 690 点、文書館は 141 館の平均で 689 点であった。図書館は、文庫に図書が多く含まれている場合があるため、点数が大幅に多くなっていると考えられる。また、それぞれの館において最も個人文書を保有している北海道図書館（8 件）、大分県立先哲史料館（42 件）、北海道立文書館（82 件）を見ると、先哲史料館の 1 件を除いてすべての文書群が平均点数以下であった。文書館で 2 番目に所蔵が多い京都府立総合資料館（9 件）、博物館の沼津市明治史料館（27 件）においても同様の傾向があることから、個人文書群を多く保有している機関は、少数の点数の個人文書群を収集あるいは少数に選別して収集しているといえる。

第 3 節 個人文書群の目録からみる編成の分析

前節においては、個人文書群の所蔵状況とその所蔵文書群を、都道府県別、

機関別に分け分析をした。本節では、それら所蔵文書群がどのように整理されているのか、つまり整理状況を確認するため、個人文書目録の編成基準の分析を試みる。

第1項 個人文書群目録の調査と結果の概要

文書目録の調査に関する先行研究としては、鈴江英一⁸¹と松下浩⁸²のものが挙げられる。前者は、24冊の都道府県庁文書目録を主な対象として分類と記述の構成を分析し、表にまとめている。後者は、12冊の近世文書目録（調査報告書も含む）などを主な対象として、構成要素や項目についての分析を行っている。しかし個人文書目録を対象に、編成の構成を分析した調査は見当たらない。編成に関しては、前者は、目録の年代に着目し分析を行っている。1980年代以降の目録は作成者がほぼ文書館になり、それに伴い組織別編成が主流となったという⁸³。後者は利用目的から分析を試みている⁸⁴が、文書群の所蔵機関に着目した分析は行っていない。本調査では、個人文書目録を対象に、編成の構成を調査し、機関という視点から分析を試みる。

対象としたのは、個人文書群の目録である。収集方法は、主に3つあり、1つは、筑波大学附属図書館所蔵の刊行目録（76点）から、2つは、同所蔵の保存機関が発行する紀要など（21点）から、3つは、Web上で公開されている目録（14点）から収集を試みた。その結果、111点の個人文書の目録（データ）を収集することができた。同一の作成者（発行者）であっても、編成方法が異なる場合は、最大3つまでを収集可能とした。機関別に分類すると、

⁸¹ 鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会、2002年、pp.235-288（初出は『史料館研究紀要』27号、1996年）

⁸² 松下浩著「史料目録の目的と構成内容—滋賀県下の史料目録作成の事例を中心に—」『記録と史料』16号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、2006年、pp.1-17

⁸³ 1950～60年代（13冊）、70年代（6）、80年代以降（9）（サンプル数）に分けて分析している。50～60年代は、編年、組織、主題に分散しており、70年代は、編年あるいは主題に依ることが顕著になるという。

鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会、2002年、pp.251-254

より

⁸⁴ 松下の論文では、調査・研究と保存・管理という2つの目的別に目録を分け、前者では文書の内容、後者では形状に関する情報が優先されると結論付けている。分類に関しては、分析が不明瞭であり、前者では編年を重視、後者では保管順序に合わせるべきとしている。

図書館の目録が 25 点、博物館が 15 点、文書館が 32 点、大学が 69 点で、研究所が 17 点、文学館が 3 点、国立国会図書館憲政資料室が 2 点、その他が 5 点であった。憲政資料室は、前節でも述べたように個人文書群に特化した特殊な組織であり、編成論も独自に作り上げてきたため、図書館や文書館には含まないことにした。

なお、収集した目録の作成・発行機関のうち、前節の調査で使用した「史料情報共有化データベース」に登録しているものは、111 機関中 25 機関にとどまり、その中で文書群情報が登録されているものは、11 群のみであった（表には「DB に文書有無」に記載）（憲政資料室を除く）。

調査結果を、参考資料 10～16 に示した。この表は、前述の鈴江英一の論文の都道府県庁文書目録を分析した表を参考に作成した⁸⁵。参考資料にある第 1 編成、第 2 編成、第 3 編成というのは、その文書群を 1 番目に編成している基準、1 番目で編成された文書群を 2 番目に編成している基準という意味である。

編成基準は、「物理形態」、「内容形態」、「形態」、「様式」、「事項」、「主題」、「十進分類」、「出所」、「現秩序」、「時期」、「組織」、「経歴」、「活動」、「場所」、「作者」、「なし」に分け、分析を行った。わかりにくいと思うものを以下に説明する。「物理形態」は、物理的に異なる形態で区別している、例えば文書、図書、写真などである。「内容形態」は、文書の内容と形態が合わさったものである、例えば詩、理事会記録などである。「形態」は、「物理形態」と「内容形態」を合わせたものとする。「様式」は、自筆資料やコピー資料などの分類である。

「主題」は、既存の図書館の分類や特定の事柄を抽象化した概念を指し、例えば産業、鉄鋼などである。一方「事項」は、1 つ 1 つの特定の事柄を指す、例えば教育施設関連、教育会議などである（これを「主題」にすると教育になる）。「場所」は、都道府県、地域による分類を指す。なお、編成は、基本的に項目立てて明示的に分けられているものを採用し、3 つ以上編成基準が見られるものは、それが多いいものから 2 つを選択し、多い基準から記載した。

⁸⁵鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会、2002 年、pp.250-251

また基本的に編成の分析対象とするのは、文書類であり、図書、書簡などの細分類は、その対象にしないことにした。

最初に全体を通しての、個人文書目録の編成の構成について述べる。収集した111点の目録の編成を分析した結果を参考資料10に示した。第1編成で最も多かったのは、物理形態の47点、2番目は、事項の25点、3番目は、形態の15点であった。第2編成で最も多かったのは、事項の29点、2番目は、物理形態の16点、3番目は、形態の14点であった。第3編成で最も多かったのは、事項で12点、2番目は、形態で8点、3番目は、内容形態で6点であった。編成基準の上位3番までは、形態に関するもの（物理、内容、形態）と、事項で占められていた。形態のもの（物理、内容、形態、様式）とそれ以外の内容のものに大別すると、第1編成は、全体の基準に占める割合は、形態のもの61%、内容のもの39%となり、最初は内容よりも12%多く、形態による編成がなされていることがわかる。しかし、第2編成では、形態のもの43%、内容のもの57%と割合が逆転し、第3編成でも、形態のもの45%、内容のもの55%になり、編成段階が進むと、10%以上多く内容による編成がなされている。

物理形態の基準は、第1編成では最も使われた（全体の39%）が、第3編成には1回しか使われていない。出所はさらに極端であり、第1編成に特有の基準であるといえる。反対に事項は、第1編成では全体の21%、第2編成で32%、第3編成で32%であり、第1編成より編成段階が進んだ方が、使われる基準だといえる。

目録上で文書群に第1編成がなされていないもの（分類されていない目録）は、11点あり、個人文書目録の約10%は分類が付されず公開されていることが分かった。第2編成では47点（全目録の42%）、第3編成では86点（全目録の77%）であった。

編成の構成と共に、刊行目録に履歴表、解題が付されているかの調査を行った。76点の目録中に、履歴表は27点（全体の36%）に、解題は23点（30%）に付されていた。履歴表と解題が併せて掲載されているものは、9点（12%）であった。年代に分けて分析すると、1985年以前には、解題が付されている目録はなかった。1986年～1999年と2000年～2014年に分けると、前者は

履歴表、解題ともに全体の 32%に付いており、後者は、履歴表 44%、解題 50%に付いていた。1985 年以前は、履歴表が 25%であり、履歴表、解題ともに約 15 年前に比べ、付されている目録が多くなっていることが分かる。史料目録には解題が必要であり、近世史料で家の来歴が解題に必要なように⁸⁶、個人文書群の目録解題においては、履歴表が必要になると考える。履歴表、解題を合わせたものが、全体の 12%であることから、個人文書目録の構成要素の改善が求められる。

第 2 項 個別機関の目録思想に関する分析（参考資料 17）

ここでは、図書館、博物館、文書館、文学館、憲政資料室の目録思想を検討し、それらに適合した目録を紹介する。

図書館では承知の通り、NDC（日本十進分類法）⁸⁷による主題分類が主流である。その他の施設に比べ最も標準化された分類である。NDC 分類は、すべての知識領域をカテゴリーに分割させるという発想から生まれている⁸⁸。目録は、「図書館のコレクションを利用するためのものである」⁸⁹という言葉に象徴されるように、図書館の目録は、利用（者）のための目録であるといえる。その思想が反映された目録が、愛知学院大学附属図書館発行の『小野文庫目録』⁹⁰である。図書、雑誌、抜刷、書類・原稿の 4 つに分類されており、第 1 編成は、「物理形態」に該当する。図書は、NDC7 版で分類され、雑誌、抜刷とともに索引が付されている。書類・原稿は、法学・法哲学、法律、刑事法、宗教法、仏教・宗教、その他に分かれ、第 2 編成は、「主題」を基準に行われている。法学・法哲学は、さらに一般、法思想史に分かれ、第 3 編成は「主題」である。書類・原稿を図書と同じように主題で分類し、図書、雑誌、抜刷は、別に索引を付し利用に供するという、図書館の目録思想を体現した目録である。

博物館では、博物館資料化する前に作成される収集目録、収蔵品をリスト化

⁸⁶大藤修著「第六章 近世文書の整理と目録編成の理論と技法」 大藤修・安藤正人共著『史料保存と文書館学』 吉川弘文館，1986 年，pp.202-285

⁸⁷ 日本図書館協会分類委員会改訂篇『日本十進分類法 新訂 10 版』 日本図書館協会，2014 年

⁸⁸三中信宏著「知識の樹」 日本図書館協会現代の図書館編集委員会編『現代の図書館』第 48 巻第 4 号 日本図書館協会，2010 年，pp.262-269

⁸⁹小西和信・田窪直規共著「1 章 目録法」 小西和信・田窪直規編『情報資源組織演習』 樹村房，2013 年，p.3

⁹⁰小野文庫整理委員会編『小野文庫目録』 愛知学院大学附属図書館，1990 年

した収蔵品目録などがあり⁹¹、目録作成は、一連の資料管理の中に位置づけられる⁹²。そのため、目録は、管理（者）のための目録であるといえる。NDCのような標準分類はなく、各館園が独自の分類をもち、また取り扱う分野によってそれぞれの学問の分類体系を反映させた専門性のある分類をもっている⁹³。市立博物館の『梁川剛一資料目録』⁹⁴においては、彫刻、挿絵、素描・スケッチ、下絵、遺品、図書に分けており、第1編成は「形態」を基準としている。第2編成以降は存在しない。図書の細分類がなされていないことから、利用というより管理目線で作られたものであり、彫刻、挿絵などの分類も美術の専門的な分類に当てはめられていると考えられる。

図書館では、史料整理の目標は、文書群の「体系的秩序（文書群の階層構造）を発見し、再構成し、呈示する」⁹⁵ことであり、その呈示が目録の役目である。国文学研究資料館の「鈴木荘六文書目録」⁹⁶では、シリーズ、サブ・シリーズというように階層構造が明記され、その下に文書群が配列されている。シリーズは、公的活動（軍）、公的活動（その他）、個人、家族と分かれており、第1編成は、「活動」、「出所（人）」である。公的活動（軍）は、教導団生徒、士官学校生徒、陸軍大学校生徒、参謀本部員などに分かれ、第2編成は「経歴」である。第2編成までは、形態、主題とも異なる、鈴木文書群の体系的秩序を表すものになっている。

文学館は、図書館的機能と博物館的機能をもつため、両者の目録思想を併せ持つと考えられる⁹⁷。日本近代文学館の『佐多稲子文庫目録』⁹⁸では、特別資料、図書に分けており、第1編成は「物理形態」である。出版物と「特別資

⁹¹全日本博物館学会編『博物館学事典』 雄山閣、2011年、pp.212-213

⁹²倉田公裕監修『博物館学事典』 東京堂出版、1996年、pp.318-323

⁹³柴田敏隆編集責任『第6巻 資料の整理と保管』 雄山閣出版、1979年、pp.131-247では、「1美術系」、「2歴史系」、「3自然史系」、「4理工学系」、「5動植物園・水族館」にわけてそれぞれ分類を論じている。

⁹⁴『梁川剛一資料目録』 市立函館博物館、1996年

⁹⁵安藤正人著「第三章 史料の整理と検索手段の作成」 国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、p.55

⁹⁶「鈴木荘六文書目録」 調査収集事業部編『史料目録 第95集 近現代文書目録（その1）』 人間文化研究機構国文学研究資料館、2012年、pp.3-49

⁹⁷中村稔著『文学館を考える』 青土社、2011年、pp.19-20

⁹⁸『日本近代文学館所蔵資料目録 27 佐多稲子文庫目録』 日本近代文学館、2002年

料」に分けるといふ編成は、収集した日本近代文学館、神奈川近代文学館の全ての目録に共通していた。特別資料は、原稿・草稿・創作メモ、書簡、日記、自筆文書、印刷物などで、第2編成は、「形態」、「様式」であった。図書とそれ以外とで分けているが、図書は主題によって分けられていない。しかし一般には、NDCにより分類されるようである⁹⁹。また原稿と草稿の区別や、自筆と印刷物の区別は、文学資料の専門的な分類を施している。これらより図書館と博物館の目録思想を併せ持つと考えられる。

第3項 機関別の編成の構成に関する分析

前項では、図書館、博物館、文書館、文学館の機能や目録の役割に適合した目録が、個人文書群の目録においても作成されていることが確認できた。本項では、収集した文書目録すべての編成の構成を分析し、それぞれの機関の目録の編成方法の傾向について考察する。

図書館所蔵の個人文書目録(25点)の編成の構成を参考資料11にまとめた。図書館の個人文書目録における第1編成は、「物理形態」が15点で最も多く、全体の52%を占める。その他の機関に比べて特徴的なものは、「主題」、「十進分類(NDC)」、また「内容形態」による分類である。図書館資料は、NDCによる分類が主流であるが、個人文書群の編成においては、第1編成で1回、第2編成で2回しか使用されていなかった。主題を含めると、第2編成で5回使用され、全体の20%を占めているが、第3編成では15%であり、第1編成では3%にすぎない。ここから図書館においてもいきなり文書群にNDCを適用させておらず、先に何らかの編成を施していることがわかる。十進分類は、1984年を境に見られないが、主題分類は1990年の目録にも見られる。2000年に入っても文書群を主題別に分類するという編成は続いているようである¹⁰⁰。

第3編成まで編成をしていたのは、12点と約半数であり、これは、博物館や文書館に比べて多かった。図書館目録は、利用者のためという要素が強いた

⁹⁹中村稔著『文学館を考える』 青土社、2011年、pp.89-90

¹⁰⁰平林祐子著「「飯島伸子文庫」開設—環境社会学の歴史と発展をめぐるアーカイブ—」『環境社会学研究』 環境社会学会、2006年、pp.178-185
平石直昭著「草稿資料の整理・保存・供用をめぐる諸問題—東京女子大学丸山文庫の経験から—」『東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター報告』8巻 丸山眞男記念比較思想研究センター、2013年、pp.100-104

め、細かく編成をし検索しやすくしていると考え。第 2 編成と第 3 編成においては、基準がばらけており、突出して使用されている基準はなかった。物理、内容、形態を合わせたものと、事項、主題、十進分類を合わせたものはほぼ同数であった。形態や主題は単独の基準として用いられるが、事項は、形態とセットで用いられていた。

博物館所蔵の個人文書目録(15点)の編成の構成を参考資料 12 にまとめた。第 1 編成は、全基準のうち物理形態：29%、形態：24%、事項：24%、出所：14%と値が分散し、突出した基準はなかった。しかし、物理形態と形態を合わせると、52%となり、形態別の編成が半数以上を占めることが分かった。また事項は、形態と合わさっており、事項のみによる統一した編成は存在しなかった。第 2 編成は、5 つ中 4 つの基準が形態によるものであった。これらから、博物館における個人文書目録において、形態別編成が、主流なものといえる。第 2 編成では、11 点の目録で編成がなくなった。第 3 編成を行った目録は 1 点のみであった。博物館目録は、管理的な要素が強いため、編成を行い、利用者の便に供するという意識が低いのではないかと考える。

文書館所蔵の個人文書目録(32点)の編成の構成を参考資料 13 にまとめた。図書館や博物館の編成基準と異なるところは、「出所」による編成が多いこと、「経歴」、「活動」などの編成基準があることである。出所は寄贈先や、個人と家族とを分けた人による出所などであった。これは、整理の原則とされる出所原則に基づいた編成であると考え。第 1 編成は、全基準のうち物理形態：25%、事項：22%、出所：19%と値が分散し、突出した基準はなかった。第 2 編成は、事項が全体の 42%で。最も多く、図書館、博物館と異なり、形態による編成よりも多かった。「経歴」、「活動」などの編成基準、そして形態よりも「事項」を重視した編成は、文書群の体系的秩序を意識したものであると考える。文書群の第 3 編成は、32 点中 29 点において編成されていなかった。文書館は図書館に比べて、細かい編成がなされていないことがわかった。全く編成がなされていなかった 4 点の目録は、いずれも web 上で公開されている大学文書館の目録であり、そのうち 3 点が 150 点未満の少数の文書群であった。

大学所蔵(12点)、研究所所蔵の個人文書目録(17点)の編成の構成を参考資料 14、15 にまとめた。どちらも第 1 編成は、物理形態によるものが最も

多かった。

文学館の目録（3点）は、出版物（主に、図書、雑誌）と「特別資料」に第1編成されており、その編成が館をまたいで共通していることから、後の憲政資料室と同様に、文学館として独自の編成基準を発達させてきたと考えられる（参考資料16）。また、「特別資料」という名称は、他の機関の目録には見られなく、なおかつ文学館に共通して見られることも独自の編成を発達させてきたと考えられる理由の1つである。「特別資料」とは、図書、雑誌に属さない資料のことを指す。その編成基準で他の機関にはない特徴的なものとして、第2編成の「様式」、第3編成の「作者（本人、その他）」が挙げられる。「様式」は、自筆資料、印刷物という区分に表れており、「作者」は、当該個人のものとの人を区別している。これら基準から、文学館は、当該個人が書いた一次資料に価値を置き、編成を行っているといえる。その理由の一つは利用にあると考える。利用者は、極めて限られた少数の研究者である¹⁰¹という考えがあり、その利用はほとんど当該文学者の肉筆資料なのではないかと考えられるからである。

群馬県立土屋文明記念文学館では、特別資料の整理について、神奈川近代文学館と山梨文学館の資料項目表を参考にし、「分類は、大分類として100原稿類、200自筆類というように主に資料内容により大きく9区分している。次に040冊子、060額というように主に資料形態によりそれぞれの大分類の中を区分している。また、小分類として004冊子装、006額装というように装丁替えしたものを形態区分している」と述べ、この分類は、「図書館で採用しているNDCの主題区分と形式区分による分類を参考にしている」という¹⁰²。この文学館では、NDCの枠組みを積極的にとり入れ、文学資料の独自の専門的な分類を行っている（NDCには、原稿や冊子などの形式区分は存在しない）。また、文学館には、分類表が作られており、その区分を当てはめて分類が行われていることがわかる。日本近代文学館名誉館長であった中村稔が著した『文学館を考える』では、原稿、ノート、書簡などそれぞれの資料価値が語られてお

¹⁰¹中村稔著『文学館を考える』 青土社、2011年、pp.19-20

¹⁰²今井恵子著「本館における資料整理の方法と情報システムについて」『風：文学紀要』2号 群馬県立土屋文明記念文学館、1998年、p.110

り、別々の役割をもつという認識がなされていることも¹⁰³、形式による分類表が作成される理由の1つであると考ええる。

国立国会図書館憲政資料室の目録は、すべて最初に文書群を書類と書簡とに大別されている（参考資料17）。この編成方法は、憲政資料室が資料を収集し始めた1950年頃に確立したものである。当時の目録編成の具体的な考え方は、「文書を書類と書簡に大別し、書類は件名を与えて内容別に排列して、これに一連番号を付し、書簡は発信者別にアルファベット順に区別し年代順に排列して、これに一連番号を与え」というものであった¹⁰⁴。書類と書簡とを分けていることから、憲政資料室が近現代私文書において書簡の重要性を、その分量や情報の面から認識していると考えられる¹⁰⁵。『阪谷朗廬関係文書目録』¹⁰⁶では、文書群を書類と書簡に大別し、書類をさらに時事・一般、広島藩関係という事項別に分類している。第2編成は、政治、国勢、時事などで主題別に分類されている。一方、『斎藤実関係文書目録 書類の部』¹⁰⁷では、凡例上では事項別と説明されているが、第1編成は、海軍時代、朝鮮総督時代に分かれており、経歴別と言い換えることができる。続く第2編成でも、経歴による編成がなされており、「事項」を幅広い意味で利用し、編成していることがわかる。2012年に出された論文では、「資料群の構造に合わせて分類し、項目立てを行い、目録として提供している」¹⁰⁸という方針が見られ、構造に合わせるという認識から、「事項」の捉え方にも変化が生じているのではないかと考える。

¹⁰³中村稔著『文学館を考える』 青土社、2011年

¹⁰⁴二宮三郎著「憲政資料室前史（下）」『参考書誌研究』第45号、1995年、p.36

¹⁰⁵加藤聖文著「3章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」 国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 下』 柏書房、2003年、p.233注（32）より

¹⁰⁶国立国会図書館専門資料部編『阪谷朗廬関係文書目録』 国立国会図書館、1990年

¹⁰⁷国立国会図書館専門資料部編『斎藤実関係文書目録 書類の部 1』 国立国会図書館、1993年

国立国会図書館専門資料部編『斎藤実関係文書目録 書類の部 2』 国立国会図書館、1995年

¹⁰⁸藤田壮介著「国立国会図書館憲政資料室のいま」『情報の科学と技術』62巻10号 情報科学技術協会、2012、pp.434-439

第4節 編成論を中心とした整理論の歴史と現時点での課題

個人文書群を含む歴史資料の編成論の歴史についての先行研究は、次の2つを挙げることができる。鈴江英一の「近現代史料整理論の状況」¹⁰⁹と、清水善仁の「アーカイブズ編成・記述・検索システム論の成果と課題」¹¹⁰である。しかし、どちらも個人文書群に焦点をあてたものではなく、また、個人文書群の編成は数年前からようやく論文の題材になり、議論され始めているため、最新の研究成果を検討に入れる必要がある。

本節では、最初に編成論の歴史を概観し、次に個人文書群に着目し、その編成論の展開を見て、それを全体の編成論の中に位置づけ、その到達点と課題を探る。

第1項 編成論の歴史と展開

編成論の萌芽は、1970年代前後に近世史料の分類論についての論考に垣間見ることができる。大野瑞男「近世史料分類の現状と基礎的課題」¹¹¹では、史料にNDCを機械的に当てはめるような分類方法は、史料の原型や性格を破壊してしまうことにつながると指摘し、図書館学の影響下にあった分類論を史料の分類から独立させようと試みている。その知見を生かし、1970年代近現代史料論が生起し、主題ではなく編年や組織による分類などが行政文書を対象に実践されていく。1979年に出版された『日本古文書学講座 11 近代編Ⅲ』¹¹²では、行政文書の分類において、さまざまな論点が提示された。それら論点は①編年と機構による分類、②柔軟性のある目録編制、③配架（書架分類）と分類（書誌分類）の分離、④家わけをくずさない、⑤原形の保存状態をくずさない、などの論点が議論されている。1980年代後半に『史料保存と図書館学』

¹⁰⁹ 鈴江英一著「近現代史料整理論の状況—近現代史料整理論ノート1—」『史料館研究紀要』27号 国文学研究資料館史料館、1996年、pp.125-184
（鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』北海道大学図書刊行会、2002年に所収）

¹¹⁰ 清水善仁著「アーカイブズ編成・記述・検索システム論の成果と課題」『アーカイブズ学研究』11号 日本アーカイブズ学会、2009年、pp.55-72

¹¹¹ 大野瑞男著「近世史料分類の現状と基礎的課題」『史料館研究紀要』第1号 史料館、1968年3月、pp.267-283

¹¹² 三上昭美編『日本古文書学講座 11 近代編Ⅲ』雄山閣、1979年

(注 20) や『史料の整理と管理』¹¹³という 2 つの著作により、欧米のアーカイブズ学の理論が輸入されると、その理論を適用した研究が、主に近世史料を中心として展開されていく。

アーカイブズ学の整理論は、アーカイブズの文書群としての特徴から導かれる。文書は、何らかの目的を持って、一連の流れの中で作成されるものであるため、その過程で作成または蓄積された文書には、一定の体系的な秩序が生まれる。そのような体系的な秩序を文書群の階層構造と呼ぶ。アーカイブズには、このような特徴があるため、整理の目標は文書群が本来持っていた関連性を見出し、秩序を再構成し、提示することになる。その目標を達成するために、整理においては、「出所原則」と「原秩序尊重の原則」という 2 つの原則を守らなければならない¹¹⁴。そして、そのような整理は、(1) 概要調査、(2) 内容調査、(3) 構造分析、(4) 多角的検索という段階を経て整理されるべきであると主張された¹¹⁵。

1990 年代に入ると文書館は、整理業務においてコンピュータの導入が進んだため、文書群の情報をどのようにデータベース化するかという問題に取り組むことになった。階層構造の表現の仕方、目録記述の標準化などの問題が盛んに議論された¹¹⁶。安藤正人は「記録史料目録論」¹¹⁷のなかで、各階層構造に記述すべき目録情報を提示した。その後、ICA 国際文書館評議会が階層構造に基づく記述標準の、ISAD(G)¹¹⁸を発表し、日本においてもこれを取り入れた検索システム¹¹⁹や文書目録¹²⁰がつくられるようになった。

¹¹³国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988 年

¹¹⁴安藤正人著 「第三章 史料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988 年、pp.51-98

¹¹⁵安藤正人著 「第三章 史料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988 年、pp.51-98

¹¹⁶鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会、2002 年

¹¹⁷安藤正人著「記録史料目録論」 『歴史評論』 497 号 歴史科学協議会、1991 年 9 月、pp.63-76

¹¹⁸ISAD(G)は、General International Standard Archival Description の略で、日本語では、記録史料記述の国際標準と訳される。

アーカイブズ・インフォメーション研究会編訳 『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会、2001 年

¹¹⁹小川千代子「ISAD(G)の実装：アジア歴史資料センターの階層検索システム」 『レコード・マネジメント』 記録管理学会、2002 年、pp.10-25

2000年代に入っても編成論の議論は、引き続き行われており、書籍においては、2002年に鈴江英一が発表論文をまとめた『近現代史料の管理と史料認識』¹²¹の中で、近現代史料整理論の歴史や到達点、そして今後の課題について再考している。2003年には『アーカイブズの科学』¹²²の中で、アーカイブズ編成と記述について近世史料と近現代史料に分け、それらの一般的な課題について論じられている。さらに2014年に『アーカイブズの構造認識と編成記述』という、編成を主テーマとして書籍が刊行された。この構成は、「第1編 アーカイブズの編成記述—理論と動向」、「第2編 アーカイブズの構造認識と編成記述論」、「第3編 近世の記録管理とアーカイブズ」に分かれており、近世史料についての論考が多い。前掲書は、個々のアーカイブズの分析と、その理論・動向とをつなごうと取り組んでおり、そのような取り組みは、近現代史料、とりわけ個人文書群においても、取り組まれるべき課題であるといえる¹²³。

第2項 個人文書の編成論における歴史と到達点

個人文書群を主題とした編成（分類）に関する論考は、古くは1979年『日本古文書学講座 第11巻 近代編Ⅲ』¹²⁴「4近代政治家の文書」に登場している。この図書の中では、主として行政文書を事例に取り上げ、整理についての論点を提示しているが、a) 国立国会図書館憲政資料室の整理方法¹²⁵、b) 早稲田大学図書館による大隈重信文書の整理事例¹²⁶、c) 憲政資料室の井上毅文書の整理事例¹²⁷などの個人文書群に関する論考もいくつか収録されている。a) では、前節で紹介した憲政資料室の編成方法だけでなく、所蔵文書の形式

¹²⁰調査収集事業部編 『史料目録 第95集 近現代文書目録（その1）』 国文学研究資料館，2012年

¹²¹鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会，2002年

¹²²国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 下』 柏書房，2003年

¹²³国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版，2014年

¹²⁴三上昭美編『日本古文書講座 第11巻 近代編Ⅲ』 雄山閣出版，1979年

¹²⁵桑原伸介著「国立国会図書館憲政資料室」三上昭美編『日本古文書講座 第11巻 近代編Ⅲ』 雄山閣出版，1979年，pp.51-66

¹²⁶中村尚美著「大隈重信文書」三上昭美編『日本古文書講座 第11巻 近代編Ⅲ』 雄山閣出版，1979年，pp.66-74

¹²⁷木野主計著「井上毅文書」三上昭美編『日本古文書講座 第11巻 近代編Ⅲ』 雄山閣出版，1979年，pp.74-83

(紙、筆記具、印刷) についての考察がある。まず全体的にいえるのは、明治期の文書の代表が和紙と墨書の組み合わせであるが、昭和期の文書は洋紙にペン書・印刷の組み合わせであるという。また、文書群の構成から見ると、明治期では、書簡が大半を占めるが、昭和期になると書簡は乏しく、事務上の書類が主流になるという。さらに書類は、前期の筆写、蒟蒻版が、後期のガリ版、活版に変わり、複写技術の開発により、別形態を有する資料が加わってきたという。筆者は、これら文書形式は、管理する上で重要と結論付けているが、私は、編成する上においても重要であると考え。これら文書形式は、年代の特定に有効であり、また作成者個人の文書形式にまで明らかにできれば、文書の作成目的や文書間の関係性などが見えてくる可能性があるためである。

b) では、『大隈文書目録』の整理方法について述べており、分類は主題によるものである。また c) でも、井上毅本人の分類を尊重し、その上で主題分類を行っている¹²⁸。『日本古文書講座 第 11 巻 近代編Ⅲ』では、行政文書においては、主題ではなく編年や機構による分類などの議論が見られるが、個人文書群においてそのような論点は議論されておらず、ここから、個人文書群の編成論の遅れを読み取ることができる。ただし、c) では、文書の連関性が消失するという問題点は認識されているが、その連関性の認識は保管体系に集約されており、保管状態(現秩序)を崩さず、書架分類をし、その後で主題に従って書誌分類をする方法を提案している。

次に個人文書群の編成に関する論考としては、1983年武田晴人が、第3回企業史料管理研究会で講演した記録である「経営史料としての個人文書—石川一郎文書の整理に即して—」¹²⁹を挙げるができる。この講演は、経団連の初代会長であった石川一郎の個人文書群を、現秩序の分類を崩し再編成した事例である。整理過程としては、最初に受け入れ時の状態(以下現秩序とする)に即して簡潔な目録を作り、次に文書 1 点ずつの目録を作成し、その後、本目録化の過程で再編成を行っている。文書群は、送付された文書や石川自身が参加した会議文書が、日付順に綴じられファイル群であり、それらは、石川の

¹²⁸木野主計著 「井上毅文書」 三上昭美編 『日本古文書学講座 11 近代編Ⅲ』雄山閣、1979年、pp.74-83

¹²⁹武田晴人著 「経営史料としての個人文書—石川一郎文書の整理に即して—」『企業と史料』 1巻 企業史料協議会、1986年3月、pp.91-104

秘書によって、主題別・機関別に分けられ、件名が付与されていた（現秩序）。現秩序の分類は、「理事関係」、「連盟会内部関係」、「技術」など 18 項目に分かれていた。武田は、ファイルにとじられた文書 1 点ずつの目録を作成するなかで、文書群が、①化学工業統制会・化学工業連盟、②政府関係機関および諸団体、③経団連・日産協という大きく 3 つのグループに分かれている（以下大分類とする）ことを発見したという。またファイルの中の文書は、相互になんらかの関係をもつことが分かったため、編成の際に原則としてファイルの原形を崩さないという方針を立てた。その上で 3 つの大分類の中に現秩序分類を生かした中分類をいくつか入れ、合計 26 項目を作成している。また、現秩序において関連が不明瞭であった③経団連・日産協においては、新たに中分類を作成しており、その一部は『経団連 30 年史』の叙述に倣い、「総合政策」、「経済法規」などの組織の業務体系を、分類項目として採用している。

前述の武田の講演記録が発表されて以来、個人文書群の編成に関する目立った論考は、2003 年『アーカイブズの科学』所収の加藤聖文の「アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」¹³⁰まで見られなかった。加藤は、この論文の中で、「近現代私文書」は、「家」の崩壊や、個人の移動回数の増加により、文書群の散逸、所蔵先の分散が生じるため、「出所」が不明瞭になり、「原秩序」が崩壊するという特徴をもつと述べ、それゆえに主題別（事項別）分類が依然として有効な編成方法として採用されていると問題提起している。

加藤の論考から 3 年後の 2007 年、呉屋美奈子・富永一也による「公文書館における私文書の収集と整理：実践と課題」が発表された¹³¹。この論文は、沖縄公文書館職員による公文書館の実態を踏まえた私文書のシリーズ編成の事例であり、ICA（国際公文書会議）の ISAD(G)（記録史料記述の国際標準）とオーストラリアのシリーズ・システムの考え方を踏まえ、それらを私文書に適用する際の問題点を指摘している。シリーズ編成の問題点の 1 つ目は、分類基準を複数設定する必要がある、それら分類基準は編成者によって異なるこ

¹³⁰加藤聖文著「3 章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」 国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 下』 柏書房、2003 年、pp.215-235

¹³¹呉屋美奈子・富永一也著「公文書館における私文書の収集と整理：実践と課題」『沖縄県公文書館研究紀要』第 9 号 沖縄県公文書館、2007 年、pp.85-103

とである。「筆者らはシリーズ編成の分類軸として、その私文書を生成した人物の活動、時期区分、主題、文書の性質（書簡、草稿、メモなど）、メディア（写真、新聞切り抜き）といったさまざまな、しかも相互に重なり合うものを採用せざるを得なかった」という。このことは、「目録編成における恣意性が大きい」ことを示し、「検索者にとっては調べるべき範囲が大きくなる」とデータベース上の検索について問題提起している。実際にシリーズ編成されている「平良幸市文書」を見ると、「沖縄県議会議員時代の文書（分類軸：時期・活動）」、「書簡（形式）」、「写真（メディア）」など 17 のシリーズに分かれている。このシリーズ編成は、結果だけ示され根拠となる資料自体の分析が無いため不明瞭であるが、シリーズの定義の解釈と構造分析の反映という点に問題をはらんでいると考える。

この論文では、ISAD(G)のシリーズの定義を採用しており、「ファイリングシステムに従って配列されている文書、あるいは以下の理由により一つの単位として維持されている文書—同一の蓄積過程あるいは同一のファイリング過程、または同一の活動から生じたため。特定の形態をもっているため。あるいはその文書が作成される際、収受される際、あるいは使用される際に生じた何らかの他の関係のため。」としている。この定義では、シリーズは、機能、活動、形態、その他理由によって「一つの単位として維持されている文書」を指している。平良幸市文書の編成では、「書簡」、「辞令書」、「写真」など数量がごくわずかなものが多く、これらはシリーズには当てはまらないと考える。またこの論文では、編成に必要な構造分析について論じている箇所がない。私文書においては、公文書のように管理体系が明確ではなく、基本的には残された文書群のあり方からシリーズを推定する必要があると考える。そのために構造分析は私文書においてとても重要になるが、少量の「書簡」、「写真」などのシリーズは、平良文書の構造を反映しているとは考えにくい¹³²。

¹³² 沖縄県公文書館において、公文書の「シリーズ」は、背景にある規則や法令から確定された業務単位を指し、物理的な保管のされ方から独立した一個の概念として捉えられている。これにより評価選別から整理までの過程を有機的に関連させている。

なおシリーズ「雑纂」については、「その後、シリーズにおいて「雑纂」という分類はありえない、という考えに至った」とある。なんらかの関係性のあるまとまりというシリーズの定義に当てはまっていないため、この考えは妥当であると考

論文の中で2つ目の問題として挙げられているのは、1点から数十点程度の断片資料の場合、編成に無理があり、編成を行っても意味をなさないというものである。この問題点は妥当であると考え、説明を付け加えるのであれば、私文書は保管体系が不明瞭で、また原秩序が崩壊している場合も多いため、残された文書群から秩序を想像する必要があるが、数点の文書では、文書相互の関連性が見えないのではないかと考える。

前述の論文から7年後の2014年には加藤聖文による「近現代個人文書の特性と編成記述」¹³³と橋本陽による「個人文書の編成」¹³⁴という2つの編成事例が提出された。加藤聖文の論文は序章の先行研究でも簡単に触れた。加藤は、個人文書の編成記述においてシリーズの設定が重要になると述べている。個人文書は、内的秩序が不明瞭であるためシリーズ設定は困難であると考えられる。しかし、機能＝社会的役割および個人的行為とおきかえて、それらをシリーズにすると、編成はそれほど困難ではないという¹³⁵。

橋本陽は、「サリドマイド関連資料」という個人が収集し、寄贈を受けたものが大半を占める個人文書を整理した。編成においては、英語圏の方法論である形態、機能・活動、出所による編成を試みたが、対象にした個人文書の性格からそれらの適用は困難であると判断し、英語圏の研究の知見である社会的出所や場所の概念を取り入れ編成を行っている¹³⁶。最終的に、「原告団・弁護団」、「支援者・支援団体」、「裁判・和解」、「行政」、「サリドマイド各種資料」、「公害・薬害問題一般」の6つのシリーズに編成している。しかし、「サリドマイド関連資料」は、個人が収集・寄贈されたもの（コレクション）が大半を占め

える。

呉屋美奈子・富永一也著「公文書館における私文書の収集と整理：実践と課題」『沖縄県公文書館研究紀要』第9号 沖縄県公文書館，2007年，pp.85-103

¹³³加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』思文閣出版，2014年，pp.181-199

¹³⁴橋本陽著「個人文書の編成—環境アーカイブズ所蔵サリドマイド関連資料の編成事例—」『レコード・マネジメント』66号，記録管理学会，2014年3月，pp.42-56

¹³⁵加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』思文閣出版，2014年，pp.181-199

¹³⁶橋本陽著「個人文書の編成—環境アーカイブズ所蔵サリドマイド関連資料の編成事例—」『レコード・マネジメント』66号，記録管理学会，2014年3月，pp.42-56

るといふ特殊な文書群であり、個人の生涯を反映した個人文書群への、加藤聖文のいう機能・活動のシリーズ編成の検証が十分なされたとはいえない。

橋本の論文では、PIM (Personal Information Management) という個人の記録管理に関わる学術分野¹³⁷について触れ、その研究成果は無駄ではないが、個人の情報管理の限界性、すなわち文書群の管理形態 (ファイルレベルの現秩序) から、原秩序を想定する限界性について指摘している。シリーズの系統自体が存在しないという主張には、個人文書群の個体差があり同意しかねるが、シリーズ設定が原秩序ではなくアーキビスト設定の秩序を招いてしまうという危険性は、常に存在すると考えられ、それは、前述の沖縄県公文書館のいう恣意性の問題と同様である。

以上 3 つの論文は、最新の個人文書群の編成に関する論文であるが、編成結果は示されているが、その根拠や構造分析を含めた編成過程の記述が不十分であると考えられる。

個人文書群の編成に関する目立った論文は、以上にあげたものである。その他には、個人文書群の「解題」において、編成について論じられているものがある。広島大学文書館が刊行している個人文書群の目録には、「解題」が付されており、「出所原則」や「原秩序尊重の原則」や段階的整理の考え方を踏まえ、整理実践を行っていることが見てとれる¹³⁸。「森戸辰男関係文書」の解題では、来歴と生成過程の研究を行っており、前者では、それぞれの文書群の寄贈経緯・時期の違いが明らかにされ、後者では、戦前と戦後における文書の整理方法の違い、住居・赴任先の変更に伴う文書の分散、などが明らかにされた。文書が履歴に沿った形で生成・変容していったことがわかったため、整理方針

¹³⁷ PIM の研究成果は、職場における個人の記録の扱い方について述べているという。初期の研究では、紙ベースの資料の記録所持のあり方、現在では、個人の E メール管理のあり方などデジタル所法に特化している。

橋本陽著「個人文書の編成—環境アーカイブズ所蔵サリドマイド関連資料の編成事例—」『レコード・マネジメント』66号、記録管理学会、2014年3月、pp.42-56より

¹³⁸小池聖一著「解題」 森戸文書研究会編『広島大学所蔵森戸辰男関係文書目録〈上巻〉』 広島大学文書館、2002年、pp.1-29

石田雅春著「解題」『広島大学文書館紀要』第15号 広島大学文書館、2013年、pp.119-124

斎藤拓海他著「解題」『大牟田関係文書目録 資料編1』 広島大学文書館、2013年、pp. i - xi

として、森戸の履歴に沿った編成を文書全体に試みている。文書の来歴や生成過程の研究を行うことで、なぜ現在、文書がこのような状態にあるのかという理由が明らかになるとともに、尊重すべき秩序が見えてくる。森戸によって、戦後、公文書類が再構成されたため、文書群の中に、類似の内容の文書が分散していたが、それは、森戸の意思によるものと考えられ、「原秩序」として本目録に採録したのである。

個人文書群の編成に関する論文は、1979年の三上昭美編『日本古文書講座第11巻 近代編Ⅲ』に登場し、早稲田大学図書館、国立国会図書館憲政資料室の立場から、それぞれ作成した個人文書目録を題材にその分類方法を述べた。しかし、その分類方法は主題分類の枠を出ていなかった。1983年武田晴人による講演記録では、石川一郎文書の整理過程について述べられ、その分類方法は経歴や関連組織を参考に作成されていた。約20年の間を経て、2003年加藤聖文の「近現代個人文書の特性と編成記述」では、アーカイブズ学の「原秩序尊重の原則」や「史料群の階層構造の把握」といった理論を踏まえて論が展開されていた。2007年の沖縄県公文書館、2014年の加藤聖文、橋本陽の3つの論文は、ISAD(G)とシリーズ・システムを踏まえて、個人文書の編成について事例を交えて論じられていた。個人文書群は編成の観点において長らく近世史料や行政文書の陰に隠れ、事例研究がなされてこなかったといえる。特に欧米のアーカイブズ学の理論が入ってきた1980年代後半以降、2000年代に入るまで、個人文書群にその適用を試みた実践研究は、ほぼ皆無に等しい。2007年に1本、2014年に2本の論文が提出され、具体的な文書群を取り上げ、編成を行い提示するという研究がなされ始めてきているが、その研究は乏しいことに変わりなく、個人文書群の編成に関する理論を構築するためには、さらなる編成実践が試みられ提示される必要があると考える。

第3項 個人文書群の編成における論点

これまで、編成論全体の歴史を見た後で、個人文書群の編成論を取り出し、その歴史と到達点を見てきた。

個人文書群の編成論における全体的な課題としては、個々の個人文書群の分析とその理論とを結びつけた検証事例が乏しいことである。乏しい中でも前項で見たように1979年から編成論に関する論点が出てきている。

最初に論点として取り上げるのは、1979年、桑原伸介が憲政資料室の整理を論じた際の所蔵文書の形式（紙、筆記具、印刷）についての考察である¹³⁹。ここでの書簡が明治から昭和にかけ重要度を低めていくという主張は、小池聖一においても論じられており、加えて日記、メモの重要性も指摘されている¹⁴⁰。しかし、文書学的な立場から、個人文書を研究した例は書簡について数例あるのみ¹⁴¹で、いまだに乏しい。

また、桑原の紙と筆記具の組み合わせが時代により変遷すること、さらに印刷方法も変化する主張については、平野正裕が発展させた論考を提示している。平野は、近代では印刷術が発達し、大量に文書が作成され、またさまざまな印刷の形態が出現することになったと述べ、それらの文書の作成（成立）様式を①刻字様式と②印写様式に分けた。①刻字様式は、手書き・彫版・タイプなどの文書の印刷手段を表し、②印写様式は、墨書・ペン・蒟蒻・謄写などの文字の記入方法を示す。例えば、手書きの場合、その文書は個人的な文書であり、活版の場合、不特定多数を想定した文書であるというように、①と②、またはそれらの組み合わせによって、文書の作成意図や文書内容の社会性が読み取れるとした¹⁴²。そのような近代文書の「刻字様式」、「印写様式」は、ワープロの出現により一気に画一化に向かう。平野は、ワープロが普及した1970～80年代を、「近代文書の時代」とは明確に区別する必要があると述べている¹⁴³。

このような文書学的な知見は、階層構造の分析、特にサブ・シリーズ以下の分析に利用でき¹⁴⁴、また目録項目の増減や、表記の方法、記載情報など、近

¹³⁹桑原伸介著「国立国会図書館憲政資料室」三上昭美編『日本古文書講座 第11巻 近代編Ⅲ』雄山閣出版、1979年、pp.51-66

¹⁴⁰小池聖一著『近代日本文書学研究序説』現代史料出版、2008年

¹⁴¹佐々木隆著「近代私文書論序説—署名表現にみる政治的関係—」『日本歴史』628号 日本歴史学会、2000年、pp.39-57

真辺将之著「『大隈重信文書』の近代私文書論的研究」『早稲田大学史記要』39巻 早稲田大学大学史資料センター、2008年、pp.53-75

¹⁴²平野正裕著「近代文書整理法序説—文書の「成立様式」と「集積文書」について」『横浜開港資料館紀要』第12号 横浜開港資料普及協会、1994年3月、pp.45-64

¹⁴³平野正裕著「近代文書の整理と活用」『地方史研究』255号 地方史研究協議会、1995年6月、pp.85-86

¹⁴⁴安藤正人著「第三章 史料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店、1988年、pp.51-98

現代史料に特化した整理論の構築に資する可能性がある¹⁴⁵。しかし、平野のように、近代文書の整理に古文書学の様式論を応用する、という主張はいまだ少数であり、研究の蓄積がなされていないという¹⁴⁶。

2 つ目の課題は、編成基準やシリーズ以下の構造分析である。編成基準は、加藤聖文による役職が、唯一の提示されている基準である。それを当てはめた事例研究を積み重ね、新たな知見を生み出していく必要がある。またシリーズ編成ばかり論じられており、個人文書群全体の構造分析がなされた例が見当たらない。一般的な文書群の秩序について論じたものでは柴田知彰の論文がある。

柴田は、「内的秩序」を i) 文書作成者の文書作成時に自然発生する秩序、ii) 文書作成者および管理者が、意識的に付与する秩序、iii) 整理者が付与する秩序、の 3 段階に分け、その発生と付与について論じている。i) の秩序は、「組織性」と「連続性」という要素に分かれ、秩序の復元の際には、このどちらかの立場をとるか、両者を組み合わせるかして構造を分析する。個人文書の場合、行政文書や近世文書と異なり、「組織性」が希薄または存在しないため、「連続性」をベースにして構造を分析すると考えられる。ii) の秩序は、個人文書の場合付与されていない傾向が高い。または、付与されている場合でも、記載が不統一な場合が多い。そのため、iii) での秩序付与が困難になる。柴田は同論文内で史料群のタイプを 3 つ示しているが、それに従うと、個人文書は「文書の作成元に明瞭な組織機構と事業が存在せず、作成当時の機能を調査して推定によりシリーズや階層構造を設定しなければならない史料群」となる¹⁴⁷。これは、呉屋らに指摘された、整理者の恣意性に関わる課題である。このような特徴をもつ史料群に対して、シリーズ以下やそれ以上の階層構造を、

¹⁴⁵平野正裕著「近代文書整理法序説—文書の「成立様式」と「集積文書」について」『横浜開港資料館紀要』第12号 横浜開港資料普及協会、1994年3月、pp.45-64

¹⁴⁶鈴江英一著「古文書における近現代史料—近現代文書への接近の試み—」『史料館研究紀要』第34号 国文学研究資料館史料館、2003年3月、pp.1-20
鈴江は、この論文の中で、自身の経験から現代公文書の評価選別、目録の編成・記述について触れ、そのさいに古文書学を利用する機会はほとんどなかったと述べている。古文書学の研究の蓄積は、近現代史料を対象とするには不十分であり、有効性を見出すには、研究領域の拡大などが必要であると主張している。

¹⁴⁷柴田知彰著「アーカイブズの内的秩序構成理論と構造分析の課題」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』思文閣出版、2014年、pp.181-199

次に述べる出所原則と原秩序尊重の原則に従い分析をして、個人文書群における構造把握の知見を積み重ね、恣意性をいかに排除できるかが大きな課題である。

3 つ目の課題は、出所原則と原秩序尊重の原則である。出所原則は、「史料を、それを作成ないし授受し保管してきた機関・団体・家・個人ごとの文書群としてとらえ、ひとつの出所をもつ文書群は整理にあたって他の出所をもつ文書群と混合されてはならない」という原則である。原秩序尊重の原則は、「出所を同じくする文書群の中で個々の文書がもともと与えられている秩序(配列)が、それを生んだ機関・団体・家・個人の活動の体系を反映している場合には、その原秩序(原配列)を尊重して残さなくてはならない」という原則である。

この 2 つの原則は、編成過程に関係しており、柴田知彰によると、文書群の物理的状态から、秩序を復元する方法としてあるという。各階層レベルと対応させると、出所原則はフォンド、サブ・フォンドに関わり、原秩序尊重の原則はそれ以下の構造に関係する¹⁴⁸。

「原秩序」の解釈は、現用段階(大藤修, 1986)¹⁴⁹(安藤正人, 1988)¹⁵⁰、現用終了時(高橋実, 2003)¹⁵¹、保存機関が受け入れた時の状態(現秩序)(岡部真二, 1992)¹⁵²(本田雄二, 1995)¹⁵³など様々な主張がある。鈴江によると、どの時点の「原秩序」を採用するかは、史料の状況と目録作成者の意思にゆだねられているという¹⁵⁴。前述の広島大学文書館のように、文書の来

¹⁴⁸柴田知彰著 「記録史料群の内的秩序の復元に関する一考察」 『研究紀要』第 7 号 秋田県公文書館, 2001 年, pp.25-48

¹⁴⁹大藤修著「第六章 近世文書の整理と目録編成の理論と技法」 大藤修・安藤正人共著『史料保存と文書館学』 吉川弘文館, 1986 年, pp.202-285

¹⁵⁰安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店, 1988 年

¹⁵¹高橋実著「5 章 地域史料調査論」国文学資料館編『アーカイブズの科学下』 柏書房 pp.163-180

¹⁵²岡部真二著「現地調査における史料整理の方法について一原秩序尊重・段階的整理の実践報告一」 『記録と史料』3 号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会, 1992 年, pp.49-65

¹⁵³本田雄二著「史料整理と目録編成について一原秩序尊重の目録編成と分類項目付与の有機的連関一」 『新潟県立文書館研究紀要』2 号 新潟県立文書館, 1995 年, pp.54-77

¹⁵⁴鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会, 2002 年, pp.314-317

歴からその文書群の「原秩序」を発見する必要があると考える。

出所原則と原秩序尊重の原則について、個人文書群の編成との関係において論じているものは見当たらず、編成事例を通してその関係性について検証することも課題の1つである。

第2章 小野増平関係文書の編成

本章では、小野増平関係文書の再編成を試みる。小野増平関係文書は、広島大学文書館所蔵の個人文書で、私は広島大学在学中に1年間（2013年3月～2014年3月）その整理に携わり、全文書群の目録を作成した。その後、別のアルバイトによるデータのチェックを受け、2015年3月に、『小野増平関係文書目録』¹⁵⁵が刊行されている。しかし、その目録は、形態別に編成されており、文書群の構造を反映したものになっていない（表1参照）。

構造把握の方法としては、現在主要なモデルは2つある。ISAD(G)の階層構造¹⁵⁶によるものと、オーストラリアのシリーズ・システム¹⁵⁷による構造把握である。前者は、作成母体の組織構造を反映させた構造把握であり、後者は組織ではなく機能（仕事）に着目したものである。加藤（2014）の論文では、個人文書の編成において、後者を活用する積極的意義は見出せないとしながら、前者を適応させた編成を行っている。加藤が論文で提起しているのは、シリーズを個人の役職に設定することで、編成が可能であるというものである。本章では、個人文書群の編成において、個人の役職によるシリーズ編成は可能であるかを課題とし、小野増平文書を対象にして、編成を試みる。

第1節 小野増平関係文書の概要と整理経過

第1項 小野増平氏の略歴と業績（参考資料18参照）

¹⁵⁵ 『小野増平関係文書目録』 広島大学文書館，2015年

¹⁵⁶ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会，2001年

¹⁵⁷ 森本祥子著「オーストラリアのアーカイブズ・システムについて一概観一」高埜利彦研究代表『歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書，平成15年度～平成18年度） 学習院大学，2007年，pp.222-236

小野増平は、1947（昭和 22）年 1 月 6 日岡山県笠岡市に生まれた。広島大学教育学部付属福山高校を卒業後、1965 年東京教育大学文学部仏語仏文科に入学し、1970 年中国新聞社に入社した。1970 年に編集局報道部に配属されると、翌年には、呉支社へ、1974 年には東京支社へと配属され、支社での記者経験を積んだ。仏文科で学んだフランス語能力をかわれ、1981 年から 1 年間、フランスへ研修のため留学し、世界から集まった若手記者と交流し、フランスの難民問題などを取材した。研修終了後、日本に戻り、呉支社に配属された。1990 年から 1993 年にかけてニューヨーク支局に勤務し、1991 年「移民」の連載や、核兵器・原子力発電などの取材に携わった。その後、編集局報道部に戻り、編集委員などを務めた。1996 年呉支社編集部長、2000 年論説委員会副主席、2002 年東京支社長などを経て、2003 年から 2005 年にかけて編集局長を務めた。2006 年に中国新聞社を退社後、広島経済大学（以下広経大と略する）メディアビジネス学科教授を務め、メディアに関する講義を担当した（注 21）。2011 年 9 月 18 日、肝不全のため 64 歳で亡くなった。

小野は、記者として 2 度、「段原の 700 人」（1985 年）、「検証ヒロシマ」、「年表ヒロシマ」（1995 年）において、日本新聞協会賞を受賞（注 22）している。また、連載後刊行されたものを含め、6 冊の著書（うち 5 冊は共著）¹⁵⁸を執筆している。

第 2 項 受贈経緯及び文書群の現秩序

小野増平氏は、広島大学教育学部付属福山高校の出身であり、広島大学に関係があることから広島大学文書館に文書群の寄贈がなされた。広島大学文書館は、小野が中国新聞社の記者時代に、平和報道に深く関わっていたことから、収集対象である平和学術文庫の 1 つとして、小野増平文書群の寄贈を受けた。

文書群は、小野の死去後、妻の小野由紀子氏と中国新聞関係者の方によって選別され、まとめられ、ブルーケース 8 箱、段ボール 9 箱、段ボール 1 箱の

¹⁵⁸中国新聞社編『ヒロシマ 40 年—段原の 700 人』 未来社、1986 年
中国新聞「移民」取材班編『移民』、中国新聞社 1992 年
中国新聞社編『年表ヒロシマ』、中国新聞社 1995 年
中国新聞社編『検証ヒロシマ』、中国新聞社 1995 年
中国新聞呉支社「呉と海上自衛隊」取材班『呉と海上自衛隊』 中国新聞社、1998 年
小野増平『新聞記者っていいもんだ』 小野増平 2006 年

計 3 回に分けて寄贈された。そのうち 8 箱には、「仏資料」、「市政時代」、「移民資料」、「核・マツダ・NY SCRAP」、「NY スクラップ資料」、「NY・雑」、「戦後 50 年」、「写真・領収書」というように名称ラベルが付与されていた。内容や形態がある程度まとまっているような箱（「移民資料」、「戦後 50 年」、スクラップ資料）もあれば、一見してさまざまな形態や時代のものが混ざっているという印象を受ける箱もあった。¹⁵⁹

第 3 項 整理の経緯

整理は、仮目録→本目録の順に段階を踏んで作成した。仮目録は、文書群の受け入れ時の状態（現秩序）を尊重して、その秩序を崩さないように目録を作成した。寄贈された 18 箱のうち、ラベルで名称が付与されていた 8 箱を除く 10 箱に内容や形態から仮の名称を付け、現秩序や原形を尊重しつつ仮目録を作成した。仮目録の作成後、本目録化にあたって、内容の詳細な目録を 1 点ずつの資料に足して作成し、目録編成を行った。基本的には形態別に項目を作り、目録データを並びかえた。編成項目は、1. 書類、2. スクラップ、3. 書簡、4. ノート・メモ等、5. 電磁文書等、6. 写真、7. 書籍、8. 雑、になった（表 1 参照）。

ただし、1. 書類の小分類に関しては、形態別ではなく受け入れ時の現秩序を部分的に反映させた。書類の小分類は、1.1. 仏資料、1.2. 市政関係、1.3. 移民関係、1.4. 核・マツダ関係、1.5. ニューヨーク関係、1.6. 戦後 50 年である。これらは、基本的に文書群の受け入れの際の、ラベルに書かれた名称をそのまま項目名として採用し、また、それぞれ 1 箱の現秩序をそのまま残している。ただし、「核・マツダ・NY SCRAP」は、1.4 核・マツダ関係と名称を変え、1.5 ニューヨーク関係は、「NY スクラップ資料」と「NY・雑」の箱をまとめた。1.1. 仏資料の中身は、書類だけではなく新聞、写真、書籍等も混入している。しかしそれらを形態別に分けることはしなかった。それは、1.1. 仏資料等の書類の小分類（1.1. ～1.6.）の目録データは、内容にまとまりが見られ、それを「原秩序」とみなしたからである。つまり寄贈状態の現秩序の一部を「原秩序」とみなし、その名称も寄贈者のものを採用し、そのまま目録に反映させたのである。

¹⁵⁹ 恩田怜著「解題」『小野増平関係文書目録』 広島大学文書館，2015 年

第4項 文書群の概要

小野増平関係文書は、主に小野の新聞記者時代に生成、蓄積された文書群である。資料点数は1,298点で、形態は文書類、写真、電磁文書等多種多様なものが含まれている。以下に、『小野増平関係文書目録』の分類項目順に、それら文書群の概要を紹介する。

1.書類は、1.1.仏資料、1.2.市政関係、1.3.移民関係、1.4.核・マツダ関係、1.5.ニューヨーク関係、1.6.戦後50年、1.7.その他に分かれる。

「仏資料」は、28点から成る。これら資料群は、小野の履歴から、1981年～82年フランス研修留学時に収集されたものだと考えられる。そのため仏字の資料が多く見られる。内容は西ドイツの平和運動、フランスに生きる東南アジア難民などである。

「市政関係」は、22点から成る。フランス留学時のものと思われる資料が半数以上を占めている。西ドイツの平和運動に関わる資料や研修中に届いた手紙などである。

「移民関係」は、68点から成る。小野の履歴から、ニューヨーク支社に勤務しているさいに連載記事である「移民」を書くために収集したものであると考えられる。形態としては、フォルダが多く、その中身には、移民を取材した際のメモや写真を含め、記事を書く際に使用した資料が、まとめてとじられていた。その他に、執筆途中の原稿など、連載記事の執筆過程がわかるような資料もある。年代は、資料からは読み取れなかったが、手帳に残っていた移民の取材予定記録と執筆記事が連載された日にちから考えて、平成3年の5月～10月のものと考えられた。

「核・マツダ関係」は、44点から成る。小野の履歴と資料の年代から、ニューヨーク支社に勤務しているさいに収集したものであると考えられる。そのため、英字資料も多く含まれている。資料は、フォルダの他に、クリアファイルによってまとめられている。形態としては、冊子、仮綴、洋紙等さまざまなものが残っている。内容は、核実験、核廃棄物、戦略兵器削減条約、ニューヨーク市立大学広島校等である。

「ニューヨーク関係」は、245点から成る。資料のほとんどが、ニューヨーク支社勤務時に収集されたものと思われる。資料は、フォルダ、仮綴じ、袋に

よってまとめられていた。多くの書簡、写真、その他にも取材ノート、手帳、領収書等が含まれていた。資料の内容は、核兵器、移民関係、仏関係のものも混入していた。

「戦後 50 年」は、8 点から成る。8 点ともファイルによって、資料がまとめられている。小野の履歴から、連載「年表ヒロシマ」と「検証ヒロシマ」を執筆していた、1995 年ごろに収集されたものだと考えられる。形態はすべてクリアファイルである。内容としては、紙面計画や出版計画、年表のデータベース化が主である。

「その他」は、145 点から成る。年代として、中国新聞社に入社後から、広島経済大学で教鞭をとるまでのものが含まれる。形態は、主にクリアファイルと仮綴である。内容は、書類、書簡、写真など多岐にわたる。小野が担当していた、編集局報、天風録、社説の記事もある。広島経済大学での講義資料や晩年に執筆していた自伝の原稿もある。

2.ノート・メモ等は、2.1.ノート、2.2.メモ、2.3.その他（手帳、名刺、名簿等）に分かれる。「ノート」は、7 点から成る。すべて手書きである。取材で使われたものと、中国新聞社内で使われたものがある。

「メモ」は、5 点から成る。すべて手書きである。NY 支局時代に使ったものが多いようであった。平和や核についての記述のほか、名刺とともに、住所や電話番号などの記述もあった。

「その他」は、78 点から成る。手帳、名刺、名簿、電話帳などが含まれている。手帳は、同年のものが複数残っている年もあり、私用、仕事用、電話帳などと使い分けていたと考えられる。

3.スクラップ（切り抜き、コピー等）は、62 点から成る。資料のほとんどが、中国新聞の切り抜きである。年代と形態を見ると、NY 支局へ行くまでは、スクラップブックを使用しており、帰国後は、クリアファイルを使用していることがわかる。内容としては、呉市、編集部出稿、自筆記事、海上自衛隊、interesting articles、社説等である。原稿執筆のために収集したもの、または、自身が執筆したものがほとんどである。「The interesting articles」は、その件名からは、趣味として収集されていたように見えるが、この時期に、呉支社で天風録や社説を執筆していたことから、それらを執筆するための話題探しと

して、収集されていたのではないかと考えられる。

4.書簡は、4.1.書簡（含む葉書）、4.2.年賀状、4.3.グリーディングカードに分かれる。「書簡」は、46点から成る。年代は、平成3～4年と平成17～19年のものが多い。形態は、葉書が少なく、書翰がほとんどである。差出人は、同僚や取材関係者等が多い。書簡のなかには、児童文学者の那須正幹が「検証ヒロシマ」の感想を綴ったものもある。

「年賀状」は、9点から成る。年代は、平成4、5、9、11、12年というように、間隔が開いて残っていることがわかる。

「グリーディングカード」は、6点から成る。ほとんど封筒が欠けているため、年代が特定されていないものも多い。

5.電磁文書等は、5.1.フロッピー、5.2.カセット、5.3.ビデオテープ・DVDに分かれる。「フロッピー」は、202点から成る。形態としては、2HDと2DDとがあり、ほとんどのフロッピーに件名が書かれていた。専用の読み取り機器によって、読み込めなかった（注23）ものについては、年代が特定できなかったが、件名からNY時代、ヒロシマ50年時代、呉支社時代の3つの時期にわかれると考える。ヒロシマ50年特集については、主に「年表ヒロシマ」にかかわるものが、「年表直しBox20年代」と記された箱によって、大量に残されている。呉支社時代のもののなかには、社説、天風録、局報、一寸法師、論説等、他にも様々な原稿が見られる。「呉と海上自衛隊」関連のものも残されている。

「カセット」は17点から成る。ほとんどのカセットに、件名が付されていた。件名や音声から、フランス留学中に記録されたものが多いと考えられた。取材を行う際には、おそらくボイスレコーダーを使用していたため、カセットの数が少ないと思われる。

「ビデオテープ・DVD」は、42点から成る。ビデオは、戦争、移民、岩国に関する内容のものである。他には、広経大で行った授業で、生徒が制作した作品を保存したものも残されている。

6.写真は、131点から成る。年代は特定できるものは少なかった。写真は、NY支局時代のものが多く残っており、平和運動、マツダ工場などが被写体として確認された。他にも海上自衛隊関連の写真もまとまって残っていた。それ

らの写真を撮ったカメラも寄贈されている。

7.書籍は、7.1.刊本、7.2.雑誌に分かれる。「刊本」は、79点から成る。主題としては、移民、平和、原爆、米軍などのほかに、新聞記者全般の仕事にかかわる、メディア、言葉、文章の書き方などのものが収集されている。自身が執筆にかかわり、中国新聞が発行した図書も含まれている。

「雑誌」は、27点から成る。内容は、原子力、ドイツ、JAZZ 等である。

8.雑（物品等）は、27点から成り、NY支局時代の領収書や辞令、他にも新聞協会賞メダルなどがある。

第2節 小野増平関係文書の編成

第1項 小野増平関係文書の分類別の構造分析

(1) 書類の構造分析（表2参照）

1.書類は、560点から成り、1.1.仏資料、1.2.市政関係、1.3.移民資料、1.4.核・マツダ関係、1.5.ニューヨーク関係、1.6.戦後50年、1.7.その他、の7つの小分類に分かれており、この分類は、主に家族と中国新聞関係者による整理時（文書館へ寄贈する前）に作成されたものを土台にしている（現秩序の尊重）。そのため、それぞれの分類の資料群のなかには、異なった主題のものが混在しているものがある。

1.1.仏資料は、まずフランス研修時（昭和56～57年）と帰国後（昭和61～平成元）の2つの時期に分けられる（表2-1参照）。作成年代が、昭和56～57年の資料は、「難民資料」、「仏原発」、「西ドイツ平和運動取材メモ」などと表題がついた封筒などがあつた。その中には現地で収集したと思われる新聞、雑誌などの資料がまとめられており、それら内容は、表題と関連するものであつた。それらを主題によって分けると、難民4点、核・原発6点、西ドイツ3点、その他3点になった。小野は、仏研修中に「*Journalistes en Europe*」という世界の若手記者で結成された集団の一員として、西独平和運動、東南アジア難民、ラジオの報道に関わっていた。これらは、主題と部分的に一致している。

帰国後の資料は、引き続き仏研修関連の封筒入り資料や中国新聞を含む地方紙や、被爆者や原爆展などの資料があり、形態・主題別に仏・独5点、ヒロ

シマ 2 点、新聞 5 点に分けることができた。

1.2. 市政関係も、同じくフランス研修中（昭和 56～57 年）と帰国後（昭和 60～63 年）に分けられる（表 2-2 参照）。研修中の資料は、フランスで執筆した記事のコピー、1.1. 仏資料で見られたような「西ドイツ平和運動」と表題の書かれた封筒資料、取材で使われたノート、家族からの書簡などがあつた。執筆記事があることから、取材、執筆 1 点、個人（書簡 2 点）という 3 つの活動に分け、その上で、取材を参考資料 10 点、ノート 2 点に分けた。

帰国後のものは、中国新聞記事のスクラップが 7 点あり、内容から特集 3 点、広島県 3 点に分けた。

1.3. 移民資料は、NY 支局に勤務していた 1990 年から 1993 年に生成・蓄積された文書群である（表 2-3 参照）。形態は主にフォルダであり、番号と名称が付与されており、移民に関するものと、核兵器に関するものがある。その中で、移民に関連するものは、1991 年から中国新聞で連載された、「移民」（注 24）の小野自身が執筆した記事と対応しており、また、核兵器に関連するものも同様の番号と名称の付いたフォルダが存在する。これらのことから、1.3. 移民資料は、大きく連載「移民」に関するもの（44 点）と、核兵器や核汚染に関するもの（25 点）に、記事によって分けることができる。移民関連フォルダ群は、内容からペルー移民、パラグアイ移民、アルゼンチン移民に分かれており、それらは連載内容とも一致している。また、フォルダで綴じられているものは、メモ、参考資料、写真などであった。これは、1 つの記事を執筆するために小野自身が、必要な資料をまとめたものと考えられ、執筆過程にあたるものといえる。また、他にも、書籍類や連載記事のコピーなども見られた。これらは、執筆前の取材と執筆後の結果にあたる過程にあると考えたため、「取材」2 点、「執筆」41 点、「記事」1 点という 3 つの活動によりフォルダ群を分けることにした。さらに執筆は、先ほども述べたように、「ペルー」15 点、「パラグアイ」18 点、「アルゼンチン」8 点に記事別に分けることができる。

核兵器・核汚染も同様の考えにより、「取材」21 点、「執筆」4 点に分かれ、「取材」がさらに「Pantex 核工場」12 点、「米軍」2 点、「環境・健康被害」6 点、「写真ネガ」1 点に分けられる。記者活動は、取材と執筆という大きく 2 つの活動に分かれると考えられ、それをこの分析に反映させたのである。取材

と執筆と記事は、相互に関連しており、それら編成基準にも関連性をもたせる必要があると考えるが、移民に関するものの中には、取材に関するものが 2 点しかなく、ペルーの概要を記した書籍があったが、編成するに至らなかった。

1.4.核・マツダ関係は、1.3.移民関係と同様に、ニューヨーク支局勤務時に生成・蓄積された文書群である（表 2-4 参照）。内容としては、核兵器、汚染、不拡散関連等があり、1.3.移民資料にあるものと考えられる。その他のものとしては、在米邦人の統計や名簿、米国に建設された原爆の子の像関連、NY 支局が作成してきた記事を前任者がまとめたスクラップブックや、ニューヨーク市立大学（注 25）広島校開校関連の資料がある。これらより、事項別に、「前任者執筆記事」6 点、「在米邦人」4 点、「原爆の像」5 点、「核兵器・汚染」10 点、「NY 大学広島校」15 点、「その他」4 点に分けた。これら事項別による編成は、1.3.移民関係を見ればわかるように、執筆記事のテーマ性に関連することがあるため、文書群の生成・蓄積過程を表している場合がある。

1.5.ニューヨーク関係は、245 点から成り、その名の通り、NY 支局勤務時の文書群が多い（表 2-5 参照）。しかしその特徴は、1.3.移民資料、1.4.核・マツダと異なり、移民関連では、名刺のコピー、全体に関連することでは、経費関連、NY 支局の注意事項、大量の書簡など事務に関するものが蓄積されている。また、仏研修時に用いた取材ノート・メモや、呉支局時代の写真、手帳、書簡などが混在している、昭和 57 年から平成 11 年までの文書群である。

年代が幅広く、主題も多岐にわたったため、履歴を参考にし、仏研修：5 点、編集局報道部：37 点、NY 支局：72 点、個人・家族：2 点、帰国後編集局：87 点、呉支社：20 点、その他：3 点、不明：15 点に分けた。編成後の文書群には、記事・主題ごとのまとまりが見られたため、1.4.核・マツダのように、連載・主題別に編成を行った。編集局報道部：37 点中、30 点が「GERMAN FEATURES」という雑誌である。収集されている 1989 年から 1991 年にかけて、ドイツではベルリンの壁崩壊といった大きな政変があった。また 8.書籍にも 8 点のドイツ雑誌があることから、仏研修でのドイツ取材以降も継続して関心があったと考えられる。

今までの書類には見られなかった特徴としては、書簡、写真、個人・家族の

存在が挙げられる。書簡は、4.書簡で後述するように、仕事に関係するものと、全くのプライベートなものに大別され、仕事に関するものは、仕事に関する文書群の中に位置づけることで、意味を有するようになると思う。また、書簡は年代のわかるものが多いため、年代別の編成を行いやすい。ここでは、その年代から、編集局報道部に7点、NY支局に25点、帰国後編集局に70点、呉支社に9点に組み入れた。写真は、6.写真で後述するように、被写体や年代が不明なものが多いことが編成する上での問題になる。しかし、少数ではあるが、被写体が記載されているものがある。帰国後編集局の中の、ヒロシマ50年：14点には、「検証ヒロシマ1945-95小頭症」と題された写真があり、これは、連載記事に使用されたものであるため、ヒロシマ50年の文書群の中に位置づけられるべき写真である。個人・家族：2点には、家族の写真とメモ用紙に記載された日記がある。これらは、仕事と関係なく発生したものであり、別に編成した。日記は、仕事関連のことが書いている場合があるため、その内容により判断するのが望ましく、公的な要素を含む場合は、その年代の文書群との関係性の中に位置づけられるべきであると思う。

1.6.戦後50年は、8点のみの少数の文書群である（表2-6参照）。内容は、戦後50年の企画・出版に関するもの、とりわけ「年表ヒロシマ」¹⁶⁰の作成計画、関連資料、個別メモなどである。作成の工程により、「出版」3点、「紙面計画」1点、「取材」2点、「執筆」2点に分けることができた。

1.7.その他は、145点から成り、今までの6つの書類群よりも年代や主題が多岐にわたっている（表2-7参照）。年代は、昭和46年から平成21年のものまであり、中国新聞社だけでなく、広島経済大学教授時代の文書群である。そのため、大きく分けて中国新聞社と広経大の2つの文書群に分かれると考えた。しかしその中には含まれないような、「JCJひろしま講座」と名のついた数点のファイルや、同窓会の会報、旅行の写真などがあった。JCJとは日本ジャーナリスト会議であり、小野は、2009年にその広島支部で講座を担当していた。小野は講座の担当当時、広経大教授であったため、大学教授としての

¹⁶⁰ 中国新聞社編著『年表ヒロシマ 核時代50年の記録』 中国新聞社、1995年
1948ページにわたる大著である。

活動の一環であると考え、JCJ 関連の文書群は広経大教授の下に含めることにした。また、私的な写真や同窓会関連のものは、仕事と関係なく生成・蓄積されるため、別に編成する必要がある。これらから、1.7.その他は、所属組織と活動により、中国新聞社：110点、広経大：6点、日本ジャーナリスト会議：6点、私的活動：7点、不明：17点（年代のわからないもの）に分けられた。

中国新聞社：110点は、前述までの6つと異なり、主題としてのまとまりがないため、履歴を参考にした編成を行う。内部組織に加え役職を基準に、呉支社編集部：1点、東京支社編集部：1点、編集局第一整理部：21点、編集局報道部：25点、NY支局長：5点、編集局報道部次長：3点、呉支社編集部長：17点、論説委員会：11点、編集制作本部：4点、東京支社長：7点、編集局長：6点に分けられた。

呉支社編集部：1点、東京支社編集部：1点は、少数であるが、前者は呉市のニュース、後者は、政治・文化一般の新聞記事であり、それら支社の特徴を表しているものである。そのため1点であっても、履歴に位置づける必要があると考える。

仏研修関連文書は、編集局第一整理部と報道部に分かれておさめられた。第一整理部の方は、研修時に生成・蓄積されたものであり、報道部の方は、帰国後に収集された「*Journalistes en Europe*」の資料である。これらは、主題は同じであるが、別の目的・活動の中で収集されたものであるため、その収集当時の状況（所属・役職）の中に位置づけることが適切であると考えられる。

呉支社編集部長：17点の中には、「企画案」と題されたファイルが5冊ある。このようなファイルは、この時期にのみ見られるため、編集部長という役職と関係するのではないかと考える。

1.書類は、現在の目録においては、受贈時の秩序（現秩序）の分類を部分的に採用していたが、構造分析により項目名には当てはまらない文書があり、またそのような文書は他の項目に当てはまったり、他の項目の文書と関連しているものがあることが分かった。そのため、現秩序は「原」秩序ではなく、現分類の7つの分類を崩し、再編成する必要があると考える。

また仏資料の難民、移民資料、ヒロシマなどは、主題による分類のようであるが、この分類は執筆記事と一致する場合があった。連載はテーマ性をもちそ

れに関連する文書を生成・蓄積するため、主題と記事が一致すると考える。記者活動の中には、取材、執筆、出版などがあると考え、その担当する記事ごとにこなす役割が異なるため、それぞれの記事のもとに、取材などの活動をおき、それに応じた文書群が蓄積されていた。

(2) ノート・メモ等の構造分析（表 3 参照）

2.ノート・メモ等は、90 点あり、2.1.ノート、2.2.メモ、2.3.その他、の 3 つに分かれている。年代は、特にノートとメモは、特定できないものが多かったため、年代による編成は難しい。内容を見ると、ノートは、紙面計画・会議関連、人事異動、取材として利用したのがあり、紙面計画 3 点、事務 1 点、取材 4 点に分けられる。メモは、取材に使用されたのがあり、年代が特定されているものは、NY 支局勤務時に作成された PKO や原爆関連のものであった。手帳は、平成 2～6 年と平成 12～19 年のように間隔が開いて残っており、年代が特定されるため、年代による編成が可能である。電話帳と身分証明書は、NY 支局勤務時に使用されていたものであった。名刺は、ファイル、ケース、そのままのもの 3 種類の形態をもっており、ファイルでは小野自身によって「マスコミ」、「企業」などと分けて整理されているものもあった。その他に自身の名刺もあり、これは経歴と照らし合わせれば、年代の特定は可能である。名簿は中国新聞社のものとその他の団体のものがあり、中国新聞社のものは年代特定が可能である。

これらは、取材や内部事務に関わる文書群であると考え。ノート、メモ、手帳、電話帳は取材関連、名簿や名刺は内部事務関連のものが多い。手帳、名簿など年代が特定されるものは、生成・利用過程が位置づけられるため、履歴に沿って編成する方法が良いのである。NY 支局という編成基準を用いると、手帳 6 点、電話帳 2 点、身分証明書 1 点、メモ 2 点をそこに位置づけることができる。1.書類などと併せて編成を行うと、これら文書群との関係性も見えてくる可能性がある。

(3) スクラップの構造分析（表 4 参照）

3.スクラップは、62 点から成り、新聞記者に特徴的な文書群であると同時に、その年代は昭和 46 年から、平成 15 年まであり、中国新聞社での記者活動を網羅するような文書群であるといえる。また年代は、スクラップ開始から

終了までの期間を示すものが多い。内容は、呉市の市政関連、原爆、西ドイツ、小野執筆記事、海上自衛隊、コラムなどまとまりのあるものもあるが、主題が特定されないものもあった。生涯にわたる蓄積が見られることや主題が特定されないことから、年代による編成を考えた。スクラップの終了年を基準として小野の経歴を参考に編成すると、呉支社（昭和 46～昭和 49）：13 点、東京支社（昭和 49 年）：2 点、編集局報道部（昭和 61～昭和 63）：2 点、NY 支局（平成 2～平成 5 年）：8 点、呉支社（平成 8～平成 12 年）：18 点、論説委員会（平成 11～14 年）：3 点、東京支社長（平成 15 年）：2 点に分けることができる。この編成から、スクラップは、呉支社勤務時に多く生成し蓄積されていることが分かる。

呉支社（昭和 46～昭和 49）：13 点は、主題と活動により、呉関連：6 点、被爆：2 点、執筆：2 点、その他：3 点に分かれる。呉関連にはタイトルに vol.2 と称したものが数点あり、残らず捨てられたものもあったと想定される。

NY 支局（平成 2～平成 5 年）：8 点は、すべて小野自筆の記事のスクラップである。記事内容は、核兵器、原子力などで 1.4.核・マツダ関連の書類と強い関連があると考えられる。1.4.核・マツダには、前任者の執筆記事のスクラップがあり、執筆記事を残すことは、NY 支局の方針であったことがうかがえる。

呉支社（平成 8～平成 12 年）：18 点は、記事又は主題別に、海上自衛隊関連のものと、呉の芸術・文化関連：5 点、多分野：8 点、その他：4 点のものと分かれる。海上自衛隊関連：13 点は、連載「呉と海上自衛隊」に使用したと思われ、その連載記事もスクラップされている。

（4）書簡の構造分析（表 5 参照）

4.書簡は、46 点から成り、4.1.書簡（含む葉書）、4.2.年賀状、4.3.グリーディングカード、の 3 つに分類される。全体として数が少なく年代も偏っているため、特に年賀状やグリーディングカードは、定期的に処分されていたと考えられる。年代がわかっているものがほとんどで、年代別の編成は可能である。ただし、その前に書簡の記載内容から性質を見極める必要があると考える。そのため、書簡をまずその内容から、仕事関連：46 点とそれ以外（年賀状：8 点、グリーディングカード：6 点、家族：2 点、封筒のみ：1 点）とに大別し

た。仕事関連：46点は、さらにその内容から、近況報告：7点、礼状：20点、挨拶状：8点、その他：11点に分かれる。

書簡は、公的なものと私的なものがあり、その性質により文書群における位置づけが異なる。年賀状やグリーディングカードといった季節の挨拶、喪中ハガキ、家族とのやりとりなどは仕事に関係なく私的なものだと考える。それ以外の書簡は、礼状には、記事掲載や取材へのものがあり、また挨拶状には、役職就任、退職に関するものなどがあり、これらは仕事に関係する文書群に位置づけられ意味をもつと考える。また、仏研修時、NY支社時に届いた書簡は、私的なものでも当時の小野をとりまく環境に内容が関係している可能性がある。そのため、それらはすべて仕事に関連するものとして、位置づけるのが適切であると考えられる。

(5) 電磁文書等の構造分析（表6参照）

5.電磁文書（注26）等は、261点であり、5.1.フロッピー、5.2.カセット、5.3.ビデオテープ・DVD、の3つに分かれている。カセットには、フランス研修時に作成されたもの、DVDには、広島経済大学の授業で作成したものが含まれていた。また、DVDには私的な家族旅行の写真などが含まれていた。家族に関わるものなどは、仕事とは別の活動の過程で蓄積された文書群である。一方、私的なものか公的なものかの区別がつかない内容のDVDやビデオも多数見られる。

フロッピーの年代は、平成2年から平成19年までで、NY支社あたりから、中国新聞の記事の執筆に使用されているようである。内容は、NY原稿や、ヒロシマ50年、呉と海上自衛隊、コラムなど大型連載に関わるものが多く残されているが、フロッピーは、記事の執筆と直接関わるため、それ以外でも、多様な記事の原稿データが生成・蓄積されている。データは、記事や連載という単位で、相互に関連をもつが、小野のすべての執筆記事を把握することは不可能である。そのため記事単位ではなくその記事を生成する背景にある履歴を参照することで、より広い尺度でデータを群として把握する必要がある。

フロッピー資料群と小野の履歴を付き合わせて、電磁文書等を、仏研修：11点、NY支局：7点、ヒロシマ50年：110点、呉と海上自衛隊：14点、その他呉関連：31点、コラム：25点、東京支社長：6点、編集局長：10点、個人・

家族：17点、広経大：14点、不明：13点に分けた。仏研修：11点は、すべてカセットテープであり、フロッピーが生成され始めるのは、平成2年からNY支局に勤めていた時からである。中国新聞社では、当時ワープロ編集の実験導入を開始しており（注27）、NY支社にもワープロが1台配置されていた¹⁶¹。フロッピーには、広島経済大学のものは含まれず、新聞社を退職する直前まで使用されている。ビデオやDVDは平成14年頃から生成・蓄積が始まっている。DVDには、中国新聞社での執筆に関わるもの5点、広島経済大学の授業に関するもの5点がある。

最も点数が多いのはヒロシマ50年の大型連載に関するフロッピー群である。ヒロシマ50年では、「検証ヒロシマ」という連載がなされ、小野も3回ほど記事を担当した。それは後に書籍化され、また、「年表ヒロシマ」も出版された。ヒロシマ50年：110点は、主にその「年表ヒロシマ」の作成に関するものである。「S35~S39」、「出稿用」、「納品」などと標題が記されたものがほとんどである。フロッピー群を年表ヒロシマ：104点、検証ヒロシマ：6点に分け、年表ヒロシマ：104点は、さらに作成過程ごとに、編集：76点、バックアップ：9点、出稿：10点、納品：8点、データベース：1点に分けることができる。編集：76点は、そのデータ内容から、ヒロシマ：56点、ルポ：5点、ナガサキ5点に分けた。ヒロシマのものは、標題として「S35~S39」などと年代が記されており、おそらく少しの期間ごとに担当者に分けデータを作成していた。小野は、ヒロシマ50年の企画にキャップとして関わっている。キャップとは、取材チームの中で、記者を統括し、指揮する新聞記者のリーダー的存在である¹⁶²。フロッピー群の内容から、各年代の担当者が、データを小野へ送り、小野がチェックをし、まとめて出稿、納品作業を行ったと考えられる。作成過程による編成を行うことで、小野のヒロシマ50年企画への関わり方を表すことができるのである。

呉と海上自衛隊：14点、その他呉関連：31点は、平成8年度から平成11年度までの呉支社勤務時のフロッピー群である。その他呉関連には、さまざま

¹⁶¹ 中国新聞社史編さん室『中国新聞百年史資料編・年表』 中国新聞社、1992年、p.253

¹⁶²内川芳美・稲葉三千男編『マスコミ用語辞典』 東洋経済新報社、1982年

な原稿や、経費関連、紙面計画、名簿などがあり、主題（記事）による編成が行えなかったため、記者活動に依る編成を行った。紙面計画：4点、取材：4点、事務：3点、執筆：20点に分かれ、呉支社執筆時の記事だけでなく内部業務までわかる構造になっている。

コラム：25点あり、連載ごとに生成されたと考えられ、そのため連載名より、一寸法師：2点、天風録：7点、局報：9点、論説：5点、その他：2点に分けた。データの年代的には、呉支社の勤務期間と重なっているが、その仕事は呉支社のものというよりは、新聞社においてコラムなどを担当する論説委員としての仕事である。小野は平成10年に呉支社編集部長兼論説委員会委員に就任しており、中国新聞社ではそれぞれ別の内部組織である¹⁶³。そのため、コラムは、組織別編成においても本社、各支社と切り離して編成する必要があると考える。

東京支社長：6点、編集局長：10点では、入社案内、企画一覧、推薦書など記事の執筆ではなく、事務に関するフロッピーが半数ほどを占める。これは、経歴によって、生成・蓄積されるデータの量と質に違いがあることを示している。

(6) 写真の構造分析（表7参照）

6.写真、7.書籍、8.雑（物品等）のような文書類ではないものに対する構造分析は、大きな課題の1つである。第1章第3節で行った目録の分析にて、「文庫」と称する目録のほとんどが、最初に「図書」と「文書」を大別して編成している。また、写真においても、文書群の構造を反映させて作られた、国文研の目録においてさえ、サブ・シリーズ下に「文書」と「写真」と分けられ、文書とは区別されている。これらは書籍や写真などの分析の困難さを示しているが、個人文書において文書類以外のものが混在し、またそれらが文書群の特徴を示す場合があることや、書籍や写真も文書類と何らかの関係性をもち、個人の生涯の活動の中で生成・蓄積されたものであることから、書籍や写真などの物品類に構造分析の必要があり、文書群の中に位置づけることが必要であると考える。

¹⁶³ 中国新聞社史編さん室編『中国新聞百年史資料編・年表』 中国新聞社、1992年、p.396

6.写真は、小野増平が新聞記者であったため、131点も残されており、小野増平関係文書にとって重要な資料群であるといえる。記者の執筆活動において写真は付随し、文書類と何らかの関係性をもつと考えられるため、写真資料群は文書類との関係性の中に位置づけられるべきものであると考える。写真の年代は、ほとんどわからない。内容も、ほとんど明記されておらず、被写体から想像して関連させる必要がある。形態は、現像時に渡される袋に入っているもの、ファイルに綴じられているもの、冊子にされているもの、何も包まれていないものの4つがあり、写真、ネガ、写真とネガの3つのパターンでその中に収まっている。少数ではあるが、14点の写真には、タイトルが書かれており、またその他に、アルファベットが記されているものもあった。残念ながら何が写っているのか不明のものが、50点あった。

そこでまず被写体が想像できるもの(68点)と不明のもの(63点)に大別し、被写体が想像できるものを海外(40点)、国内(20点)に2分した。海外:40点は、マツダ工場、核工場、核実験禁止大会、米軍などが写っていた。これらは、NY勤務時に撮影されたものであると考えられ、1.4.核・マツダ文書類と関連をもつと考える。その他ドイツやネパールでの写真があり、ドイツ:2点、ネパール:6点、米国:32点に分けられ、米国は、被写体別にマツダ:6点、核兵器:6点、核実験禁止大会:7点、米軍:2点、その他:10点にさらに分けられる。国内は旅行(1点)や卒業アルバム(2点)や小野自身の写真(3点)など仕事とは関係のないものと、海上自衛隊関連のもの(9点)とがある。海上自衛隊は、連載「呉と海上自衛隊」関連のものと考えられ、形態別にファイル(2点)、冊子(2点)、袋(6点)、写真のそのもの(1点)に分けられる。これらは作成・蓄積過程が異なることから生じる違いであると考えられる。5.電磁文書等の海上自衛隊関連のもの、関連付ける必要ある。

被写体が不明なもの:63点についても、利用方法の違いを反映していると考え、形態別に分けた。その前に、執筆記事と関係をもつと考えられるアルファベットの記載に注目して、記載あり:12点、なし:50点に分け、さらになし:50点を冊子:10点、袋:34点、なし:6点に分けた。それらの中で、写真、写真とネガ、ネガにそれぞれ分けた。写真、ネガのみのものは、利用した可能性が考えられる。

写真は、取材時に撮影するため、活動としては、取材の関連にあると考えられる。また写真にはアルファベットが記載されているものがあつたが、これは記事と関係をもつと考えられるため、活動としては、執筆の関連にある。そのような機能を写真は持っており、個別的に見ても核兵器やマツダ工場の写真などは、1.4.核・マツダの書類と関連していることから、書類や電磁文書等の中に組み込ませて編成するべきであるとする。しかし、「ネパール」、「インド」と書かれているものなど、何に使用したのかわからない写真や、被写体が不明なものが多数あり、それらの編成は困難である。

(7) 書籍の構造分析（表 8 参照）

7.書籍は、106 点から成り、7.1.刊本、7.2.雑誌、の 2 つに分かれている。両者とも、小野が自発的に収集したものだけではなく、取材関係者や知人から送付されたものを含んでいる。書籍は、付箋が貼られているものが多く、書き込みのあるものもあり、原稿を書く際に、参考にした可能性を感じさせる。また、作者の手紙が挟み込まれているもの、書類が挟み込まれているものがあつた。内容は、大きく分けて、自身が関わった著書とそれ以外の仕事に関わるもの、私的なものなどである。

図書・雑誌は、執筆記事、授業、研究の参考文献としての役割をもっていると考え、それらとの関連を見るのであれば、まず図書・雑誌の内容で編成するべきであると考えた。主題や同一タイトルで分けたところ、核兵器：3 点、原爆：10 点、移民：5 点、メディア関連：13 点、県史：2 点、官僚：3 点、米軍基地：5 点、広島県：5 点、海上自衛隊：5 点、ジャズ：6 点、ドイツ：9 点、広島文学：3 点、その他：40 点、に分かれた。次に付箋や書き込みがあるものとそれ以外のものを分けた。これは、使用跡のあるものは、執筆などに利用された可能性があると考えたためである。その次に小野の著書や小野が執筆に関わった中国新聞社発行のものと、それ以外のものとに大別した。自身が執筆に関わったものは、書類などに関連をもつため、文書群に位置づけるべきであるとする。

移民：5 点においては、著書を除いて、連載が始まる前に出版された図書であり、執筆の参考図書として使用された可能性が高い。メディア関連：13 点においては、昭和 53 年から平成 22 年まで生涯をかけて蓄積された図書であ

り、生涯メディアの仕事に携わった小野の文書群の大きな特徴を形成している。原爆：10点においても、幅広い年代という特徴をもっており、小野は、ヒロシマ40年、50年、60年報道に関わっているが、具体的にどの図書とどの連載の記事に参照したのかは不明である。ヒロシマに関連した講演は、中国新聞社退職後、ヒロシマ基礎講座で行われており（注28）、米軍基地：5点の中の岩国基地に関する図書が利用されたと考えられる。また、利用の対象が明確なケースとしては、その他：40点の中の書評：8点が挙げられる。小野は、中国新聞社を退職後の2007年5月から、広島在住のジャーナリストとして、廣文館という書店のブックレビューを担当していた¹⁶⁴。その8冊すべてには、付箋が貼り付けられている。広経大勤務時の活動であるため、その下に位置づけるべきと考える。

上記のような具体的な利用対象が明確なるケースは稀であり、ほとんどの図書においてその利用対象は不明であり、編成が困難になるのである。また書籍の中には、私的な図書（短歌、絵本、書など）や雑誌（ジャズ、文学）が混在しているようであり、それらと仕事に利用したものとの区別も必要である。

（8）雑（物品等）の構造分析（表9参照）

8.雑（物品等）は、27点から成り、証書、小切手帳、名刺、写真、腕章、カメラ、絵画作品などがある。物品類は、文書類と同様に、その個人文書群と特徴づけるものであり、文書群の中に位置づけて新たな意味を見出すものもあると考える。文書群の中に位置づけるためには、活動として物品類を捉える必要がある。雑資料群を、事務：9点、「取材」：10点、「私的収集」：10点という3つの活動に分けた。小切手、辞令などは事務へ、カメラ、腕章、手帳などは取材というように、活動の中に位置づけることで、物品も文書群としての把握が可能になるのではないかと考える。

以上述べたのは、小野増平関係文書目録の形態別の構造分析である。次項では、この結果を踏まえて、形態別の構造を横断した、小野文書群全体の構造の分析を試みる。

第2項 小野増平関係文書の編成

¹⁶⁴ 廣文館作成「コラム・ブックレビュー」 『廣文館ウェブページ』
http://www.kobunkan.com/c_book/b_menu.html（最終閲覧2016年1月1日）

(1) 小野増平関係文書の書類の編成

書類は、現分類だと、7つに分かれている。これは、現秩序を生かした分類であったが、以下の理由から再編成の必要があると考える。1つ目は、それぞれ7つの分類ごとに構造分析をした結果、分類項目名とは異なる文書群が含まれているためである。2つ目は、それぞれの項目に、他の分類の文書と関係する文書が入っているためである。3つ目は、小野の履歴と照らし合わせたときに、1.3.移民関係も1.4.核・マツダも1.5.ニューヨーク関連に本来であれば包含されるものであり、また、1.6.戦後50年より後の年代の文書もたくさん残されているが、項目立てされていないことである。以上から「現」秩序は、「原」秩序ではないといえるため、それを崩し、再編成を行う。

1.1から1.7までそれぞれの文書群にあった編成基準で編成がなされている。これらをまとめるときには、横断的な編成基準を再考する必要がある。最も多様な年代や主題の文書群は、1.7.その他のものであり、その編成が基本になると考える。1.7.その他の編成項目に1.1～1.6の編成項目を当てはめていった。組織または役職を編集基準にしていなかったものには、年代から作成当時の組織または役職を割り出し、該当組織または役職のもとに文書群を位置づけた。例えば、1.1.仏資料の仏研修時のまとまりは、編集局第一整理部へ、1.6.ヒロシマ50年の文書群は、編集局報道部次長へ位置づけた。このように6つの書類群を、それぞれの構造を構成していた文書群のまとまりを崩さずに、1.7.その他の編成項目に当てはめることができた。部局や役職で編成を行うことは、文書の作成時期を特定できれば、容易に行えるが、記事(事項)のまとまりで見た際に、関連文書が分断されるという問題が生じる場合がある。ヒロシマ50年関連の記事は、NY支局時代に全米被爆者協会などの取材と無関係であるとは言い切れない。中国新聞は、10年に一度、ヒロシマ特集を組んでおり、その準備は、相当前の時期から行われていると考える。ヒロシマ50年関連の文書の中には、平成4年から蓄積されているものが見られる。そのような文書群を分断するという問題を、役職別の編成がはらんでいると考える。

特にNY支局において経理関係や支局の利用関係の書類があり、これらは「取材」、「執筆」などの記者活動には当てはまらないと考えたため、新たに「事務」という活動を項目に追加した。

(2) ノート・メモ、スクラップ、書簡、電磁文書等（文書類）の編成

2.ノート・メモ類において、ノートは、紙面計画、内部事務、取材という活動別に分かれていた。年代のわかるものは、その年代の活動の下、年代が不明なものは、「その他記事」の活動の下に位置づけた。手帳は、年代が特定されるため、該当年代の「事務」の下に位置づけ、電話帳として利用されているものは、「取材」の下に位置づけた。名刺は、自身のものは年代と特定し、「事務」の下に位置づけ、他人の名刺は年代が不明なため、記者活動の最後まで利用したと想定し、編集局長の「事務」の下へ位置づけた。小野増平個人の名刺は、その該当役職の「事務」の下に位置づけた。名簿も同様に「事務」の下に編成した。

3.スクラップは、構造分析の結果、組織別に分かれていたため、それを崩さずその組織のもとの主題に位置づけた。

4.書簡は、基本的には、その年代から蓄積当時の組織・役職を割り出し、その該当組織または役職のもとの「事務」（活動）に書簡を位置づけた。年賀状とグリーディングカードは、その内容から私的なものであることが確認されたため、「私的収集」に含めた。

5.電磁文書等は、基本的に組織別の構造をもっていたため、その該当組織の中の記事・主題の中もしくは、「執筆」活動のもとに編成し直した。仏研修、ヒロシマ 50 年は①で述べたものと同様に扱い、呉と海上自衛隊：18 点、呉関連その他：31 点は、「呉支社編集部長」のもとへ位置づけた。

(3) 文書類と、写真、書籍、雑（物品）の編成

物品類も文書類と関係性をもつため、文書群の秩序に組み込む必要があり、項目を解体し、再編成を行った。

6.写真は、撮影時期が不明なものが多いため、その編成は困難である。写真の構造は、海外で撮影されたものと国内で撮影されたものに分かれる。被写体のわかるものは、主題によりまとまりをもつものがあり、そこから何の取材の際に生成されたかを推定できる。海外のドイツ：2 点、米国：32 点は、それぞれ仏研修中、NY 支局勤務時に生成されたものであると考えられる。国内のものも、卒業アルバム：2 点、旅行：1 点、自身の写真：3 点などは、私的収集の領域であり、海上自衛隊：11 点は、「呉と海上自衛隊」関連のものである

と推定される。生成経緯が不明なもの、また被写体が不明なものに関しては、写真は取材の際に撮影されるという特徴から、「その他」の「取材」の中に入れた。

7.書籍の構造は、最初に主題によって分かれている。年代を見ると、出版年はわかるが、蓄積年が不明なため、主題・記事による編成と主題を見比べて、関連するものを特定していく必要がある。その基準は、使用した（例えば参照して記事を書いた）、生成した（小野の著書）、蓄積した（送付状の挟み込み）などが考えられる。これら 3 つの中で使用を明確にそれに基づいた編成を行うことは、「原秩序」の観点から望ましいが、その特定は最も困難である。特定したのは、移民：3 点（連載「移民」に使用）、県史：2 点（教授時代の論文に使用）、米軍基地：5 点（岩国基地に関するものを JCC 講座で使用）、海上自衛隊：1 点（連載「呉と海上自衛隊」で使用）などであった。小野の著書に関しては、作成年代に着目して、それぞれの「記事」の執筆過程で生成された文書群の「出版」のもとに位置づけた。生成・使用・蓄積の経緯が不明なものの中で、使用跡（付箋や書類挟み込み）があり、その主題から記者活動に関連したと考えられるものは、「その他役職」へ、ないものは、「私的収集」へ編成を行った。

6.写真や 7.書籍の多くは、「その他」へ入れられたが、これらも執筆記事を中心とした文書群の詳細な分析により、すべて組織・役職別に編成可能であると考えられる。なお、本編成においては、「その他」の活動により編成を試み、その他の記事・主題による編成と同じく、記者の仕事に沿った文書群の生成・蓄積過程を示すことができたと考えている。

8.雑（物品等）の構造は、3 つの活動に分けられていた。再編成を行うには、活動より前に、組織・役職や主題・記事を特定させる必要がある。NY 支局時代の小切手帳は、「事務」へ、日本新聞協会賞メダルは、ヒロシマ 50 年の「出版」へ入れた。年代や内容から作成・蓄積経緯が特定されないものは、「その他」のそれぞれの活動の中に入れた。

第 3 節 小野増平関係文書の編成と編成論との関係（表 10 参照）

第 1 項 階層構造レベルとの関係

小野増平関係文書の編成を表に示した。ここでは、ISAD(G)の前提として示されている階層構造モデルを用いて分析を行う。i) フォンド、ii) サブ・フォンド、iii) シリーズ、iv) サブ・シリーズ、に分け、以下に分析を試みる。本研究においての主要な課題である、役職を基準とするシリーズ設定は、iii) シリーズ以下で考察する。

i) フォンドの設定

フォンドとは、ICA の定義では「特定の個人、家、団体が、個人的もしくは組織的に活動するなかで有機的に作成され、または蓄積され、使用された記録の総体」とされる¹⁶⁵。小野増平関係文書は、小野増平氏の仕事あるいはプライベートの過程で、生成・蓄積され、使用されてきた文書の総体である。家族関連のものや、同僚が作成したものなどが含まれるが、その内容や量から、前者は小野のプライベートに、後者は小野の仕事関連の文書の範疇に含まれるものである。そのため、フォンドは、その定義から、「小野増平関係文書」となる。

ii) サブ・フォンドの設定

サブ・フォンドとは、「相互に関連あるまとまった記録をもつ下部フォンド。これは、作成組織または機関の業務遂行上の下部組織に対応して設定されるか、またはそれが不可能な場合は、資料自体の地理的区分、編年、機能、あるいは類似の分類によって設定される」ものである¹⁶⁶。個人文書群には、内部組織がないため、行政文書のように内部機構による編成を行うことができない。しかし、個人文書群は、当該個人が組織との関わり合いの中で作成・蓄積されたため、組織構造を反映した文書群も存在すると考えられる。またこの 2 つの組織は、まったく異なる組織であり、仕事内容も異なるため、別々の秩序をもつ文書群であると考ええる。サブ・フォンドの設定には、出所原則を守らなければいけないとされており¹⁶⁷、2 つの組織は別々の出所であると考ええる。これら

¹⁶⁵ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会，2001年，p.14

¹⁶⁶ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会，2001年，p.14

¹⁶⁷ 竹林忠男著「行政文書の整理と編成一史料整理基本原則の適用とその問題点一」『日本のアーカイブズ論』 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会，2003年，pp.424-441（初出は『記録と史料』5号，1994年）

の理由から、所属組織に相当すると考え、サブ・フォンドとして「中国新聞社」と「広島経済大学」の2つを設定した。

iii) シリーズの設定

シリーズとは、「ある体系に従って編成された記録。または同一の活動によって生じたり、特定の形態をもっていたり、記録が作成される際に生じたほかのなんらかの関係により、ひとつの単位として保持されている記録」のことである¹⁶⁸。加藤聖文は、役職（配属部課も含む）によるシリーズ設定を主張している。その理由は、個人の社会的行為は社会的経歴（地位の積み重なり）にはほぼ符合し、決められた権限の下の行為により記録が蓄積されていくからである¹⁶⁹。加藤は、機能を社会的役割及び個人的行為と置き換え、シリーズに値すると解釈しているが、少々強引であり、役職をシリーズとみなす場合には、シリーズ概念の拡張が必要であると考ええる。

小野の履歴から配属部局と役職を参照し、「呉支社編集部」、「東京支社編集部」、「編集局第一整理部」、「編集局報道部」、「NY支局長」、「編集局報道部次長」、「呉支社編集部長」、「論説委員会」、「東京支社長」、「編集局長」をシリーズとして設定した。呉支社編集部以前に作成されたような文書は見あたらず、それ以前の役職を設定しなかった。また昭和60年編集局報道部課長格以前の報道部時代と、NYから帰国後の編集局報道部次長になるまでの報道部時代の文書は、少数かつほとんどが書簡であり、別々に編成する必要がないと判断したため、編成項目として自立させなかった。論説委員会とは、論説、社説などのコラムを担当する組織であり¹⁷⁰、これは、編集局とは別組織であるため、別々に項目を立てた¹⁷¹。

役職や部局別に残された文書群の特徴は、以下のようなものであった。呉支社編集部時代には、呉市に関する地元ニュースのスクラップが目立って見られ

¹⁶⁸ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会，2001年，p.14

¹⁶⁹ 加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版，2014年，pp.181-199

¹⁷⁰ 内川芳美・稲葉三千男編『マスコミ用語辞典』 東洋経済新報社，1982年，p.269

¹⁷¹ 中国新聞社史編さん室編『中国新聞百年史資料編・年表』 中国新聞社，1992年

たが、東京支社編集部時代には、政治、経済、参院選などの全国規模の記事のスクラップが見られた。役職だけでなく部局をも含め、シリーズ編成を行うことにより、より文書群の特徴を表す項目が立てられた。しかし、役職における編成の問題点も見られた。それは、1つのテーマ性をもった文書群が分断されてしまうことである。仏研修関連の文書群は、主に編集局第一整理部にあるが、編集局報道部課長にも含まれている。他にも NY 関連の文書群が、編集局報道部次長に含まれたり、検証ヒロシマの準備のための文書が、おそらくは NY 支局の「原爆・被爆者」などにも含まれている可能性がある。このように同様の活動により生成・蓄積されるはずの文書群が、役職が変わると分断されてしまうという事態が発生するのである。

また加藤の主張のように、役職のレベルが上昇するにつれ、取材や執筆活動にテーマ性のようなものが見られなくなり、総合性の強い文書群が形成されていた¹⁷²。ただし、キャップとして関わったヒロシマ 50 年企画では、「年表ヒロシマ」のデータが小野の下へ集められたため、個別かつ具体性の強い文書群が生成されていた。

また加藤は、「公的活動」と「個人活動」というシリーズ編成も主張している。この理由は、近代になり「家」から解放された個人における個人文書群は、パブリックな記録とプライベートな記録の 2 種類から成りたつからである¹⁷³。この主張を通すならば、「個人活動」ではなく、「私的活動」という名称の方が適切であると考えられる。しかし、これらの区別をし難い文書群（例えば日記、書簡、写真、書籍など）が存在する。小野増平関係文書においては、内容によって書簡を、使用跡や保存状態などによって写真や書籍を、私的なものと公的なものとに分けた。また私的な可能性があるものでも、仏研修時や NY 支局勤務時に作成・蓄積された書簡、写真、日記などは、私的活動が公的活動に規定される側面が大きいと判断し、公的なものに位置づけた。そのように思い至った理由の 1 つは、NY 時代に送られてきた書簡が大量に残されていたためである。これら書簡は、NY 時代に位置づけられて初めて意味をもつと考え

¹⁷²加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

¹⁷³加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

られる。

iv) サブ・シリーズの設定

サブ・シリーズとは、安藤正人によると、「シリーズのなかでの形態・タイプ・内容などによる副次的な分割単位」とされている¹⁷⁴。個人文書群の編成においては、シリーズレベルの設定にみに焦点が当てられ、サブ・シリーズ以下の設定について論じられたものは非常に少ない。加藤の論文では、経歴（役職）を基準とする編成の後で、サブ・シリーズも提示されているが、その基準は、「本人の具体的な関与や役割を第一の基準とする」¹⁷⁵と言うにとどまっている。

サブ・シリーズの定義は上に述べたものであるが、シリーズの定義を基準に設定できれば、秩序を反映させたものであり、より望ましいと考える。シリーズの定義に適用できなくなった場合、サブ・シリーズの定義を適用すればよいのである。シリーズの定義では、「同一の活動によって生じた」文書群とあるため、新聞記者の「活動」を考える。新聞記者の主な活動は、記事を書くことである。小野は主に編集局に勤務しており、そこでは取材・執筆が求められる¹⁷⁶。そのためまずは、取材、執筆という活動そのものが、サブ・シリーズとして設定できると考えられるのである。また、取材・執筆は 1 つの記事もしくは連載を執筆するために行われる。連載はテーマ性をもって行われ、その執筆は一定期間続く「同一の作業」であると言い換えることができる。つまり特定のテーマ性をもつ連載もサブ・シリーズになる可能性がある。連載に沿って、計画、取材、執筆という行為が行われ、文書が生成・蓄積されていくのである。その当時の役職によって、連載への関わり方が変わるため、多様な性格の文書群を生成すると考えられる。また連載の下に取材、執筆を位置づけると、その連載（活動）をどのように行ったのか、つまりどのように文書群が蓄積されたのかが把握でき、さらに取材と執筆の関連（文書群の秩序）も見えやすくなる。そのため、連載は、取材よりも先行する基準であると考え、小野の

¹⁷⁴安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、p.80

¹⁷⁵加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.186

¹⁷⁶上妻教男・北野栄三著『マスコミ用語の意味がわかる辞典』 日本実業出版社、1984年、p.258

関わった連載と残存文書を照らし合わせ、「移民」、「年表ヒロシマ」、「検証ヒロシマ」、「海上自衛隊」という大型企画をサブ・シリーズに設定した。その他の特定されなかった連載や、記事のまとまりに関しては、取材、執筆の下に想定される記事（事項）ごとにまとめた。役職としては、課長以上、支社長より下において連載を特定できる文書群のまとまりが確認された。地位が低いもので特定されない理由は、役職が与えられていないもしくは低い時点では、大型連載には主体的に関わっていない可能性が考えられる。加藤の課長及び次長レベルの集積文書のテーマ性の拡散は当てはまらないが、権限が上がるにつれ、集積される記録も広範囲かつ多様になるため、サブ・シリーズ編成は複雑化するという指摘¹⁷⁷は、局長レベル以上に当てはまり、編成における課題であると考ええる。

第2項 出所の原則の再考

出所原則とは、「資料を、それを作成ないし授受してきた機関・団体・家・個人ごとの文書群としてとらえ、ひとつの出所をもつ文書群は整理にあたって他の出所をもつ文書群と混同されてはならない」という原則であった¹⁷⁸。出所原則は、行政文書や近世史料においては、その母体や内部の部局レベルに適用されるものである¹⁷⁹。

個人文書群においては、内部の部局は存在しないが、組織との関わり合いにより生成・蓄積され、組織の特徴を反映させた文書群は存在すると考える。また小野が記者から教授に転職したように、生涯に複数の組織で働くことは、現代では珍しくないように考える。異なる組織のもとで仕事をして蓄積された文書群は、その仕事の違いにより異なる体系を有していると考えられ、編成上区別する必要が生じる。そのため、個人文書群による出所原則は、内部機構ではなく、社会的活動の際に所属した組織に適用されると考える。

広島経済大学教授時代の「講座」文書群は、日本ジャーナリスト会議という組織との関わりの中での仕事であるが、メディアビジネス学科で教えているこ

¹⁷⁷加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

¹⁷⁸安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、p.56

¹⁷⁹安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、pp.51-98

と関連していると考え、広島経済大学に含めた。このような関係した組織を分析し、出所として分けていく作業も個人文書群の編成において必要になると考える。

第3項 原秩序尊重の原則の再考

原秩序尊重の原則とは、出所を同じくする文書群の中で個々の文書がもともと与えられている秩序（配列）が、それを生んだ機関・団体・家・個人の活動の体系を反映しているものである場合には、その原秩序（原配列）を尊重して残さなくてはならない」という原則であった¹⁸⁰。第1章において、「原秩序」の解釈がさまざまであることから、その解釈は文書群の状態と目録作成者の意思にゆだねられている¹⁸¹と述べた。小野増平関係文書群の「原秩序」を、現秩序、現用段階、現用終了時の3つの解釈に当てはめて考察する。

最初に現秩序に関して述べる。現目録では、その秩序を尊重し（分類項目に反映させ）目録編成されており、現秩序を部分的に「原秩序」ととらえていることがわかる。しかし、本研究では、構造分析の結果、現秩序の分類は、小野文書群の構造を反映していないと判断したため、再編成を行ったのであった。

「原秩序」として着目すべき文書のまとまりは、「NY 支局長」の中の「移民」の中の「執筆」に編成されているファイル群である。このファイル群は、それぞれの中に取材メモ、参考資料などがはさまれている。これらファイルは、連載記事に対応したタイトルが付されており、小野が、執筆の際にまとめたものと考えられる。この秩序は、小野の記者活動の体系を反映していると考えられ、これを「原秩序」として設定する。この「原秩序」は、執筆時の現用段階を示すと考えられる。個人文書は、行政文書のように、作成時と管理時という原秩序を2重にもつ¹⁸²と考えられるが、行政文書のように体系的な管理がなされていないため、管理状態を「原秩序」とみなす必要性は、行政文書よりも低いと考える。

¹⁸⁰安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、p.56

¹⁸¹鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会、2002年、pp.314-317

¹⁸² 竹林忠男著「行政文書の整理と編成—史料整理基本原則の適用とその問題点—」 『日本のアーカイブズ論』 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、2003年、pp.424-441（初出は『記録と史料』5号、1994年）

「原秩序」は、編成における 1 つの守るべき原則であり、それを参考にしてシリーズ以下の構造を明らかにすることができるという¹⁸³。記事ごとに執筆に参考にする文書がまとまっているものを、「原秩序」と設定したことにより、「移民」という 1 つの連載の中に、「執筆」という活動があり、その中で 1 つの記事ごとに文書が作成されるという構造を発見することができた。その構造を基本としてその他の文書群を分析し、「年表ヒロシマ」、「検証ヒロシマ」、「海上自衛隊」などのサブ・シリーズを編成したのである。また、シリーズ設定を部局＋役職で行ったことにより、どのような役職や部局に勤務している時に作成されたものかという、現用段階の「原秩序」を表すことができたと考える。

第 3 章 長岡半太郎資料と馬場重徳文書の編成

前章では、小野増平関係文書の編成を行った。本章では、長岡半太郎資料と馬場重徳文書を対象として編成を試みる。小野文書と同様に役職を基準にしたシリーズ設定を中心に、階層構造、出所原則、原秩序尊重の原則等の観点から分析を行う。

第 1 節 長岡半太郎資料の編成

第 1 項 長岡半太郎氏の略歴と業績（参考資料 19 参照）

長岡半太郎は、1865 年（慶応元年）に肥前国大村（現在の長崎県大村市）に誕生した。1882（明治 15）年、東京大学予備門を卒業すると、東京大学理学部理学科へ進学し、翌年物理学科へ進級した。1887 年、帝国大学（東京大学から改称）大学院へ進学し、3 年後の 1890 年、同理科大学助教授となる。6 年後には教授になった。教授職以外に、長岡はさまざまな研究会の会員を務めていた。1892 年、震災予防調査委員会委員、1899 年、測地学委員会委員、1906 年、帝国学士院会員（39 年、院長）、1917 年、理化学研究所研究員物理学部長（21 年、主任研究員）、1920 年、日本学術研究会議会員（物理学部長）、1933 年、日本学術振興会学術部長（39 年、理事長）、1935 年、度量衡制度調

¹⁸³柴田知彰著 「記録史料群の内的秩序の復元に関する一考察」 『研究紀要』第 7 号 秋田県公文書館，2001 年，pp.25-48

査委員会委員、1940年、全国科学技術聯盟理事長、1941年、電波物理研究会会長などである。また、1909年、東北帝国大学理科大学創立準備委員、1931年、大阪帝国大学初代学長を務めたように、大学教育にも深く携わっていた。1950（昭和25）年に85歳で亡くなった。

長岡半太郎は、明治・大正から昭和前半にかけての近代日本の科学を最もよく代表する科学者といわれている¹⁸⁴。長岡が最初に取り組んだ研究は、磁気歪みの研究であった。その研究は、大学院、ドイツ留学、帰国後も続けられ、1900年の第1回万国物理学会では磁気歪みをテーマに講演を行っている。1901年から理論物理学講座の教授となり、研究テーマを理論物理学へ転向させていく¹⁸⁵。その研究の中でも、1903年に発表された原子模型に関する研究は、1913年のボーアの模型に先立つものであり、長岡の研究の最も重要なものとされる¹⁸⁶。その他、分光学研究や、地震学の研究など様々な分野の研究を生涯にわたって続けた。700ページを超える『長岡半太郎伝』（この本の執筆にあたって、本論文で取り上げる「長岡半太郎資料」を利用している。）の中に、「長岡半太郎論文目録」¹⁸⁷が掲載されているが、その数は、〇にも及ぶ（共著を含む）。これら業績が評価され、1937年には第1回目の文化勲章を受章している¹⁸⁸。

第2項 受贈経緯及び資料の現秩序

長岡半太郎資料は、その来歴の違いから①旧資料と②新資料の2つに分かれる。①旧資料は、国立科学博物館の特別展「原子模型の父、長岡半太郎」（1962年12月～63年1月）の際に収集されたものである。収集された資料は、後に、『長岡半太郎伝』（1973年）¹⁸⁹の執筆に活用され、同書刊行後、2000年に長岡家の好意により①旧資料が国立科学博物館に寄贈されたという。

¹⁸⁴板倉聖宣・木村東作・八木江里著『長岡半太郎伝』 朝日新聞社、1973年、冒頭のはしがきより

¹⁸⁵河村豊著「緊急時に科学は注目される 長岡半太郎」『材料技術』、2005年、pp.19-22

¹⁸⁶「長岡半太郎博士の業績」『心』4巻2号 平凡社、1951年、pp.49-50

¹⁸⁷「長岡半太郎論文目録」板倉聖宣・木村東作・八木江里著『長岡半太郎伝』 朝日新聞社、1973年、巻末資料 pp.32-58

¹⁸⁸河村豊著「緊急時に科学は注目される 長岡半太郎」『材料技術』、2005年、pp.19-22

¹⁸⁹板倉聖宣・木村東作・八木江里著『長岡半太郎伝』 朝日新聞社、1973年

①旧資料の資料本体は、『長岡半太郎伝』の著者でもある、国立科学博物館の木村によって、最終的に整理されたという。目録は、カード目録とそれをデータ化したもの（現行の目録）とが存在する。しかし、作成時期と作成者は不明である。現行の目録は、外部に公開されていないが、資料利用のために来館した研究者などの閲覧には提供されている。長岡資料の主要なものは、マイクロフィルムまたは電子画像が作成されており、基本的にそれらを閲覧するよう利用者をお願いしているという。¹⁹⁰

2000年、①旧資料の寄贈の際に、長岡家に遺されていた、②新資料も一緒に寄託された。同館の研究報告に収められた論文のなかで、②新資料の概要が紹介されている¹⁹¹。②新資料は、未調査かつ未発表のものであり、その中身には、『長岡半太郎伝』や伝聞・記憶によるこれまでの記述を補うものや、長岡像を修正する可能性を秘めた資料もあった（注29）。そのような概要の調査はあるものの、②新資料においては、完全な目録は作成されていない。

①、②は、ともに国立科学博物館筑波研究施設に保存されている。①旧資料は、目録に対応した順番で、保存用のキャビネットに入れられていた（三段組みで扉つき）。②新資料は、①旧資料と別置され、プラスチックケースに収められていた。

第3項 整理の経緯

2014年4月、国立科学博物館の理工学研究部科学技術史グループで、長岡半太郎資料の整理・分析を担当している有賀暢迪研究員（注30）に上記の来歴と現時点で把握している資料の概要をうかがい、加えて現物の保管環境を調査した。

有賀の指揮のもとで、整理作業を開始した。整理は2014年から9月から開始され、現在（2015年1月）まで続いている。基本的には有賀と私を含むバイト数名とで、整理作業を行っている。加えて同科学技術史グループの沓名貴彦（注31）研究員のアドバイスをもらうこともあった。

旧資料群のほうは、現行目録と資料との照合をするという狙いのもとで、目

¹⁹⁰有賀暢迪・沓名貴彦著「国立科学博物館所蔵・長岡半太郎資料の概要とその再整理について」『科学史研究』53巻272号 日本科学史学会, 2015年, pp.403-405

¹⁹¹岡本拓司他著「長岡半太郎の新資料について」『国立科学博物館研究報告 E類（理工学）』第29巻, 国立科学博物館, 2006年, pp.7-13

録データのとりなおしをおこなった¹⁹²。新資料群は、8つのプラスチックケースに分かれて保存されており、その現秩序を尊重しつつ、目録データをとった。加えて、箱の状態と、1つ1つの資料を写真に収めた（注 32）。

どちらの資料群も、内容の分析はせず、管理者が資料を同定でき、利用者が資料を想像できる最低限の書誌情報をとることを心掛けた。具体的には、形態、大きさ、表題、言語、特記事項を情報として記載した。それらを専用（情報を記載する枠が印刷されている）の中性紙の封筒に書き、資料をその封筒の中に入れ、さらにその封筒を中性紙の保存箱に詰め、保存した。

旧資料目録は、現在、「研究論文集」、「ノート」、「日誌類・手帳」、「論文別刷」、「記書・辞令」の目録がとりなおされ、データ化されている。私は、「研究論文集」と「ノート」、「日記類・手帳」の目録の作成に携わった。新資料群の目録においては、約 540 点中、182 点の目録を作成した。以下に、その概要を述べる。

第 4 項 資料群の概要

(1) 旧資料群（表 11 参照）

旧資料群は、6,496 点から成る。年代は 1841 年～1958 年である。旧資料群の現行の目録における分類は、表 1 のようになっている。分類は大きく、「実験資料」、「研究論文集」、「ノート」、「日記類・手帳」、「原稿類」、「書簡」、「論文別刷」、「勲章・書状・記念状」、「記書・辞令」、「身廻り品」、「写真」、「書籍」、「その他」に分かれている。各分類（目録では「種類」と記載）には、「記号」が付与され、その記号がその分類の中で小分類の役割を果たしているものもあった。

「実験資料」（記号：EX）は、12 点から成る。実験器具やスペクトル波を記録したガラス乾板、印画紙がある。

「研究論文集」（NPF）は 17 点である。そのうち 15 点は、博物館でまとめられたものである。長岡が執筆した論文を、主題別と雑誌別にまとめたものであり、別刷りとコピーが混ざっている。別刷りだけを見ると、1887 年～

¹⁹² 有賀暢迪・沓名貴彦著「国立科学博物館所蔵・長岡半太郎資料の概要とその再整理について」『科学史研究』53 巻 272 号 日本科学史学会，2015 年，pp.403-405

1950年までの計340点が存在する。

「ノート」は468点から成る。東大予備門・物理学科時代（P）、大学1年（I）、…大学教授（U）、理研（In）と、経歴ごとに分類されている。

「日記類・手帳」は65点から成る。形態からノート（DM）と手帳（PN）に分かれている。日記以外に、雑記、学術研究会議、調査、備忘録などに用いられたものがある。

「原稿類」は、130点から成る。論文の原稿（MSA）と講演の原稿（MSB）に分かれている。論文はほとんど英字、講演は日本語で書かれている。

「書簡」は、351点から成る。大きくは、外国人から送られたもの（LF）、日本人から送られてきたもの（LJ）に分けられる。長岡から三島忠雄と三村剛昂に出したものが、一括でまとめられているのは、おそらく両者から寄贈されたためである。

「論文別刷」は、4,894点から成る。大きく外国人から送られたもの（RPF）と日本人から送られたもの（RPJ）とがある。RPFは1841年から1958年までであり、RPJは1885年から1949年までである。点数は、RPFがRPJの約2.4倍もある。付箋が貼られているものも見られた。分野としては、長岡の研究分野でもあった光学、理論物理、地球物理のものがあつた。

「勲章・書状・記念状」は、19点から成る。メダル、章状、賞状、ケンブリッジ大学から名誉博士号を授与された際にもらったガウンと帽子がある。

「記書・辞令」（Wo）は、189点から成る。辞令、出張、下賜、手当などがある。

「身廻り品」（WPG）は、29点から成る。額、軸、カメラ、計算尺などがある。

「写真」（Ph）は、35点から成る。長岡が被写体のもの、長岡資料の複写などがある。

「書籍」は、274点から成る。和書（Jb）、漢籍（Cb）、英書（Eb）、独書（Gb）、仏書（Fb）と言語別に分かれている。中身は研究書ではなく、小説が多く、和書では『太平記』、『徒然草』などの古典、洋書では、ディケンズ（英）やユゴー（仏）の作品などがある。

「その他」は、13点から成る。経費の書類や大学試験問題などがある。

(2) 新資料群 (表 12 参照)

新資料群は、約 540 点から成る。年代は 1908 年～1939 年である。新資料群の現行の目録における分類は、岡本の報告では、旧資料群の分類に倣い、表 2 のようになっていた。目録をとった 224 点を、岡本の分類を修正し(注 33)、形態別に分類した。旧資料の分類を参考にし、「実験資料」と「論文別刷」を追加した。

「実験資料」は、39 点から成る。内容は、実験データと実験装置の図がある。実験データは、印画紙や巻紙、ガラス板、スクラップブックに貼り付けてある。スペクトル波形を記録したものが多い。旧資料よりも点数が多く(注 34)、新資料群の特徴的な資料といえる。

「ノート」は、23 冊から成る。数値のみのもものと、英語で記載されているものがある。研究に使用したものと、備忘録用に使用したものがあるようである。

「理研議案決議 1917」と表題のついたノートは、一部日本語で書かれている。

「メモ」は、11 点から成る。日本語、英語、ドイツ語による記載である。日本語のものには、冒頭に「理化学研究の目的」とある。8 点に表題がなく、年代も不明である。

「原稿」は 9 点から成る。講演会や歓迎会でのあいさつの原稿である。長岡のものは英語で書かれており、渋江小摩策という者の日本語の原稿が混在している。

「書簡」は、12 点から成る。ポストカードと封書に分かれている。日本語で書かれたものがほとんどであり、英語、独語、仏語のものも数点ある。

「論文別刷」は、11 点から成る。長岡が著したものは 5 点あり、すべて英語である。日本語で書かれた 6 点は、他人のものである。

「封筒」は、33 点から成る。実験データ、メモ、草稿、別刷などの資料が一括してまとめられているものが多い。実験データが入っているものには、「Fadeout」や「Radio」と封筒に記してあるものが存在した。

「写真」は、7 点から成る。アルバムは 3 点あり、主に外国人が写っていた。2005 年に開催された仁科芳雄展(注 35)で作成したと思われる写真パネルもあった。

「書籍・雑誌」は、14 点から成る。2 点は雑誌であり、『柿岡地磁気観測所要

報』である。書籍は、漢籍や近世史のものがあり、物理学関連の本多光太郎著『鐵及び鋼の研究』などもあった。

「その他」は、18点から成る。書類、文献カード、便せん、名簿、名刺などがあつた。手紙やメモやグラフ用紙がまとめられているものもあつた。他にも、地震研究所談話会のプログラムや、理化学研究所の長岡研究室から発表された論文をまとめたものがあつた。

「長岡家関係」は、42点から成る¹⁹³。父の長岡治三郎関係のものが半数以上を占める。全国各地の産業を調査した記録が残っている。また、家系図や巻物や書などがある。

今回の整理で目録をとることができなかった残りの350点余りの資料群は、岡本の報告を参考にすると、大半は「書簡類」であると考えられ、「証書・表彰状類」、「身の回り品」も残されていると考えられる。

第5項 旧資料及び新資料のノート群の構造分析

国立科学博物館の整理では、現段階で新資料及び旧資料の完全な目録リストは作成できていない。新資料は、一度見た限りであり、また整理の過程でも記したように、内容や年代を記載しているものは少ない。旧資料においては、「ノート」、「日記類・手帳」、「研究論文集」に限り、目録作成の作業に携わっている。これらより、長岡半太郎資料群のすべての資料の構造を分析することが、不可能であると考えため、私が整理に携わり、加えて、表題や年代が比較的記載されている、ノート資料群（旧資料：526点、新資料：24点）を対象にし、構造分析を行う。

(1) 旧資料（表13～15参照）

長岡のノート資料群を取り上げた先行研究としては、旧資料において2つあり、国立科学博物館の木村東作による日本物理学会での講演¹⁹⁴と、中央大学理工学部生による卒業論文に、木村をはじめ板倉、八木の『長岡半太郎伝』執筆者が手を入れたもの¹⁹⁵がある（注36）。木村の予稿では、ノートのおおま

¹⁹³ 目録の代わりに、表題と数量のみの簡単なリストを作成した。

¹⁹⁴ 木村東作著「長岡半太郎の残した日記、ノート類」『日本物理学会年回講演予稿集』19巻1号、1964年、p.104

¹⁹⁵ 田辺一男・松川為訓共著「長岡半太郎のこした大学ノート・別刷と教え子たち」『物理学史研究』4巻1号 物理学史研究刊行会、1968年、pp.35-56

かな時代区分が推定されている。その区分は、大学生：214点、1888-1990：118点、留学（1893-1896）：47点、1901-1925：27点、1926-1949：83点である¹⁹⁶。履歴によると、1901年は東京帝国大学教授に就任した年であり、1926年は大学を退職した年である。その時代区分を部分的にさらに詳しく明らかにしたのが、後者の中央大学生の研究である。その論文では、ノートから大学時代の長岡の学習内容を明らかにする目的で、大学1年から大学院までノートを時代区分し、当時の科目編成や長岡の修了証書から、履修授業とノートの内容の関係性を分析している。時代区分ごとの点数は、大学1年：31点、大学2年：34点、大学3年：46点、大学4年：62点、大学院：24点と分かれ、大学1年から4年までのノートは、履修科目と対応させ分類されている。また、各学年共通に見られることは、受講ノート、自習ノート、演習ノート（雑記）と使い分けていたことだという¹⁹⁷。

旧資料の目録には、「備考」欄に「大学1年」などと書かれており、それは以上の先行研究によるものではないかと考える。それらの先行研究の知見と、今回の整理により採録された情報より、分析を行う。

最初に年代別に第1編成を施したところ表13のようになった。年代は10ごとに区切ったところ、1880-1889年は314点、1890-1899年は51点、1900-1909年は7点、1910-1919年は13点、1920-1929年は50点、1930-1939年は40点、1940-50年は32点であった（年代が不明の19点を除く）。これより年代に偏りがあることが分かる。最も多いのは、1880-90の大学生から大学院生にかけての時期である。一方、対照的に少ないのは1900-1909年と1910-1919年の東京帝国大学教授の時期である。1923年より、長岡研究室は、理研の建物に移転しており、その頃から再び点数が増加していると考えられる。また第2編成は主題により行い、その結果、1880-1889年が最も主題として多くの項目がたった。これは大学の授業ノートであり、多様な授業を受けたため、主題が分散している。年代の区切りとして特徴的なものは、「数学」のノートであり、1880-1899までは存在するが、1990年以降は見られなくなる。

¹⁹⁶木村東作著「長岡半太郎の残した日記、ノート類」『日本物理学会年回講演予稿集』19巻1号、1964年、p.104

¹⁹⁷田辺一男・松川為訓共著「長岡半太郎ののこした大学ノート・別刷と教え子たち」『物理学史研究』4巻1号 物理学史研究刊行会、1968年、pp.35-56

この現象も、大学や大学院での数学の講義が関係していると考えられる。また、1900年以降は、授業に関するノートや、研究室に関するノートが出てくる。これは、教授となり研究室をもつようになったためである。

次に主題別に第1編成を施したところ表14のようになった。主題は大きく、数学、物理、その他科学、雑に分かれた。主題は、まとまって存在するものを主題として採用し、関連するものを無理にまとめたりはしなかった。その理由は、長岡資料群は、主に長岡の研究過程の中で生成・蓄積されたものであるため、無理に主題としてまとめてしまうと、研究対象が見えにくくなってしまったと考えたからである。また、先行研究において、大学時代に長岡が受けた授業が明らかにされているが、その授業で作成されたものは、そのまとまり（授業名）を主題として採用した。この理由は、ノートの生成過程を表すことができると考えたためである。

物理は合計295点含まれ、数学は145点とほぼ半数であった。数学は、「関数」の40点が最も多く、次いで「純正数学」の31点であった。純正数学は、授業による生成物である。物理は、「力学」の65点が最も多く、次いで「地球物理学」の35点であった。「地球物理学」には、新資料にも含まれる「Seismology」（地震学）と称されたノートが14点あった。その他科学は、ほとんどが大学時代の授業時に生成されたものである。年代を見ると、長期間かけて生成・蓄積した主題と、短期間に生成された主題とに分けることができる。数学においては、長くても「関数」の大学時代から1度目の留学が終わる頃までである。一方物理は、「地球物理学」において1886年から1950年までの蓄積が見られた。これにより地球物理学の分野は、長岡にとって生涯取り組んだ研究テーマであると考えられる。同様に光学に関しても、1885-1940年と長期にわたっており、長岡の主要な研究テーマであったと考えられる。長岡の研究履歴によると、分光学に関する最後の論文は1938年に出され、地球物理学の論文は1943年に出された。地球物理学分野は、その後も地震学研究所において、報告が続けられていたという¹⁹⁸。そのような長岡の研究・活動が文書群に反映されているのである。

最後に経歴による編成を行った結果、表15のようになった。経歴は、東大

¹⁹⁸板倉聖宣著『長岡半太郎』 朝日新聞社、1976年

予備門、東大大学生、大学院、助教授、帝大教授、理研研究員、地震学研究所嘱託に分けて編成を行った。長岡の経歴における編成の問題点の 1 つは、経歴が重なっていることである。東京帝国大学教授時代は、1896 年から 1926 年まで、理化学研究所時代は、1917 年から 1946 年まで、地震学研究所時代は、1926 年から 1950 年までである。このように役職が重なっているため、年代や主題のはっきりしないノートを各経歴に位置づけることは困難である。例えば、長岡資料群には、雑記帳、雑録、Miscellaneous Note とタイトルの付いたノートが、1886 年から 1950 年にかけて生成・蓄積されている。おそらくそれには、研究に関わることが書かれている可能性がある。前章の小野増平文書の場合、そのようなノートは、各経歴の「事務」という活動に位置づけたが、経歴が重なっている時期に生成されたノートである場合は、いずれかの経歴に位置づけることは困難であると考えられる。

また、どの役職においてどのような研究をしていたかという長岡自身の研究の過程を研究する必要も出てくる。今回は 1923 年長岡研究室が理研の建物にいてした都市を契機に、理化学研究所へノートを位置づけ、主題により地震関連のものとはっきりわかるものを地震学研究所へ位置づけた。

また今回はそこまで分析が及ばなかったが、長岡半太郎の履歴を見ると、1899 年測地学委員会、1931 年大阪帝国大学初代学長、1943 年陸軍電波委員会特別委員などさまざまな役職を務めている。これらの活動に関連した文書も存在する可能性があるが、それら経歴を含めた編成はさらに複雑さを増すと考えられる。

(2) 新資料 (表 16~18 参照)

新資料のノート群に触れた先行研究においては、前述の岡本による報告¹⁹⁹が挙げられる。岡本の報告では、研究ノート類、備忘録・雑録に分けその概要が記録されている。研究ノート類には、スペクトル (ゼーマン効果) の実験とまとめのノートが 10 冊ある。そのほか、地球物理学、地震学、電波に関するノートがあるという。備忘録は、理化学研究所の議事録やハイゼンベルク、ボーアといった著名な物理学者の講演記録などがあるという。

¹⁹⁹岡本拓司他著「長岡半太郎の新資料について」『国立科学博物館研究報告 E 類 (理工学)』第 29 巻, 国立科学博物館, 2006 年, pp.7-13

最初に年代別にノートを並び変えたところ、表 16 のようになった。ノートの作成年代は、1908 年から 1937 年であった。1908 年から 1911 年にかけては、Zeeman Effect に関するノートのみである。文字はほとんど数値であり、ゼーマン効果を確認する実験記録であると考えられる。長岡は 1908 年から分光学（ゼーマン効果を含む）の実験を開始したといわれており²⁰⁰、開始当時のノートであるとわかった。1917 年には理研議案決議のノートがある。同年に理研に物理学部長として勤めだしており、研究員の採用に関する内容である²⁰¹。次は 10 年以上後の 1929 年から 1936 年にかけてメモ、原稿、雑記録があり、1937 年に「Seismology」（地震学）の研究ノートが 2 冊ある。

次に主題別に分類をし、構造把握を試みたところ、表 17 のようになった。主題の分類は、長岡の著書を主題別に分類した論文²⁰²を参考に、分類した。主題は、光学（Zeeman Effect）10 点で最も多く、一般物理学 1 点、物質構造論（量子力学）3 点、地球物理学 3 点、その他 5 点である。

作成目的別に分けると主題のものは研究ノートでもあると考えられ、その数は 17 点であり、（不明の実験データを含む）、一般物理学のものは、授業ノートで 1 点、その他事務は、6 点であった。

最後に経歴による編成を試みたところ、表 18 のようになった。年代が特定できるものを該当年代における経歴に当てはめ位置づけた。「Seismology」のノートは、その内容から理化学研究所ではなく、地震学研究所に位置づけた。しかし、長岡は、旧資料でも見たように、地球物理学の研究を生涯にわたって行っており、理化学研究所においても、東京帝国大学においても行っていた。そのため、複数の研究所に所属している時期では、どちらで行った研究なのかが不明瞭になり、別の組織・役職の下に位置づけてしまう可能性が考えられる。また関連して、生涯にわたって行っている研究があるため、年代が不明な場合、主題・内容だけでは、どの経歴時に作成されたものかわからない可能性が大きいのである。

²⁰⁰ 板倉聖宣著『長岡半太郎』 朝日新聞社、1976 年

²⁰¹ 岡本拓司他著「長岡半太郎の新資料について」『国立科学博物館研究報告 E 類（理工学）』第 29 巻，国立科学博物館，2006 年，pp.7-13

²⁰² 牛込研一・今泉憲一著「長岡半太郎と世界物理学との関係—外国論文別刷の解析からみた—（要約）」『物理学史研究』5 巻 2 号 物理学史研究刊行会，1969 年，pp.13-36

(3) 旧資料と新資料を合わせたノート群の構造

旧資料と新資料を合わせた構造は、年代別にみると、新資料は、1900-1909年：7点、1910-1919年：4点、1929年3点、1931-1939年：5点であり、旧資料の点数が少ない年代を補完するノート群であるといえる(1900-1909年は7点、1910-1919年は13点)。しかし、「Zeeman Effect」ノートは、旧資料の1900-1909、1910-1919の2つにまたがるため、当てはめると、まとまりが崩れてしまうと考える。

主題別にみると、新資料の「Zeeman Effect」のノート群は、旧資料の「光学」にあたるが、「光学」には、Zeeman Effectに関するノートは見当たらない。前述したように、新資料のZeeman Effectノートは、長岡の分光学研究の開始時の実験データが記載されている。同年代のノートも光学において見られないため、1つの秩序をもったノート群として、「光学」に位置づけられると考えられる。一方地球物理学の「Seismology」ノートは、旧資料の「地球物理学」に位置づけられ、そこには「Seismology」という表題の付いた1887年、1889年、1909年、1923年～1930年作成のノートが蓄積されている。新資料のノートは1937年作成のものであり、最新のノートであると考えられ、補完する資料であるといえる。

第2節 馬場重徳文書の編成

第1項 馬場重徳文書の整理経緯と概要

(1) 馬場重徳氏の略歴と業績(参考資料20)

馬場重徳は、1909(明治42)年東京都千代田区に生まれた。早稲田第一高等学院理科を卒業後、1931年早稲田大学理工学部電気工学科第一分科に入学した。1934年に古川電気工業(株)の研究員になり、1943年に調査研究聯盟研究局企画部第一係主任を務めた。

1943年に退社後、内閣技術院事務嘱託に就き、1946年には、内閣戦争調査会内閣事務官を兼任した。翌年に学術研究会議外国文献調査研究特別委員会幹事に就任し、総合目録委員会、学術用語委員会に関わった。1949年から、国立国会図書館マイクロ写真委員会委員を5年間務め、1954年から文部省図書館職員養成所の講師として2年間勤めた。その後、国家公務員採用上級試験

口述試験官（1962年）を経て、1964（昭和39）年図書館短期大学講師を併任し、1965年に、図書館短期大学教授に着任した。同教授を務めている間、文部省ドキュメンテーション講習会講師（1966年）、文部省・図書館短期大学共催大学図書館長期研修講師（1969年）などの講師活動を引き受けていた。また、日本図書館協会にも携わり、同大学図書館部会短大分科会委員・分科会長（1975年）を務めあげた。図書館短期大学では、1974年からの2年間、同図書館長を務めた。翌年（1977年）の4月に停年により退職した。1993（平成5）年、虚血性心疾患により83歳で亡くなった。

馬場はドキュメンテーション（注37）研究者であった。日本から初めてヨーロッパにドキュメンテーションの研究に行き、ヨーロッパで言われていた「Documentation」を日本で「ドキュメンテーション」と初めて用いたとされる²⁰³。馬場のドキュメンテーション研究の特徴は統計的手法を用い、図書館や情報の活動におけるすべての現象を分析するというものであった。例えば、学術雑誌を分析し、特性要素を抽出し、それら要素を定式化するという、書誌方程式を編み出した。その他にも翻字の研究や、マイクロフィルムの研究にも取り組んだ。²⁰⁴また馬場は、戦後の図書館行政にも尽力した一面を持つ。疲弊しきった大学図書館の再建、図書および学術雑誌の総合目録の作成、学術用語の標準化など、日本を文化国家としての復興させるため、熱心に取り組んだとされる。行政官としての馬場に関する研究は、1996年～1998年までの科研の報告書にまとめられている²⁰⁵。

（2）来歴及び文書群の現秩序

馬場重徳文書群は、その来歴により2つの文書群から構成されていた。①筑波大学附属図書館情報学図書館（以下図情図書館とする。）に保存されているもの、②佐藤隆司（注38）宅に保管されていたもの、である。

最初に①の文書群の来歴及び文書群の現秩序について述べる。1993年、馬

²⁰³馬場重徳先生論文集刊行会編『ドキュメンテーション—馬場重徳先生論文集—』馬場重徳先生論文集刊行会，1977年，pp.1-30

²⁰⁴桜井宣隆著「馬場重徳先生のご業績の紹介」『図書館短期大学紀要』13号 図書館短期大学，1977年，pp.1-6

²⁰⁵佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程：馬場重徳文書の組織化と分析』図書館情報大学，1999年（平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書）

場重徳の死去後、生前から馬場の研究を手伝っていた図書館情報大学の佐藤隆司教授が、残された資料の引き取りを遺族の方に懇願した²⁰⁶。遺品整理が行われ、私宅にあった書棚 20 本程度と机の周辺に残された文書類が、段ボール箱約 100 箱に入れられた。それら文書群は佐藤の私宅の物置²⁰⁷や、図書館情報大学の共同研究室に運搬されたという²⁰⁸。

佐藤は、研究室に運んだ文書群をゼミ生らとともに少しずつ整理していた。その整理の途中で、佐藤は一部の文書群を自宅に運んだと推定している（注 39）。平成 8 年度から 3 年間、文部省の科学研究費の補助を受けることが決まり、本格的に文書の整理・分析にあたるようになった（注 40）。佐藤らにより目録が作成され（注 41）、その成果は、科研の報告書の後半部に「馬場重徳文書のリスト」として掲載されている。その科研の期間内に整理しきれなかった文書群は、後に佐藤によってリスト化され、上記の「馬場重徳文書のリスト」を補完するものとして、2001 年に冊子化されている²⁰⁹。

図情図書館との交渉の末、目録を作成した文書群の一部（特に図書館短期大学関係のもの）が図書館へ移管された²¹⁰。文書群は、1 つ 1 つポリ袋に詰められ、金属枠のついた 5 つの段ボール箱に収められ、書庫に保存されていた。それら文書は、筑波大学附属図書館ウェブページのデータベース「Tulips Search」²¹¹において、検索可能である。

次に②佐藤隆司宅に保管されていたもの、の文書群の来歴及び文書群の現秩

²⁰⁶佐藤隆司著「馬場重徳文書のリスト」, 2001 年の「序にかえて」より

²⁰⁷ 当時、佐藤と共に整理を行っていた獨協医科大学の川村敬一によると、目録カードなどの大量のカード類は、佐藤が重要だと判断し、直接自宅に運んだという。

²⁰⁸ 原秀成著「文書の保存と維持に関する制度上の問題点—馬場重徳文書の整理作業と恒久的保存策—」 pp.15-24 佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程：馬場重徳文書の組織化と分析』 図書館情報大学, 1999 年（平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書）

²⁰⁹ 佐藤隆司著「馬場重徳文書のリスト」, 2001 年の「序にかえて」より 926 件（2034 点）のリストである。

²¹⁰ 2014 年 7 月 18 日、佐藤隆司氏への聞き取り調査より。移管されたのは 231 点である。残りの文書群（1800 点あまり）は、行方が分からないがおそらく廃棄されたと考えられる。

²¹¹ 『筑波大学附属図書館 Tulips』 <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/>（最終閲覧 12 月 11 日）

序について説明する。②は、馬場宅から直接運び込まれたカード類²¹²（注 42）と、図書館情報大学での整理途中に佐藤宅に運び込まれたものから構成されている。カードは膨大な量があったため、状態が良く全体のサンプル（代表例）になるであろうものを残して、多くは廃棄したという²¹³。今回、科研²¹⁴による研究の一環として、佐藤宅に訪問し聞き取りを行い、2014年9月に保管してあった文書群を筑波大学春日キャンパスの一室へ移した。文書群は、段ボール箱で約41箱分であった。箱は、3種類あり、それぞれ書き込みが見られた（注 43）。

（3）整理の経緯

上で述べた、②佐藤隆司宅に保管されていたもの、について、整理の過程を記述する。

最初に保存状態を良好にするため、段ボールの中の資料を、現秩序を変えないよう配慮しながら、中性紙の箱に詰め替えた²¹⁵。また、現秩序を記録するため、段ボールの外観を写真に収めた。整理の全体的な手順としては、i) 概要調査→ii) 内容調査→iii) 構造分析という、段階を踏んだ整理方法を採用した²¹⁶。ここでは、i) と ii) を記述し、次項にて、iii) を詳しく記す。

i) 概要調査の目的は、「整理の全体計画を立案するために文書群の全体像を把握することと、文書群の保存の原状をできるだけ詳しく記録すること」²¹⁷である。それに基づき、目録項目を設定した。項目は、「箱番号」、「内容」、「年代」、「点数」、「特記事項」、「箱書き（段ボール）」、「箱の種類」、「箱書き（個別）」、「箱（個別）の状態」、「備考」の10項目である。カード類自体は数千枚単位で、箱（個別）に入れられ、さらに段ボール箱に入っていた。そのため、

²¹²佐藤はカードを最も重要な資料だと考え大学を通さず、自宅に運んだという。獨協医科大学の川村敬一への聞き取りによる。

²¹³ 2014年7月の佐藤への聞き取りによる

²¹⁴ 2014年～2015年度科学研究費助成事業 基盤研究(B) 水嶋英治代表者「21世紀図書館情報専門職養成研究基盤アーカイブ構築：図書館情報専門職の再検討」
『科学研究費助成事業データベース』

<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/26280117.ja.html>より（最終閲覧：2016年1月5日）

²¹⁵

²¹⁶安藤正人著「第三章 史料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店、1988年、pp.51-98

²¹⁷安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店、1988年、pp.58

箱（個別）と段ボール箱の箱書きや状態を記録する項目を作り、現状記録として残すことを心掛けた。段ボール箱は、箱書きが見えるようにすべて写真に収め、サンプルとして2つ残し、残りは廃棄した。

ii) 内容調査では、文書群の中にどのような文書が含まれているのかを明らかにするために、受入時の現状のままリストを作成することが求められる²¹⁸。目録項目は、科研で使用していた既存のフォーマットを用いた。項目は、「所在（ID）」、「タイトル」、「年代備考」、「形態」、「点数」、「年代」、「備考」の7項目である。これら項目に、過不足なくカードの情報を記載するために、記述内容を考えた。カードは、ほとんど8×13cmの規格であり、大きいもので、32×39×10cm（縦×横×高さ）の箱（紙箱や段ボール箱や木箱）にすきまなく並べられていた。そのような箱が133箱あり、そのうち85箱に箱書きが記載されていた。それら箱書きには、「機械化 1-1」のように一見すると、どのような内容のカードが入っているのか不明なものもあった。カードには、広告やコピー用紙で作られているものもあった。カードには作成年月日は記載されていなかったが、箱のなかには、そのカードをとるために使用した、参考文献のカードが冒頭にまとめられている箱もあった。これらのカード群の特徴から、目録における各項目の記述内容及び記述様式を以下のように確定した。

「タイトル」は、カードが入っている箱の箱書きを採用することにした。箱書きが無い場合は、内容から「タイトル」を推定し記載したが、そのさい、箱書きと区別するため、[]でくくり、表記した。加えてカードの内容を()で追記した。「形態」は、手製と既成のカードを区別するようにした。「年代」は、参考文献の最も新しいものの出版年をカードの作成時期と推定し、「(〇年以降)」と表記することにした。

内容目録の記入要領は参考資料 21 に掲載した。

第2項 馬場重徳文書の編成

(1) 文書群の概要

馬場重徳文書群の全体像を巻末資料に示した。ここでは、①図情図書館所蔵のもの、②廃棄されたもの、③今回科研で整理したものの3つに分け、以下

²¹⁸安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、pp.58

にそれら概要を説明する。

① 図情図書館所蔵のもの

筑波大学附属図書館ウェブサイト「Tulips」²¹⁹の OPAC で検索可能である。点数は、233 点である。形態は、論文の草稿が多く、他にも建議書、書簡、日誌、議事録、会議資料、研究に利用した図書・雑誌などがあつた。年代は、1915 年から 1992 年である。年代が特定されている 191 点の年代内訳は、1944 年以前（行政官以前）：3 点、1944～1952 年まで（欧州留学まで）：47 点、1953～1964 年まで（帰国後）：110 点、1965～1977 年まで（図書館短大教授）：21 点、1978 年から（退職後）：8 点である。内容としては、総合目録や学術用語についての文書がある。それらは馬場の経歴と照らし合わせると、1947 年学術研究会議外国文献調査研究特別委員会幹事の頃に蓄積された文書であると思われる。1950 年文部省国立大学附属図書館改善協議会委員時代の、会議資料や、大学図書館協議会の文書も多く残されている。また 1952 年欧州留学時の研究ノートや、研修地の図書館の写真なども存在する。マイクロフィルムの利用状況に関する文書、ドキュメンテーションに関する講演・セミナーのノートなども少数ではあるが存在する。また、1968 年筑波共同利用施設設備会の議事録も 2 点ある。ただし馬場の研究関連のものは、草稿がほとんどであるという印象を受けた。

② 廃棄されたもの

点数は、1,804 点である。年代は、1892 年から 1992 年までである。年代が特定されている 1,260 点の内訳は、1944 年以前（行政官以前）：67 点、1944～1952 年まで（欧州留学まで）：231 点、1953～1964 年まで（帰国後）：666 点、1965～1977 年まで（図書館短大教授）：246 点、1978 年から（退職後）：50 点である。内容としては、馬場の草稿をはじめ、① 図情図書館に所蔵されているものと類似の文書類があつた。①に見られないものとしては、研究の参考資料として用いたであろう、図書、雑誌、辞典、書誌、目録などが大量に存在した。図書館をはじめとする様々な機関が使用している分類表や、馬場が資料を分類する際に用いた国際十進分類表（UDC）も見られた。また大学図書館関

²¹⁹ 『筑波大学附属図書館 Tulips』 <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/>（最終閲覧 12 月 11 日）

係者から送られてきた書簡が複数見つかった。欧州留学中（1952年）の年代の文書群が72点も見られ（注44）、その研究成果報告書も存在した。年代が古いものの中には、卒業論文の草稿や、古河電工時代に作成した抄録集などもあった。

③ 科研で整理したもの

件数は、約550件（注45）であった。年代は、1927年から2001年までであり、1950年代後半から70年代のものが多く見られた。内容としては、カード（辞書・事典、非ローマ字、古文字、多国ドキュメンテーション用語）、馬場著の図書、馬場著の論文掲載の雑誌、論文の草稿、講演記録、研究に使用した和洋図書・雑誌（コピーも含む）、学生提出課題などであった。文部省時代の報告書のコピーや、図書館短期大学関連の資料も数点ではあるが、存在した。古河電工時代のものや、日記、書簡などは見当たらなかった。

特筆すべき文書群は、カード群である。カード群は、133件あり、550件ある総文書群のなかの約24%を占める。また、① 図情図書館所蔵のもの、② 廃棄されたもの、の中には、存在しない文書群でもある。

（2）用語辞典カード群の個別分析

個別のカード群の中から特筆すべきものを挙げ、カード資料群の関係性を探る材料とする。最初に取り上げるのは、「Library glossaries 図書館用語集草案（多国語編）」（1950年）というカード束であり（「参照文献」として記載されている辞書、用語集等の中で最も新しいものは1959年のもの）、頭文字A~Zまでの15件のまとまりから成るものである。これは他のカードと大きさが異なり、紐で綴られている。作成年代や形状から、多国語用語集において馬場が最初に作成したものではないかと考えられる。同じ形状のものが、「瑞典-英-日 図書館用語」であり、これは冒頭に記載されていた参照文献から、1962年以降のものだとわかる。また「西班牙語-英語-独語語彙」というカード群の箱に、1961年から執筆し始めた「西班牙図書館用語辞典」というノートが同封されており、50年代から60年代にかけて、さまざまな欧州の言語を見出し語とする多国語用語集を編纂し始めたことが分かる。また、「西班牙図書館用語辞典」ノートには、1952年からの欧州研修へ行った際に、用語を補足したと書かれており、欧州研修と用語辞典編纂に関係性があることがわかる。

「英多国語辞典」の参照文献のうち、最も新しいものは1984年であり、1959年以降の「Library glossaries 図書館用語集草案（多国語編）」を改訂したものだと考えられる。参照文献を見比べると、「英多国語辞典」は23冊中2冊が、「Library glossaries」で使用されたものであった。これらから、用語辞典は、1950～60年代に作成され、最新の用語を絶えず更新していたことが分かる。「スペイン語・英語・独語語彙」の参照文献も最新は、1990年のものである。用語辞典の参照文献の多くは、辞書、事典類である。これらは、言語学分野の辞書の書誌カード群と関連していると考えられる。

また、同様の特徴はカードの印写様式からも見てとることができる。カードは、黒ペン、青ペン、赤ペン、印字などさまざまな記載があり、手製、既成（既成のものでも異なる種類のカード）のカードも入り混じっていた。馬場は、戦後しばらくの間、広告の裏を利用してカードを作っていたという²²⁰。そのため、手製のものは、作成年代が古いのではないかと予想される。

また、英訳から多国語訳へという流れも存在する。ドイツ語、ポーランド語、などは、英訳のものと、多国語訳のカード群が残されている。スウェーデン、オランダ、ノルウェー、デンマークなど英（和）訳しか存在しないものもある。またフランス語、スペイン語の多国語訳カード群の箱にも、索引や同封のノートなどから、英和訳の痕跡が認められた。

「アルバニア用語」の箱には、「1988.8.再点検済み」というカード索引が冒頭にあり、多国語訳も最大11カ国語になされ、その他のカード群と比べ最もまとまっているうちの1つである。ここに収められているカードから、馬場が編纂しようとしていた用語辞典の全体像が見えてくる。まず「c, pを除き索引化済み」というカード索引があることから、用語の索引化を考えていたことが分かる。日本語、ドイツ語を見出し語にした索引カードがあることから、それぞれ11カ国を見出し語にした索引カードを作ろうとしていたと考えられる。用語のカードの前に、発音の仕方、略号、凡例、参照文献、アルバニア語の歴史などのカードがある。発音や語源などは、言語学の参照文献が関係すると考えられる。このような体系は、出版を想定して作られていると考えられ、馬場が目指していた用語「辞典」の一つの体系を示しているといえる。

²²⁰ 2014年7月18日佐藤隆司氏へのインタビューより

(3) カード群の編成 (表 19～20 参照)

ここでは、③科研で整理したものの中のカード資料群(133件)の編成を行う。カード群は、馬場文書群にとって最も重要なものであると考えられたため、佐藤は遺品整理の際に図情大を経由せずに、それらを直接自宅へ運んだという²²¹。カードの内容としては、図書・雑誌・辞書・事典の書誌カード、索引カード、ドキュメンテーション用語の多言語訳カードなどがあり、主題としては言語学のものが多く見られた。133件(箱)中、120件が、外国語で記載されており、英語ではない外国語も多かった。これらカードは、研究の参考文献や分析に利用されており、馬場の研究の基礎となる文書群であり、研究と共に生成・蓄積していったものといえる。

カードに書かれている情報は、大きく分けて「本」と「ことば」である。

本：41件のカードの構造を表 19 に示した。第 1 編成においては、その特徴から、資料の種類、主題という 2 つの基準が考えられる。書かれているものの資料種を基準とする編成は、書誌：3件、辞書・事典：8件、図書：20件、雑誌：3件、著作：1件、に分けられる。これらカードは、それぞれ書誌として機能している。書誌：3件には、世界の多分野の書誌の書誌カードが収録されている。雑誌：3件には、和雑誌の書誌が収録されている。著作：1件は、馬場の 1980 年までの講演なども含んだ著作リストである。

第 2 次編成において、主題・事項を基準にして編成を試みた。書誌や雑誌においては、特定の分野に偏っておらず、分けることができなかった。辞書・事典：8件は、言語学：5件、多分野：3件、学生課題：1件に分け、図書：26件は、ドキュメンテーション学：3件、言語学：20件、イタリア：1件、学生課題：2件に分けた。学生課題は、司書講習講師あるいは、授業において学生が作成したカードである。

第 3 編成は、国・言語を基準に編成される。辞書・事典：8件—言語学 4件は、多国：3件、イタリア：1件に分かれる。特定の国の言語の辞典を採録したものは、唯一イタリアのみ存在した。図書 26 点—言語学：20件は、多言語：17件、文字(非ローマ字)：3件に分かれる。文字：3件の中には非ローマ字表記のアフリカの諸言語に関する文献が採録されている。第 4 編成において、

²²¹2014 年獨協医科大学の川村敬一への聞き取りによる。

図書データの入手先を基準として、図書一言語学—多言語：17件は、大学所蔵：10件、その他：7件に分かれる。大学所蔵のものには、「京大」や「東大」という印がカードに押されており、京大、東大が多く、天理大、一橋大学などもある。その他としては、ある特定の書物の中で参照されている文献、専門図書を扱う書店のリスト、新聞の図書紹介欄などからデータを収集していたようであった。

第5次編成は、カードの性質によって既成（一般的な8×13cm）、手製（広告の裏紙など使用）、欧研カードの3つに分かれる。手製のカードは、29件、欧研は1件のみである。「本」のカード41件中には、手製のものは、21件で半数以上であった。「ことば」のカード92点には、手製が8件しかなく、これらから、「本」のカードの方が、より古いものである可能性が高い。

2つ目の主題を基準にした場合の構造を提示する（表20参照）。第1編成において、主題を基準に取る編成を行うと、言語学：24点、多分野：13点、その他ドキュメンテーション：4点に分かれる。半数以上が言語学に関する「本」のカードであり、その他の多くは、多分野であり特定のものではないという特徴をもつことがわかる。

第2編成では、言語学：24点を、さらに事項（国）を基準に、多国：20点、文字：3点、イタリア：1点に分けた。ここまで内容を基準に編成し、この後、上述した資料種による編成を行った。

第3編成では、資料種を基準とし、言語学—多国20点を、辞書・辞典・事典：3点、図書：17点に分け、多分野：13点を、書誌：3点、辞書・辞典・事典：4点、図書：3点、雑誌：3点に分けた。第4編成は、所蔵を基準にして、言語学—図書：17点を、大学所蔵：10点、その他：7点に分け、多分野—辞書・辞典・事典：4点を、学生課題：1点、その他：3点に分け、—図書：3点を、イタリア：1点、学生課題：2点に分けた。第5編成は、上記と同じく既成、手製、欧研の区別をした。

ことば：92点のカードには、さまざまな言語、主に外国語で1つの単語が書かれ、それに索引が付されていたり、多言語に訳されていたり、用例が付されていたりする（表20参照）。

第1編成は、記載の言語（翻訳してあるものであれば、見出し語）を基準

とし、英語：40点、ドイツ語：7点、フランス語：5点、ロシア：5点、アルバニア語：4点、ポーランド：4点、日本語：4点、スウェーデン語：1点、イタリア語：1点、スペイン語：1点、オランダ語：1点、ラテン・ギリシャ：1点、チェコ：1点、その他文字：8点、複数言語：4点、記載なし：4点という項目に分けた。

第2編成は、使われ方（機能）を基準にして、用語編纂、用語抽出に2分した。第3編成は、どの媒体から参照したか（所蔵）を基準に、図書、雑誌、著書などに分けた。第4編成は、書かれている内容から（主題）と翻訳（対訳か多国語訳か）を基準に、編成を行った。スウェーデン語、イタリア語など1件のみのカード群は、すべて当該編成項目を見出し語として、ドキュメンテーション用語が多国語訳されているものである。複数件数ある項目には、その用語辞典カードのほかに、異なる機能をもつカード群がある。

英語：40点は、第2編成において、用語編纂：29点、用語抽出：12点に分かれ、第3編成において、用語抽出：12件は、図書：10件、雑誌：2件に分かれ、第4編成において、用語編纂：29件は、辞典：24件、機械化：5件に、用語抽出—図書：10件は、機械化：2件、索引化：2件、図書館学・書誌学：4点、その他：2点に分かれる。英多国語辞典と書かれたもののうち、4箱に渡って、頭文字A~Zまでの用語が並べられている。用語編纂は、多くは多国語辞典編纂のためのものであり、複数の著書などからテーマ性をもって編纂されたカード群である。また、用語抽出は、何かしらのテーマ性をもった用語を多くは索引付きで、当該言語の単著から、取り出してきたカード群のことである。

ドイツ語：7点は、第2編成において、用語辞典：4点、用語抽出：3点に分かれており、第3編成において、用語辞典は、対訳：1点、多言語訳：3点に分かれ、用語抽出は、言語名：2点、書目：1点に分かれる。

フランス語：5点は、用語辞典：2点、用語抽出：3点に分かれる。用語抽出のものは、言語学分野の単著からそこで使用されている用語を抽出し、和訳したものである。

ロシア語：5点は、すべて用語辞典の機能をもち、対訳：1点、多国語訳：3点に分かれる。4箱に渡って、頭文字がA~Яまで（ローマ字のA-Zと同じ）

の用語が編纂されている。

ポーランド語は、すべて用語辞典の機能をもち、対訳：1点、多国語訳：3点に分かれる。

日本語は、すべて用語抽出の機能をもち、著作：2件、雑誌：1件、学生課題：1件に分かれる。

その他文字：7件は、第2編成において、用語編纂：4件、用語抽出：3件に分かれる。文字は、非ローマ字のことであり、その言語名を日本語にしたもの、文字をアルファベットに直したもの、その文字を扱う民族とその文化などを記したカードである。

複数言語：4件は、第2編成において、用語辞典：2件、用語抽出：2件に分かれ、第4編成において、用語編纂が、対訳：1件、多国語訳：1件に分かれる。辞典の見出し語は、ルーマニア、デンマーク、ノルウェーなど、第1編成の項目に入っていない言語も含まれている。第4編成は、カードの性質により、既成と手製に2分した。

(4) カード群編成の結果と履歴との関連

カード群の編成結果を表20に示した。カード群は、「本」と「ことば」のカードに分かれる。「本」は、図に示した2つの構造が考えられたが、第1編成において主題を基準とするものを「本」の構造として選択した。その理由は、まず辞書と図書が一体となっている書誌カード群が多く、辞書と図書に分けられないことが挙げられる。またそのようなカード群は、「言語辞典」や「言語・言語書目」というように「言語」という名称が付されており、作成当時から言語学という主題を意識して作成されたものではないかと考えられたためである。最初に資料種によって編成してしまうと、それがどういうために作成されたかという作成意図が見えてこない。「本」と「ことば」の1つの関係性としては、「ことば」のカードを作る際に「本」を参考にしたというものが考えられる。そのような参照文献としての役割は、主題を基準に編成し提示することで、その参考文献が持つ情報も明確にされ、「ことば」のカードとの関係性も見えやすくなると考える。例えば、用語編纂は、「言語学」を参照し、用語抽出は「多分野」のものも参照したのではないかと関連性を想定することができる。また、用語抽出における「所蔵」の基準が、「資料種」の基準と対応して

おり、また同レベルで対応することができている。

第 1 編成は、主題によって言語学、多分野、その他ドキュメンテーションに分けた。先に述べたようにこれは作成意図を示している。次にさらに内容で区別できそうな「言語学」を、事項（国）を基準に多国、文字（非ローマ字）、イタリアに分けている。次は、書誌が採られている資料種によって、図書、書誌、辞書・事典、雑誌に分けた。全体として「ことば」より「本」の方が、手製のカードが多いことから、年代の古いときに作られたと考えられ、その「本」のカードを参考資料として「ことば」のカードを作り研究を行っていったという過程が見えてくるのである。また図書、雑誌というまともには、生成・蓄積過程を示している。それは、馬場が書誌、図書、雑誌、辞書・事典の書誌を編纂し刊行しているからである。書誌を掲載した著書としては『欧州における書誌文献』²²²が挙げられる。資料種の次の所蔵による編成で、「大学所蔵」とあるのは、昭和 21 年頃から学術行政のための総合目録の作成に乗り出しており、それを作るさい最初に、旧帝大の蔵書の目録をとったという²²³。それより京大、東大などの帝国大学の押印があるカードが多いのである。さらに、著書の中では、分析対象としてそれらを取り上げたり、参考資料として一覧を付したりしている。特に、雑誌は、それを分析対象の中心として、要素を分解し、書誌方程式という馬場のドキュメンテーション研究の 1 つの大きな成果²²⁴として知られる研究に利用されている。

「ことば」は、言語によって分かれていると考える。最も多いのは、英語：42 件であり、記載のあるものの 45%が英語で記載され、または見出し語を英語に取り多国語訳されたカードであることを示している。馬場は、ユネスコを初め、ヨーロッパ諸国から奨学金や援助を受けた感謝をこめて、それぞれの国の言語用語を見出し語として多国語辞典を編成してきたという²²⁵。そのため、

²²² 馬場重徳著『欧州における書誌文献』 学術文献普及会、1967 年

²²³馬場重徳先生論文集刊行会編『ドキュメンテーション—馬場重徳先生論文集—』馬場重徳先生論文集刊行会、1977 年、pp.1-30

²²⁴桜井宣隆著「馬場重徳先生のご業績の紹介」『図書館短期大学紀要』13 号 図書館短期大学、1977 年、pp.1-6

²²⁵馬場重徳著「今このような仕事をしています（卒業生のクラス会あての手紙）」、1992 年 2 月 4 日、佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程：馬場重徳文書の組織化と分析』 図書館情報大学、1999 年（平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書）、

言語による編成は、カード群の生成・蓄積過程を表しているといえる。

カード群は用語辞典の編纂だけではなく、たくさんの研究に使用された。どのようにカードが利用されているかを分析し、各言語を、「用語編纂」と「用語抽出」という機能によって分けた。用語編纂は、複数の参照先をもち、何らかのテーマ性をもって編纂される行為である。用語抽出は、編纂の準備段階にあたるものと考え、相互に関連する項目である。用語編纂と用語抽出以下の項目で類似の名称のものがあれば、それらの下に配置されているカード群は何らかの過程上の関連をもつと考える。

次にわかる範囲で、どの媒体から用語を抽出しているかを分析し、図書、雑誌、辞典などに分けた。これは、「本」の編成項目と関連をもつと考える。つまり、「本」の「図書」、「雑誌」、「辞典」の項目と関連している可能性があることを示しているのである。

次に主題と翻訳で編成が施されている。主題は、どのような目的で、テーマ性をもって、そのカード群を生成したのかを表している。また上述のように、類似項目は、横断的に関連をもつと考える。用語抽出の「辞典用語」カードは、ドイツ語の「書目関係用語」や英語の「書誌的術語」と関連するものだと考える。対訳（英訳）、多言語訳の区別は、対訳から多言語訳という辞典編纂における過程を表している。

冒頭の言語による編成は、カードの生成・蓄積過程を示していると述べた。その生成が始まったのは、1950年ごろからであり、1952年の欧州研修によって生成・蓄積されていった。欧州研修は、他にも、馬場に非ローマ字の翻字の必要性を感じさせた。非ローマ字の翻字の研究は、それ以後着実に行われ、1968年書籍として刊行された。その中で論じられたチェコ語の翻字を基礎にして、馬場は晩年、多国語辞典の集大成として、チェック・ドキュメンテーション用語集の編纂を行い出版しようとしていたのである²²⁶。これらのことから、非ローマ字という項目を立て、その下にチェコ語の用語編纂を配置することは、馬場の研究活動を反映させることにつながる。そのため、言語による

pp.69-71

²²⁶馬場重徳著『チェック・ドキュメンテーション用語』1994年（馬場の死後佐藤によって出版。草稿のコピー。）

編成の前に、ローマ字と非ローマ字という項目を立てて、編成を試みた。その結果、ローマ字には、欧州研修で訪問した国々によってまとまり、生成過程として互いにまとまりをもつものになったと考える。

第3節 長岡半太郎資料と馬場重徳文書の編成と編成論との関係

第1項 階層構造レベルとの関係

ここでは、第2章と同じく ISAD(G)の前提として示されている階層構造モデルを用いて分析を行う。i) フォンド、ii) サブ・フォンド、iii) シリーズ、に分け、以下に分析を、馬場重徳文書を中心に試みる。

i) フォンドとの関係

フォンドとは、ICA の定義では「特定の個人、家、団体が、個人的もしくは組織的に活動するなかで有機的に作成され、または蓄積され、使用された記録の総体」とされる²²⁷。馬場重徳文書は、その来歴により①図情図書館所蔵のもの、③今回科研で整理されたものに分かれる。長岡半太郎資料も、その寄贈経緯により、旧資料と新資料に分かれている。しかし、もともとは、どちらも1つの文書群として存在していたため、馬場重徳文書、長岡半太郎資料をそれぞれフォンドとして設定するべきであると考えられる。

ii) サブ・フォンドとの関係

サブ・フォンドとは、「相互に関連あるまとまった記録をもつ下部フォンド。これは、作成組織または機関の業務遂行上の下部組織に対応して設定されるか、またはそれが不可能な場合は、資料自体の地理的区分、編年、機能、あるいは類似の分類によって設定される」ものである²²⁸。馬場文書群は、上述のように③今回科研で整理されたもののほかに、①図情図書館所蔵のものがある。それらは別の出所による文書群であると考えられ、サブ・フォンドは、「図情図書館所蔵馬場重徳文書」と「佐藤家旧蔵馬場重徳文書」という名称に分けて設定すべきであると考えられる。長岡半太郎資料においても、その寄贈経緯により旧資料と新資料とに分けられており、それぞれ「長岡半太郎旧資料」、「長岡半太

²²⁷ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会、2001年、p.14

²²⁸ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会、2001年、p.14

郎新資料」というように別のサブ・フォンドとして設定されるべきである。

iii) シリーズとの関係

シリーズとは、「ある体系に従って編成された記録。または同一の活動によって生じたり、特定の形態をもっていたり、記録が作成される際に生じたほかのなんらかの関係により、ひとつの単位として保持されている記録」のことである²²⁹。

小野文書群の編成を参考にすると、加藤聖文が論じた、シリーズを、部局を含めた役職名に設定することが考えられる。しかし、馬場重徳文書のカード群は作成年代がわからないばかりか、おそらく多くのカード群は、年代が1970年～80年という晩年のものが多いため、途中で手が加えられ、中身が改変されているものと考えられる。実際に1箱のカード群を見ても、異なる種類のカードが混在しているものがあつた。馬場は、教え子への書簡の中で、多国語辞典など5つの仕事を挙げ、それらを昭和20年以来、続けてきた仕事と述べている²³⁰。これらよりカード群の作成年代を把握するのは非常に困難であり、そのため役職による編成を行うことができない。それだけでなく、役職による編成をし直すということは、カードの後年の改変を無視することにもなる。カード群の作成時点での状態を復元できないとすれば、カード群の中身の「原秩序」は、現状の秩序ということになる。そのため、役職による編成は、「原秩序」を破壊してしまうことにもつながるのである。

長岡半太郎資料においても、役職編成について、数点の問題点が挙げられた。長岡は、複数の組織の役職に就いている時期があり、その時期に生成されたノート群は、内容を見ていずれかの役職の下に位置づけなければならない。小野増平関係文書の場合、単一の組織しか関わってなかったため、年代さえわかれば、部局+役職の下へ位置づけることができた。そして、その点において経歴による編成は、容易であり整理者による恣意性が少ないものになりえた。しか

²²⁹ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』北海道大学図書刊行会、2001年、p.14

²³⁰ 馬場重徳著「今このような仕事をしています(卒業生のクラス会あての手紙)」、1992年2月4日、佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程：馬場重徳文書の組織化と分析』図書館情報大学、1999年(平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書)、pp.69-71

し、複数の役職に就いている場合は、内容より文書を分別しなければならなくなり、整理者の恣意性が大きくなると考える。また馬場文書と関連する問題としては、研究のテーマが分断されてしまうという点があげられる。長岡半太郎資料において、「地球物理学」の資料は、1886年から1950年までの蓄積が見られ、生涯にわたって取り組んだ研究テーマであることが分かった。実際、長岡の地球物理学に関する論文は、欧文論文総数326編の約28%にも達しており²³¹、長岡の中心的な研究の1つであったといえる。そのように長期にわたって取り組んでいる研究によって生成・蓄積される文書群は、一定の体系的な秩序を形成していると考えられ、経歴による編成はその秩序を分断してしまう恐れがあると考えられる。

第2項 出所の原則の再考

出所原則とは、「資料を、それを作成ないし授受してきた機関・団体・家・個人ごとの文書群としてとらえ、ひとつの出所をもつ文書群は整理にあたって他の出所をもつ文書群と混同されてはならない」という原則であった²³²。

馬場重徳文書は、③今回の科研、①図情図書館という大きく2つの構造に分かれていた。その2つは、本来一体であった文書群であるが、前者は佐藤家で、後者は図情大で別々に保管され、前者は今回の科研で、後者は佐藤を中心とする科研で、別々に整理されたものである。それらは、来歴から別々の意味をもつ文書群であり、③には①に含まれないカード群が存在することから、それぞれ別々の秩序を有する文書群であると考えられる。そのため、別々の出所として分けて保存されることが望ましいと考えた。『広島大学所蔵森戸辰男関係文書目録』の中では、広島大学旧蔵文書、森戸富仁子夫人寄贈文書、檜山家文書を分けてそれぞれ編成し、目録上で3つを並べている²³³。このように馬場文書群においても①と③を統一フォーマットの下で目録を作成する必要があり、安易に2つの文書群を混ぜてはいけなないと考える。さらに森戸文書目録では示されていないが、①と③を合わせた構造分析が行われる必要があり、そ

²³¹ 木村東著作「長岡の地球物理学に関する研究の傾向」『物理学史研究』3巻2号 物理学史研究刊行会、1966年、pp.35-40

²³² 安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店、1988年、p.56

²³³ 小池聖一著「解題」 森戸文書研究会編『広島大学所蔵森戸辰男関係文書目録〈上巻〉』 広島大学文書館、2002年、pp.1-29

の上で、出所を1つにまとめるかの判断をするべきであると考え。

長岡半太郎資料の旧資料と新資料は、今回の整理において、統一フォーマットの下で、目録が作成されている。第1節で示したノートだけでなく、すべての旧資料と新資料において構造分析が行われ、全体の関係性が示された後に、出所をまとめるかの判断を行う。出所をまとめるのであれば、全資料を包括するような編成がなされるべきだと考える。

第3項 原秩序尊重の原則の再考

原秩序尊重の原則とは、出所を同じくする文書群の中で個々の文書がもともと与えられている秩序（配列）が、それを生んだ機関・団体・家・個人の活動の体系を反映しているものである場合には、その原秩序（原配列）を尊重して残さなくてはならない」という原則であった²³⁴。カードの中身の秩序は、現秩序を「原秩序」として認定した。本来であれば、保管者であった佐藤の手が加えられた可能性もあるため、馬場作成時の状態を「原秩序」とすべきであるが、その手掛かりがないためその秩序を復元することは不可能に近いと考える。旧蔵していた佐藤がカードの秩序を壊していない場合、それらカード群の排列は、馬場が最後にまとめた状態である。馬場のカード群の中には、手製や既成を含め、カードの様式、ペンの種類、記載内容などから様々な年代に作られたカードが混在している箱があった。また箱書きが黒マジックで消され、新たな箱書きが付されている箱もあった。これらから、馬場は作成したカードを研究や他の目的に沿って、配列を変えたり箱を横断して入れ替えたりして、新たな秩序を作り出していたということがわかる。その新たな秩序も同様に「個人の活動の体系を反映している」と考えられるため、それを尊重し、「原秩序」とするのである。これは、小池聖一が森戸文書において、後年の森戸自身による整理痕跡を発見し、それを尊重して「原秩序」とした処置と同様である²³⁵。

もう1つの秩序である、カード箱とカード箱の関係性における「原秩序」の1つの基準となるのは、箱書きによる名称である。例えば英多言語辞典と称する箱には、3箱に分けて、頭文字A-Zの用語カードが含まれていた。それ

²³⁴安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店、1988年、p.56

²³⁵小池聖一著「解題」森戸文書研究会編『広島大学所蔵森戸辰男関係文書目録〈上巻〉』広島大学文書館、2002年、pp.1-29

らは 1 つのまとまったカード群である。しかし、他にも英多言語辞典と称する箱は存在し、その関係性は不明であり、それらを抽出してきた参考文献も不明である。「ことば」の完成している A-Z のカードに至る過程のカード群と、「本」の参考文献のカードを対応させた秩序が 1 つの「原秩序」であると考えられ、そのような一連の活動をシリーズに設定できるのではないかと考える。

このようなカード群の場合は、中身の配列に加えて、カード箱同士の秩序も「原秩序」尊重の範囲に含まれると考える。

終章 個人文書群の編成の課題と展開

(1) 本研究の小括

本研究は、近現代個人文書群の編成を行い、個人文書群の整理論のなかの編成に関わる理論の構築に資することを目的とした。研究の方法として、第 1 章では、史料情報共有化データベースを用いて、個人文書群の所蔵機関とその個人文書群の情報をリスト化し、その上で所蔵点数、文書群数などについて都道府県別、機関別に分析を行った。また個人文書目録をできる限り収集し、その編成基準を 3 つの段階に分けてデータ化し、その特徴や傾向を機関別や年代別に分析した。第 2 章では、小野増平関係文書、第 3 章では、長岡半太郎資料、馬場重徳文書を対象に、構造分析を行い、加藤聖文が主張する、階層構造ベースの経歴（役職）によるシリーズ設定を適用し、分析を行った。

第 1 章では、最初にアーカイブズの中の個人文書群の特徴について検討した。個人文書群の他のアーカイブズにはない最も大きな特徴は、「家」から自立した「個」の文書であるということであった。そのため近世文書のように「家」単位として扱われず、「個人」単位で編成を行うのである。また編成に関連する特徴としては、個人文書群は、行政文書に比べ、文書管理が規則的に行われていないため、文書群の持つ体系的な秩序が見えにくいというものがあつた。それに加え、転勤や転職により文書群の移動が繰り返されるため、寄贈時には、原秩序が崩壊している場合が多くなるのであつた。

次に個人文書群の収集・保存の歴史と現状について調査を行った。個人文書群の収集は、戦後に「戦後歴史資料保存運動」とは別の動きとして、大久保利

謙の手によって始められていた。その運動は、国立国会図書館憲政資料室に引き継がれ、その後、大学史料室・文書館によって展開されていった。次に実際の個人文書の所蔵状況を見るために、国文研作成の「史料情報共有化データベース」を用いて、調査を行った。個人文書を所蔵している機関は、登録機関のうち 22%であり、最も多く個人文書群を所蔵していたのは、憲政資料室であった。都道府県別にみると、北海道の機関中 3 分の 1 が個人文書を所蔵しており、これは、近代開拓民の個人文書が多く所蔵されているためであった。機関種別にみると、個人文書は、図書館、博物館、文書館だけでなく、大学、教育委員会、研究所、県庁・市役所などに所蔵されていることが分かった。登録総機関数に対する個人文書所蔵機関の割合は、文書館が 40% (47 館中 19 館) で研究所に次いで 2 番目であり、図書館や博物館に比べ 4 倍以上多かった。しかし、登録総文書群に占める個人文書群の割合は、いずれの機関も 3% 以下であった。

次に実際に個人文書群の目録がどのような基準で編成されているのかを分析した。その結果、個人文書群の第 1 編成において最も利用されている基準は、物理形態 (39%) であった。機関別に分析を行った結果、図書館においては NDC 及び主題分類、文書館においては、出所、経歴などを基準として編成が特徴として見られた。

最後に個人文書の編成論について、その歴史と課題を明らかにした。個人文書の編成論は、1980 年前後に萌芽したが、それ以後 20 年間、議論の俎上に載せられることはなかった。2014 年になりようやく、編成論を個人文書群に適用させる 2 つの事例研究が提示され、そこで主張されているシリーズ設定に就いて編成論の議論の土台が形成されつつある。課題としては、シリーズ設定の基準、特に加藤聖文の主張した経歴 (役職) による編成が、有効であるかどうか検証した研究がない。また、シリーズ以下の編成については、論じた研究が無い。個人文書群の編成における出所原則と原秩序尊重の原則の関係性を論じた研究がないことが挙げられた。

第 2 章では、新聞記者の個人文書である、小野増平関係文書の編成を行った。現行の『小野増平関係文書』における分類項目ごとに構造分析を行い、それらを併せて全体の構造として示した。その構造とその過程を階層構造、出所

原則、原秩序尊重の原則の 3 つに分け分析した。階層構造による分析では、サブ・フォンドを個人の所属組織に求められる可能性を指摘した。シリーズ設定においては、部局＋役職をシリーズとして設定した。また、サブ・シリーズ以下の構造についても分析を加え、連載あるいは、取材、執筆といった活動をサブ・シリーズとして設定した。出所原則による分析では、社会的活動の際に所属した組織を出所として認められるかについて問題提起を行った。原秩序尊重の原則による分析においては、個人文書の「原秩序」は管理時ではなく作成時に求められるとし、そのように明らかにした「原秩序」によっていかにサブ・シリーズを設定したかを示した。

第 3 章では、物理学者である、長岡半太郎の個人文書、ドキュメンテーション研究者である、馬場重徳の個人文書の編成を行った。それぞれ出所別に前者はノート群、後者はカード群を分析し、文書群の部分的な構造を示した。その構造とその過程を階層構造、出所原則、原秩序尊重の原則の 3 つに分け分析を試みた。階層構造による分析では、フォンドとサブ・フォンド設定において、2 つの出所に分かれた文書群の扱い方について論じた。2 つの文書群共に、フォントは統一し、現時点ではサブ・フォンドは出所ごとに分けるべきであるとした。シリーズ設定においては、経歴（役職）による設定に対する、研究テーマの分断などの問題点を指摘した。原秩序尊重の原則による分析においては、作成年代が不明な文書群における把握の仕方を論じた。

(2) 本研究における論点と課題

本研究における大きな論点は、階層構造におけるシリーズ設定であった。加藤聖文が提示した経歴（役職）²³⁶を基準としたシリーズ編成を各文書群に試みた。小野増平関係文書においては、文書群の残存状態を鑑み、10 の部局＋役職名をシリーズとして設定した。その結果、論説委員会など役職によって個性の出る文書群の蓄積過程を復元することができ、また部局を役職名に付けることで、部局による執筆記事の違いもあらわした構造が提示された。しかし、長岡、馬場の両文書群においては、作成年代が不明な点、役職が重なるケース、テーマ性をもった一連の活動の分断という問題点が生じ、役職による編成は困

²³⁶加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版、2014年、pp.181-199

難であると結論付けた。小野増平関係文書においては、連載という 1 つのテーマ性をもった活動によって、サブ・シリーズを編成した。それが可能であったのは、連載が長くても 1 年余りで終了するという短期的な活動であったためである。長岡資料と馬場文書は、そのような短期ではなく、研究という長期間に及ぶ活動を反映した文書群であったため、役職によって一連の関連ある文書群が分断されてしまったのである。また、馬場カード群における多国語辞典や長岡ノート群における地球物理学関連のものなどは、生涯にわたって蓄積が見られた。そのような活動をたとえ作成年代がわかったとして、役職により分断してしまうことは、文書群の体系的構造を反映しておらず、逆に壊してしまう編成になりかねないと考える。

またこれらの編成結果からは、個人文書群の構造の重要な特徴が浮かび上がってくる。小野増平氏と長岡半太郎、馬場重徳両氏との大きな違いは、会社勤めか、そうではないかである。小野増平は、中国新聞社という会社に勤め、記者活動をさまざまな部局、役職の下で行った。部局、役職によりそれぞれ業務内容は規定されているため、勤務部局、役職によって、生成・蓄積される文書群の秩序は異なる。そのため、経歴による編成を行うと、文書群が本来持っている体系的な秩序を復元することができるのである。

しかし、長岡半太郎と馬場重徳は、会社に勤めていない研究者という職業である。研究活動は、個人的な問題関心に基づき行われるものであり、組織や役職に影響されることは少なく、組織や役職が変わっても、同一テーマの研究が続く場合がある。つまり役職が変わっても仕事が変わらないのである。そのため、研究活動によって生成・蓄積された文書群は、組織や役職による編成を行うことができないのである。特に馬場重徳文書におけるカード群は、研究の基礎資料群であり、生涯にわたって手が加わり生成・蓄積されていたため、役職などに影響されないという特徴に強く当てはまる。このような組織の影響下のない秩序をもつ文書群は、近世の「家」制度から独立し、「個」が確立した近現代個人文書群ならではの構造なのである。

一方、長岡半太郎資料のノート群は、地震学や電波に関するものにおいては、地震学研究所嘱託（1926 年～）や電波物理研究会会長（1943 年～）などの経歴と対応している。しかし、地震学関連のノートは、1886 年から 1950 年ま

で蓄積されており、また、電波関連のノートは、1920年から1950年まで蓄積されている。これらの研究は、対応する役職に就く以前から行われており、役職に就いてからも、以前から引き続き研究に取り組んだのである。そのため、地震学関連や電波関連のノートは、経歴に対応した秩序と、研究活動という一連のテーマ性をもった活動という秩序の2つの秩序を併せ持っているといえるのである。

長岡半太郎資料と馬場重徳文書において、経歴（役職）を基準としたシリーズ編成には上述のように様々な問題点があるが、それに代わる編成基準を提示することができなかった。研究活動によって、生成・蓄積された文書群であるため、その研究テーマを基準にした編成が可能であると考えられる。しかし、カード群においては、総合索引化の研究のためのカード群や非ローマ字の翻字のカード群を、多言語訳用語集のカード群に使用した、というような研究テーマを横断するような資料群であったため、研究テーマによる編成を行うことができなかった。研究テーマを基準に編成を行えないとしても、経歴にまたがる継続した活動によって蓄積した文書群の場合、それが個人文書群における特質であることを鑑みれば、「経歴」ではなく、「活動」を基準にした編成がおこなわれるべきであると考えられる。どのような編成基準を立てることができるのかは、今後の研究課題の1つである。

小野増平関係文書の編成においては、ほかにもサブ・フォンドに所属組織を設定、サブ・シリーズに活動を設定、写真や書籍など文書以外の資料の編成などの論点を提示した。

サブ・フォンドは、「作成組織または機関の業務遂行上の下部組織に対応して設定される」²³⁷と定義されているが、その定義では、内部に組織をもたない個人文書においては、サブ・フォンドは適用されない。しかし、個人の多くは、組織に属しながら社会的活動（仕事）を行っており、その過程で生成・蓄積される文書群には、所属組織の業務体系が反映され、それぞれ固有の構造をもっている可能性がある。この所属組織は、1つの出所として解釈でき、出所原則に基づいて、他の出所と混同してはならないことになる。この解釈は、出

²³⁷ アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会，2001年，p.14

所と関係しているサブ・フォンド設定に関連していく。そのため、小野増平関係文書では、「中国新聞社」と「広島経済大学」というサブ・フォンドを設定したのである。そして、出所という解釈の仕方を、個人文書群においては、「社会的活動の際に所属した組織」に設定することを提案した。

サブ・シリーズの設定は、これまで論じられることがなかったが、小野増平関係文書において、「一連の活動」という基準で設定された。小野増平関係文書においては、経歴（役職）によるシリーズ設定だけでは、文書群の体系的な構造を表しているとは言えなかった。経歴（役職）以下のサブ・シリーズ設定は、その個人の仕事の要となる活動が基準になると考えた。記者は、取材し、記事を執筆することが要となる活動である。また、要となる活動の1つに連載が挙げられる。1つのテーマ性をもった連載は、そのテーマ性に沿った形で、文書が生成・蓄積されていく。この2つの活動に着目して、サブ・シリーズを設定した。決め手になったのは、小野増平関係文書の連載「移民」における関連文書群の存在である。ファイルの中に取材メモ、参考資料などが1つの記事単位にとじられている状態を、執筆活動の反映として「原秩序」に設定した。その結果、移民→執筆→ファイルという構造が浮かび上がり、サブ・シリーズの設定に至ったのである。

小野文書の編成においては、写真や書籍に構造分析を行い、文書の中に位置づけることを試みた。文書以外の資料群は、最初の編成基準において、文書とそれ以外というように分けられる場合がある。しかし、写真や書籍においても、個人の活動の中に埋め込まれていれば、文書群の体系的秩序の中に位置づけられると考える。小野増平関係文書においては、記者活動の取材や執筆の過程で、取材写真や参考文献などが生成・収集されていくと考えられ、それら写真・書籍は、記者活動と密接に関連し、「取材」や「執筆」という活動の下に位置づけられるものである。写真や書籍の中には、作成年や使用年が不明なものも多かったが、被写体や付箋・書き込みの跡から、特定、推定された記事あるいは活動の下に位置づけたのである。

(3) 個人文書群の編成における課題と今後の展開

編成作業は目録作成に直結する作業であり、構造分析の結果は、目録編成の際に反映されるべきである。安藤正人は、史料目録の最大の役割として、「史

料の科学認識」を挙げ、それは個々の記録史料を理解できるだけでなく、記録資料群の構造、その発生母体への理解、そしてその作成者を取り巻く社会を理解することのできる目録によって達成されると述べている²³⁸。しかし、実際の目録においては、第1章第3節で見たように、解題と履歴表が付されている個人文書目録は、76点中9点(12%)にとどまっていた。また、文書群の構造を反映させた目録編成は、国文学研究資料館(加藤聖文作成)のもの²³⁹しか収集した111点の目録からは、確認できなかった。個人文書群においては、安藤の示す目録からは、かけ離れた現状にあるといえる。しかし、構造分析は、大変手間のかかる作業であるため、未整理文書の多い機関においては、仮目録を作成するだけで、構造分析はなされず、利用者に提供されている²⁴⁰。また、第1章第2節の調査結果からは、目録が作成されていないと想定される文書群が、350件中71件(20%)に相当することがわかっており、そもそも仮目録さえも作成されていないという現状がある。

「史料の科学認識」が主張される一方で、本田雄二のように目録の上に文書群の体系的構造を再構成することに疑問を呈す声もある。整理の枠をはみ出し研究に至っている、誤って秩序を破壊する恐れがあるなどの批判である²⁴¹。整理者の恣意性を排除するという意味においては、呉屋・富永の批判²⁴²に通じる部分がある。そのため、現秩序に沿った目録作成を推進しているが、個人文書群のように現秩序が「原秩序」とは異なる場合が多い文書群において、その主張には疑問を感じる。本研究で小野増平関係文書に行った編成はこの批判に耐えうるであろうか。

小野増平の編成においては、1つの文書(ファイル)が、どのような部局の

²³⁸ 安藤正人著「記録史料目録論」 『歴史評論』497号 歴史科学協議会, 1991年, pp.63-76

²³⁹ 調査収集事業部編『史料目録 第95集 近現代文書目録(その1)』 人間文化研究機構国文学研究資料館, 2012年

²⁴⁰ 長沢洋著「古文書整理業務の20年」『広島県立文書館紀要』10号 広島県立文書館, 2009年, pp.29-45

²⁴¹ 本田雄二著「史料整理と目録編成について—原秩序尊重の目録編成と分類項目付与の有機的連関—」 『新潟県立文書館研究紀要』2号 新潟県立文書館研究紀要, 1995年, pp.54-77

²⁴² 呉屋美奈子・富永一也著「公文書館における私文書の収集と整理:実践と課題」 『沖縄県公文書館研究紀要』第9号 沖縄県公文書館, 2007年, pp.85-103

どのような活動の下で作成されたものであるかが分かる構造になっている。例えば、取材メモが 1 点あると、形態別に並んでいる場合は、たくさんのメモの中の 1 点にすぎない。しかし、構造分析を行っていると、そのメモが「移民」という連載のために作られたもので、それは連載の何回目にあたり、そのメモがその記事になるまでのどのような過程にあり、どのように位置づけられるかが見えてくるのである。より下位のレベルになるほど、その文書を探す際に、またその文書を見たときに、それらが不明瞭になるため、構造を示しておくことが必要であると考え。利用者はたとえその文書群に関する専門的知識をもっていなくとも、どのようなときに、どのような目的で作成されたのかを知ることができるのである²⁴³。

一方では、編成は、やはり秩序を壊してしまうという危険性を常にはらんでいるといえる。長岡資料の編成において年代が不明かつ役職が重なっている文書群においては、役職による編成は整理者の恣意性が高まる危険性を指摘した。しかし、その危険性があるからこそ、概要調査や仮目録を作成し現秩序を記録するのである。また、秩序が不明瞭な場合は、目録上で編成し、保管の現状を崩さないという方法も考えられるのである²⁴⁴。

第 1 章第 2 節では、個人文書群が、文書館だけでなく、図書館、博物館、教育委員会などに所蔵されていることが明らかになった。しかし、図書館では、NDC による分類が行われ、博物館においては、第 1 編成の約 50% が形態によるものであり、第 3 編成までなされたものは、15 点中 1 点のみであった。このような現状の中において、文書群の体系的構造を反映させた編成というアーカイブズ学的手法を、文書館以外にも敷衍する必要があると考える。本研究においても第 3 章で博物館所蔵である、長岡半太郎資料を取り上げ、編成を試みた。現在の形態別分類においては、長岡資料群の構造を反映していないと考えたためである。博物館においても、文書資料と「もの」を切り離さず、それらを一体として展示する、また原秩序などを展示内容に組み入れるという方向

²⁴³大友一雄著「1 章 アーカイブズを理解する」 国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 下』 柏書房, 2003 年, pp.2-16

²⁴⁴竹林忠男著「行政文書の整理と編成一史料整理基本原則の適用とその問題点一」『日本のアーカイブズ論』 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会, 2003 年, pp.424-441 (初出は『記録と史料』5 号, 1994 年)

性が重視されるようになってきているという²⁴⁵。アーカイブズ学的手法が、利用されるためには、鈴江英一の指摘するように、多様な資料群に対応し得る一般性、普遍性をもって確立する必要がある²⁴⁶。本研究においては、図書、写真などの文書以外の資料群にも構造分析を行い、編成の可能性を探った。本研究が、アーカイブズ学的手法の敷衍への第一歩になることを期待する。

²⁴⁵君塚仁彦著「5章 アーカイブズと博物館・博物館学」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学上』 柏書房、2003年、pp.245-261

²⁴⁶鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』 北海道大学図書刊行会 2002年

注記

- 注 1) **General International Standard Archival Description** の略：国際標準記録史料記述一般原則と訳される。国際文書館評議会（ICA: International Council on Archives）の支援のもと組織された、記述標準特別委員会（Ad Hoc Commission on Descriptive Standards）が 1994 年 1 月 23 日に採択した。
- 注 2) マドリッド原則とは、国際標準の制定に先立ち、依拠すべき原則を作成したもので、「記録史料記述に関する原則についての声明」として 1992 年に ICA の記述標準特別委員会が採決した。この原則に基づき、ISAD(G)が生まれた。
（田窪直規著「国際標準記録史料記述一般原則：ISAD(G)—その基本構造・考え方と問題点—」 『レコード・マネジメント』44 号，2002 年，pp.1-22 より）
- 注 3) ISAD(G)でもっとも重要なことはマルチレベル記述の規則を定めたことである。階層構造を前提に、各レベルに必要な記述要素をその目的と規則に分けて定めている。
- 注 4) **Commonwealth Record Series(CRS) System**：CRS システムと略される。国立公文書館（National Archives of Australia：NAA）で整備された総合的なアーカイブズ・コントロールの考え方である。
（森本祥子著「オーストラリアのアーカイブズ・システムについて—概観—」 高埜利彦研究代表『歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究』（科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書，平成 15 年度～平成 18 年度） 学習院大学，2007 年，pp.222-236 より）
- 注 5) ここでいう記録史料とは、「地域や時代の背景を持った個々の組織等によって作成され保存されてきた、個別具体的なもの」である。
（図書館情報学ハンドブック編集委員会編『図書館情報学ハンドブック 第 2 版』 丸善株式会社，1999 年，p.527 より）
- 注 6) ただし、物品類が混在している場合、「文書」という名称が適切かどうかを判断する必要がある。加藤は、文書以外の写真や物品なども含まれているのであるならば、「史料」という言い方がより相応しいとしている。
（加藤聖文著「3 章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」 『アーカイブズの科学 下』 柏書房，2003 年，pp.222 より）
- 注 7) 沖縄県公文書館では、個人文書（私文書と呼んでいる）を地域資料として収集している。地域資料は、古文書、档案、沖縄関係資料に分かれ、個人

文書は主に、沖縄関係資料：「沖縄の政治、経済、文化に対して深く関わった者に関連する資料又は同人が有していた沖縄関連資料」として収集されている。

(呉屋美奈子・富永一也著「公文書館における私文書の収集と整理：実践と課題」 『沖縄県公文書館研究紀要』第9号 沖縄県公文書館，2007年，pp.87より)

注8) ここでは、記録資料としてのアーカイブズを管理・提供するための「部署」、そこで担われる「機能」、「プログラム」を「組織アーカイブズ」と「収集アーカイブズ」と分けている。組織アーカイブズとは、「組織内で作成されたもの、その組織と外部との間でやりとりされた通信等の記録資料を保存・管理・提供する」ところである。収集アーカイブズとは、「あるテーマ・主題の下にさまざまな組織で作成された記録資料を収集して保存・管理・提供する」ところである。

(松崎裕子著「第一章 経営資源としてのアーカイブズ」 企業史料協議会編『企業アーカイブズの理論と実践』 丸善出版，2013年，p.6から引用)

注9) ただし、本来は図書館的機能を果たすことが文書館の役割であると述べている。しかし、最近では博物館的機能が文学館に求められているという。

(中村稔著『文学館を考える』 青土社，2011年，pp.19-20)

注10) 国立大学は、非現用法人文書を基盤としており、個人文書群の意味も、事務局文書・大学の管理運営を補完するものとして位置づけられ、ii)とiii)が収集の中心になるという。

(小池聖一著『近代日本文書学研究序説』 現代史料出版，2008年，pp.249-271)

注11) 1900年生まれ1995年に亡くなっている。大久保利通の孫で、内務省官僚であった利武を父にもつ。日本近代の学制史、シーボルト研究に代表される洋学史、明治14年の政変に関する研究で多くの業績を残した。1938年～1943年貴族院五十年史編纂事務嘱託、1949年国立国会図書館嘱託、その後非常勤調査員・客員調査員として1990年まで勤務した。

(藤本守著「この人を知る 大久保利謙」『国立国会図書館月報』606号 国立国会図書館，2011年，pp.17-19より)

注12) 1963年に同志社大学で社史編纂所が設置され、続いて1970年代から80年代において、明治大学、中央大学、立教大学などが、大学史資料の収集・保存の活動を展開していったという。このような大学アーカイブズを積極

的に設置していったのは、私立大学であったという。

注 13) 日本で最初の文書館である山口県文書館は、1959年に設立された。

注 14) 公文書館法が成立したのは、1987年のことである。

注 15) 保存機関にアンケートを送り回答をもらうという方法をとったため、未回答機関の割合は少なくなかったという。

注 16) 「史料情報共有化データベース」は、以下の研究時に作成されたものである。

科学研究費基盤研究 (B) 一般、平成 11～13 年度、「歴史史料情報の共同集約と共有化に向けてのシステム構築に関する研究」、代表鈴江英一他

注 17) これ以前にも「史料情報共有化データベース」作成後から、いくつかの機関の史料情報は入力されていたようである。

(「歴史史料情報の共同集約と共有化に向けてのシステム構築に関する研究」『科学研究費補助金データベース KAKEN』)

<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/11410096/2001/6/ja.en.html>より (最終閲覧 :

2015 年 12 月 18 日)

注 18) 個人文書群の所在を調べたものの中に、伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』吉川弘文館、2004年がある。

この辞典は、主に政治・外交・軍事・行政の分野で重要な役割を果たし、顕著な事績を残した人物 (539 名) を選定し、その人物の遺した史料の行く末を辿ったものである。人物という視点で見るとは、優れているが機関という視点で見るとは、いささか不便である。本調査では、どの機関にどのような個人文書群が保存されているのかというリストを作成したく、また史料情報も点数や年代など不明なものが多かったため、上記の辞典は本調査には用いなかった。

注 19) 情報項目は、ISAD(G) : 記録史料記述の一般原則第 2 版に準拠して、設定されている。

(大友一雄編『アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究』人間文化研究機構国文学研究資料館、2006年、(平成 15 年度～17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書), p.579 より)

注 20) 大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』吉川弘文館、1986年

この中に所収されている、安藤正人著「第 5 章 欧米における史料整理と検索手段作成の理論と技法」(初出「史料整理と検索手段作成の理論と技法—欧米文書館の経験と現状に学ぶ—」『史料館研究紀要』17 号, 1985 年)

が、日本に欧米の整理論を体系的に紹介した最初の論文であるとされる。

注 21) 小野の論文として、「草創期の中国地方の新聞」が挙げられる。

小野増平著「草創期の中国地方の新聞」 『広島経済大学研究論集』 31 巻 2 号 広島経済大学経済学会，2008 年，pp.69-79

以下のサイトからダウンロードして pdf 版を読むことができる。

広島県大学図書館協議会運営『広島県大学共同リポジトリ HARP』

<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hue/metadata/1508>（最終閲覧：2016

年 1 月 2 日）

注 22) 1985 年に被爆 40 周年連載企画「段原の 700 人」、1995 年に被爆 50 周年連載企画「検証ヒロシマ」「年表ヒロシマ」で受賞している。

注 23) フロッピーを日常的に使用する時代は終わっても、それを読み取る機器を整備しておく必要がある。他の電子メディアにおいても同様であり、これからのアーカイブズ施設には、必要機器を備えることが求められているといえる。

注 24) 中国新聞連載「移民」は、1991（平成 3）年 5 月 27 日から 1992 年 4 月 29 日まで、朝刊 1 面を中心に連載 25 シリーズ 222 回、特集 14 回という回数を重ね、掲載された。中国地方からの移民が住む、ハワイ、北米、中南米、アジア・オセアニアなどの地域が取り上げられ、最後に日本に来た移民についても取り上げられている。

小野増平は、中南米を担当し、ペルー、パラグアイ、アルゼンチンへの移民について記事を書いた。

注 25) ニューヨーク市立大学リーマン校の分校であり、現在は閉校している。

（『Lehman College』 Web ページ：<http://www.lehman.cuny.edu/>）

注 26) このようなフロッピー、DVD などを、電磁「文書」と呼ぶことについては、適切であると考ええる。それは、現代においては、文書は紙によるやり取りだけでなく、電子媒体を通してのやり取りが多くなってきているからである。そういう意味において、個人のメールは、現代において書簡に変わるものであると考えるが、それらをどのように電子「文書」として個人文書化させるのかが、今後の大きな課題であろう。

注 27) ワープロ入力実験システムは昭和 61 年 12 月に運用が開始された。平成 2 年までにはブロック支社、本社報道部にデスクワープロが設置された。平成 4 年までには記事の 80%という入力目標をほぼ達成したという。

（中国新聞社史編さん室『中国新聞百年史資料編・年表』 中国新聞社，1992 年より）

注 28) ジャーナリストのためのヒロシマ基礎講座第 8 回、2009 年 4 月 18 日に小野増平（広島経済大教授）が、「ひろしま—呉—イワクニ〜トライアングルの視点」という講演を行っている。

「ヒロシマ基礎講座」『日本ジャーナリスト会議広島支部 JCJ HIROSHIMA』より

<http://icj-daily.sakura.ne.jp/hirosima/koza.html> (最終閲覧: 2016 年 1

月 2 日)

注 29) 前掲の論文では「2. 資料の概要」のなかで、(1) 研究ノート類、(2) 備忘録・雑録、(3) 草稿・メモ類、(4) 書簡類、(5) 証書・表彰状類、(6) 写真、(7) 身の回り品、(8) 書籍、(9) その他の 9 つに分けて紹介している。pp.8-9

なぜそのような 9 項目になったのかという理由は、記述されていない。「2. 資料の概要」の冒頭には、「長岡資料に倣い大きく以下のように分けられている」(p.8) とある。

(岡本拓司他著「長岡半太郎の新資料について」『国立科学博物館研究報告 E 類 (理工学)』第 29 巻, 国立科学博物館, 2006 年, pp.7-13)

注 30) 力学を中心とする物理学や数理学の科学史を専門的に研究されている。

注 31) 博物館における保存科学を専門的に研究されている。

注 32) 国立科学博物館のデータベースで公開する際に、画像データも目録と併せて掲載される。

注 33) 研究ノートと備忘録をまとめ、草稿とメモを別々にした。

注 34) 実験資料は旧資料も新資料もまとまりを 1 点として数えているため、1 つ 1 つのガラス乾板や印画紙を数えた総点数は、どちらが多いか不明である。

注 35) 2005 年 11 月 12 日 (土) ~12 月 18 日 (日) に「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」が国立科学博物館で開催されていた。

「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」『国立科学博物館ウェブページ』

<http://www.kahaku.go.jp/event/2005/nisina/> (最終閲覧 2015 年 12 月 15

日)

注 36) 冒頭の「はじめに」に「この論文には長岡半太郎の伝記研究のための貴重な資料も含まれ、日本の物理学界における長岡半太郎の役割を評価する上に有効だと思われるので、本人たち自身で要約したものに、板倉、八木両氏と木村が手を入れ、さらに両君の了解を得て発表することにしたものです。」とある。

注 37) 馬場はドキュメンテーションを「(n-1) 次の文献を n 次の文献に変換する、文献変換の手続きである」と定義している。

注 38) 馬場重徳文書を整理した中心人物である。馬場文書を整理していた当時は図書館情報大学教授であった。馬場と同じくドキュメンテーションの研究

者である。

- 注 39) 佐藤宅の文書に、佐藤の筆跡ではない目録カードが挟み込まれていたことから推定した。
- 注 40) 100 箱の段ボール中、科研を始める前に 20 箱、科研の初年度（1996）に 50 箱整理したという。
（「戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程--馬場重徳文書の組織化と分析 研究課題番号：08680423 1996 年度 研究実績報告書」『科学研究費助成事業データベース』
<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/08680423/1996/3/ja.ja.html>（最終閲覧 2015 年 12 月 11 日）より）
- 注 41) 国立科学博物館図書室の中堀桂子さんと協力して目録を作成し、佐藤はキーワード、中堀は記述を担当したという。（「馬場重徳文書のリスト」に挟み込まれていたメモより）
- 注 42) 佐藤ゼミに所属していた吉田右子教授によると、佐藤は馬場のことを研究者として私淑しており、その研究の過程も含め、後世に残そうとしたという。大学では、カードを保存してくれないという認識もあり、自宅へ配送されたのではないかということであった。
- 注 43) 箱は、木箱、ヤマト運輸、日通（今回の資料の移動で使われた）の 3 種類あった。日通の箱以外には書き込みが見られた。段ボール 41 箱分の文書群が、66 箱の中性紙箱に移された。段ボール 1 箱分が、中性紙 1 箱に収まらない場合は、中性紙箱を 2 箱用い、「1-1」、「1-2」と枝番号で対応した。
- 注 44) ①のなかには 5 点しか存在しない。
- 注 45) 概要目録では、まとめり（袋、括り、まったく同一のもの（雑誌など））を 1 つとして数えているため、点数ではなく件数とした。また、カードは枚数ではなく、入っている箱 1 つで 1 件と数えた。

図表

表 1. 『小野増平関係文書目録』の分類

大分類	小分類	点数
1.書類	1.1.仏資料	28 点
	1.2.市政関係	22 点
	1.3.移民資料	68 点
	1.4.核・マツダ関係	44 点
	1.5.ニューヨーク関係	245 点
	1.6.戦後 50 年	8 点
	1.7.その他	145 点
2.ノート・メモ等	2.1.ノート	7 点
	2.2.メモ	5 点
	2.3.その他（手帳、名刺、名簿等）	78 点
3.スクラップ		62 点
4.書簡	4.1.書簡（含む葉書）	46 点
	4.2.年賀状	9 点
	4.3.グリーディングカード	6 点
5.電磁文書等	5.1.フロッピー	202 点
	5.2.カセット	17 点
	5.3.ビデオテープ・DVD	42 点
6.写真		131 点
7.書籍	7.1.刊本	79 点
	7.2.雑誌	27 点
8.雑（物品等）		27 点
合計		1,298 点

表 2. 書類の構造分析表

表 2-1. 1.1.仏資料の構造分析 (28 点)

資料群名	時期	主題・形態	点数
仏資料	仏研修時	難民	4
		原発	6
		西ドイツ	3
		その他	3
	帰国後	仏・独	5
		ヒロシマ	2
		新聞	5

表 2-2. 1.2.市政関係の構造分析 (22 点)

資料群名	時期	活動・形態	形態	点数
市政関係	仏研修	取材	参考資料	10
			ノート	2
		執筆記事		1
		書簡		2
	帰国後	スクラップ		7

表 2-3. 1.3.移民関係の構造分析 (68 点)

資料群名	連載	記者活動	主題・物理 形態	点 数
移民資料	移民	取材		2
		執筆	ペルー	14
			パラグアイ	18
			アルゼンチ ン	8
		記事		1
	核 兵 器・汚 染	取材	Pantex 工 場	12
			米軍	2
			環境・健康 被害	6
			写真ネガ	1
		執筆		4

表 2-4. 1.4.核・マツダ関係の構造分析 (44 点)

資料群名	主題	点数
核・マツダ関 係	前任者執筆	6
	記事	
	在米被爆者	4

	原爆の像	5
	核兵器・汚染	10
	NY 大学広島校	15
	その他	4

表 2-5. 1.5. ニューヨーク関連の構造分析 (245 点)

資料群名	組織・活動	主題・形態	物理形態	点数
ニューヨーク関連	仏研修			5
	編集局 報道部	書簡		7
		GERMAN FEATURES		30
	NY 支局	事務		12
		移民		3
		原爆		17
		核実験		3
		PKO		3
		NY 大学広島校		3
		書簡		25
		その他米国 関連	写真	
	その他			4

	個人・家族			2	
	帰国後 編集局	その他		2	
		事務		1	
		ヒロシマ 50 年	写真		14
			その他		2
		書簡		53	
		年賀状		7	
		グリーディングカード		10	
	呉支社	事務		6	
		呉関連写真		5	
		書簡		9	
	その他			3	
	不明			15	

表 2-6. 1.6.戦後 50 年の構造分析 (8 点)

資料群名	活動	点数
ヒロシマ 50 年	計画	1
	取材	2
	執筆	2
	出版	3

表 2-7. 1.7.その他の構造分析 (145 点)

資料群名	組織	組織・役職	活動・主題	活動・物理形態	物理形態	点数	
その他	中国新聞社	呉支社 編集部				1	
		東京支社 編集部				1	
		編集局 第一整理部	仏研修	取材			4
				事務	書簡		7
					その他		10
		編集局 報道部	事務	書簡			13
				その他			5
			仏研修				3
			在韓被爆者				3
			取材一般				1
		NY支局長	事務				3
			在米被爆者				2
		編集局 報道部 次長					3
		呉支社	企画				12

		編集部 長	その他			5
		論説委 員会				13
		編集制 作本部				4
		東京支 社長				7
		編集局 長	事務			7
			その他			6
	広経大					6
	日本ジ ャーナ リスト 会議					5
	個人					7
	不明					17

表 3. 2. ノート・メモ類の構造分析 (90 点)

資料群 名				点数
ノート 類	紙面計 画			3

	内部事務			1
	取材	ノート		4
		メモ		2
手帳類	NY	手帳		6
		電話帳		2
		身分証明書		1
	その他	手帳		15
名刺	関係者	ファイル	その他	10
			呉支社	2
		ケース		8
		なし		5
	小野			12
名簿	中国新聞社			8
	その他			7
その他				2

表 4. 3. スクラップの構造分析 (62 点)

資料群	組織	主題・活動	活動	点数
スクラップ	呉支社 編集部	呉関連		6
		その他		3
		被爆		2

		出稿		2
	東京支社			2
	編集局 報道部	西ドイツ		2
	NY支局	執筆記事		8
	呉支社 編集部 長	海上自衛隊	取材関連	3
			連載記事	1
			出版関連	1
			その他	8
		呉関連		5
		多分野		8
		その他		4
		論説委員会		
	東京支社			2
	不明			2

表 5. 4. 書簡の構造分析 (61 点)

資料群名	内容形態	事項	点数
------	------	----	----

書簡	書簡・葉書	近況報告	7
		礼状	20
		挨拶状	8
		その他	11
	年賀状		8
	グリーディングカード		6
	封筒のみ		1

表 6. 5. 電磁的記録等の構造分析 (261 点)

資料群名	連載・活動	活動・記事	活動	事項	点数
電磁文書	仏研修				11
	NY支局	原稿			5
		事務			2
	ヒロシマ50年	年表ヒロシマ	編集	ヒロシマ	56
				ルポ	15
				ナガサキ	5
			バックアップ	9	
			出稿	10	
			納品	8	

		索引		3
		データ ベース		1
	検証ヒ ロシマ	原稿		6
呉と海 上自衛 隊	編集			5
	データ ベース			1
	バック アップ			5
	出版			3
呉関連 その他	紙面計 画			4
	取材			4
	事務			3
	執筆	その他		14
		少年野 球		6
コラム	一寸法 師			2
	天風録			7
	局報			9
	論説			5
	その他			2
東京支 社長	ヒロシ マ			3
	その他			3

	編集局長	事務			6
		その他			4
	個人・家族	旅行			8
		その他			9
	広経大	授業			3
		ラジオ			5
		その他			1
	その他	岩国			2
		その他			3
	不明				13

表 7. 6. 写真の構造分析 (131 点)

資料群名	場所	主題・内容形態	主題・内容形態	形態	物理形態	点数	
写真	海外	ドイツ				2	
		ネパール	アルファベット			5	
			なし			1	
		米国	マツダ	袋		写真	1
						写真とネガ	5
				なし			1
			核兵器	アルファベット			3

				ト			
				なし	袋	2	
					なし	1	
			核実験 禁止大 会			7	
			米軍			2	
			その他			10	
国内	諸外国					4	
	旅行					1	
	卒業ア ルバム					2	
	小野増 平					3	
	海上自 衛隊		ファイ ル				2
			冊子				2
			袋				6
			なし				1
	その他		写真				4
			ネガ				2
			スライ ド				1
	不明	アルフ アベツ ト	写真				2
			写真と ネガ				1

			ネガ			9
		なし	冊子	写真		7
				写真と ネガ		2
				ネガ		1
			袋	写真		6
				写真と ネガ		20
				ネガ		8
				マイク ロ		1
			なし	写真		1
				写真と ネガ		2
				ネガ		3

表 8. 7. 書籍の構造分析 (106 点)

資料群名	主題	物理形態	物理形態	内容形態	点数
書籍	原爆	使用跡	付箋	著書	1
				著書以外	1
			挟み込み		2
		跡なし	著書		1
			著書以外		5

			外		
移民	使用跡				
		付箋			1
		挟み込み			1
	跡なし	著書			2
		著書以外			1
メディア ア関連	使用跡	付箋			9
	跡なし	著書			
		著書以外			4
県史	付箋				2
官僚	付箋				3
米軍基地	使用	付箋			4
		跡なし			1
広島県	使用	付箋			1
		挟み込み			1
	跡なし				3
海上自衛隊	跡なし	著書			1
		著書以外			1
核兵器					3
ジャズ					6
ドイツ					9
広島文学					3

	その他	使用	付箋		13
			挟み込み		1
		跡なし	送付		4
			収集		13
		書評			8
		スケジュール			1

表 9. 8. 雑（物品等）の構造分析（27点）

資料群名	活動	主題・形態	点数
雑（物品等）	事務	経理	1
		辞令	2
		写真	2
		証書・メダル	2
	取材	写真	1
		メモ	1
		携帯品	6
		書類	2
	私的収集	写真	4
		色紙・絵画	4
		父親関連	2

表 10. 小野増平関係文書と階層構造との関係

ファンド	サブ・ファンド	シリーズ	サブ・シリーズ	サブ・サブ・シリーズ	サブ・サブ・シリーズ	点数	
出所	組織	部局＋役職	活動(連載)	活動、記事(事項)	記事(事項)		
小野増平関係文書	中国新聞社	呉支社編集部	事務			1	
			取材	呉関連		7	
				被爆		2	
			執筆	被爆		2	
		その他			3		
		東京支社編集部	取材		4		
			執筆		2		
		編集局第一整理部	仏研修	事務			23
					取材	フランス情勢	5
						ラジオ	9
						難民	6
						西ドイツ	8
						原発・核兵器	14
						その他	6
その他活動		2					

	編集局報道部	事務	仏関連		40	
			その他		37	
		取材	ヒロシマ		10	
			その他		8	
			出版		2	
		NY 支局長	事務			96
			移民	取材		8
				執筆	ペルー	14
					パラグアイ	18
					アルゼンチン	8
	記事・出版				4	
	その他 記事		取材	原爆・被爆者	24	
				PKO	3	
				米軍	6	
				核兵器・汚染	24	
				核不拡散	17	
				マツダ	9	
				NY 大学 広島校	18	
		その他		24		
		執筆	核兵器・汚染	4		
その他			5			
編集局報道部次	事務	NY 関連		3		

		長		その他		59
		長	年表ヒ ロシマ	執筆		109
				出版		4
			検証ヒ ロシマ	計画		2
				取材		17
				執筆		6
				出版		2
		呉支社編集部長	事務			19
			海上自 衛隊	取材		23
				執筆		15
				出版		2
			その他 記事	計画		9
				取材	呉関連	23
					多分野	8
					その他	18
				執筆		19
				記事		5
		論説委員会	事務			2
			コラム	取材		17
				執筆	一寸法師	2
					天風 録・社説	9
					局報	13
					論説	5
					その他	4
				記事		9
		東京支社長	事務			19
			計画			4

			取材			7
			執筆			3
		編集局長	事務			59
			取材			10
			執筆			4
			出版			2
		その他役職				
	広島経済大学	メディアビジネス学科教授	事務			7
			研究			2
			授業			3
			書評			8
			学内ラジオ			2
			市民講座			15
その他					6	
私的収集	写真					
	書簡					
	電磁文書					
	書籍					
	その他					

表 11. 長岡半太郎旧資料の現状の分類

種類	記号	記号の意味	点数
実験資料	EX		12点
研究論文集	NPF		17点

ノート	P	東大予備門、物 理学科学生時代	20点
	I	大学1年	46点
	II	大学2年	37点
	III	大学3年	42点
	IV	大学4年	35点
	K	北尾次郎	42点
	Gr	大学院	90点
	Gm	留学	43点
	U	大学教授	41点
	In	理研	72点
日記類・手帳	DM	ノート	40点
	PN	手帳	25点
原稿類	MSA	論文	93点
	MSB	講演	37点
書簡	LF	外国人→	153点
	LNb	外国人スクラッ プ	28点
	LJ	日本人→	130点
	LN	長岡→	5点
	LNm	→三島忠雄	18点
	LMN2	→三村剛昂	16点
論文別刷	RPF	外国人	3,422点
	RPJ	邦人	1,472点
勲章・書状・記念状	DC		19点
記書・辞令	Wo		189点
身廻り品	WPG		29点
写真	Ph		35点
書籍	Jb	和書	80点

	Cb	漢籍	122 点
	Eb	英字	26 点
	Gb	独字	8 点
	Fb	仏字	34 点
その他	YZ	雑	8 点
	X	他人のノート	5 点
合計			6,496 点

表 12. 長岡半太郎新資料の分類（目録をとったもの）

種類	点数
実験資料	39 点
ノート	23 点
メモ	11 点
原稿	9 点
書簡	12 点
論文別刷	11 点
封筒	33 点
写真	7 点
書籍・雑誌	14 点
その他	18 点
長岡家関係	42 点
合計	224 点

表 13. 旧資料のノート群の編成（年代別）

年代	主題・内 容	主題・内容	点 数	年代	主題・ 内容	主題・内 容	点数

1880-1889	数学	三角法	4	1900-1909	授業		2	
		幾何学	18		地球物理		2	
		円錐曲線	2		その他		3	
		純正数学	31	1910-1919	授業		6	
		数学演習	13		研究室		2	
		関数理論	29		その他		5	
		微積	9	1920-1929	物理	授業		2
		確率	2			実験		3
		曲面	2			イオン		6
		その他	13			電波		2
		一般物理	2	地震学			10	
		物理	毛細管現象	6	1930-1939	随筆		4
	熱力学		10	日記			4	
	光学		16	雑記帳			12	
	力学		54	その他			7	
	流体力学		7	物理		分光学		4
	電磁気		21		地球物理学		4	
	地震学		2		電波		9	
	弾性		18		雑記帳		17	
	ニュートン力学		6		その他		6	
	動物学		2	1940-1950	物理	電波		2
	その他		7			イオン		4
	地質学		2			地球物理		16
	化学		6		雑記帳		6	

	星学		7	その他		4
	文献目録		2			
	雑記帳		12			
	実験記録		11			
1890-189 9	数学		15			
	物理	熱学	2			
		力学	11			
		光学	2			
		磁気	10			
		その他	7			
	実験記録	2				
雑記帳		2				

表 14. 旧資料のノート群の編成（主題別）

主題	主題・内容	年代	点数
数学	関数	1887-1895	40
	純正数学	1883-84	31
	幾何学	1882	25
	数学演習	1884	13
	微積	1885-1889	9
	三角法	1881-83	4
	円錐曲線	1882	2

	確率	1885	2
	曲面	1887-89	2
	その他	@	17
物理	力学	1882-1895	65
	地球物理学	1886-1950	35
	磁気	1885-1899	33
	光学	1885-1940	24
	弾性	1886-1889	18
	実験	1887-1930	18
	電波	1920-1950	13
	熱力学	1887-1895	12
	授業	1900-1930	11
	イオン	1920-1950	10
	相対性理論	@	9
	流体力学	1886	7
	毛細管現象	1887	6
	ニュートン力学	1882	6
	一般物理学	1882	2
その他学習ノート	@	26	
その他科学	星学	1881-1886	7
	化学	1882	6
	動物学	1881	2
	地質学	1882	2
	天文学	1939-46	2
雑	雑録	1886-1950	53
	随筆	1920-1940	5
	日記	1920-1940	5

	研究室	1910-1930	4
	会議録	1920-1940	2
	目録	1887-89	2

表 15. 旧資料のノート群の編成（経歴別）

経歴	時期	点数
東大予備門		8
東大大学生	1年	62
	2年	39
	3年	59
	4年	62
大学院		95
助教授	留学前	8
	留学	44
帝大教授		37
理研研究員		46
地震学研究所嘱託		46

表 16. 新資料のノートの分析（年代別）

年代（書き始め）	表題	文字	点数
1908	Zeeman Effect Exercises in General Physics	数値 3, 英語 1	4
1909	Zeeman Effect	数値 3	3
1910	なし	数値	1

1911	Zeeman Effect	数値	1
1915	なし	写真	1
1917	理研 議案決議	英語、日本語	1
1929	Memorandum 講演ノート	英語	3
1932	原稿	英語	1
1936	Miscellanies	英語	1
1937	Seismology Bohr	英語	3
年代不明	@	@	6

表 17. 新資料のノートの分析（主題別）

主題	表題（内容）	言語と点数	年代（書き始め）
光学	Zeeman Effect	数値 9、英語 1	1908-1915
一般物理学	General Physics	英語 1	1908-1909
物質構造論	量子力学の講演	英語 2	1929
	原子モデルの講演	英語 1	1937
地球物理学	Seismology（地震学）	地震研究所談話会 2	1937
	Electric Waves	演習授業 1	@
その他	雑記帳、メモ、理研	英語 5	1917-1932
不明	実験データ、不明	2	@

表 18. 新資料のノートの分析（経歴別）

経歴	内容	年代	点数
東京帝国大学 教授	Zeeman Effect	1908-1915	10
	General Physics	1908-1909	1
理化学 研究所 物理部 長	理研 議案決議	1917	1
	量子力学の講演	1929	2
	原子モデルの講演	1937	1
地震学 研究所 嘱託	Seismology	1937	2

表 19. カード群の編成案（本）

機能	資料種	主題	国・言語	所蔵	カード 性質	点数	
本	書誌				既成	1	
					手製	2	
	辞書・辞 典・事典	多分野				手製	2
						既成	1
		言語学	多国			手製	3
			イタリ ア			手製	1
		学生課題				既成	1
	図書	言語学	多言語	大学所	手製	2	

				蔵	既成	8
				その他	手製	6
					欧研	1
				文字	手製	1
					既成	2
		図書館学	手製	2		
			既成	1		
		イタリア	既成	1		
		学生課題	既成	1		
			手製	1		
		雑誌	手製	1		
			既成	2		
		著作	既成	1		

表 20. カード群の構造分析

機能	主題	事項 (国)	資料種	所蔵・事項	カードの性質	点数				
本	言語学	多国	辞書・事典			3				
						図書館	大学所蔵	手製	2	
								既成	8	
			その他	手製	6					
				欧研	1					
			文字 (非ローマ字)	図書館	手製	1				
		既成			2					
		イタリア	辞書・事典			1				

			典					
多分野			書誌		手製	2		
					既成	1		
			辞書・事典	その他	手製	2		
					既成	1		
				学生課題		1		
			図書	イタリ ア		1		
					学生課題	手製	1	
						既成	1	
				雑誌		手製	1	
					既成	2		
	ドキュメンテーションその他			その他		手製	2	
						既成	1	
				著書			1	
機能	言語種	言語	機能	所蔵	主題・翻訳	カードの性質	点数	
ことば	ローマ字	英語	用語編纂		辞典	手製	17	
						既成	7	
					機械化	既成	5	

				言語学	手製	1
		用語抽出	図書	機械化	既成	2
				索引化	既成	2
				図書館学・書誌学	既成	2
					手製	2
				その他		2
			雑誌		2	
	ドイツ語	用語辞典		対訳		1
				多言語訳	手製	1
			既成		2	
		用語抽出		言語名	手製	1
					既成	1
			書目		1	
	フランス	用語辞典		手製	1	
				既成	1	
		用語抽出		言語学	手製	2
			既成		1	
	スウェーデン				1	
	イタリア				1	
	スペイン				1	
	オランダ				1	
	複数言語	用語編纂		対訳	1	
				多国語訳	1	

			用語抽出	辞典			1
				その他	参照頻度分析		1
非ローマ字 (文字)	ロシア	用語辞典		多国語訳	手製		1
						既成	4
	ポーランド	用語辞典		対訳			1
				多国語訳		3	
	アルバニア	辞典		対訳			1
				多国語訳		3	
	ラテン・ギリシヤ						1
	チェコ						1
	日本語	用語抽出	著作				2
			雑誌				1
			学生課題				1
	その他文字	用語編纂			手製		2
					既成		2
用語抽出				手製		1	
				既成		2	
記載なし						4	

参考資料 1.都道府県別の個人文書所蔵機関

都道府 県	機 関 数	個人文 書所蔵 機関	総登録 文書群 数	個人 文書 群合 計	個人/総 文書	個人機関 /機関	個人文書 /個人機 関
北海道	15	5	341	98	0.28739	0.333333	19.6
青森	8	0	70	0	0	0	@
岩手	4	2	14	6	0.428571	0.5	3
宮城	1	0	12	0	0	0	@
秋田	8	1	112	1	0.008929	0.125	1
山形	10	2	448	7	0.015625	0.2	3.5
福島	13	0	255	0	0	0	@
茨城	12	3	397	5	0.012594	0.25	1.666667
栃木	9	0	160	0	0	0	@
群馬	14	0	320	0	0	0	@
埼玉	17	2	208	7	0.033654	0.117647	3.5
千葉	15	1	489	1	0.002045	0.066667	1
東京	40	12	2264	341	0.150618	0.3	28.41667
神奈川	16	3	1874	3	0.001601	0.1875	1
新潟	21	5	473	11	0.023256	0.238095	2.2
富山	15	1	116	1	0.008621	0.066667	1
石川	9	0	209	0	0	0	@
福井	6	2	750	4	0.005333	0.333333	2
山梨	3	0	12	0	0	0	@
長野	24	3	324	7	0.021605	0.125	2.333333
岐阜	18	1	93	10	0.107527	0.055556	10
静岡	17	2	246	28	0.113821	0.117647	14
愛知	35	3	174	13	0.074713	0.085714	4.333333
三重	25	1	194	5	0.025773	0.04	5

滋賀	8	1	109	1	0.009174	0.125	1
京都	15	6	925	20	0.021622	0.4	3.333333
大阪	27	4	444	6	0.013514	0.148148	1.5
兵庫	4	0	67	0	0	0	@
奈良	11	0	279	0	0	0	@
和歌山	11	0	65	0	0	0	@
鳥取	2	1	54	1	0.018519	0.5	1
島根	9	0	91	0	0	0	@
岡山	16	0	149	0	0	0	@
広島	9	2	254	10	0.03937	0.222222	5
山口	18	3	510	9	0.017647	0.166667	3
徳島	5	0	45	0	0	0	@
香川	8	0	143	0	0	0	@
愛媛	12	0	43	0	0	0	@
福岡	17	2	485	18	0.037113	0.117647	9
佐賀	16	1	116	1	0.008621	0.0625	1
長崎	12	1	72	2	0.027778	0.083333	2
熊本	7	0	45	0	0	0	@
大分	15	1	397	42	0.105793	0.066667	42
宮崎	7	0	59	0	0	0	@
鹿児島	12	1	36	4	0.111111	0.083333	4
沖縄	5	0	10	0	0	0	@
合計	601	72	0.1198	662			

参考資料2. 個人文書の所蔵機関リスト								
機関別 No.	機関種	所蔵機関名	個人文書群数	全文書群数	館種	機関種②	都道府県	設置主体
1	図書館	北海道立図書館	8	32			北海道	道
2	図書館	三重県立図書館	5	57			三重県	県
3	図書館	首都大学東京図書情報センター	4	11		大学	東京都	公立
5	図書館	帯広市図書館	2	2			北海道	市
6	図書館	財団法人東京市政調査会市政専門図書館	2	2			東京都	財団法人
7	図書館	大阪府立中之島図書館	2	25			大阪府	府
4	図書館	長崎県立長崎図書館	2	52			長崎県	県
8	図書館	遠野市立図書館	1	1			岩手県	市
9	図書館	秋田市立中央図書館明德館	1	8			秋田県	市
10	図書館	山形大学附属図書館	1	162		大学	山形県	国
11	図書館	本庄市立図書館	1	1			埼玉県	市
12	図書館	秦野市立図書館	1	1			神奈川県	市
13	図書館	長岡市立中央図書館	1	1			新潟県	市
14	図書館	浜松市立中央図書館	1	13			静岡県	市
15	図書館	彦根市立図書館	1	13			滋賀県	市
1	博物館	大分県立先哲史料館	42	347	歴史		大分県	県
2	博物館	沼津市明治史料館	27	112	歴史		静岡県	市
3	博物館	福岡市博物館	17	354	歴史		福岡県	市
4	博物館	鶴岡市郷土資料館	6	130	郷土		山形県	市
5	博物館	浄法寺町歴史民俗資料館	5	10	歴史		岩手県	町
6	博物館	鹿児島県歴史資料センター黎明館	4	8	歴史		鹿児島県	県
7	博物館	豊島区立郷土資料館	3	176	郷土・歴史		東京都	区
8	博物館	糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)	2	4	歴史		新潟県	市
9	博物館	上伊那郷土館	2	5	郷土		長野県	社団法人
10	博物館	幕別町ふるさと館	1	1	郷土・歴史		北海道	町
11	博物館	茨城県立歴史館	1	285	歴史	文書館	茨城県	県
12	博物館	鴨川市郷土資料館	1	41	郷土		千葉県	市
13	博物館	明治大学博物館	1	456	不明	大学	東京都	私立
14	博物館	駒澤大学禅文化歴史博物館	1	2	不明	大学	東京都	私立
15	博物館	津久井町立尾崎琴堂記念館	1	1	歴史		神奈川県	町
16	博物館	砺波市立砺波郷土資料館	1	24	郷土・歴史		富山県	市
17	博物館	知立市歴史民俗資料館	1	1	歴史		愛知県	市
18	博物館	京都府立丹後郷土資料館	1	45	郷土		京都府	府

19	博物館	八尾市立歴史民俗資料館	1	5	歴史		大阪府	市
20	博物館	鳥取県立博物館史料室	1	53	総合		鳥取県	県
21	博物館	岩国学校教育資料館	1	1	郷土・歴史		山口県	市
22	博物館	柳川市立歴史民俗資料館	1	1	歴史		福岡県	市
23	博物館	佐賀県立名護屋城博物館	1	2	歴史		佐賀県	県
1	文書館	北海道立文書館	82	263			北海道	道
2	文書館	京都府立総合資料館	9	786			京都府	府
3	文書館	山口県文書館	7	298			山口県	県
4	文書館	埼玉県立文書館	6	123			埼玉県	県
5	文書館	広島県立文書館	5	82			広島県	県
6	文書館	広島市公文書館	5	137			広島県	市
7	文書館	学習院大学史料館	4	33		大学	東京都	私立
8	文書館	長野県立歴史館	4	97			長野県	県
9	文書館	国文学研究資料館(歴史資料)	3	1314		研究所	東京都	大学共同 利用機関 法人
10	文書館	福井県文書館	3	711			福井県	県
11	文書館	東京大学史料編纂所	2	37			東京都	国立
12	文書館	新潟県立文書館	2	167			新潟県	県
13	文書館	愛知県公文書館	2	22			愛知県	県
14	文書館	京都大学大学文書館	2	4		大学	京都府	国立
15	文書館	下関文書館	2	31			山口県	市
16	文書館	明治大学史料センター	1	1		大学	東京都	私立
17	文書館	神奈川県立公文書館	1	1813			神奈川県	県
18	文書館	同志社大学 同志社社史資料センター	1	2		大学	京都府	私立
1	憲政資料室	国立国会図書館 憲政資料室	313	359			東京都	国
1	文庫	阪急学園池田文庫	1	9			大阪府	財団法人
1	大学	京都大学基礎物理学研究所湯川記念館史料室	2	2			京都府	国立
2	大学	筑波大学朝永振一郎名誉教授記念室	1	1			茨城県	国
1	教育委員会	札幌市教育委員会文化資料室	5	7			北海道	市
1	研究所	自然科学研究機構核融合科学研究所核融合アークイプ室	10	16			岐阜県	大学共同 利用機関 法人
2	研究所	自然科学研究機構分子科学研究所史料編纂室	10	11			愛知県	大学共同 利用機関 法人
3	研究所	法政大学大原社会問題研究所	6	16		大学	東京都	私立
4	研究所	同志社大学人文科学研究所	5	5		大学	京都府	私立

5	研究所	高エネルギー加速器研究機構史料室	3	18			茨城県	大学共同利用機関法人
6	研究所	一橋大学経済研究所	1	1		大学	東京都	国立
7	研究所	飯田市歴史研究所	1	5			長野県	市
1	市役所	新潟市歴史文化課	2	92			新潟県	市
2	市役所	小浜市役所企画調整課世界遺産推進室	1	8			福井県	市
1	その他	十日町市十日町情報館	4	132			新潟県	町
2	その他	(財)大阪社会運動協会	2	2			大阪府	財団法人

参考資料3. 所蔵個人文書群の情報									
No.	所蔵機関名	文書群名	年代	数量	検索手段	利用可能な代替方式	都道府県	経歴	機関分類
1	北海道立図書館	一条忠郎	(嘉永6-明治41)	8	@	@	北海道	行政官	図書館
2	北海道立図書館	中村多四良資料	明治-昭和初期	43	@	マイクロ	北海道	雑穀商経営	図書館
3	北海道立図書館	桜庭儀作文書	安政2-大正11	80	@	マイクロ	北海道	漁業経営	図書館
4	北海道立図書館	桜庭為四郎文書	明治13-30年代	293	@	マイクロ	北海道	開拓使	図書館
5	北海道立図書館	佐藤正克文書	明治初年	113	@	マイクロ	北海道	開拓使	図書館
6	北海道立図書館	渋谷十郎関係史料	明治9-大正7	76	@	マイクロ	北海道	開拓使職員	図書館
7	北海道立図書館	寺田省婦資料	(安政4-)	8	@	@	北海道	校長、議員	図書館
8	北海道立図書館	安田徳治関係史料	明治	249	@	マイクロ	北海道	@	図書館
1	三重県立図書館	田村泰次郎文庫	(明治44-昭和58)	9,000	田村泰次郎文庫目録(1998年)	@	三重県	作家	図書館
2	三重県立図書館	瀬田栄之助特別資料	(大正5-昭和46)	@	瀬田栄之助特別資料目録(2003年)	@	三重県	小説家、教授	図書館
3	三重県立図書館	梅原三千関係資料	(元治元-昭和20)	@	梅原三千関係資料目録(2001年)	@	三重県	郷土史家	図書館
4	三重県立図書館	鈴木敏雄関係資料	(明治21-昭和39)	@	鈴木敏雄関係資料目録(2003年)	@	三重県	教育者、郷土史家	図書館
5	三重県立図書館	東畑精一関係資料	(明治32-昭和58)	@	東畑精一関係資料目録(2000)	@	三重県	教授、農業経済学	図書館

1	首都大学東京 図書情報セン ター	花房義質関係文 書	明治2 年-昭 和	1,500	『花房義質関係文 書目録』(1979)	マイクロ フィルム	東京都	外交官	図書館
2	首都大学東京 図書情報セン ター	上原勇作関係文 書	(安政3- 昭和8)	2,700	「上原勇作関係文 書目録」(事務用)	マイクロ フィルム	東京都	陸軍大臣	図書館
3	首都大学東京 図書情報セン ター	高橋是清関係文 書	明治20 年代	354	「高橋是清関係文 書目録 第一稿」 (事務用)	マイクロ フィルム	東京都	財政家	図書館
4	首都大学東京 図書情報セン ター	松本文書	@	1,500	「松本文庫目録」 (事務用)	マイクロ フィルム	東京都	外交官	図書館
1	帯広市図書館	吉田巖資料	明治 23-昭 和38	45,000	内部目録、マイクロ フィルム目録	一部マイ クロフィル ム	北海道	アイヌ研 究者	図書館
2	帯広市図書館	中城ふみ子資料	昭和 15-昭 和51	1,122	マイクロフィルム目 録	マイクロ フィルム・ DVD(デ ジタル画 像化)	北海道	歌人	図書館
1	財団法人東京 市政調査会市 政専門図書館	大森文書	明治時 代	149	『中山文書・大森文 書目録』(1984)	マイクロ フィルム (憲政資 料室)	東京都	内務省書 記官	図書館
2	財団法人東京 市政調査会市 政専門図書館	中山文書	明治時 代	114	『中山文書・大森文 書目録』(1984)	マイクロ フィルム (憲政資 料室)	東京都	内務大臣 秘書官	図書館
1	大阪府立中之 島図書館	織田文庫	享保1 年-昭 和30年	1509	『大阪府立中之島 図書館蔵 織田文 庫目録』(1978)	コピー	大阪府	小説家	図書館
2	大阪府立中之 島図書館	藤沢文庫	昭和期	3000	『大阪府立中之島 図書館蔵 藤沢文 庫目録』(1991)	@	大阪府	作家	図書館
1	長崎県立長崎 図書館	山口文庫	天保11 年-明 治36年	4711	『長崎県の郷土史 料』(1988)	@	長崎県	郷土史家	図書館
2	長崎県立長崎 図書館	福田文庫	江戸	1115	『長崎県の郷土史 料』(1988)	@	長崎県	郷土研究 家・小学 校教諭・ 校長	図書館
1	遠野市立図書 館	山奈宗真文書	江戸、 主に明 治	600	@	@	岩手県	殖産家	図書館
1	秋田市立中央 図書館明德館	栗林広運日記	江戸末 期から 明治初 期	16	無、原本非公開	コピー(公 開)	秋田県	@	図書館
1	山形大学附属 図書館	長井政太郎文書	(大正- 昭和58)	16	内部目録	@	山形県	地理学研 究、教授	図書館
1	本庄市立図書 館	旭山文庫	明治- 平成	3,000	web	@	埼玉県	社会主義 運動家石 川三四郎	図書館
1	秦野市立図書 館	前田夕暮資料室 資料	明治- 昭和	200	『前田夕暮記念室 図録』(1993)	@	神奈川県	歌人	図書館
1	長岡市立中央 図書館	三島徳二郎日記	明治2- 明治24	42	「長岡市文化財(書 跡・古文書)概要」 (1985)	@	新潟県	政治家、 実業家	図書館
1	浜松市立中央 図書館	中村與資平資料	大正- 昭和	@	『中村與資平資料 目録』(2001)	一部マイ クロ	静岡県	建築家	図書館
1	彦根市立図書 館	舟橋聖一記念文 庫	(明治 37-昭 和51)	41,300	@	@	滋賀県	作家	図書館

1	大分県立先哲史料館	福沢諭吉自筆書簡	明治12年	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	複製本・マイクロ	大分県	思想家	博物館
2	大分県立先哲史料館	野上弥生子書簡	明治22-明治28	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	複製本・マイクロ	大分県	作家	博物館
3	大分県立先哲史料館	福沢先生真跡文稿	明治27	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	複製本・マイクロ	大分県	思想家	博物館
4	大分県立先哲史料館	小川鼎三関係史料	昭和	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	複製本・マイクロ	大分県	脳解剖学者	博物館
5	大分県立先哲史料館	末綱恕一関係史料	明治43-昭和31	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	複製本・マイクロ	大分県	数学者	博物館
6	大分県立先哲史料館	福沢諭吉書簡	明治3	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	思想家	博物館
7	大分県立先哲史料館	福沢諭吉自筆書状	明治23	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	思想家	博物館
8	大分県立先哲史料館	福田平八郎書簡	大正10-昭和39	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	日本画家	博物館
9	大分県立先哲史料館	矢野龍溪書簡	明治34	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	立憲改進黨、新聞社員	博物館
10	大分県立先哲史料館	福田平八郎自筆草稿「綿羊」	昭和25年頃	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	日本画家	博物館
11	大分県立先哲史料館	田近翁詠歌集	明治	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	勤皇家	博物館
12	大分県立先哲史料館	山本達雄書簡	明治22-大正9	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	日本勸業銀行総裁、大蔵大臣、立憲民政党の最高顧問	博物館
13	大分県立先哲史料館	重光葵書簡	昭和11-昭和27	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	外交官	博物館
14	大分県立先哲史料館	朝倉文夫葉書	明治43-大正7	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	彫刻家	博物館
15	大分県立先哲史料館	朝吹英二書簡	明治21	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	実業家	博物館
16	大分県立先哲史料館	矢野龍溪書簡2	明治17年カ	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	立憲改進黨、新聞社員	博物館
17	大分県立先哲史料館	渡辺文庫	戦国～昭和	4147 無	@	大分県	@	博物館
18	大分県立先哲史料館	福沢諭吉草稿「炭杭視察」	明治21	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	思想家	博物館
19	大分県立先哲史料館	一万田尚登書簡	昭和	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	日銀総裁	博物館
20	大分県立先哲史料館	野口善兵衛書簡集	明治	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	篤農家	博物館
21	大分県立先哲史料館	三角寛草稿	昭和	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	作家	博物館

22	大分県立先哲史料館	久留島武彦関係史料	昭和20-昭和35	26	無	@	大分県	作家	博物館
23	大分県立先哲史料館	久留島武彦関係史料・2	明治40-平成5	284	無	@	大分県	作家	博物館
24	大分県立先哲史料館	久留島武彦関係史料・3	昭和14-昭和35	39	無	@	大分県	作家	博物館
25	大分県立先哲史料館	久留島武彦関係史料・4	昭和	2	無	@	大分県	作家	博物館
26	大分県立先哲史料館	久留島武彦関係史料・5	昭和	5	無	@	大分県	作家	博物館
27	大分県立先哲史料館	重光葵書簡2	昭和	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	外交官	博物館
28	大分県立先哲史料館	久留島武彦扁額	昭和	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	作家	博物館
29	大分県立先哲史料館	矢野龍溪自筆書簡	明治45	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	立憲改進党、新聞社員	博物館
30	大分県立先哲史料館	一万田尚澄書簡	昭和9年-昭和10年9	2	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	日銀総裁	博物館
31	大分県立先哲史料館	村上直次郎書簡及び覚書	昭和28	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	歴史学者	博物館
32	大分県立先哲史料館	久留島武彦書簡	昭和30	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	作家	博物館
33	大分県立先哲史料館	鈴木氏所蔵久留島武彦関係史料	昭和	2	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	作家	博物館
34	大分県立先哲史料館	福田平八郎関係史料	大正	11	『先哲史料館 収蔵史料目録 2』(2004)	@	大分県	日本画家	博物館
35	大分県立先哲史料館	福田平八郎書簡2	昭和	2	『先哲史料館 収蔵史料目録 3』(2005)	@	大分県	日本画家	博物館
36	大分県立先哲史料館	久留島武彦書幅	昭和初	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 3』(2005)	@	大分県	作家	博物館
37	大分県立先哲史料館	大井憲太郎書簡	明治30年頃	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 3』(2005)	@	大分県	政治家・社会運動家	博物館
38	大分県立先哲史料館	三角寛関係史料	昭和	2	『先哲史料館 収蔵史料目録 3』(2005)	@	大分県	山窩社会の研究	博物館
39	大分県立先哲史料館	野上草稿「新しく且つ古い中国」	昭和32	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 3』(2005)	@	大分県	作家	博物館
40	大分県立先哲史料館	野上草稿「この本に寄せて」	昭和34	1	『先哲史料館 収蔵史料目録 3』(2005)	@	大分県	作家	博物館
41	大分県立先哲史料館	猪俣喜藤関係史料	嘉永2-昭和20	55	無	@	大分県	別府市助役、内務官僚	博物館
42	大分県立先哲史料館	鈴木氏所蔵久留島武彦関係史料	大正9-昭和31	19	無	@	大分県	作家	博物館

1	沼津市明治史料館	矢田堀鴻関係文書	嘉永5年-明治21年	16	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	海軍幹部	博物館
2	沼津市明治史料館	矢吹秀一関係資料	明治	5	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	軍人	博物館
3	沼津市明治史料館	平岡道生関係文書	明治13年-昭和3年	44	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	数学会社社員	博物館
4	沼津市明治史料館	田辺朔郎関係資料	明治44年-昭和59年	10	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	工学博士	博物館
5	沼津市明治史料館	中島静関係文書	明治9年-明治20年	15	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	教諭	博物館
6	沼津市明治史料館	中村六三郎関係資料	明治24年-明治41年	27	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	幕臣	博物館
7	沼津市明治史料館	大野寛一関係資料	天保14年-昭和36年	31	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	藩軍事俗務方頭取	博物館
8	沼津市明治史料館	大築尚志関係文書	安政7年-明治2年	99	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	洋学者	博物館
9	沼津市明治史料館	大川通久関係資料	(弘化4-明治30)	2	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	農商務省陸地測量部、陸軍士官	博物館
10	沼津市明治史料館	相磯格堂関係資料	明治28年-明治45年	6	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	医師	博物館
11	沼津市明治史料館	川口嘉関係資料	明治40年-明治42年	5	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	藩軍事俗務方頭取	博物館
12	沼津市明治史料館	石橋絢彦関係資料	安永3年-昭和32年	153	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	歴史家	博物館
13	沼津市明治史料館	清野勉関係資料	明治16年-明治29年	15	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校関係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	哲学者	博物館

14	沼津市明治史料館	江原素六關係資料	弘安11年-昭和48年	8343	『沼津市明治史料館史料目録 1 江原素六關係史料目録』(1987)	@	静岡県	政治家	博物館
15	沼津市明治史料館	古川宣誉關係資料	大正3年-	4	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校關係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	陸軍中将	博物館
16	沼津市明治史料館	熊谷直孝關係文書	明治3年-昭和11年	82	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校關係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	教授、技術者	博物館
17	沼津市明治史料館	間宮信行關係文書	明治4年-明治41年	17	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校關係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	教授	博物館
18	沼津市明治史料館	乙骨太郎乙關係文書	明和2年-大正5年	838	『沼津市明治史料館史料目録 18 沼津兵学校關係人物資料目録』(1996)	@	静岡県	教授	博物館
19	沼津市明治史料館	江原素六關係文書(江原素六先生顕彰会寄贈分)	明治32年-大正13年	39	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	政治家	博物館
20	沼津市明治史料館	江原素六關係文書(石井敏子氏寄贈分)	明治9年-大正11年	99	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	政治家	博物館
21	沼津市明治史料館	乙骨太郎乙關係文書(補遺)	寛文3年-平成5年	94	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	教授	博物館
22	沼津市明治史料館	名和謙次關係文書	明治21年-	6	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	漢学者、教師	博物館
23	沼津市明治史料館	芳賀可伝關係文書	明治11年-明治17年	41	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	教師	博物館
24	沼津市明治史料館	鈴木知言關係文書	享保11年-明治23年	20	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	教師	博物館
25	沼津市明治史料館	渡瀬昌邦關係資料	明治11年-大正13年	106	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	陸軍軍人	博物館
26	沼津市明治史料館	小田川全之關係文書	明治39年-	2	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	実業家	博物館
27	沼津市明治史料館	鈴木龍六關係文書	明治6年-明治22年	113	『沼津市明治史料館史料目録30 旧幕臣・沼津藩士關係文書目録』(2002)	@	静岡県	陸軍省	博物館

1	福岡市博物館	柴田治道資料	明治期-昭和期	3205	『昭和59年度収集 收藏品目録 2』 (昭和62)	@	福岡県	計理事務 所	博物館
2	福岡市博物館	加島昭二資料	江戸期-昭和期	104	『昭和59年度収集 收藏品目録 2』 (昭和62)	@	福岡県	@	博物館
3	福岡市博物館	井上清助資料	明治期-大正期	10	『昭和61年度収集 收藏品目録 4』 (平成元年)	@	福岡県	人形師	博物館
4	福岡市博物館	持丸義治資料	昭和18-昭和21	9	『昭和62年度収集 收藏品目録 5』(、 平成2年)	@	福岡県	軍人	博物館
5	福岡市博物館	不破資料	明治期-大正期	105	『昭和62年度収集 收藏品目録 5』 (平成2年)	@	福岡県	戸長、区 長、郡長、 市議会議 長	博物館
6	福岡市博物館	古賀善一資料	明治期-昭和期	77	『昭和63年度収集 收藏品目録 6』 (平成3年)	@	福岡県	海苔養殖 業	博物館
7	福岡市博物館	藤村元昭資料	明治期-昭和期	455	『昭和63年度収集 收藏品目録 6』 (平成3年)	@	福岡県	藤村工業 所	博物館
8	福岡市博物館	松岡純資料	昭和初期-昭和10年代	301	『平成元年度収集 收藏品目録 7』 (平成4年)	@	福岡県	音楽家	博物館
9	福岡市博物館	藤井甚太郎関係資料	天保3-大正期	65	『昭和63年度収集 收藏品目録 6』 (平成3年)	@	福岡県	郷土史家	博物館
10	福岡市博物館	吉富三重子資料	明治期-昭和期	997	『平成2年度収集 收藏品目録 8』 (平成5年)	@	福岡県	助産師	博物館
11	福岡市博物館	坂田大資料	昭和10年代-昭和50年代	188	『平成2年度収集 收藏品目録 8』 (平成5年)	@	福岡県	郷土史家	博物館
12	福岡市博物館	吉木久吉資料	明治期	4	『平成2年度収集 收藏品目録 8』 (平成5年)	@	福岡県	建築家	博物館
13	福岡市博物館	伊豆久生資料	大正期-昭和期	304	『平成3年度収集 收藏品目録 9』 (平成6年)	@	福岡県	酒造会社	博物館
14	福岡市博物館	長幸之助資料	昭和期	13	『平成3年度収集 收藏品目録 9』 (平成6年)	@	福岡県	軍人	博物館
15	福岡市博物館	毛利淳一郎資料	昭和期	105	『平成4年度収集 收藏品目録 10』 (平成7年)	@	福岡県	産業奨励 館	博物館
16	福岡市博物館	山崎暢子資料	@	@	@	@	福岡県	酒屋	博物館
17	福岡市博物館	庄林ハナ資料	@	@	『平成12年度収集 收藏品目録 18』 (平成15年)	@	福岡県	郵便局員	博物館
1	鶴岡市郷土資料館	森藤右衛門文書	明治6-明治17	50	『諸家文書目録I』 (鶴岡市郷土資料 館、昭和55年3月 30日)	@	山形県	自由民権 運動家	博物館
2	鶴岡市郷土資料館	下田弥一郎史料	寛政-昭和22	473	『諸家文書目録IX』 (鶴岡市郷土資料 館、平成5年)	@	山形県	@	博物館
3	鶴岡市郷土資料館	渡会愚守史料	江戸-昭和	174	内部目録	@	山形県	俳人	博物館
4	鶴岡市郷土資料館	高山樗牛資料	明治20-明治30	991	『高山家寄託高山 樗牛資料目録』(鶴 岡市教育委員会、 平成13年)	@	山形県	鶴岡出身 文学者	博物館
5	鶴岡市郷土資料館	石原重俊史料	慶安1年-昭和12年	406	『諸家文書目録 VII』(鶴岡市郷土 資料館、平成3年 3月25日)	@	山形県	校長、図 書館、大 宝館勤務	博物館
6	鶴岡市郷土資料館	石原完爾資料	寛永-昭和50	8,410	『増補改訂 石原 完爾資料目録』(鶴 岡市郷土資料館、 昭和17年3月31 日)	@	山形県	軍人	博物館

1	浄法寺町歴史民俗資料館	飯近禰宜資料	江戸、明治	302	@	@	岩手県	@	博物館
2	浄法寺町歴史民俗資料館	小向守丹文書	明治-昭和	30	@	@	岩手県	@	博物館
3	浄法寺町歴史民俗資料館	佐藤節良文書	明治-昭和	53	@	@	岩手県	@	博物館
4	浄法寺町歴史民俗資料館	田口正俊文書	江戸-明治	7	@	@	岩手県	@	博物館
5	浄法寺町歴史民俗資料館	田口方三文書	昭和	7	@	@	岩手県	@	博物館
1	鹿児島県歴史資料センター黎明館	大久保利通文書	江戸末-明治11	1644		@	鹿児島県	政治家	博物館
2	鹿児島県歴史資料センター黎明館	黒田清隆文書	江戸-明治	721		@	鹿児島県	政治家	博物館
3	鹿児島県歴史資料センター黎明館	寺島宗則文書	明治	85		@	鹿児島県	政治家	博物館
4	鹿児島県歴史資料センター黎明館	中井弘文文書	江戸-明治	354		@	鹿児島県	@	博物館
1	豊島区立郷土資料館	稲垣岩次文書	昭和3-昭和24	39	@	@	東京都	@	博物館
2	豊島区立郷土資料館	木村秀崇氏関係文書	昭和21-昭和54	2774	内部目録	@	東京都	豊島区区長	博物館
3	豊島区立郷土資料館	草川誠氏関係文書	大正11	3	内部目録	複写	東京都	@	博物館
1	糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)	相馬御風関係文書	明治	9030	『相馬御風資料目録I』(1996)	@	新潟県	歌人	博物館
2	糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)	相馬御風宛書簡	明治39-昭和25	12,000	『相馬御風宛書簡目録』(1996)	@	新潟県	歌人	博物館
1	上伊那郷土館	伊澤修二先生資料	江戸末-昭和初	3,300	「伊澤修二先生年譜と資料目録」(1955)	@	長野県	教育者	博物館
2	上伊那郷土館	唐沢文書(唐沢貞治郎史料)	慶長-昭和	1,300	「唐沢文書目録」(1985)	@	長野県	郷土史家	博物館
1	幕別町ふるさと館	吉田菊太郎文書	明治20-昭和40	1,045	『幕別町蝦夷文化考古館 吉田菊太郎資料目録 文書資料編』	@	北海道	アイヌ民族運動家	博物館
1	茨城県立歴史館	菊池欣弥関係史料	@	341	『結城家史料目録』	@	茨城県	弁護士	博物館
1	鴨川市郷土資料館	古泉千樞関係文書	明治末-大正	91	内部目録	複写	千葉県	歌人	博物館
1	明治大学博物館	衣川栄太郎文書	明治41-昭和13	113	『明治大学刑事博物館目録 第6号』 『明治大学刑事博物館目録 第8号』(1954)	@	東京都	@	博物館
1	駒澤大学禅文化歴史博物館	多田文雄フィールドノート	明治-昭和	99	@	@	東京都	駒澤大学文学部教授	博物館
1	津久井町立尾崎琴堂記念館	尾崎行雄(琴堂)文書	明治-昭和	300	なし(閲覧可)	紙焼き	神奈川県	文部大臣	博物館
1	砺波市立砺波郷土資料館	竹部弥平次文書	寛文5-昭和6	6,369	『砺波市歴史資料調査報告書 第6集』(1996)	@	富山県	戸長、書記	博物館

1	知立市歴史民俗資料館	内藤魯一関係文書	寛永11年-昭和	1500	『内藤魯一関係文書目録』	@	愛知県	政治家、自由民権運動家	博物館
1	京都府立丹後郷土資料館	岩崎英精文庫	宝永4年-明治4年	1500	『岩崎英精文庫目録』(1994)	紙焼き	京都府	郷土史家	博物館
1	八尾市立歴史民俗資料館	沢井文書	江戸時代-大正時代	1316	『沢井文書目録』(1984)	紙焼き	大阪府	市史編纂委員	博物館
1	鳥取県立博物館史料室	湯本文彦収集文書	明和元-明治30	43	『昭和56年度 資料調査報告書 第9集』(1983)	@	鳥取県	歴史家、藩士	博物館
1	岩国学校教育資料館	藤岡市助関係資料	明治-大正	3645	無	@	山口県	電気工学、教授	博物館
1	柳川市立歴史民俗資料館	「北原白秋文書」の他	明治~昭和	1676	無	@	福岡県	作家	博物館
1	佐賀県立名護屋城博物館	小川敬吉資料	明治期-昭和初期	1700	『名護城博物館紀要』に目録あり	@	佐賀県	旧朝鮮総督府役人	博物館
1	北海道立文書館	秋山剛太郎保険証券	昭和10-昭和13	2	web	@	北海道	@	文書館
2	北海道立文書館	阿部正己北海道史関係資料	元文4-昭和5	144	web	マイクロ	北海道	@	文書館
3	北海道立文書館	天川恵三郎翁手記	昭和8年	1	web	カーボンコピー	北海道	社会運動家	文書館
4	北海道立文書館	伊地知明資料	大正14-平成元	107	web	@	北海道	@	文書館
5	北海道立文書館	泉麟太郎関係資料	明治5-昭和7	18	web	マイクロ	北海道	開拓者	文書館
6	北海道立文書館	伊藤一隆辞令及付属書類	明治13-明治31	52	web	@	北海道	社会運動家	文書館
7	北海道立文書館	井上馨関係文書	(天保6-大正4)	13	web	紙焼き	北海道	政治家	文書館
8	北海道立文書館	岩村通俊文書	明治4-明治30	13	web	原子式複写・写真複製	北海道	官僚	文書館
9	北海道立文書館	浦河町谷川利男関係資料	昭和25	2	web	@	北海道	技師	文書館
10	北海道立文書館	衛生技術員不破登一郎記録	明治41-大正5	3	web	@	北海道	技師	文書館
11	北海道立文書館	榎本武揚書簡	明治26	1	web	@	北海道	政治家	文書館
12	北海道立文書館	大森鍾一関係文書	明治16	2	web	紙焼き	北海道	官僚	文書館
13	北海道立文書館	笠井信一関係書簡	明治43-大正9	15	web	電子式複写	北海道	政治家	文書館
14	北海道立文書館	鹿島万兵衛記録	明治4-大正8	53	web	マイクロ	北海道	実業家	文書館
15	北海道立文書館	河川監守植田末義資料	明治34-昭和37	43	web	@	北海道	@	文書館
16	北海道立文書館	片岡利和千島関係文書	明治17-明治36	23	web	@	北海道	議員	文書館
17	北海道立文書館	片岡允資料	昭和30	1	web	@	北海道	道職員	文書館
18	北海道立文書館	来住野盛忠公務記録	明治5-明治7	2	web	電子式複写	北海道	@	文書館
19	北海道立文書館	久代樗郎文書	明治8-明治40	1	web	電子式複写	北海道	@	文書館
20	北海道立文書館	黒田清隆関係文書	慶応2-明治31	10	web	マイクロ	北海道	政治家	文書館

21	北海道立文書館	小石源蔵文書	昭和初	2	web	@	北海道	@	文書館
22	北海道立文書館	国分茂八文書	明治19-大正9	64	web	@	北海道	市職員	文書館
23	北海道立文書館	小島倉太郎文書	明治2-明治32	53	web	@	北海道	通訳	文書館
24	北海道立文書館	小梁川忠志関係資料	明治43-昭和21	5	web	@	北海道	@	文書館
25	北海道立文書館	斉藤実関係文書	明治24-昭和9	7	web	紙焼き	北海道	政治家	文書館
26	北海道立文書館	斉藤三男著択捉島築港資料	平成3年	1	web	電子式複写	北海道	道庁職員	文書館
27	北海道立文書館	坂田実土木関係資料	昭和7-昭和36	68	web	@	北海道	@	文書館
28	北海道立文書館	坂千秋所蔵資料	昭和8-昭和13	2	web	@	北海道	道長官	文書館
29	北海道立文書館	坂本直寛文書	明治18-昭和57	136	web	マイクロ	北海道	牧師	文書館
30	北海道立文書館	澤茂吉所蔵福沢諭吉書簡	明治29	2	web	電子式複写	北海道	思想家	文書館
31	北海道立文書館	清水谷公考文書	嘉永7-明治7	45	web	紙焼き	北海道	府知事	文書館
32	北海道立文書館	白石廣太千島関係資料	明治18-昭和30	11	web	@	北海道	@	文書館
33	北海道立文書館	杉浦誠文書	幕末-明治30年代	12	web	マイクロ	北海道	奉行	文書館
34	北海道立文書館	鈴木吉蔵氏関係文書	昭和10-昭和42	45	web	@	北海道	千島調査員	文書館
35	北海道立文書館	須田定吉辞令ほか	明治22年-明治45	6	web	@	北海道	@	文書館
36	北海道立文書館	添田弼関係文書	明治10-大正元	7	web	電子式複写	北海道	@	文書館
37	北海道立文書館	高田夕力関係資料	明治38-明治43	7	web	@	北海道	@	文書館
38	北海道立文書館	高橋伊助辞令ほか	@	15	web	電子式複写	北海道	戸長	文書館
39	北海道立文書館	高橋藤十郎(久敬)文書	万延元-明治2	2	web	電子式複写	北海道	@	文書館
40	北海道立文書館	高橋実所蔵坂千秋署名入り日本国旗	昭和20-昭和61	2	web	@	北海道	道長官	文書館
41	北海道立文書館	高畑利宜文書	寛政9-大正10	74	web	マイクロ	北海道	開拓使吏員	文書館
42	北海道立文書館	高山周徳辞令綴	明治5-明治14	1	web	電子式複写	北海道	開拓使官	文書館
43	北海道立文書館	武田正夫辞令	明治33	1	web	@	北海道	@	文書館
44	北海道立文書館	多田輝利所蔵木下成太郎書状	昭和5-昭和11	10	web	電子式複写	北海道	議員	文書館
45	北海道立文書館	田辺資良関係文書	@	53	web	@	北海道	@	文書館
46	北海道立文書館	谷技師水産資料	昭和9-昭和12	11	web	@	北海道	@	文書館
47	北海道立文書館	田村瑤惟吉辞令	昭和12-昭和57	12	web	@	北海道	@	文書館

48	北海道立文書館	都筑馨六文書	明治23-明治26	7	web	マイクロ、紙焼き	北海道	官僚	文書館
49	北海道立文書館	寺田真一資料	昭和10-昭和20	62	web	@	北海道	@	文書館
50	北海道立文書館	土居豊築日誌	慶応3-明治3	1	web	電子式複写	北海道	@	文書館
51	北海道立文書館	永田孝雄ビート製糖関係資料	大正10-昭和55	10	web	@	北海道	@	文書館
52	北海道立文書館	中西久吉所蔵札幌招魂社関係資料	昭和8-昭和10	5	web	@	北海道	@	文書館
53	北海道立文書館	新納多気雄関係資料	明治26-昭和4	104	web	@	北海道	道庁職員	文書館
54	北海道立文書館	西野三吉文書	明治18-大正11	106	web	@	北海道	巡查・集治監看守	文書館
55	北海道立文書館	西村賢治資料	昭和3-昭和63	622	web	@	北海道	@	文書館
56	北海道立文書館	西村皓平日誌	明治32-大正7	3	web	マイクロ	北海道	開拓者	文書館
57	北海道立文書館	函館市公証人横山吉四郎日誌	大正14-昭和7	3	web	@	北海道	@	文書館
58	北海道立文書館	橋本堯尚関係文書	明治13-昭和3	5	web	電子式複写	北海道	北海道開進会社	文書館
59	北海道立文書館	橋本東三資料	大正15-昭和18	26	web	@	北海道	@	文書館
60	北海道立文書館	林千秋資料	昭和42-昭和6	107	web	@	北海道	@	文書館
61	北海道立文書館	日野安信所蔵文書	明治18-	1	web	電子式複写	北海道	@	文書館
62	北海道立文書館	平芳夫水産加工関係資料	明治42-昭和41	13	web	@	北海道	@	文書館
63	北海道立文書館	藤田徳太郎文書	明治23-大正13	362	web	@	北海道	@	文書館
64	北海道立文書館	藤山要吉商店帳簿類	明治41-大正7	3	web	@	北海道	@	文書館
65	北海道立文書館	ブリガム(Arther A.Brigham)関係資料	文久2-明治28	12	web	電子式複写、写真(複製)	北海道	教師	文書館
66	北海道立文書館	北越殖民社大橋順一郎関係文書	明治19	1	web	@	北海道	@	文書館
67	北海道立文書館	本間三郎資料	昭和25-昭和38	2	web	@	北海道	政治家	文書館
68	北海道立文書館	牧野伸顕関係文書	明治29-昭和12	1	web	@	北海道	政治家	文書館
69	北海道立文書館	松方正義文書	(明治4-明治30)	5	web	紙焼き	北海道	政治家	文書館
70	北海道立文書館	松本十郎関係文書	明治2-明治6	13	web	マイクロ	北海道	官吏	文書館
71	北海道立文書館	三浦吉兵衛筆写日露戦争詔勅ほか	明治37-明治39	15	web	@	北海道	@	文書館

72	北海道立文書館	三上樵太郎文書	明治4	1	web	@	北海道	@	文書館
73	北海道立文書館	三島通庸文書	明治15-明治19	5	web	@	北海道	官僚	文書館
74	北海道立文書館	三田村多仲文書	天保9-昭和29	43	web	@	北海道	医師	文書館
75	北海道立文書館	宮内三郎文書	明治44-昭和14	50	web	@	北海道	@	文書館
76	北海道立文書館	宮島源太郎文書	明治14-大正11	22	web	@	北海道	@	文書館
77	北海道立文書館	森秀太郎日誌	明治29-昭和17	6	web	マイクロ	北海道	@	文書館
78	北海道立文書館	紋別郡小津野佐太郎関係文書	大正3-昭和12	6	web	@	北海道	@	文書館
79	北海道立文書館	紋別郡奥一未辞令	明治30-明治36	4	web	電子式複写	北海道	@	文書館
80	北海道立文書館	安場保和関係文書	明治10-明治30	21	web	@	北海道	官僚	文書館
81	北海道立文書館	山本留吉辞令	大正9-昭和4	21	web	@	北海道	道庁職員	文書館
82	北海道立文書館	吉野幸徳宛書状	明治9-昭和5	2	web	@	北海道	@	文書館
1	京都府立総合資料館	吉井勇資料	明治-昭和	@	web	@	京都府	歌人、劇作家、小説家	文書館
2	京都府立総合資料館	明石博高文書	安政6~明治43年	263	web	@	京都府	@	文書館
3	京都府立総合資料館	伊藤博文書状	明治	1	web	@	京都府	政治家	文書館
4	京都府立総合資料館	岩倉具視書状	明治	1	web	@	京都府	政治家	文書館
5	京都府立総合資料館	大森鐘一関係資料	@	8	web	@	京都府	京都府知事	文書館
6	京都府立総合資料館	小木貞一文書	@	2	web	@	京都府	衆議院法務委員会専門委員	文書館
7	京都府立総合資料館	北垣国道関係資料	明治	37	web	@	京都府	京都府知事	文書館
8	京都府立総合資料館	田辺朔郎関係資料	@	5	web	@	京都府	工学者	文書館
9	京都府立総合資料館	本多辰次郎文書(甲・乙・丙)	明治-昭和初期	329	web	@	京都府	宮内省臨時帝室編集局御用掛	文書館
1	山口県文書館	近藤清石文庫	元龜4年-大正17年	577	『山口県文書館収蔵文書仮目録 4 諸文庫仮目録・』	@	山口県	藩士(密用方助筆、右筆)・山口県庁の諸役・国学者	文書館
2	山口県文書館	石川卓美文庫	江戸-昭和	369	印字目録	@	山口県	歴史研究者	文書館
3	山口県文書館	田中義一関係文書	明治2年-昭和32	2000	『山口県文書館所蔵史料目録 20』	@	山口県	陸軍大将・総理大臣	文書館
4	山口県文書館	久幸虎雄文書	昭和8-昭和57	345	印字目録	@	山口県	県職員	文書館
5	山口県文書館	美祢龍彦文書	明治、大正	9	手書き目録	@	山口県	下宇野令村長・県会議員	文書館

6	山口県文書館	山本文子文書	昭和28-平成15	192	印字目録	@	山口県	山口県通 役	文書館
7	山口県文書館	木村一人文書	昭和7-平成6	34	印字目録	@	山口県	教員	文書館
1	埼玉県立文書館	中原英寿氏関係文書	明治44-昭和17	280	『埼玉県立文書館 収蔵文書目録 第 21集 諸家文書目 録?』(埼玉県立文 書館、昭和60年)	@	埼玉県	@	文書館
2	埼玉県立文書館	伊達徳次郎関係文書	大正12-昭和18	305	『埼玉県立文書館 収蔵文書目録 第 21集 諸家文書目 録?』(埼玉県立文 書館、昭和60年)	@	埼玉県	@	文書館
3	埼玉県立文書館	清水卯三郎関係文書	明治32-	1	『埼玉県立文書館 収蔵文書目録 第 21集 諸家文書目 録?』(埼玉県立文 書館、昭和60年)	@	埼玉県	出版・輸 入業者	文書館
4	埼玉県立文書館	前沢孝氏関係文書	昭和20-昭和52	2	『埼玉県立文書館 収蔵文書目録 第 34集 諸家文書目 録?』(埼玉県立文 書館、平成7年)	@	埼玉県	@	文書館
5	埼玉県立文書館	二上種夫氏関係文書	昭和23-昭和50	21	『埼玉県立文書館 収蔵文書目録 第 34集 諸家文書目 録?』(埼玉県立文 書館、平成7年)	@	埼玉県	@	文書館
6	埼玉県立文書館	小池信一氏関係文書	明治17-昭和29	95	『埼玉県立文書館 収蔵文書目録 第 42集 諸家文書目 録?』(埼玉県立文 書館、平成15年)	@	埼玉県	@	文書館
1	広島県立文書館	広島市山木茂文書	大正9-昭和45	190	『広島県立文書館 収蔵文書目録』 (閲覧室)	@	広島県	社会運動 史	文書館
2	広島県立文書館	広島市山岡彦人文書	昭和20	8	『広島県立文書館 収蔵文書目録』 (閲覧室)、複製は 『広島県立文書館 複製資料目録第1 集』	@	広島県	警察官	文書館
3	広島県立文書館	広島市天野卓郎文書	大正12-昭和15	66	『広島県立文書館 収蔵文書目録』 (閲覧室)	@	広島県	教授	文書館
4	広島県立文書館	東広島市小池秀男文書	昭和28-昭和51	@	『広島県立文書館 収蔵文書目録』 (閲覧室)	@	広島県	県庁職員	文書館
5	広島県立文書館	広島市今堀誠二文書	昭和20-昭和46	414	『広島県立文書館 収蔵文書目録』 (閲覧室)	@	広島県	東洋史 学、平和 学研究、 教授、学 長	文書館
1	広島市公文書館	都築正男資料	大正14-昭和35	645	『広島市公文書館 紀要 第5号 都築 資料目録』(1982)	@	広島県	東大名譽 教授	文書館
2	広島市公文書館	重家豊資料	@	4582	『重家豊資料目録 広島県社会・労働・ 文化運動史料』 (1984年)	@	広島県	@	文書館
3	広島市公文書館	新藤兼人資料	昭和21-昭和55	92	『広島市公文書館 紀要 第5号』 (1982年)、『新原 兼人資料目録』	@	広島県	作家	文書館

4	広島市公文書館	山木茂資料	昭和4-昭和58	2393	『山木茂資料目録(社会運動資料)』(1988)	@	広島県	市議会議員、社会運動史研究	文書館
5	広島市公文書館	任都栗司資料	昭和32-昭和54	195	『任都栗司資料目録』(1988)	@	広島県	市議会議員	文書館
1	学習院大学史料館	安田鍊之助関係文書	明治43-昭和16	180	『学習院大学史料館所蔵資料目録第10号安田鍊之助関係文書』(1990)	マイクロフィルム	東京都	陸軍軍人	文書館
2	学習院大学史料館	西田幾多郎史料	嘉永元年-昭和61年	585	『学習院大学史料館収蔵資料目録第18号』(2004)	@	東京都	哲学者	文書館
3	学習院大学史料館	三好達治原稿	昭和24	1	@	@	東京都	詩	文書館
4	学習院大学史料館	大鳥圭介関係史料	万延元年-昭和45年	146	@	@	東京都	学習院長	文書館
1	長野県立歴史館	児玉勝子史料	大正13-平成3	2,032	内部目録	@	長野県	婦人運動家	文書館
2	長野県立歴史館	長野市千原勝美図書・史料	@	757	内部目録	@	長野県	信州大学教授	文書館
3	長野県立歴史館	長野市高野イシ文書	昭和21年-昭和52年	117	内部目録	@	長野県	長野県婦人会初代会長	文書館
4	長野県立歴史館	小林杜人文書	(明治35-昭和59)	410	無(閲覧可)	@	長野県	社会運動家	文書館
1	国文学研究資料館(歴史資料)	岡谷繁実文書	嘉永5-大正3	11	マイクロ収集史料目録	@	東京都	藩士	文書館
2	国文学研究資料館(歴史資料)	石橋正平文書	昭和5年	1	@	@	東京都	函們鉄道株式会社社員	文書館
3	国文学研究資料館(歴史資料)	鈴木荘六文書	明治16-昭和18	818	仮目録	@	東京都	陸軍人	文書館
1	福井県文書館	西川秀男文書	昭和3-平成5	57	Web「目録データベース」	@	福井県	会社員	文書館
2	福井県文書館	酒井敏雄文書	明治13-明治22	3	web	@	福井県	植物学者	文書館
3	福井県文書館	白石健二文書	昭和57-平成15	231	web	@	福井県	@	文書館
1	東京大学史料編纂所	龍肅関係史料	@	4	東京大学史料編纂所所蔵史料目録データベース	@	東京都	史料編纂所所長	文書館
2	東京大学史料編纂所	豊原百太郎関係文書	@	13	東京大学史料編纂所所蔵史料目録データベース	@	東京都	大蔵省書記官	文書館
1	新潟県立文書館	山添武治氏政治活動発着書状等	明治20年-明治24年	34	@	@	新潟県	@	文書館
2	新潟県立文書館	新潟市稲葉保治氏関係文書等	大正6年-昭和30年	106	内部目録	@	新潟県	@	文書館
1	愛知県公文書館	小笠原愛二文書	昭和10年代-昭和30年代	39	OPAC。冊子体の内部目録(閲覧用)あり。	@	愛知県	愛知県職員	文書館
2	愛知県公文書館	加藤隼五郎関係資料	明治-昭和	227	OPAC。冊子体の内部目録(閲覧用)あり。	@	愛知県	政治家	文書館

1	京都大学大学 文書館	木下広次関係資 料	明治3 年-大 正13年	1983	Webページ	@	京都府	大学総長	文書館
2	京都大学大学 文書館	鳥養利三郎関係 資料	昭和	440	Webページ	@	京都府	大学総長	文書館
1	下関文書館	椿惣一先生資料	@	4484	『郷土資料目録 第7集』(1972)	@	山口県	教員・校 長・博物 館長	文書館
2	下関文書館	堀哲三先生文 庫	近世中 期(写) -昭和 40年代	1158	『郷土資料目録 第10集』(1979)	@	山口県	教師・校 長、歴史 研究者、 下関文書 館嘱託専 門員	文書館
1	明治大学史資 料センター	三木武夫関係資 料	(明治 40-昭 和63)	65,000	@	@	東京都	内閣総理 大臣	文書館
1	神奈川県立公 文書館	佐々木信綱文書	昭和17 年	2	HP上DB、閲覧室 用目録	@	神奈川県	歌人、万 葉学者	文書館
1	同志社大学 同志社社史資 料センター	新島遺品庫資料	嘉永5 年-昭 和初期	6000	『新島遺品庫収 蔵目録』上・下 (1977・1980)、 Webページ	マイクロ フィルム、 デジタル データ		牧師、教 育家、創 立者	文書館
1	阪急学園池田 文庫	白井鐵造文庫	大正末 期-昭 和末期	11508	コンピュータ検索	@	大阪府	宝塚歌劇 団演出家	文庫
1	筑波大学朝永 振一郎名誉教 授記念室	@	(明治 39-昭 和54)	2,382	@	@	茨城県	物理学 者、教授	大学
1	京都大学基礎 物理学研究所 湯川記念館史 料室	湯川秀樹史料 (仮)(公刊資料目 録収録分)	(明治 40-昭 和56)	@	@	@	京都府	理論物理 学者	大学
2	京都大学基礎 物理学研究所 湯川記念館史 料室	湯川秀樹史料 (仮)	(明治 40-昭 和56)	@	@	@	京都府	理論物理 学者	大学
1	札幌市教育委 員会文化資料 室	五十嵐勝右衛門 文書	江戸、 明治	21	「新札幌市史第6 巻 史料編1」(札 幌市教育委員会、 昭和62年)	@	北海道	@	教育委員 会
2	札幌市教育委 員会文化資料 室	大友亀太郎文書	江戸、 明治初	34	「新札幌市史第6 巻 史料編1」(札 幌市教育委員会、 昭和62年)	複製	北海道	開拓者	教育委員 会
3	札幌市教育委 員会文化資料 室	大村耕太郎資料	明治初 -大正 末	1,000	無	@	北海道	@	教育委員 会
4	札幌市教育委 員会文化資料 室	三関武治資料	明治7- 昭和58	2,253	無	@	北海道	@	教育委員 会
5	札幌市教育委 員会文化資料 室	村上善彦関係史 料	昭和	956	無	@	北海道	@	教育委員 会
1	自然科学研究 機構核融合科 学研究所核融 合アーカイブ室	市川芳彦 寄贈資 料	昭和 55-平 成9	81	@	@	岐阜県	理論物理 学者、教 授	研究所
2	自然科学研究 機構核融合科 学研究所核融 合アーカイブ室	関口忠 寄贈資料	昭和 25-平 成17	417	@	@	岐阜県	核融合工 学者、教 授	研究所
3	自然科学研究 機構核融合科 学研究所核融 合アーカイブ室	早川幸男 寄贈資 料	昭和 24-平 成3	1,114	@	@	岐阜県	素粒子物 理学者、 教授	研究所

4	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	伏見康治 寄贈資料	安政2- 昭和61	2,720	@	@	岐阜県	理論物理学 者、教授	研究所
5	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	長尾重夫 寄贈資料	(大正8- 平成17)	147	@	@	岐阜県	物理学 者、教授	研究所
6	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	阿部勝憲 寄贈資料	昭和 62-平成 19	98	@	@	岐阜県	核融合工 学者、教 授	研究所
7	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	高山一男 寄贈資料	昭和 25-平成 元	159	@	@	岐阜県	物理学 者、教授	研究所
8	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	宮本健郎 寄贈資料	@	3	@	@	岐阜県	物理学 者、教授	研究所
9	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	板谷良平 寄贈資料	@	293	@	@	岐阜県	工学者、 教授	研究所
10	自然科学研究 機構核融合科学 研究所核融合 アーカイブ室	宮原昭 寄贈資料	@	944	@	@	岐阜県	核融合、 教授	研究所
1	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	赤松秀雄寄贈史料	昭和 26-昭和 56	9	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
2	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	長倉三郎寄贈史料	昭和 37-昭和 50	111	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
3	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	井口洋夫寄贈史料	昭和 46-昭和 53	120	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
4	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	木村克美寄贈史料	昭和50 年前後	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
5	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	小谷野猪之助寄 贈史料	昭和42 年~昭和 45年頃	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
6	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	中村宏樹寄贈史料	昭和40 年~昭和 56年頃	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
7	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	薬師久彌寄贈史料	平成元 年	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
8	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	北川禎三寄贈史料	平成元 年	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
9	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	吉原経太郎寄贈 史料	昭和50 年代~平 成10年頃	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所
10	自然科学研究 機構分子科学 研究所史料編 纂室	森田紀夫寄贈史料	昭和 50-平成 17	@	@	@	愛知県	物理化学 者	研究所

1	法政大学大原社会問題研究所	下坂正英資料	昭和20-昭和45	181	web「下坂正英資料インデックス」(リスト)	@	東京都	社会運動家	研究所
2	法政大学大原社会問題研究所	春日庄次郎資料	昭和期	@	web「春日庄次郎資料インデックス」(リスト)	@	東京都	社会運動家	研究所
3	法政大学大原社会問題研究所	向坂逸郎文庫原資料	大正-昭和55	@	『向坂逸郎文庫目録?原資料』(2001)(Webでも閲覧可)	@	東京都	経済学者	研究所
4	法政大学大原社会問題研究所	木原実文書	昭和	@	web「木原実文書インデックス」(リスト)(2004)	@	東京都	日本社会党	研究所
5	法政大学大原社会問題研究所	棚橋小虎関係文書	明治-昭和	@	web「棚橋小虎関係文書インデックス」(リスト)(2003)	@	東京都	日本社会党	研究所
6	法政大学大原社会問題研究所	藤林伸治資料	大正-昭和	@	web「藤林伸治資料インデックス」(リスト)(2004)	紙焼き	東京都	記録映画作家	研究所
1	同志社大学人文科学研究所	近藤栄蔵文庫	明治後期-昭和40年	1200	『近藤栄蔵文庫目録』(1969)	@	京都府	社会運動家	研究所
2	同志社大学人文科学研究所	山室軍平文庫	明治-昭和初期	450	『山室軍平文庫目録』(1998)	マイクロ	京都府	社会事業家、日本救世軍	研究所
3	同志社大学人文科学研究所	海老名弾正資料	明治期-昭和初期	4099	『海老名弾正資料目録』(2004)	紙焼き、マイクロ	京都府	大学総長、牧師	研究所
4	同志社大学人文科学研究所	柏木義円資料	江戸-昭和初期	3529	『柏木義円資料目録』(2005)	マイクロ	京都府	日本組合基督安中教会牧師	研究所
5	同志社大学人文科学研究所	湯浅与三関係資料	明治-昭和初期	1066	『湯浅与三関係資料』(2005)	マイクロ	京都府	日本組合基督安中教会牧師	研究所
1	高エネルギー加速器研究機構史料室	菅原寛孝氏機構長室所蔵資料	(昭和13-)	@	整理中	@	茨城県	物理学者、教授	研究所
2	高エネルギー加速器研究機構史料室	西川哲治氏特別顧問室資料	(大正15-平成22)	@	整理中	@	茨城県	物理学者	研究所
3	高エネルギー加速器研究機構史料室	西川哲治氏理科大学長室所蔵資料	(大正15-平成22)	@	整理中	@	茨城県	理科大学長	研究所
1	一橋大学経済研究所	都留重人名誉教授寄贈資料	(明治45-平成18)	15,000	Web	なし	東京都	経済学者、一橋大学学長	研究所
1	飯田市歴史研究所	実原公男氏寄贈資料	昭和34年-平成3年	950	内部目録	@	長野県	@	研究所
1	新潟市歴史文化課	星野恒氏関係文書	天保10年-大正6年	380	個別ファイル	@	新潟県	歴史学者	市役所
2	新潟市歴史文化課	嘉村正規文書	昭和	17	なし	@	新潟県	中学校校長	市役所
1	小浜市役所企画調整課世界遺産推進室	鳥居史郎寄贈文書	大正9-昭和11	48	『小浜市史料所在目録 第5輯』(1986)	@	福井県	市長	市役所
1	十日町市十日町情報館	杉本周徳資料	明治	100	なし(閲覧可)	@	新潟県	医師	その他
2	十日町市十日町情報館	塩川梅坡資料	@	20	なし(閲覧可)	@	新潟県	俳人	その他
3	十日町市十日町情報館	中山龍次資料	昭和	50	なし(閲覧可)	@	新潟県	十日町町長	その他
4	十日町市十日町情報館	丸山拳石資料	明治	30	なし(閲覧可)	@	新潟県	@	その他
1	(財)大阪社会運動協会	中江文書	昭和20-昭和55	5306	『大阪社会運動協会蔵書目録 中江文書』、Web	@	大阪府	総評大阪地方評議会議長	その他
2	(財)大阪社会運動協会	河本文庫	20世紀	1174	文書は未整理	@	大阪府	西部交通労働同盟	その他

参考資料 4.図書館の設置主体別の分析

図書館	171 館						
設置主体	館数	個人文 書所蔵 館	全文書 群数	個人文 書群数	個人機関 /機関	個人/総 文書	個人文 書/個人 機関
都道府 県	25	4	502	17	0.16	0.033865	4.25
市	81	8	518	9	0.098765	0.017375	1.125
区	1	0	2	0	0	0	@
町	9	0	65	0	0	0	@
財団法 人	2	1	3	2	0.5	0.666667	2
国立大 学	30	1	404	1	0.033333	0.002475	1
公立大 学	2	1	18	4	0.5	0.222222	4
私立大 学	22	0	291	0	0	0	@

参考資料.5 博物館の設置主体別の分析

博物館	299 館						
設置主体	館数	個人文 書所蔵 館	全文書 群数	個人文 書群数	個人機 関/機関	個人/総 文書	個人文書 /個人機 関

都道府 県	27	6	1138	50	0.2222 22	0.04393 7	8.33333 3
市	154	10	2047	68	0.0649 35	0.03321 9	6.8
区	6	1	297	3	0.1666 67	0.01010 1	3
町村	69	3	281	7	0.0434 78	0.02491 1	2.33333 3
法人(財 団、社団 等)	20	1	105	2	0.05	0.01904 8	2
会社	4	0	4	0	0	0	@
個人	7	0	12	0	0	0	@
国立大 学	1	0	110	0	0	0	@
私立大 学	4	2	507	2	0.5	0.00394 5	1
その他	2	0	8	0	0	0	@
不明	5						

参考資料 6. 博物館を館種別に分析

館種	館数	個人文 書所蔵 館	全文書群 数	個人文 書群数	個人機関 /機関	個人/総 文書	個人文 書/個人 機関
総合	21	1	509	1	0.047619	0.001965	1
郷土	71	8	1073	16	0.112676	0.014911	2
美術	14	0	142	0	0	0	@
歴史	168	16	2757	109	0.095238	0.039536	6.8125

自然	4	0	37	0	0	0	@
理工	3	0	3	0	0	0	@
その他	3	0	4	0	0	0	@
不明	48						

参考資料 7. 文書館の設置主体別分析

文書館	47 館						
設置主体	館数	個人文 書所蔵 館	全文書 群数	個人文書 群数	個人機関 /機関	個人/総 文書	個人文書 /個人機 関
都道府 県	26	11	5601	122	0.423077	0.021782	11.09091
市	9	2	285	7	0.222222	0.024561	3.5
区	1	0	1	0	0	0	@
法人	2	1	1315	3	0.5	0.002281	3
国立大 学	5	2	96	4	0.4	0.041667	2
私立大 学	3	3	36	6	1	0.166667	2
その他	1	0	4	0	0	0	@

参考資料 8. 研究所の設置主体別分析

研究所	17 施設					
	機関数	個人文	全文書	個人文書群	個人機	個人/総

		書所蔵 機関	群数	数	関/機関	文書
大学	8	3	56	12	0.375	0.214286
大学共 同利用 機関	4	4	1359	26	1	0.019132
その他	5	1	23	1	0.2	0.043478

参考資料 9.大学の設置主体別分析

大学	84校						
設置形 態	機関 数	個人文 書所蔵 機関	全文書 群数	個人文書 群数	個人機関 /機関	個人/総 文書	個人文書 /個人機 関
国立	48	6	659	9	0.125	0.013657	1.5
公立	4	1	23	4			
私立	32	7	401	19	0.21875	0.047382	2.714286
図書館	54	2	713	5	0.037037	0.007013	2.5
博物館	5	2	617	2	0.4	0.003241	1
文書館	8	5	132	10	0.625	0.075758	2
研究所	8	3	56	12	0.375	0.214286	4
大学の 記念館 等	9	2	32	3	0.222222	0.09375	1.5

参考資料 10.個人文書目録の全体の編成			
全体	111		
編成基準 ／段階	第 1 編 成	第 2 編 成	第 3 編 成
物理形態	47	16	1
内容形態	8	6	6
形態	15	14	8
様式	4	4	2
事項	25	29	12
主題	0	8	4
十進分類	1	2	0
出所	10	1	0
現秩序	1	3	0
時期	3	2	2
経歴	4	3	0
活動	2	0	0
組織	1	1	0
場所	0	2	1
作者	0	1	2
なし	11	47	86

参考資料 11.図書館所蔵個人文書目録の編成			
図書館	25		
編成基準 ／段階	第 1 編 成	第 2 編 成	第 3 編 成

物理形態	15	4	0
内容形態	4	4	4
形態	1	4	3
様式	2	0	0
事項	5	6	3
主題	0	3	2
十進分類	1	2	0
出所	1	0	0
現秩序	0	1	0
場所	0	0	1
なし	0	6	18
合計	29	24	13

参考資料 12.博物館所蔵個人文書目録の編成			
博物館	15		
編成基準 ／段階	第1編 成	第2編 成	第3編 成
物理形態	6	3	0
内容形態	0	0	1
形態	5	1	0
様式	1	0	0
事項	5	0	1
主題	0	1	0
出所	3	0	0
時期	1	0	0
なし	1	11	14

参考資料 13.文書館所蔵個人文書目録の編成			
文書館	32		
編成基準 ／段階	第1編 成	第2編 成	第3編 成
物理形態	8	1	1
内容形態	1	0	0
形態	5	4	0
事項	7	8	2
出所	6	0	0
現秩序	1	1	0
時期	0	0	1
組織	0	1	0
経歴	2	2	0
活動	2	0	0
場所	0	2	0
なし	4	19	29

参考資料 14.研究所所蔵個人文書目録の編成			
研究所	17		
編成基準 ／段階	第1編 成	第2編 成	第3編 成
物理形態	7	1	0
内容形態	1	1	0
形態	2	2	3
様式	1	0	0

事項	6	9	3
主題	0	2	1
出所	0	0	0
現秩序	0	1	0
時期	2	1	0
組織	1	1	0
作者	0	1	0
なし	1	3	12

参考資料 15.大学所蔵個人文書目録
の編成

大学	12		
編成基準 ／段階	第1編 成	第2編 成	第3編 成
物理形態	4	3	0
内容形態	1	1	0
形態	2	1	1
様式	0	1	0
事項	2	3	2
時期	0	0	1
経歴	1	0	0
なし	4	7	9

参考資料 16.文学館所蔵個人文書目録
の編成

文学館	3		
編成基準	第1編	第2編	第3編

／段階	成	成	成
物理形態	3	1	0
形態	0	1	1
様式	0	3	0
事項	0	0	1
作者	0	0	2

参考資料17. 個人文書目録の編成基準の分析															
No.	機関名	機関名2	編集者 (発行者)	目録名	発行年	公開方法	収録年次	収録資料 数	編成項目 および 並び				個人の主 な職業	履歴表	解題
				書名					第1編成	第2編成	第3編成	編成項目 内の 並び			
1	図書館	大学	(早稲田 大学図書館)	大隈文書目録	1952	刊行	(天保9- 大正11)	12,000	物理形態	主題、事 項	主題	年月日	政治家	x	x
2	図書館	大学	国学院大 学図書館	梧陰文庫目録	1963	刊行	(天保14- 明治28)	6,700(6,00 0)	物理形態 (現秩序を 一部含む)	十進分 類、現秩 序(事項)	@	現秩序	文部大 臣、書記 官	x	x
3	図書館	大学	東京学芸 大学附属 図書館	松浦文庫目録	1965	刊行	(明治5-昭 和20)	479	内容形態	十進分類	@	@	教育行政 家、九大 総長	x	x
4	図書館	大学	国際基督 大学図書 館	内村鑑三記念 文庫目録	1971	刊行	(万延2-昭 和5)	810(44)	物理形態、 様式	@	@	@	宗教家、 思想家	x	x
5	図書館	大学	(東北大学 附属図書 館)	漱石文庫目録	1971	刊行	(慶応3-大 正5)	3103(45)	出所	内容形態	内容形態	年代順	作家	x	x
6	図書館	大学	広島修道 大学図書 館	武井文庫目録	1974	刊行	(昭和8-昭 和46)	1817 (827)	物理形態	物理形態	@	整理順	郷土史 家、助教 授	○	x
7	図書館		小田原市 立図書館	牧野信一資料解 説目録	1974	刊行	(明治29- 昭和11)	84	物理形態、 事項	@	@	年月日	小説家	x	x
8	図書館		大阪府立 中之島図 書館	織田文庫目録	1978	刊行	(大正2-昭 和22)	1509 (591)	物理形態	内容形態	@	タイトルの 50音順	作家	x	x
9	図書館	大学	東京都立 大学附属 図書館事 務室	花房義質関係文 書目録	1979	刊行	(天保13- 大正6)	@	物理形態	事項	内容形 態、事項	年月日	外交官	x	x
10	図書館	大学	実践女子 学園図書 館	下田歌子関係資 料総目録	1980	刊行	(安政元- 昭和11)	3,200	事項、出所 (家族)	事項、内 容形態	事項、形 態	年月日	女子教育 者、教授	○	x
11	図書館	大学	明治学院 大学図書 館	沖野岩三郎文庫 目録	1983	刊行	(明治9-昭 和31)	690(208)	物理形態	@	@	@	作家	x	x
12	図書館		弘前市立 弘前図書 館	成田文庫	1984	刊行	@	2,143	十進分類	@	@	@	弘前図書 館長	x	x

13	図書館		鳴外記念 本郷図書館	森鷗外資料目録	1985	刊行	(文久2- 大正11)	@	物理形態	物理形 態、事項	内容形 態、事項	タイトルの 50音順	作家	x	x
14	図書館	大学	日本福祉 大学付属 図書館	小川太郎文庫目 録	1987	刊行	(明治40- 昭和49)	5965 (1199)	形態、事項	形態	@	@	学監	O	x
15	図書館	大学	立教大学 図書館	宮沢俊義文庫目 録	1988	刊行	(明治32- 昭和51)	9600 (400)	物理形態	形態	@	@	法学者、 教授	x	x
16	図書館	大学	立命館大 学図書館	末川文庫目録	1990	刊行	(明治25- 昭和52)	14369 (2,880)	様式	形態、事 項	形態、事 項	年代順	法学者、 教授、学 長	O	x
17	図書館	大学	(愛知学院 大学附属 図書館)	小野文庫目録	1990	刊行	(明治24- 昭和61)	12400 (1,400)	物理形態	主題	主題	年代順	法学者、 教授、弁 護士	O	x
18	図書館	大学	早稲田大 学図書館	大西祝資料目録	1991	刊行	(元治元- 明治33)	2,057	物理形態	@	@	年月日	哲学者、 講師	x	x
19	図書館	大学	早稲田大 学図書館	宮島誠一郎文書 目録	1997	刊行	(天保9- 明治44)	@	物理形態、 人(出所)	内容形 態、事項	@	年月日	官僚	x	O
20	図書館	大学	福島大学 附属図書 館	大塚久雄文庫目 録	2002	刊行	(明治40- 平成8)	8539 (249)	内容形態	形態	@	年代順	経済学 者、教授	O	x
21	図書館	大学	広島大学 図書館	藤原与一文庫目 録	2012	刊行	(明治42- 平成19)	3,226	内容形態	都道府県	形態	資料名順	教授、方 言研究	x	O(解説)
22	図書館	大学	(九州大学 付設記録 資料館産 業経済資 料部門)	熊谷恒夫文書目 録	2010	論文	(昭和3- 昭和63)	494	事項	@	@	不明	福岡県労 働組合評 議会		
23	図書館	大学	一橋大学 附属図書 館	大塚金之助資料 目録	@	web	(明治25- 昭和52)	30,082	物理形態	物理形態	@	年月日	経済学 者、教授		
24	図書館		飯田市立 図書館	伊藤大八関係文 書目録	@	web	(安政5- 昭和2)		物理形態、 事項	物理形態	@	年月日	政治家		
25	図書館		三重県立 図書館	鈴木敏雄関係資 料目録	@	web	(明治21- 昭和39)	216	内容形態	主題	@	@	教育者、 郷土史家		
1	博物館		後藤新平 記念館	後藤新平文書目 録	1980	刊行	(安政4- 昭和4)	@	時期、事項	@	@	年月日	政治家	x	x
2	博物館		東京都美 術館	柳瀬文庫目録	1991	刊行	(明治33- 昭和20)	@	形態、事項	物理形 態、主題	事項、内 容形態	年月日	洋画家	x	x
3	博物館		市立函館 博物館	梁川剛一資料目 録	1996	刊行	(明治35- 昭和61)	@	形態	@	@	年月日	彫刻家、 挿絵画家	x	x
4	博物館		(東京国立 近代美術 館)	岸田劉生 作品 と資料	1996	刊行	(明治24- 昭和4)	@	形態	物理形態	@	年月日	洋画家	x	x
5	博物館		(国立歴史 民族博物 館)	大久保利通関係 史料目録	2003	刊行	(文政13- 明治11)	3,000	物理形態	@	@	年月日	政治家	x	x
6	博物館		福岡市博 物館	井上快庵関係文 書	2003	刊行	@	180	@	@	@	@	@	x	x
7	博物館		(南方熊楠 邸保存顕 彰会)	南方熊楠邸資料 目録	2005	刊行	(慶応3- 昭和16)	@	形態、様式	形態	@	年代順	博物学・ 生物学・ 民俗学者	x	x
8	博物館		大分県立 先哲史料 館	久留島武彦関係 史料 I-V他	2006	刊行	(明治7- 昭和35)	@	出所(寄贈 先)	@	@	不明	児童文学 者	x	x
9	博物館		茨城県天 心記念五 浦美術館	岡倉天心資料	2007	刊行	(文久2- 大正2)	166	物理形態	@	@	著者50音 順	美術評論 家	x	x
10	博物館		(国立科学 博物館)	棚橋資料目録	1990	論文	(明治2- 昭和36)	654	物理形態、 事項	@	@	「書名」の 50音順	東京教育 博物館館 長		
11	博物館		横浜開港 資料館	中村房次郎関係 文書目録	2002	論文	(明治3- 昭和19)	651	事項、物理 形態	@	@	年月日	実業家		
12	博物館		横浜開港 資料館	武田家旧蔵ア一 ネスト・サトウ 関係資料目録1-3	2001-2、 2006	論文	(天保14- 昭和4)	2,200	出所(人)	物理形態	@	年月日	外交官		
13	博物館	大学	(名古屋大 学博物館)	奈良坂源一郎関 係史料目録	2006- 2011	論文	(明治14- 大正10)	2,013	形態	@	@	年月日	医学者		
14	博物館		愛媛県総 合科学博 物館	曾我部右吉四阪 島煙害関連資料 目録	2012	論文	(元治元- 昭和31)	224	物理形態、 出所(人)	@	@	年月日	村長		
15	博物館		国立民族 博物館	菊沢季夫アーカ イブ	@	web	明治33- 昭和60	@	物理形態、 事項	@	@	年月日	国語学研 究、日本 ローマ字 学会会長		

1	文書館	大学	(学習院大学大学史料館)	安田鏡之助関係文書	1990	刊行	明治41-昭和15	253	事項、内容形態	@	@	年月日	御付武官	x	○(解説)
2	文書館	大学	大阪市立大学大学史資料室	末川博関係資料目録	2001	刊行	(明治25-昭和52)	@	物理形態、現秩序	@	@	現秩序か	法学者、教授	x	○
3	文書館		衆議院憲政記念館	村川一郎文書	2002	刊行	(昭和14-平成10)	823	事項	@	@	@	自由民主党	x	x
4	文書館		衆議院憲政記念館	上村耕作文書	2002	刊行	(明治10-)	300	出所(配布先)、物理形態	@	@	年代順	衆議院議員	x	x
5	文書館	大学	広島大学文書館	森戸辰男関係文書目録	2002	刊行	(明治21-昭和59)	22,522	出所(寄贈元)	事項、形態	事項、時期	年月日	学長、政治家	○	○
6	文書館	大学	広島大学文書館	平岡敬関係文書目録	2005	刊行	(昭和2-平成16)	@	物理形態	現秩序	@	年月日	広島市市長、中国新聞社	○	○
7	文書館	大学	九州大学大学文書館	伊東祐彦関係資料目録	2007	刊行	(慶応元-昭和11)	@	形態	事項(組織別)	@	年月日	医者、教授、学長	x	x
8	文書館	大学	(東京大学史史料室)	古在由直史料目録	2007	刊行	(明治14-昭和9)	609	事項、物理形態	事項、形態	@	年月日	農芸化学者、教授、総長	○	x
9	文書館	大学	名古屋大学大学文書資料室	渋沢元治関係資料	2007	刊行	(明治9-昭和50)	1,080	経歴、出所(人)	形態、事項	@	年月日	名古屋大学初代総長	x	○
10	文書館	大学	東京大学史史料室	内田祥三史料目録	2008	刊行	(明治18-昭和47)	@	出所(組織)	事項	@	年月日	建築学、教授、総長	○	x
11	文書館		(国文学研究資料館)	鈴木荘六文書目録	2012	刊行	明治16-昭和18	818	活動、出所(人)	経歴	物理形態	年月日	陸軍人	○	○
12	文書館		(国文学研究資料館)	山口重次文書目録	2012	刊行	大正元-昭和30	408	活動	経歴、物理形態	事項	年月日	満鉄・満州国協和会員	○	○
13	文書館		(国文学研究資料館)	赤井春海文書目録	2012	刊行	明治42-昭和20	75	形態	@	@	年月日	陸軍人	○	○
14	文書館	大学	広島大学文書館	大牟田稔関係文書目録 資料編	2013	刊行	(昭和5-平成13)	53,000	形態	事項	@	年月日	中国新聞社、平和文化センター理事	○	○
15	文書館	大学	(学習院大学史料館)	大島圭介関係史料目録	2014	論文	(天保3-明治44)	122	形態	@	@	年月日	政治家		
16	文書館	大学	(学習院大学法学会)	村松岐夫関係文書目録	2010	論文	(昭和15-)	752	事項、出所(人)	@	@	年月日	政治学者、教授		
17	文書館	大学	京都大学大学文書館	木下広次関係資料	2005	論文	(嘉永4-明治43)	@	物理形態	事項	@	年月日	法学者、総長、貴族院議員		
18	文書館	大学	京都大学大学文書館	鳥養利三郎関係資料	2012	論文	(明治20-昭和51)	@	@	@	@	不明	電気工学者、教授、総長		
19	文書館	大学	北海道大学大学文書館	川嶋一郎関係資料	2010	論文	(明治13-昭和51)	103	形態	@	@	年月日	県庁、町長		
20	文書館	大学	(早稲田大学大学史資料センター)	志富勲負関係文書目録	2013	論文	(明治32-昭和36)	1,000	物理形態	@	@	@	茨城新聞社員		
21	文書館	大学	(早稲田大学大学史資料センター)	安部磯雄関係資料目録	2014	論文	(元治2-昭和24)	174	物理形態	@	@	年月日	牧師、教授		
22	文書館	大学	大阪大学アーカイブズ	五島忠久関係文書目録	@	web	(明治44-平成22)	@	@	@	@	年月日	教授		
23	文書館	大学	大阪大学アーカイブズ	高木修二関係文書目録	@	web	(大正13-平成18)	@	@	@	@	現秩序か	物理学者、教授		
24	文書館	大学	東北大学史料館	本多光太郎文書	@	web	明治44-大正10	125	@	@	@	現秩序	理学部教授、総長		
25	文書館	大学	東北大学史料館	村岡典嗣文書目録	@	web	明治35-昭和50	358	形態、事項	事項	@	年月日	法学部教授		

26	文書館	大学	北海道立文書館	寺田真一資料	@	web	昭和10-20	62	事項	地区	@	@	開拓使吏員		
27	文書館	大学	北海道立文書館	坂本直寛文書	@	web	明治後期	136	形態	@	@	@	宣教師、教師		
28	文書館	大学	沖縄県公文書館	平良幸市文書	2005	web	昭和20-昭和54	723	形態、経歴	@	@	@	沖縄県知事		
29	文書館	大学	沖縄県公文書館	大田政作文書	2006	web	昭和6-平成11	135	形態、事項	@	@	@	弁護士、政治家		
30	文書館		尼崎市立地域研究史料館	師岡祐行氏社会運動関係等資料	@	web	明治8-昭和56	1,687	事項、形態	@	@	年月日	京都部落史研究所所長		
31	文書館		板橋区公文書館	櫻井徳太郎文庫	@	web	(大正6-平成19)	38198 (3,127)	形態	地域、形態	@	年月日	日本民俗学者、教授		
32	文書館		明治大学歴史編纂資料室	田島義方文書目録	1967	刊行	(安政5-昭和13)	@	物理形態	@	@	年月日	大学事務、学監	○	×
1	研究所	大学	(東京女子大学附属比較文化研究所)	植村記念 佐波文庫目録	1965	刊行	@	@	物理形態	主題	主題	書名別 口-マ字	牧師	×	×
2	研究所		遠山現代音楽研究所	山田耕柝資料目録-第1巻	1981	刊行	(明治19-昭和40)	7,000	事項(演奏方法)	@	@	曲の50音順	作曲家	×	×
3	研究所		国立教育研究所	志水義暉文庫目録	1986	刊行	(明治21-昭和29)	(615)	事項、物理形態	事項	@	年代順	文部省督学官、教育学局教学官	×	○
4	研究所		国立教育研究所	厚沢留次郎文書目録	1988	刊行	(明治42-昭和56)	1,500	@	@	@	現秩序	文部省教育局視学官	×	○
5	研究所		国立教育研究所	石川二郎旧蔵資料目録	1992	刊行	(大正5-昭和49)	@	事項	事項	@	年月日	文部行政官	×	○
6	研究所		国立教育研究所	石川二郎旧蔵資料目録	1992	刊行	(大正5-昭和49)	@	事項	事項	@	年月日	文部行政官	×	○
7	研究所	大学	お茶の水女子大学女性文化研究センター	湯浅年子資料目録	1993	刊行	(明治42-昭和55)	@	事項、物理形態	事項、時期	@	年月日	原子物理学、教授	○	×
8	研究所	大学	沖縄県立芸術大学附属研究所	鎌倉芳太郎資料目録	1998	刊行	(明治31-昭和58)	216	物理形態	形態	@	不明	染織家	×	×
9	研究所	大学	(法政大学ポアソソナード記念現代法研究所)	梅沢次郎文書目録	2000	刊行	(万延元-明治43)	@	事項、内容形態	現秩序 (法政大学図書館分類)	@	@	法学者、総長、教授	×	○
10	研究所	大学	法政大学大原社会問題研究所	向坂逸郎文庫目録V 原資料	2001	刊行	(明治30-昭和60)	@	時期	事項	形態、事項	年月日	経済学者、教授	○	×
11	研究所	大学	政策研究大学院大学政策情報研究センター	矢部貞治関係文書目録	2002	刊行	(明治35-昭和42)	13,000 (3,343)	物理形態、様式	作成者	@	年月日	政治学者、教授、選挙制度調査会	○	×
12	研究所	大学	広島大学平和科学研究所	峠三吉資料目録	2004	刊行	(大正6-昭和28)	@	形態、事項	内容形態、事項	形態	年月日	詩人	×	×
13	研究所	大学	お茶の水女子大学女性文化研究センター	保井コノ資料目録	2004	刊行	(明治13-昭和46)	456	形態、事項	事項、形態	@	@	植物学、教授	○	×
14	研究所	大学	國學院大学日本文化研究所	深沢暹関係文書目録	2005	刊行	明治9-昭和19	517	物理形態	@	@	年月日	外務省	○	○
15	研究所	大学	大阪経済大学日本経済史研究所	杉田定一関係文書目録	2007	刊行	(嘉永4-昭和4)	12,593	時代	主題、物理形態	事項、形態	年月日	自由民権運動家、衆議院議長	×	○
16	研究所	大学	名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター情報資料室	荒木光太郎文書解説目録	2014	刊行	(昭和11-昭和25)	911	組織、事項	組織、事項	@	年月日	経済学、教授	○	○(解説)
17	研究所	大学	(東京女子大学附属比較文化研究所)	青山なを資料目録1、2	1990、1991	論文	(明治33-昭和60)	500以上	物理形態	事項(人を含む)	事項(人を含む)	年月日	女性史研究、教授		

1	大学	甲南大学 哲学研究室	九鬼周造文庫目 録	1976	刊行	明治21- 昭和16	7,929(574)	物理形態	物理形態	時期、事 項(著作)	@		哲学者、 教授	○	x
2	大学	京都大学 経済学部	河上肇手稿類目 録	1979	刊行	(明治12- 昭和21)	215	形態	@	@	年月日	経済学 者、社会 思想家	x	x	
3	大学	名古屋大 学法学部	瀧川文庫目録	1987	刊行	(明治24- 昭和37)	14,196 (299)	物理形態	様式、物 理形態	形態	@	刑法学 者、学長、 教授	x	x	
4	大学	(学習院大 学法学部)	山岡萬之助関係 文書目録	1988	刊行	(明治9- 昭和43)	@	経歴、物理 形態	事項、物 理形態	@	年月日	政治家	○	○	
5	大学	一橋大学 経済研究 所附属日 本経済統 計情報セ ンター	美濃部洋次満洲 関係文書目録	2000	刊行	(明治33- 昭和28)	623	内容形態	事項 (国)、内 容形態	事項	年月日	商工省官 僚	x	○	
6	大学	(青山学院 大学)	谷干城関係文書 目録	2009	論文	(天保8-明 治44)	581	物理形態	形態、事 項	@	年月日	軍人、政 治家			
7	大学	(大阪市立 大学)	上田静一資料目 録	2009	論文	(明治17- 明治39)	116	@	@	@	不明	部落運動 家			
8	大学	慶應義塾 大学法学 研究会	安達峰一郎関係 資料目録	1999	論文	明治2-昭 和9	111	@	@	@	年月日	外交官			
9	大学	(静岡理工 科大学)	川村驥山関連資 料目録	2011	論文	明治15- 昭和44	111	@	@	@	年月日	書家			
10	大学	早稲田大 学教育学 研究科	田口卯吉関係資 料目録	2010	論文	(嘉永7- 明治38)	242	@	@	@	@	経済・歴 史学者			
11	大学	東京大学 法学部近 代立法過 程研究会	池田寅二郎関係 文書目録1	1971	論文	(明治12- 昭和14)	@	事項	@	@	年月日	司法官			
12	大学	東京大学 法学部近 代立法過 程研究会	上山満之進関係 文書目録	1978	論文	(明治2- 昭和13)	@	形態、事項	@	@	年月日	官僚			
1	文学館	神奈川文 学振興会	中里恒子文庫目 録	1999	刊行	(明治42- 昭和62)	7351 (2,871)	物理形態	様式	形態	年月日	作家	x	x	
2	文学館	日本近代 文学館	佐多稲子文庫目 録	2002	刊行	(明治37- 平成10)	@	物理形態	形態、様 式	作者(本 人、その 他)、事項	年月日	作家	x	○	
3	文学館	神奈川文 学振興会	滑川道夫文庫目 録-1(特別資 料・雑誌)	2007	刊行	(明治39- 平成4)	16316 (985)	物理形態	物理形 態、様式	作者(本 人、その 他)	年月日	児童文学 研究者	x	x	
1	国会図書 館	国立国会 図書館専 門資料部	阪谷朗庵関係文 書目録	1990	刊行	(文政5- 明治14)	5,000	物理形態	事項、主 題	主題、内 容形態	年月日	儒学者	○	x	
2	国会図書 館	国立国会 図書館専 門資料部	斎藤実関係文書 目録 書類の部 1、2	1993,1995	刊行	安政5-昭 和11	10,000以 上	経歴、内容 形態	経歴、事 項	事項	年月日	海軍軍 人、政治 家	x	x	
1	その他	我孫子市 史編さん 室	杉村楚人冠関係 資料目録	2005	刊行	(明治5-昭 和20)	6,237	物理形態	出所(部 屋)	@	年月日	ジャーナ リスト	x	○	
2	その他	大阪商工 会議所	五代友厚関係文 書目録	1973	刊行	(天保6-明 治18)	4,500	物理形態	主題、事 項	事項	年月日	実業家、 大阪商法 会議所初 代会頭	○	x	
3	その他	(福建会 館)	王敬祥関係文書 目録	1996	刊行	(明治5-大 正11)	175	@	@	@	@	福建会館 会長	○	x	
4	その他	多数の大 学教授に よる研究 会	新城文庫目録	2000	刊行	(明治6-昭 和13)	2,351	出所(人 物)	形態	@	年代順	京大総 長、上海 自然科学 研究所長	○	x	
5	その他	北海道ア イス民族 文化セン ター	久保寺彦彦文庫 文書資料・写真 資料目録	2001	刊行	(明治35- 昭和46)	(858)	物理形態	物理形 態、時期	@	@	民族・言 語学者、 教授	x	○	

参考資料 18 小野増平氏履歴

昭和 22 (1947) 年生

学 歴

昭和 40 年 3 月 広島大学教育学部附属福山高校卒業

昭和 45 年 3 月 東京教育大学文学部仏語仏文科卒業

職 歴

昭和 45 年 4 月 中国新聞社入社 試用社員 総務局付

昭和 45 年 7 月 社員 編集局報道部

昭和 46 年 1 月 呉支社編集部

昭和 49 年 2 月 東京支社編集部

昭和 52 年 3 月 東京支社編集部 (主任格)

昭和 53 年 3 月 編集局第一整理部 (主任格)

昭和 57 年 3 月 課長待遇

昭和 58 年 3 月 編集局報道部 (課長待遇)

昭和 60 年 3 月 課長格

昭和 63 年 3 月 部次長待遇

平成 2 年 8 月 ニューヨーク支局長

平成 3 年 3 月 部次長格

平成 5 年 7 月 編集局報道部 (部次長格)

平成 6 年 3 月 編集局報道部次長 (部次長格)

平成 7 年 3 月 編集局編集委員 (部長・総合デスク担当)

平成 8 年 3 月 呉支社編集部長

平成 10 年 3 月 呉支社編集部長兼論説委員会委員

平成 11 年 3 月 部長格 呉支社編集グループリーダー

平成 12 年 3 月 局次長格 編集製作本部論説委員会副主幹 (局次長)

平成 13 年 3 月 編集制作本部論説委員会副主幹 (局次長) (局次長格) (組織の
改正による名称変更)

平成 14 年 2 月 局長格 東京支社長

平成 17 年 取締役編集担当 編集局長
平成 18 年 取締役編集制作本部長 編集・論説・制作管理担当
平成 18 年 12 月 退任
平成 19 年 9 月 広島経済大学メディアビジネス学科教授

平成 23 (2011) 年没 (享年 64 歳)

参考資料 19.長岡半太郎略歴

1865 (慶応元) 年 肥前国大村に誕生

学 歴

1882 (明治 15) 年 東京大学予備門卒業
同年 東京大学理学部へ入学 (86 年より帝国大学に改称)
1883 年 物理学科へ進学
1887 年 大学院へ進学 (至 1889 年)

職 歴

1888 年 9 月 帝国大学物理学実験指導嘱託
1890 年 4 月 帝国大学理科大学助教授 (至 1896 年)
1892 年 7 月 震災予防調査委員会 委員
1893 年 1 月 博士号 (理学) 取得
同年 3 月 数理物理学研究のためドイツ留学
1896 年 9 月 帰国 理科大学教授 (97 年より東京帝国大学に改称) (至
1926 年)
1898 年 3 月 中等学校教員検定委員 (至 1899 年)
1899 年 4 月 高等師範学校物理学講師嘱託 (1 年)
1899 年 5 月 測地学委員会 委員
1900 年 5 月 第 1 回万国物理学会に出席 磁気歪について講演

1901年1月	理学文書目録委員会 委員
1901年5月	東京数学物理学会委員長に当選就任（1913年も同様）
1906年9月	帝国学士院 ²⁴⁷ 会員（至1939年）
1909年4月	東北帝国大学理科大学創立準備委員 囑託
1917年（大正6年）6月	理化学研究所研究員 物理学部長（至1921年）
1919年11月	東京帝国大学評議員（至1925年）
1920年11月	日本学術研究会 ²⁴⁸ 議会員（物理学部長）（至1939年）
1921年3月	理化学研究所 主任研究員（至1946年）
1925年 7月	ケンブリッジ大学から名誉博士号授与
1926年1月	東京帝国大学付置 地震学研究所 囑託（至1950年）
1931年（昭和6年）5月	大阪帝国大学 初代学長（至1934年）
1933年2月	日本学術振興会 学術部長（至1939年）
1933年10月	国防協議会 会員
1934年2月	貴族院議員（帝国学士院選出）（至1947年）
1935年8月	度量衡制度調査委員会 委員
1939年2月	日本学術振興会 ²⁴⁹ 理事長（至1947年）
同年3月	帝国学士院 院長（至1948年）
1940年6月	日本学術研究会 会員（至1943年）
同年8月	全国科学技術聯盟 理事長

²⁴⁷ 帝国学士院は、研究者に対する顕彰等の事業を通じ、日本の学術の発展を図る目的で設置された。設置根拠は、1906年に勅令として公布された「帝国学士院規程」などに基づく。文部大臣の管理下に位置づけられており、職員として置かれた書記にも文部官僚が任じられた。また、貴族院には帝国学士院会員の議席枠が4議席確保されていた。内部組織は会員の専攻分野ごとに別れており、人文科学、社会科学系の会員は第一部、自然科学系の会員は第二部に所属していた。

²⁴⁸ 海外の学術団体との橋渡しを行う。

²⁴⁹ 前身は、昭和天皇から学術奨励のために下賜された下賜金により、昭和7年（1932年）12月に創設された財団法人日本学術振興会。学術研究の助成、研究者の養成のための資金の支給、学術に関する国際交流の促進、学術の応用に関する研究等を行うことにより、学術の振興を図ることを目的とする。

1941年3月 電波物理研究会 会長（至1942年）
1942年12月 海軍科学技術審議会委員（至1943年）
1943年8月 陸海軍電波委員会特別委員
1947年6月 米国学術諮問団受け入れ委員
1948年6月 帝国学士院 会員（至1950年）

1950年（昭和25年） 死去（享年85歳）

参考資料 20.馬場重徳氏履歴²⁵⁰

1909（明治42）年生

学 歴

1928（昭和3）年 早稲田第一高等学院理科入学
1931年 早稲田大学理工学部電気工学科第一分科入学

職 歴

1934年4月 古河電気工業（株）研究員（至1944年3月）
1943年3月 （社）調査研究聯盟研究局企画部第一係主任（至1944年4月）
1944年4月 内閣技術院事務嘱託（奏任待遇）
7月 私立久我山電波工業専門学校教授及び図書館長（至1955年5月）
1945年5月 内閣技術院参議官高等官五等（至9月）
9月 文部省科学教育局科学官
1946年6月 内閣戦争調査会内閣事務官兼任（至9月）

²⁵⁰「馬場重徳略歴」, pp.73-74, 佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程:馬場重徳文書の組織化と分析』 図書館情報大学, 1999年（平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書）

- 1947年6月 学術研究会議外国文献調査研究特別委員会幹事
 (総合目録委員会、学術用語委員会)
 学術研究会議外国文献利用委員会実施委員
 (マイクロフィルム委員会、国際交換委員会)
- 1949年9月 国立国会図書館マイクロ写真委員会委員 (至1954年11月)
- 1950年4月 文部省国立大学附属図書館改善協議会委員
- 1952年2月 オランダ、スペイン含む世界11ヶ国にて学術文献に関する研究(至12月)
- 1953年1月 英国のAslib会員に推薦
 6月 電気学会海外調査専門委員会委員
- 1954年4月 文部省図書館職員養成所講師 (至1956年3月)
- 1955年4月 国立国会図書館文献複製委員会委員
 11月 電気学会調査研究委員会内外雑誌調査専門委員会委員 (至1958年4月)
- 1958年10月 文部省大学学術局学術情報主任官付専門員 (配置換)
- 1959年7月 日本デンマーク協会ステーマン女史接待委員会委員
- 1960年11月 東京教育大学図書館職員採用試験委員
- 1962年2月 山陽技術振興会特別会員に推薦
 10月 国家公務員採用上級試験口述試験官 (1962年度)
- 1964年4月 図書館短期大学講師併任 (至1965年3月)
- 1965年1月 日本マイクロ写真協会特別会員に推薦
 4月 図書館短期大学教授 (配置換)
- 1966年4月 文部省学術奨励審議会専門委員
 12月 文部省ドキュメンテーション講習会講師 (1966年度)
- 1968年3月 筑波共同利用施設設備会第五パネル・メンバー
 文部省委嘱司書講習講師
- 1969年8月 文部省・図書館短期大学共催大学図書館長期研修講師 (至1971年8月)
- 1971年4月 図書館短期大学学生部長 (至1972年3月)
- 1973年4月 同学長事務取扱 (至8月)

- 1974年4月 同図書館長（至1976年3月）
- 1975年4月 日本図書館協会大学図書館部会短大分科会委員・分科会長
（至1977年3月）
- 1976年4月 図書館短期大学学生主事（至1977年3月）
- 5月 日本図書館協会短期大学図書館部会長・常務理事（至1977年4月）
- 1977年4月 図書館短期大学退職（停年）
- 1993（平成5）年没（享年83歳）

参考資料 21. 目録記入要領

(1) 概要目録

- 箱番号… 文書群が入っている中性紙箱の番号
- 内容… おおまかな資料内容と形態（〇〇図書、草稿、ノート、カードなど）
- 年代… 資料の作成年、発行物は発行年を記載
- 点数… まとまり（袋、ひもしばり、カードの束など）を一点として数える
- 特記事項… 図書館短期大学に関する資料
- 箱書き（ダンボール）
- 箱の種類… ヤマト運輸、日通、紙箱、ビニル袋
- 箱書き（個別）… 主にカードが入っている箱のもの
- 箱（個別）の状態… ビニル紐、ガムテープなど
- 備考… 上記の項目で対応できない重要なこと

(2) 内容目録（カード群の場合）

- 所在（ID）… 1(-1)-1（箱番号(-箱の枝番)-資料番号）
- タイトル… 箱書き

箱書きが無い場合、内容から推定し[]で記載

内容を()で補記

→箱書きは馬場本人が書いたものと想定

タイトルだけではカードの内容を表しきれないため、()で

補記する

年代備考…日本の元号を示す

形態 …○×○cm(手製)カードと記載

→手製と既成のものを区別する

点数 …カードの枚数が分からないため「@」を入力

年代 …参考文献の最も新しいものを()で記載

→年代は同封の書籍や、参考文献としてカードに記載されているもののなかから、最も新しいものを記載

備考 …その他の箱書き、同封の資料、カードの索引情報、箱のサイズ

など

参考資料

* 第 1 章第 3 節において参考にした目録* (発行者の 50 音順)

図書館の蔵書目録

『中崎家文書 (1)』 茨城大学附属図書館, 1998 年

『岡山大学所蔵 近世庶民史料目録 第 1 巻』 岡山大学附属図書館, 1973 年
国立国会図書館図書部編『平成 3 年 - 平成 7 年 第 3 編 社会・労働・教育 (2)』
国立国会図書館, 1996 年

『児童図書目録 第 1 分冊』 東京都立日比谷図書館, 1992 年

博物館の収藏品目録

『蔵品目録』 石川県立歴史博物館, 1996 年

『大阪商業大学商業史博物館資料目録—中谷コレクション 3—』 第 12 集 大阪
商業大学商業史博物館, 2009 年

『福富家文書目録』 国立歴史民俗博物館・資料委員会, 1992 年

『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録』 国立歴史民俗博物館, 2000 年

『水木家資料目録』 国立歴史民俗博物館, 2003 年

『埼玉県立博物館館有資料目録Ⅱ』 埼玉県立博物館, 1980 年

『埼玉県立博物館館有資料目録Ⅲ』 埼玉県立博物館, 1981 年

『民俗資料 1 琵琶湖水系漁撈習俗資料(1)』 滋賀県立琵琶湖博物館, 2006 年

『魚類標本 6』 滋賀県立琵琶湖博物館, 2007 年

『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅶ—仙台藩士資料 (家わけ) —』 仙台市博物館,
1994 年

『東京国立博物館蔵書目録 (和書 1)』 東京国立博物館, 1998 年

『栃木県栗山村の維管束植物 I』 栃木県立博物館, 2006 年

『内藤家文書目録 第 1 部』 明治大学博物館事務室, 2007 年

文書館の史料目録

藤實久美子著「川路聖謨・高子史料目録」 『学習院大学史料館紀要』 13 巻 学
習院大学, 2005 年, pp.259-268

井上高聡著「〔目録〕上田誠吉旧蔵宮澤・レーン事件関係資料」 『北海道大学大
学文書館年報』, 2012 年, pp.105-161

埼玉県立文書館編 『埼玉県 行政文書総目録 第 1 集』 埼玉県教育委員会,

1980年復刻

埼玉県立文書館編 『埼玉県教育委員会行政文書総目録 第1集』 埼玉県教育委員会，1987年

『市町村作成地図目録 1』 埼玉県立文書館，1996年

『カラーマイクロフィルム撮影地図目録 I』 埼玉県立文書館，1998年

『カネニ小松史料目録』 東京大学経済学部図書館文書室，2001年

『史料館目録 第60集 越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録（その4）』 国文学研究資料館史料館，1994年

『史料館所蔵史料目録 第64集 山梨県下市町村役場文書目録（その1）』 国文学研究資料館史料館，1997年

調査収集事業部編『史料目録 第82集 出羽国村山郡山家村山口家文書（その2）』 人間文化研究機構国文学研究資料館，2006年

調査収集事業部編『史料目録 第92集 愛知県下諸家文書目録（その1）』 人間文化研究機構国文学研究資料館，2011年

その他の機関の目録

伊奈町史編集室編 『伊奈町の石仏』 北足立郡伊奈町，1986年

伊奈町史編集室編 『伊奈町の金石文』 北足立郡伊奈町，1987年

『浦和市史調査報告書第十五集 関野家文書目録』 浦和市総務部市史編さん室，1983年

『大阪商業大学商業史研究所資料目録 第四集』 大阪商業大学商業史研究所，1996年

教育委員会市史編さん室編 『春日部市諸家所蔵文書目録（1）』 埼玉県春日部市，1976年

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課編 『埼玉県文化財目録』 埼玉県教育委員会，2003年

平勢隆郎・井上直美・河村久仁子編『東京大学東洋文化研究所所蔵古写真資料目録 I 明治の営業写真家 山本讚七郎写真資料目録その1』 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター，2006年

『甲斐国巨摩郡河原部村 小林家文書（布屋文庫）目録』 池田文庫，1996年

図書館の個人文書目録

小野文庫整理委員会編『小野文庫目録』 愛知学院大学附属図書館，1990年
尼崎市立地域研究史料館作成「師岡祐行氏社会運動関係等資料目録」

<http://www.archives.city.amagasaki.hyogo.jp/collections/records/catalogs/pdf/092007c.pdf> (最終閲覧 2015年11月20日)

飯田市立図書館作成「伊藤大八関係文書目録」『飯田市立図書館ウェブページ』

http://www.nanshin-lib.jp/iida/tokusyu/itou/itou_index.html (最終閲覧 2015年11月20日)

『森鷗外資料目録 1984年(昭和59年)版』 文京区立鷗外記念本郷図書館，1985年

『大阪府立中之島図書館蔵 織田文庫目録』 大阪府立中之島図書館，1978年

『大阪府立中之島図書館蔵 藤沢文庫目録』 大阪府立中之島図書館，1991年

国際基督教大学図書館編『内村鑑三記念文庫目録 第2版(増補訂正)』 内村鑑三先生記念文庫設置世話人会，1971年

『板倉文書解説目録 牧野信一資料解説目録 報徳集書目録』 小田原市立図書館，1970年

國學院大學図書館調査室梧陰文庫整理委員会編『梧陰文庫目録』 國學院大學図書館，1963年

国立教育研究所附属教育図書館編『志水義暉文庫目録』 国立教育研究所，1986年

『漱石文庫目録』 東北大学附属図書館，1971年

『小川太郎文庫目録』 日本福祉大学附属図書館，1987年

一橋大学図書館作成「大塚金之助資料目録(2012年3月31日現在)」

<http://www.lib.hit-u.ac.jp/catalog/otsukapapers/Ot-list.pdf> (最終閲覧 2015年11月20日)

『広島修道大学所蔵 武井文庫目録』 広島修道大学図書館，1974年

広島大学図書館編『方言の山野を歩く～藤原与一文庫目録～』 広島大学出版会，2012年

『弘前図書館蔵書目録 成田文庫の部』 弘前市立弘前図書館，1984年

『福島大学附属図書館所蔵 大塚久雄文庫目録』 福島大学附属図書館，2002年

三重県立図書館作成「鈴木敏雄関係資料目録」『三重県立図書館ウェブページ』
<http://www.library.pref.mie.lg.jp/list/suzukitoshio/index.htm>（最終閲覧 2015
年 11 月 20 日）

『南方熊楠邸資料目録』 南方熊楠邸保存顕彰会，2005 年

『沖野岩三郎文庫目録』 明治学院大学図書館，1982 年

『宮沢俊義文庫目録』 立教大学図書館，1988 年

『立命館大学図書館蔵 末川文庫目録』 立命館大学図書館，1990 年

早稲田大学大隈研究室編『大隈文書目録』 早稲田大学図書館，1952 年

『大西祝資料目録』 早稲田大学図書館，1991 年

博物館の個人文書目録

『梁川剛一資料目録』 市立函館博物館，1996 年

『茨城県天心記念五浦美術館所蔵資料目録』 茨城県天心記念五浦美術館，2007
年

「久留島武彦関係史料 I - V」『収蔵史料目録 4』 大分県立先哲史料館，2006 年，
pp.25-38

斎藤修啓・鈴木一義著「棚橋源太郎資料について—棚橋資料目録—」『Bulletin
of the National Science Museum. Series E, Physical sciences&engineering』
21 巻 国立科学博物館，1998 年，pp.9-57

『大久保利通関係史料目録』 国立歴史民族博物館，2003 年

国立民族学博物館作成「菊沢季生アーカイブ 日記」『国立民族学博物館ウェブペ
ージ』

[http://nmearch.minpaku.ac.jp/kikusawa-archives/kikusawa_ArchiveList/kiku
sawa_ArchiveList_nikki.htm](http://nmearch.minpaku.ac.jp/kikusawa-archives/kikusawa_ArchiveList/kikusawa_ArchiveList_nikki.htm)（最終閲覧 2015 年 11 月 20 日）

『開館 30 年憲政記念館所蔵資料目録』 衆議院憲政記念館，2002 年，（「村川一
郎文書」「上村耕作文書」所収）

『岸田劉生 作品と資料』 東京国立近代美術館，1996 年

『柳瀬文庫目録』 東京都美術館，1991 年

「2. 井上快庵関係文書」『平成 12 年度収集 収蔵品目録 18』 福岡市博物館，
2003 年，pp.113-119

文書館の個人文書目録

板橋区公文書館作成「櫻井徳太郎文庫」『板橋区役所ウェブページ』, 2008年4月1日公開

http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/000/000982.html (最終閲覧 2015年11月20日)

「鈴木荘六文書目録」 pp.3-49, 「山口重次文書目録」 pp.93-118, 「赤井春海文書目録」 pp.119—130, 調査収集事業部編『史料目録 第95集 近現代文書目録 (その1)』 人間文化研究機構国文学研究資料館, 2012年

沖縄公文書館作成「平良幸市文書」『沖縄公文書館ウェブページ』

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/collection/2014/08/post-459.html> (最終閲覧 2015年11月20日)

沖縄公文書館作成「大田政作文書」『沖縄公文書館ウェブページ』

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/collection/2014/10/post-460.html> (最終閲覧 2015年11月20日)

北海道立文書館作成「私文書階層表示 寺田真一資料」 『北海道立文書館ウェブページ』

http://www.bunsho.pref.hokkaido.jp/monjokan/mj_shi_kaisou.asp (最終閲覧 2015年11月20日)

北海道立文書館作成「私文書階層表示 坂本直寛文書」『北海道立文書館ウェブページ』

http://www.bunsho.pref.hokkaido.jp/monjokan/mj_shi_kaisou.asp (最終閲覧 2015年11月20日)

広島県立文書館作成「広島市 今堀誠二文書仮目録」, 2007年

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/25340.pdf> (最終閲覧 2015年11月20日)

中武香奈美著「中村房次郎関係文書目録」『横浜開港資料館紀要』20号 横浜開港資料館, 2002年, pp.182-220

中武香奈美著「武田家旧蔵アーネスト・サトウ関係資料目録 (1)」『横浜開港資料館紀要』21号 横浜開港資料館, 2001年, pp.177-212

中武香奈美著「武田家旧蔵アーネスト・サトウ関係資料目録 (2)」『横浜開港資料館紀要』22号 横浜開港資料館, 2002年, pp.219-238

中武香奈美著「武田家旧蔵アーネスト・サトウ関係資料目録(3)」『横浜開港資料館紀要』24号 横浜開港資料館, 2006年, pp.219-238

松本洋幸著「有吉忠一関係文書目録」『横浜開港資料館紀要』22号 横浜開港資料館, 2004年, pp.170-218

大学の個人文書目録

小林和幸著「谷家所蔵「谷干城関係文書」目録並びに解題」『青山史学』27巻 青山学院大学, 2009年, pp.75-150

大藪岳史著「上田静一資料目録」『人権問題研究』大阪市立大学, pp.336-342
『末川博関係資料目録』大阪市立大学大学史資料室, 2001年

大阪経済大学日本経済史研究所編『杉田定一関係文書目録』大阪経済大学図書館, 2007年

大阪大学アーカイブズ作成「五島忠久関係文書目録」

http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/ed_support/archives_room/files/goto_list.pdf (最終閲覧 2015年11月20日)

大阪大学アーカイブズ作成「高木修二関係文書目録」

http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/ed_support/archives_room/files/takagi_list.pdf (最終閲覧 2015年11月20日)

『湯浅年子資料目録 続』お茶の水女子大学ジェンダー研究センター, 1998年

『湯浅年子資料目録』お茶の水女子大学女性文化研究センター, 1993年

『保井コノ資料目録』お茶の水女子大学女性文化研究センター, 2004年

『安田鍬之助関係文書』学習院大学史料館, 1990年

「大島圭介関係史料目録」『学習院大学史料館紀要』20号 学習院大学史料館, 2014年, pp.24-37

村松岐夫・若月剛史著「村松岐夫関係文書目録」『学習院大学法学会雑誌』46巻1号 学習院大学法学会, 2010年, pp.153-198

山岡文書研究会編『学習院大学法経図書室所蔵 山岡萬之助関係文書目録』学習院大学法学部, 1988年

『伊東祐彦関係資料目録』九州大学大学文書館, 2007年

三浦壮著「【資料紹介】熊谷恒夫文書目録」『エネルギー史研究』25巻 九

- 州大学付設記録資料館産業經濟資料部門，2010年，pp.97-111
- 『河上肇文庫目録』 京都大学經濟学部，1979年
- 「〈資料解説・目録〉木下広次関係資料」 『京都大学大学文書館研究紀要』 第3号 京都大学大学文書館，2005年，pp.79-127
- 「〈資料解説・目録〉鳥養利三郎関係資料」 『京都大学大学文書館研究紀要』 第10号 京都大学大学文書館，2012年，pp.55-78
- 森征一・豊島二二夫監修・法文化研究会「安達峰一郎関係資料目録および略年譜」
『法学研究』72卷7号 慶應義塾大学法学研究会，1999年，pp.57-99
- 『九鬼周造文庫目録』 甲南大学哲学研究室，1976年
- 『深沢暹関係文書目録』 國學院大學日本文化研究所，2005年
- 小栗勝也著「袋井関連人物参考資料目録（2）～浅羽佐喜太郎、川村驥山関連資料目録～」『静岡理工科大学紀要』19卷 静岡理工科大学，2011年，pp.83-92
- 実践女子学園図書館編『下田歌子関係資料総目録』 実践女子学園，1980年
- 新城文庫研究会編『新城文庫目録』 不明，2000年
- 『矢部貞治関係文書目録 4 書類編・書簡編更訂』 政策研究大学院大学政策情報研究センター，2002年
- 『松浦文庫目録』 東京学芸大学附属図書館，1965年
- 木村健次郎編『植村記念 佐波文庫目録』 東京女子大学附属比較文化研究所，1965年
- 「青山なを資料目録 1 ノート」『東京女子大学附属比較文化研究所』51号 東京女子大学附属比較文化研究所，1990年，pp.1-45
- 「青山なを資料目録 2 個別研究資料」『東京女子大学附属比較文化研究所』52号 東京女子大学附属比較文化研究所，1991年，pp.47-76
- 『古在由直史料目録』 東京大学史史料室，2007年
- 『内田祥三史料目録』 東京大学史史料室，2008年
- 戸谷穂高・杉山巖著「東京大学文学部所蔵富田文書の紹介」 『東京大学日本史学研究室紀要』15号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室，2011年，pp.291-309
- 『花房義質関係文書目録』 東京都立大学付属図書館事務室，1979年
- 東北大学史料館作成「本多光太郎文書」

<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/data/kojin-kikan/prof/honda-p/list-honda-p>

[df](#) (最終閲覧 2015 年 11 月 20 日)

東北大学史料館作成「村岡典嗣文書 目録」

<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/data/kojin-kikan/prof/muraoka/list-muraoka>

[ka.pdf](#) (最終閲覧 2015 年 11 月 20 日)

『荒木光太郎文書解説目録』 名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策
研究センター情報資料室, 2014 年

『名古屋大学大学文書資料室保存資料目録 第7集』(内容は渋沢元治関係資料)
名古屋大学大学文書資料室, 2007 年

島岡眞著「奈良坂源一郎関係史料目録(一)―履歴関係資料のリスト及び解題―」

『名古屋大学博物館報告』22号 名古屋大学博物館, 2006年, pp.249-266

島岡眞著「奈良坂源一郎関係史料目録(二)―手稿, 絵葉書等にみる〈紀行〉―」

『名古屋大学博物館報告』23号 名古屋大学博物館, 2007年, pp.27-64

島岡眞著「奈良坂源一郎関係史料目録(三)―写真・短冊―」 『名古屋大学博
物館報告』24号 名古屋大学博物館, 2008年, pp.1-19

島岡眞著「奈良坂源一郎関係史料目録(四・完)―収集家・博物家としての奈良
坂―」 『名古屋大学博物館報告』27号 名古屋大学博物館, 2011年, pp.45-49

『瀧川文庫目録 第2分冊 和書・本文篇』 名古屋大学法学部, 1987年

『美濃部洋次満洲関係文書目録』 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報セ
ンター, 2000年

『広島大学所蔵 森戸辰男関係文書目録』上巻・下巻 広島大学文書館, 2002
年

『横浜市所蔵 森戸辰男関係文書目録』 広島大学文書館, 2012年

『広島大学文書館所蔵 大牟田稔関係文書目録 資料編1』 広島大学文書館,
2013年

『広島大学文書館蔵 小野増平関係文書目録 個別編』 広島大学文書館, 2015
年

松尾雅嗣・池田正彦編『峠三吉資料目録』 広島大学平和科学研究センター, 2004
年

広島大学文書館編『広島大学原爆放射線医科学研究所蔵 平岡敬関係文書目録(韓

国人・朝鮮人被爆者問題関係史料)』 広島大学平和科学研究センター, 2005年

『向坂逸郎文庫目録 V 原資料』 法政大学大原社会問題研究所, 2001年
梅文書研究会編『法政大学図書館所蔵 梅謙次郎文書目録』 法政大学ポアソナード記念現代法研究所, 2000年

山本美穂子著「〔目録〕川嶋一郎関係資料」 『北海道大学大学文書館年報』第5号 北海道大学大学文書館, 2010年, pp.167-185

山本美穂子著「〔目録〕唐澤隆三・富美子関係資料」 『北海道大学大学文書館年報』第7号 北海道大学大学文書館, 2012年, pp.93-99

『田島義方文書目録』 明治大学歴史編纂資料室, 1967年

望月雅志著「志富實氏寄贈 志富靱負関係文書」目録 『早稲田大学史紀要』早稲田大学大学史資料センター 44巻, 2013年, pp.360-424

和田敦彦著「早稲田大学図書館所蔵田口卯吉関係資料目録 アーカイブズ教育の一環として」『早稲田大学教育学部 学術研究(国語・国文学編)』第58号 早稲田大学教育会, 2010年, pp.11-34

『宮島誠一郎文書目録』 早稲田大学図書館, 1997年

『伊原青々園宛書簡目録』 早稲田大学図書館, 1998年

文学館の個人文書目録

『県立神奈川近代文学館収蔵文庫目録 10 中里恒子文庫目録』 神奈川文学振興会, 1999年

『県立神奈川近代文学館収蔵文庫目録 16 滑川道夫文庫目録-1(特別資料・雑誌)』 神奈川文学振興会, 2007年

『日本近代文学館所蔵資料目録 2 芥川龍之介文庫目録』 日本近代文学館, 1977年

『日本近代文学館所蔵資料目録 22 塩田良平文庫目録』 日本近代文学館, 1991年

『日本近代文学館所蔵資料目録 27 佐多稲子文庫目録』 日本近代文学館, 2002年

『日本近代文学館所蔵資料目録 28 高橋和巳文庫目録』 日本近代文学館, 2002年

国立国会図書館憲政資料室の個人文書目録

国立国会図書館参考書誌部編『三島通庸関係文書目録』 国立国会図書館，1977年

国立国会図書館専門資料部編『阪谷朗廬関係文書目録』 国立国会図書館，1990年

国立国会図書館専門資料部編『斎藤実関係文書目録 書類の部 1』 国立国会図書館，1993

年

国立国会図書館専門資料部編『斎藤実関係文書目録 書類の部 2』 国立国会図書館，1995

年

国立国会図書館憲政資料室作成「高橋亀吉関係文書（その2）目録」，2011年11月 pdf 作成

その他の機関の個人文書目録

『五代友厚関係文書目録』 大阪商工会議所，1973年

『鎌倉芳太郎資料目録』 沖縄県立芸術大学附属研究所，1998年

「池田寅二郎関係文書目録（1）」『国家学雑誌』84巻1・2号 国家学会事務所，1971年，pp.43-98

「上山満之進ならびに穂積陳重・重遠関係文書目録」『国家学会雑誌』91巻7・8号 国家学会事務所，1978年，pp.461-503

『山田耕筰資料目録一第1巻』 遠山現代音楽研究所，1981年

渡部宗助編著『石川二郎旧蔵資料目録稿 森戸辰男関係文書目録稿』 国立教育研究所，1992年

佐藤秀夫著『厚沢留次郎文書目録』 国立教育研究所，1988年

『久保寺逸彦文庫 文書資料・写真資料目録』 北海道立アイヌ民族文化研究センター，2001年

王柏林・松本武彦編『王敬祥関係文書目録』 福建会館，1996年

『マイクロフィルム版 後藤新平文書目録』 水沢市立後藤新平記念館，1980年

我孫子市史編さん室編『杉村楚人冠関係資料目録（Ⅲ）』 我孫子市教育委員会，

2005 年

吉村久美子著「曾我部右吉 四阪島煙害関連資料目録」『愛媛県総合科学博物館
研究報告』17号 愛媛県総合科学博物館，2012年，pp.63-84

伊東久智著「丸山達雄氏寄贈安部磯雄関係資料」(2012年度寄贈)目録『早稲田
大学史記要』45巻 早稲田大学大学史資料センター，2014年，pp.302-332

『植村記念佐波文庫目録』 東京女子大学附属比較文化研究所，1965年

参考文献

修士論文の参考文献

- 大野瑞男著 「公文書館法と文書館」 歴史科学協議会編 『歴史評論』第 463 号 校倉書房, 1988 年, pp.1-11
- 鮎澤修著『分類と目録』 日本図書館協会, 1995 年
- 石田武久著「博物館資料分類目録法」 加藤有次他編『博物館学概論』 雄山閣出版, 2000 年, pp.156-162
- 大城善盛著「図書館における書誌コントロール—目録の機能—」 日本図書館学会研究委員会編『図書館目録の現状と将来』 日外アソシエーツ, 1987 年, pp.55-71
- 君塚仁彦著「5 章 アーカイブズと博物館・博物館学」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学上』 柏書房, 2003 年, pp.245-261
- 栗山欣也著「史料の保存と活用—図書館・博物館そして文書館—」『文書館紀要』9 号 埼玉県立文書館, 1996 年, pp.2-16
- 小西和信・田窪直規共著「1 章 目録法」 小西和信・田窪直規編『情報資源組織演習』 樹村房, 2013 年, pp.2-21
- 埼玉県地域史料保存活用連絡協議会編『地域文書館の設立に向けて 4 地域史料の保存と管理』 埼玉県地域史料保存活用連絡協議会, 1994 年
- 三中信宏著「知識の樹」 日本図書館協会現代の図書館編集委員会編『現代の図書館』第 48 巻第 4 号 日本図書館協会, 2010 年, pp.262-269
- 柴田敏隆著「2 資料の受入から収納まで」「3 資料登録の基準」 古賀忠道・徳川宗敬・樋口清之監修『資料の整理と保管』 雄山閣出版, 1979 年, pp.65-90
- 柴田敏隆編集責任『第 6 巻 資料の整理と保管』 雄山閣出版, 1979 年, pp.131-247
- 志村尚夫著『目録学序説—原理と事例からのアプローチ』 学芸図書, 1981 年, pp.18-43
- 永田治樹著「第 4 章 アーカイブズと図書館情報学—メタデータの相互運用性」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学上』 柏書房, 2003 年, pp.219-244
- 根本彰著「地域資料とは何か—国立国会図書館調査に基づいて—」『アーキビスト』71 号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会, 2009 年, pp.1-8
- 丸子亘著「博物館資料分類法の発達と問題点」 『立正大学文学部論叢』第 14

- 号 立正大学文学部, 1962年, pp.1-30
- 安澤秀一著「情報資源保管サービス基地としてのアーカイブズ・ライブラリ・ミュージアム：目録記述要素の特性比較（講演会要旨）」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』21号 一橋大学, 2001年, pp.32-43
- 安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店, 1988年, pp.51-98
- 安藤正人著「記録史料目録論」『歴史評論』497号 歴史科学協議会, 1991年9月, pp.63-76
- 大藤修著「第六章 近世文書の整理と目録編製の理論と技法」大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』吉川弘文館, 1986年, pp.202-285
- 神谷智著「文書資料目録における資料表記方法の問題点—『名古屋大学大学史資料室保存資料目録』を事例として—」『名古屋大学史紀要』10巻 名古屋大学, 2002年, pp.49-68
- 永田治樹・増田元・竹内比呂屋共著「文書目録情報のデータベース化の問題」『大学図書館研究』第33号 大学図書館研究編集委員会, 1988年, pp.41-51
- 中野美智子著「近世地方史料の整理論の動向について—所蔵目録作成の立場から—」地方史研究協議会編『地方史の新視点』雄山閣, 1988年, pp.134-155
- 原島陽一著「冊子型史料の形態表示について」『史料館研究紀要』14号 国文学研究資料館内国立史料館, 1984年, pp.75-90
- 玄圭燮著・林昌夫訳「書誌記述の原則確立のための覚書」『大学図書館研究』27巻 大学図書館研究編集委員会, 1985年, pp.8-14
- 鷲塚研著「道立文書館の資料整理について」『研究紀要』第2号 北海道立文書館, 1987年3月, pp.79-100
- 大藤修著「第6章 史料所在調査法」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店, 1988年, pp.155-183
- 小島浩之著「資料保存の考え方—現状と課題—」『情報の科学と技術』60巻2号 情報科学技術協会, 2010年, pp.42-48
- 坂口貴弘著「段階的整理におけるコストパフォーマンス」『アーカイブズ学研究』8号 日本アーカイブズ学会, 2008年, pp.60-79
- 鈴江英一著『近現代史料の管理と史料認識』北海道大学図書刊行会 2002年
- 高橋実著「5章 地域史料調査論」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と

- 編成記述』 思文閣出版，2014年，pp.162-180
- 原島陽一著「第4章 史料の保存と補修」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店，1988年，pp.99-130
- 廣瀬睦著「初期整理段階の史料保存手当」全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『日本のアーカイブズ論』 岩田書院，2003年，pp.483-499
- 文学部所蔵文書調査団著「東京大学文学部所蔵文書の整理作業について」『東京大学日本史学研究室紀要』4号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室，2000年，pp.231-238
- 小川千代子「ISAD(G)の実装：アジア歴史資料センターの階層検索システム」『レコード・マネジメント』 記録管理学会，2002年，pp.10-25
- 鎌田和栄著「公文書館の国際化と史料記述標準化問題について—21世紀にあたり公文書館・アーキビストは何をしていくべきか—」『記録と史料』11号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会，2001年，pp.37-47
- 坂口貴弘著「アーカイブズの編成・記述とメタデータ」『情報の科学と技術』60巻9号 情報科学技術協会，2010年，pp.384-389
- 柴田知彰著「記録史料群の内的秩序の復元に関する一考察」『研究紀要』第7号 秋田県公文書館，2001年，pp.25-48
- 柴田知彰著「アーカイブズの内的秩序構成理論と構造分析の課題」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版，2014年，pp.43-69
- 清水善仁著「アーカイブズ編成・記述・検索システム論の成果と課題」『アーカイブズ学研究』11号 日本アーカイブズ学会，2009年，pp.55-72
- 田窪直規著「国際標準記録史料記述一般原則：ISAD（G）—その基本構造・考え方と問題点—」『レコード・マネジメント』44号 記録管理学会，2002年，pp.1-22
- 森本祥子著「国際標準記録史料記述（一般原則）」適用の試み—行政文書の場合—『史料館研究紀要』29号 国文学研究資料館史料館，1998年，pp.1-29
- 森本祥子著「オーストラリアのアーカイブズ・システムについて—概観—」高埜利彦研究代表『歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書，平成15年度～平成18年度） 学習院大学，2007年，pp.222-236
- 森本祥子著「アーカイブズ編成・記述の原則再考—シリーズ・システムの理解から—」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』 思文閣出版，2014年，pp.71-96
- 吉田千絵著「国際標準：団体、個人、家に関する記録史料オーソリティ・レコー

- ド；ISAAR(CPF)第2版の概要』『研究紀要』20号 北海道立文書館，2005年，pp.42-72
- 伊藤隆著「特別講演2 個人文書の現状と課題」『広島大学文書館紀要』7号 広島大学文書館，2005年，pp.28-41
- 伊藤隆著「個人文書の収集・保存・公開について」藤原良雄編『図書館・アーカイブズとは何か』藤原書店，2008年，pp.82-91
- 井上真琴・小川千代子著「アーカイブ資料整理へのひとつの試み—同志社大学所蔵田中稻城文書・竹林熊彦文書の場合—」『大学図書館研究』77号 大学図書館研究編集委員会，2006年，pp.1-11
- 大野瑞男著「近世史料分類の現状と基礎的課題」『史料館研究紀要』第1号 史料館，1968年3月，pp.267-283
- 小風秀雅著「近代私文書の評価・選別に関する方法的試論」『記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究：研究レポート』3号 国文学研究資料館史料館，2000年，pp.84-88
- 加藤聖文著「3章 アーカイブズの編成と記述—近現代史料をめぐる課題」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 下』柏書房，2003年，pp.215-235
- 加藤聖文著「鈴木荘六関係史料の紹介—近現代個人史料の受け入れと史料館の立場—」『史料館報』80号 国文学研究資料館史料館，2004年，pp.9-10
- 加藤聖文著「近現代史料のEAD記述の実例報告—国立国会図書館憲政資料室所蔵大野緑一郎関係文書—」『歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書，平成15年度～平成18年度）学習院大学，2007年，pp.124-129
- 加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』思文閣出版，2014年，pp.181-199
- 鎌田永吉著「近世史料の分類〔遺稿〕—第18回近世史料取扱講習会講義草稿—」『史料館研究紀要』第4号 国立史料館，1977年3月，pp.1-34
- 呉屋美奈子・富永一也著「公文書館における私文書の収集と整理：実践と課題」『沖縄県公文書館研究紀要』第9号 沖縄県公文書館，2007年，pp.85-103

- 桑原伸介著「国立国会図書館憲政資料室」三上昭美編『日本古文書学講座 11 近代編Ⅲ』 雄山閣，1979年，pp.51-66
- 中村尚美著「大隈重信文書」三上昭美編『日本古文書講座 第11巻 近代編Ⅲ』 雄山閣出版，1979年，pp.66-74
- 小池聖一著「解題」 森戸文書研究会編『広島大学所蔵森戸辰男関係文書目録〈上巻〉』 広島大学文書館，2002年，pp.1-29
- 斎藤拓海・石田雅春・小池聖一・小宮山道夫著「解題」 『大牟田関係文書目録資料編1』 広島大学文書館，2013年，pp.i-xi
- 斎藤忠一著「小樽・高島南弥太郎家文書の整理を終えて」 『研究紀要』 第10号 北海道立文書館，1995年3月，pp.1-36
- 佐々木隆著 「近代文書論序説」 『日本歴史』第628号 日本歴史学会，2000年，pp.39-57
- 鈴江英一著「近現代史料論の形成と課題—古文書学などとの接点について—」 『史料館研究紀要』 第32号 国文学研究資料館史料館，2001年3月，pp.29-57
- 鈴江英一著「古文書における近現代史料—近現代文書への接近の試み—」 『史料館研究紀要』 第34号 国文学研究資料館史料館，2003年3月，pp.1-20
- 高野修著「第1章 記録史料（アーカイブズ）とは何か」 文書館問題研究会・横浜開港資料館編『歴史資料の保存と公開』 岩田書院，2003年，pp.11-15
- 武田晴人著「経営史料としての個人文書—石川一朗文書の整理に即して—」 『企業と史料』 1巻 企業史料協議会，1986年3月，pp.91-104
- 塚本学著「文学史料の整理をめぐる問題若干—福富家文書目録の作成を終えて—」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第45集 国立歴史民俗博物館，1992年12月，pp.327-343
- 仲宗根良江・砂川真理子著「大学図書館における私文書整理—新崎盛暉文庫整理概要—」 『地域研究』 13号 沖縄大学地域研究所，2014年，pp.153-165
- 橋本陽著「個人文書の編成—環境アーカイブズ所蔵サリドマイド関連資料の編成事例—」 『レコード・マネジメント』 66号，記録管理学会，2014年3月，pp.42-56
- 平野正裕著「近代文書整理法序説—文書の「成立様式」と「集積文書」について—」 『横浜開港資料館紀要』 第12号 横浜開港資料普及協会，1994年3月，pp.45-64
- 平野正裕著「近代文書の整理と活用」 『地方史研究』 255号 地方史研究協議会，1995年6月，pp.85-86
- 山本浩幾著「占領期九州地区検閲台本群—ダイザー・コレクション—の再整理と

- 公開」『情報の科学と技術』57巻12号, 2007年, pp.567-574
- 青木睦著 「1章 アーカイブズの保存とは」 国文学研究資料館史料館編 『アーカイブズの科学 下』 柏書房, 2003年, pp.298-325
- 青山英幸著「アーカイブズ編成・情報化の現在」 国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 下』 柏書房, 2003年, pp.181-198
- アーカイブズ・インフォメーション研究会編訳 『記録史料記述の国際標準』 北海道大学図書刊行会, 2001年
- 安藤正人著 「第一章 文書記録の保存・利用と文書館」, pp.2-40, 同著「第七章 近世・近代地方文書研究と整理論の課題」, pp.286-327, 大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』 吉川弘文館, 1986年
- 石田雅春著「解題」 『広島大学文書館紀要』 第15号 広島大学文書館, 2013年, pp.119-124
- 泉正人著「大学の史料の整理と分類」 『早稲田大学史紀要』 31巻 早稲田大学大学史史料センター, 1999年7月, pp.151-168
- 丑木幸男著「アーカイブズの科学とは」, pp.1-14, 同著「6章 近現代の組織体と記録」, pp.119-135, 国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 上』 柏書房, 2003年
- 大串夏身著「第2章 図書館における情報サービスの意義と種類」 大串夏身・齊藤誠一編『情報サービス論』 理想社, 2010年, pp.25-49
- 大友一雄著 「1章 アーカイブズを理解する」 国文学研究資料館史料館編 『アーカイブズの科学 下』 柏書房, 2003年, pp.2-16
- 榎本裕希子著「2 書誌コントロールと標準化」 榎本裕希子・石井大輔・名城邦孝著『情報資源組織論』 学文社, 2012年, pp.12-17
- 岡崎敦著「アーカイブズ, アーカイブズ学とは何か」 『九州大学附属図書館研究開発室年報』 九州大学附属図書館, 2012年7月, pp.1-10
- 岡野裕行著「図書館と文学館の連携」 『情報の科学と技術』 61巻6号 社会法人情報科学技術協会, 2011年6月, pp.233-237
- 加藤有次著 『博物館学総論』 雄山閣, 1996年
- 木野主計著「井上毅文書」 三上昭美編『日本古文書学講座 11 近代編Ⅲ』 雄山閣, 1979年, pp.74-83
- 小池聖一著『近代日本文書学研究序説』 現代史料出版, 2008年, pp.iii, 259-271

- 小池聖一著「大学文書館のサービス戦略」 『情報の科学と技術』 58巻11号
情報科学技術協会, 2008年11月, pp.548-553
- 古賀崇著「レコードキーピング: その射程と機能」 高山正也先生退職記念論文
集刊行会編『明日の図書館情報学を拓く—アーカイブズと図書館経営—』 樹
村房, 2007, pp.60-71
- 鈴木良徳・八重樫純樹著「MLA 記述規則に関する比較研究」 『情報知識学会誌』
20巻2号 情報知識学会, 2010年5月, pp.215-220
- 鈴江英一著「北海道総務部行政資料課」 三上昭美編『日本古文書学講座 11 近代
編Ⅲ』 雄山閣, 1979年, pp.119-133
- 田窪直規著「情報メディアを捉える枠組—図書館メディア、博物館メディア、文
書館メディア等、多様な情報メディアの統合的構造化記述のための—」
『Booklet』, 慶應義塾大学 2001年3月, pp.16-31
- テオ・トマセン著・石原一則訳「アーカイブズ学入門」『アーカイブズ学研究』2
号 日本アーカイブズ学会, 2005年, pp.4-16
- 原島陽一著「国文学研究資料館史料館」 三上昭美編『日本古文書学講座 11 近代
編Ⅲ』 雄山閣, 1979年, pp.111-118
- 三多摩郷土資料研究会編『地域資料入門』 日本図書館協会, 1999年, pp.55-107
- 森本祥子著「4章 アーカイブズの編成と記述標準化—国際的動向を中心に」 国
文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版, 2014年,
pp.237-280
- 安澤秀一著 『史料館・文書館学への道—記録・文書をどう残すか—』 吉川弘
文館, 1985年
- 山崎圭著「2章 アーカイブズの編成と記述—近世史料を中心に」 国文学研究資
料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版, 2014年, pp.199-214
- 中国新聞九十年史刊行委員会編『中国新聞最近十年史 創刊九十周年』 中国新
聞社, 1982年
- 中国新聞社史編さん室編『中国新聞百年史』 中国新聞社, 1992年
- 中国新聞社史編さん室『中国新聞百年史 資料編・年表』 中国新聞社, 1992
年
- 佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程: 馬場重
徳文書の組織化と分析』 図書館情報大学, 1999年(平成8年度~平成10
年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書)

- 馬場重徳先生論文集刊行会編『ドキュメンテーション—馬場重徳先生論文集—』
馬場重徳先生論文集刊行会，1977年
- 桜井宣隆著「馬場重徳先生のご業績の紹介」『図書館短期大学紀要』13号 図書館短期大学，1977年，pp.1-6
- 馬場重徳著『チェック・ドキュメンテーション用語』1994年（馬場の死後佐藤によって出版。草稿のコピー。）
- 板倉聖宣他著『長岡半太郎伝』 朝日新聞社，1973年
- 木村東作著「長岡の地球物理学に関する研究の傾向」『物理学史研究』3巻2号 物理学史研究刊行会，1966年，pp.35-40
- 板倉聖宣・木村東作・八木江里著『長岡半太郎伝』 朝日新聞社，1973年
- 河村豊著「緊急時に科学は注目される 長岡半太郎」『材料技術』，2005年
「長岡半太郎博士の業績」『心』4巻2号 平凡社，1951年，pp.49-50
- 木村東作著「長岡半太郎の残した日記、ノート類」『日本物理学会年回講演予稿集』
19巻1号，1964年，p.104
- 牛込研一・今泉憲一著「長岡半太郎と世界物理学との関係—外国論文別刷の解析からみた—（要約）」『物理学史研究』5巻2号 物理学史研究刊行会，1969年，pp.13-36
- 田辺一男・松川為訓共著「長岡半太郎ののこした大学ノート・別刷と教え子たち」
『物理学史研究』4巻1号 物理学史研究刊行会，1968年，pp.35-56
- 岡本拓司他著「長岡半太郎の新資料について」『国立科学博物館研究報告 E類（理工学）』第29巻，国立科学博物館，2006年，pp.7-13
- 金谷和至・高岩義信編集責任『湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一の遺した史料』
つくば技術大学，2011年
- 全日本博物館学会編『博物館学事典』 雄山閣，2011年
- 倉田公裕監修『博物館学事典』 東京堂出版，1996年
- 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会監修『文書館用語集』 大阪大学出版会，
1997年
- 小川千代子・高橋実・大西愛編 『アーカイブズ事典』 大阪大学出版会，2003年
- 日本図書館協会ハンドブック編集委員会編 『図書館ハンドブック 第6版』 日

- 本図書館協会，2005年
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典 第4版』
丸善出版，2013年
- 図書館情報学ハンドブック編集委員会編『図書館情報学ハンドブック第2版』丸
善株式会社，1999年
- 伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』吉川弘文館，2004年
- 中原茂仁著「公文書等の管理に関する法律」について』『アーカイブズ』37号 国
立公文書館，2009年，pp.32-41
- 大友一雄編『アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究』人間文化研究機構
国文学研究資料館，2006年（平成15年度～17年度 科学研究費補助金（基
盤研究（B））研究成果報告書）
- 水谷長志著「MLA連携のフィロソフィー」『情報の科学と技術』61巻6号 2011
年，pp.216-221
- 草薙由美著「第3章 博物館における文書の保存と活用—相模原市立博物館の事
例—」文書館問題研究会・横浜開港資料館編『歴史資料の保存と公開』岩
田書院，2003年，pp.127-145
- 中村稔著『文学館を考える』青土社，2011年
- 松崎裕子著「資産としてのビジネスアーカイブズ：付加価値を生み出す活用の必
要性と課題」『情報の科学と技術』62巻10号，2012年，pp.422-427
- 企業史料協議会編『企業アーカイブズの理論と実践』丸善出版，2013年
- 岡部建次・広瀬順皓著「個人文書目録データベースの作成」『文化情報学：駿河台
大学文化情報学部紀要』第2巻 駿河大学大学文化情報学部，1995年，
pp.37-43
- 二宮三郎著「憲政資料室前史（下）」『参考書誌研究』第45号，1995年，pp.18-47
- 藤田壮介著「国立国会図書館憲政資料室のいま」『情報の科学と技術』62巻10
号 情報科学技術協会，2012，pp.434-439
- 小林章子著「日本近代文学館における資料の整理について」『全国文学館協議会会
報』6号 全国文学館協議会，1998年，pp.2-9
- 今井恵子著「本館における資料整理の方法と情報システムについて」『風：文学紀
要』2号 群馬県立土屋文明記念文学館，1998年，pp.106-114

- 今井恵子・吉田佳代子著「特別資料の整理方法について」『風：文学紀要』群馬県立土屋文明記念文学館，1999年，p.105-114
- 上田良和著「古文書・私文書資料の整理と情報提供—その現状と課題について—」『神奈川県立公文書館紀要』6号 神奈川県立公文書館，2008年，pp.213-235
- 有賀暢迪・沓名貴彦著「国立科学博物館所蔵・長岡半太郎資料の概要とその再整理について」『科学史研究』53巻 272号 日本科学史学会，2015年，pp.403-405
- 高橋実著「5章 地域史料調査論」国文学資料館編『アーカイブズの科学下』 柏書房 pp.163-180
- 白井哲哉著「民間史料から文書館・公文書館をとらえ直す—問題提起として—」『地方史研究』55巻 2号 地方史研究協議会，2005年，pp.5-12
- 日本学術会議作成「歴史資料保存法の制定について（勧告）」（1969.11.1）全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『日本の文書館運動—全史料協の20年』岩田書院，1996年
- 藤本守著「この人を知る 大久保利謙」『国立国会図書館月報』606号 国立国会図書館，2011年，pp.17-19
- 桑尾光太郎・谷本宗生著「第2章 大学アーカイブズのあゆみ」 全国大学史料資料協議会編『日本の大学アーカイブズ』 京都大学学術出版会，2005年，pp.21-37
- 「東京大学史史料室ニュース」1号 東京大学史史料室，1988年，pp.1-8
- 大友一雄著「第4章 史料保存機関における情報資源化の取り組みと課題」 国文学研究資料館編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』 岩田書院，2010年，pp.83-97
- 地方史研究協議会編『歴史資料保存機関総覧〔増補改訂版〕〕〔東日本〕〔西日本〕 山川出版社，1990年
- 日本図書館協会図書館調査事業委員会編『日本の図書館 統計と名簿 2014』 日本図書館協会，2015年
- 大堀哲編著『日本博物館総覧—ミュージアムの招待—』 東京堂出版，1997年
- 日本博物館協会編『全国博物館総覧』 ぎょうせい，1986年（筑波大学附属図書館

館により 2003 年まで加除あり)

松下浩著「史料目録の目的と構成内容—滋賀県下の史料目録作成の事例を中心に—」『記録と史料』16号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会, 2006年, pp.1-17

岡部真二著「現地調査における史料整理の方法について—一原秩序尊重・段階的整理の実践報告—」『記録と史料』3号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会, 1992年, pp.49-65

本田雄二著「史料整理と目録編成について—一原秩序尊重の目録編成と分類項目付与の有機的連関—」『新潟県立文書館研究紀要』2号 新潟県立文書館, 1995年, pp.54-77

竹林忠男著「行政文書の整理と編成—史料整理基本原則の適用とその問題点—」『日本のアーカイブズ論』 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会, 2003年, pp.424-441 (初出は『記録と史料』5号, 1994年)

長沢洋著「古文書整理業務の20年」『広島県立文書館紀要』10号 広島県立文書館, 2009年, pp.29-45

平林祐子著「「飯島伸子文庫」開設—環境社会学の歴史と発展をめぐるアーカイブ—」『環境社会学研究』 環境社会学会, 2006年, pp.178-185

平石直昭著「草稿資料の整理・保存・供用をめぐる諸問題—東京女子大学丸山文庫の経験から—」『東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター報告』8巻 丸山眞男記念比較思想研究センター, 2013年, pp.100-104

真辺将之著「『大隈重信文書』の近代私文書論的研究」『早稲田大学史記要』39巻 早稲田大学大学史資料センター, 2008年, pp.53-75

参照 WEB サイト

Web サイト「日本の図書館統計」『日本図書館協会』(2014年度)

<http://www.jla.or.jp/library/statistics/tabid/94/Default.aspx> (最終閲覧: 2015

年5月15日)

Web サイト「2.博物館数、入館者数、学芸員数の推移」『文部科学省』(2011年度)

http://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/1313126.htm (最終閲覧: 2015

年5月15日)

岡野裕行作成「文学館一覧」『文学館研究会ウェブページ』

<http://literarymuseum.net/lm-list.html> (最終閲覧：2016年1月10日)

Web サイト「関連リンク」『国立公文書館』

<http://www.archives.go.jp/links/> (最終閲覧：2015年5月15日)

国文学研究資料館作成「史料情報共有化データベース」『国文学研究資料館 web ページ』<http://base1.nijl.ac.jp/~isad/> (最終閲覧：2015年12月17日)

「歴史史料情報の共同集約と共有化に向けてのシステム構築に関する研究」『科学研究費補助金データベース KAKEN』

<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/11410096/2001/6/ja.en.html> より (最終閲覧：2015年12月18日)

ニューヨーク市立大学リーマン校の分校であり、現在は閉校している。

(『Lehman College』 Web ページ：<http://www.lehman.cuny.edu/>)

「ヒロシマ基礎講座」『日本ジャーナリスト会議広島支部 JCJ HIROSHIMA』より

<http://jcj-daily.sakura.ne.jp/hirosima/koza.html> (最終閲覧：2016年1月2日)

廣文館作成「コラム・ブックレビュー」『廣文館ウェブページ』

http://www.kobunkan.com/c_book/b_menu.html (最終閲覧 2016年1月1日)

「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」『国立科学博物館ウェブページ』

<http://www.kahaku.go.jp/event/2005/nisina/> (最終閲覧 2015年12月15日)